

橫濱高等商業學校二十年史

序

本校は關東大震災火災の灰燼の裡に、その復興の魁として、大正十三年横濱市に創設された。爾來、世界的經濟不況の深化の間に、その搖籃期を迎へた。出發點からこの一大試煉に對して、學園は却て不撓の氣魄を養ひ、和衷協同、克く荆棘の道を拓き、内容を充實して向上の一途を辿り、光輝ある學園の礎石を築くことが出来た。この間に育成した三千の有爲なる人材は、「信賴の人」として、社會に優秀なる成果を擧げ、國家への奉仕に全力を盡して歇まざるあるのは洵に欣快の至りである。

創立してより今や二十周年を迎へんとす。學園の悠久性より觀れば二十年は短日月であるが、人生に譬へれば適齡期に達したといへよう。二十年の氣魄に満ちたる傳統を基として、研學に教育に邁進すべき時期を迎へたのである。況や、國家が總力を擧げて大東亞建設の聖

一

二

戰を遂行する秋、一刻の儉安も許されず、日々清新の氣魄を以て愈々本分に恪循し、教育の使命完遂に挺身せねばならない。徒らに馬齡を加へる如きは宥さるべくもない。沈滯は學園の汚辱である。

二十年の過去を回想し、之を修纂して學園の事歴を略敘したる所以は、徒らに自慰低徊に耽るためではない。自己反省のためであり、將來の向上に資せんがためである。

昭和十八年四月十五日

横濱高等商業學校長

田

尻

常

雄

例 言

創立二十周年記念式を十八年五月に舉げることと決定した時、田尻校長から「創立二十年史」の編纂が提案され、一月八日に次の十氏が三十年史編纂委員を委嘱された。下田禮佐、不二門龍親、徳増榮太郎、小幡孫二、井上龜三、森田優三、越村信三郎、井手文雄の八教授、齋藤照之助主事、高林義雄書記。これ等の委員にそれぞれ分掌してゐる事務資料を整理して提供して貰ひ、徳増がこれを整理勘案して編纂することとした。さうして編纂の方法を提示して、一、總記 二、沿革 三、學友會記 四、同窓會記 五、回想録に五大別し、更に沿革を創立から十周年までと十周年から二十周年までに區分し、この區分の下に各委員は資料を整理執筆して二月二十日頃までに資料が提供された。徳増はこの資料に據つて、獨りで二十年史を執筆することとした。といふのは提供された資料を單に集成編纂しただけでは重複やら形の相違やらがあつて、いかにも寄せ集めたといふ感じを與へると思つたことと、幸にも私は高商學報を第一號から所藏してゐたので、その學報の記事から過去折々の空氣を嗅ぎ得ることとの理由で、提供資料を據り所とし、之に學報記事を参照しながら獨りで執筆すれば一つの纏つた二十年史が出来ると思つたからである。さうして三月一日執筆を始めて、四月三日に大體脱稿した。その間、學年末で在宅日に恵まれたから、文字通りこの仕事に没頭した。獨りで執筆したことは資料の單なる寄せ集めとい

二

ふ難からは救はれてゐると思ふが、それだけに徳増一個の觀方や習癖が出てゐるやを惧れる。とにかく文責は徳増一個にある點をここにお断りしておく。

學友會記は、學報から注目すべき記事を抽出收録した。この方法が多少學友會の足跡を傳へ得ると思つたからである。同窓會記は越村教授の執筆をその儘收載した。

なほ各委員が提供された資料のほか参照した資料を念の爲め申添へておかう。

横濱高等商業學校一覽 大正十四年以降

教授要目 昭和五年以降

庶務課日誌 大正十三、十四、十五年度分

開校式、十周年記念式關係書類綴

高商學報 第一號（昭和二年六月三十日付）より第百三十六號（昭和十八年三月十五日付）まで

（編纂委員 徳増謙）

横濱高等商業學校二十年史

目次

序	一
例言	一
總記	一
本校教育の信條	一八
本校の校風	三
國家的行事と學園	四
沿革前篇	六
第一 創立記	九—二五
創立事情	二—二二
創立の年	二—二八

第二 創業時代より開校十周年まで (大正末期より昭和九年まで)	三—二五
------------------------------------	------

一 教育組織	三—三〇
學科課程	三—三三
學年、學期	三—三三
訓育の方針	三—三三
二 創業の完成	三〇—三三
全學年完成	三〇—三三
施設漸次整ふ	三—三三
三 研究調査機關	三—三三
研究所、調査部創設	三—三三
研究所季報發刊	三—三三
商學會の設立と「商學」の發行	三—三三
外部研究團體	三—三三
四 夜學部附設	三—三三

夜學部の目的	六
講習會の經過	四
五 開校式	四一—六一
開校式祝賀日程	四一
開校祝賀式典	四二
開校記念祭プログラム	四三
横濱文化史料展覽會	四三
開校記念論文集刊行	四四
開校式當時の概況	四五
六 學友會の活動	六一—六六
文化團體	六一
運動部	六二
横濱高商新聞發刊	六四
その頃の學友會	六五
七 貿易別科新設	六七—六九

三

四

貿易別科創設の事由	六七
南米に横濱高商村建設の意氣	六九
八 開校五周年（昭和四年）前後	六九—七五
教官の動靜	六九
應召出征の職員生徒	七一
野外教練と査閲	七一
校歌成る	七二
開校五周年記念祭	七四
消費組合設置	七五
對高工野球定期戰の復活	七五
九 就職狀況	七七一—八二
不況の深化	七七
就職難時代	七八
財界好轉と就職狀況	八〇
十 思想問題とその對策	八二—八六

不況と思想問題	八三
思想對策	八三
社會教育へ進出	八四
十一 開校十周年記念式	八七—二五
開校十周年の回顧	八七
十周年記念行事日程	八八
記念式典	八九
十年勤績者表彰式	八九
慰靈祭	九〇
記念行事	九〇
記念事業	九一
開校十周年當時(昭和九年十月)の概況	九六
沿革後篇	一〇一—一四四
第三 開校十周年以降二十周年まで	一〇一—一四四
(昭和十年より十八年五月まで)	一〇一—一四四

一 日本の大轉換期と教育の新方向	一一九—一二四
自由經濟より拘束經濟へ	一二九
歐化思想を棄て皇國精神の確立	一二三
教育界の新體制	一二三
二 學園新體制	一二四—一二四
國體明徴	一二四
勤勞報國團の結成	一二六
集團勤勞作業	一二七
興亞青年勤勞報國隊參加	一二八
勤勞作業資料	一二九
三 報國團結成と報國隊編成	一三〇—一三一
自治的學友會の解消	一三〇
報國團結成	一三一
消費組合より生活部購買班へ	一三一
報國隊編成	一三一

勤勞協力令と報國隊	一五二
國防體制の強化	一五二
教育の統括	一五三—一五九
日本文化昂揚施設	一五三
學校視察の實行	一五三
教育の統制	一五三
専門學校令の改正	一五三
學科課程の改革	一五九—一七三
學制改革	一六〇
第二次學科課程の改正	一六〇
新學科課程	一六〇
卒業期繰上對策	一七一
研究施設	一七一—一二二
ゼミナール	一七一
英語教授上の一特色	一七一

圖書館	一七二
紀元二千六百年記念文庫	一七二
調査部	一八〇
太平洋貿易研究所	一八一
研究團體	一八七
公民講座	二〇〇
商品實驗室と商品陳列所	二〇一
教練と體育	二〇二—二〇九
學校教練の重視	二〇二
體育に出色	二〇四
入學試験と就職狀況	二〇五—二〇六
入學試験	二〇六
就職狀況	二〇六
教職員十年間の動靜	二〇六—二〇七
田尻校長の榮譽	二〇七

教官の勤務	三六
物故教官	三二
十 支那事變、大東亞戦争と學園	二三一—二三五
應召卒業生と戦歿者	二三二
記念行事	二三四
十一 學友會 報國團	二三五—二三八
學友會より報國團へ	二三六
鍛鍊部	二三九
文化部	三三八
十二 生活調査	三四一—三四四
十三 寄宿寮	三四三—三四五
十四 開校二十周年時代の概況	三四五—三四八
學友會(報國團)記	三四七—三四八

同窓會(富丘會)記	三五一—三五四
回想錄	三五五—三五八

附 表

教官擔當科目異動表	三六
生徒主事異動表	三七
年 表	三八
十五年以上勤務者	三七

沿革 前篇

第一 創立記

第二 創立時代より開校十周年まで

沿革

第一 創立記

創立事情 大正七年原敬内閣——中橋徳五郎文相——の時、高等諸學校の創設と擴張とが計畫され、大正八年から十三年に至る六ヶ年繼續事業として第四十一帝國議會の協賛を経たが、本校は第十一高等商業學校として大正十四年開校を豫定された時に創立の萌芽を見る。

當時まで横濱には高等専門學校が一つもなかった。諸學校の集中してゐる帝都に近接してゐることが、横濱に高等教育機關の設置を等閑にした主なる理由であらうが、これは甚だ遺憾のことであつた（六大都市中、大學を持たないのは獨り横濱のみといふ現状も同様に遺憾である）。ここに原内閣の創設計畫によつて商業工業の専門學校が一時に設置されることとなつたが、これは些かも不審ではない。議會に於てもその設置の場所について相當突込んだ質問が放たれたに拘らず、横濱への商工二校の新設が組上に上らなかつたのは、當然あるべきところになかつた隙隙を漸く充たすことが出来たからにほかならない。

大正七年に、かかる高等専門學校の創設計畫が時の内閣に取り上げられたのは、第一次歐洲大戰中及び戦後の日本經濟の躍進を反映するものであつて、この經濟界の發展に照應して高等諸學校への入學志望者は著しく増加

した。然るにこれを容れるべき学校の数が少く——高等商業學校では東京、神戸、長崎、山口、小樽の五校——ために入學競争は激甚を極めて試験地獄を現はし、不幸にして入學志望を達しなかつた青年の多數は所謂浪人として、一年乃至數年を不安焦燥の裡に過させる不幸に陥れるが、これは社會風教上甚だ面白くない現象であつたら、この試験地獄を緩和して青年の向學心を出来るだけ充たすと同時に、併せて有爲な人材、教養の深い人間への社會の要求に應へる必要が痛感されたからである。

かやうに躍進日本經濟の反映として本校の設立が確定したのである。さうして横濱としては先づ大正九年に高工が設置され、本校は十三年度に設置、十四年開校の豫定であつた。

創設計畫實施の翌大正九年秋には早くも好況の反動があらはれ恐慌が來襲し、反動期の不況漸く深刻なものがあつた折、十二年九月一日の關東大震災といふ大きな衝撃を受け、京濱地方の痛手は非常に深かつたのは事實だ横濱だけの家屋の倒壊及焼失七萬四千戸、死傷者行衛不明者合計六萬五千人といふ愕くべき多數の犠牲を出し、巨億の財産が烏有に歸したのだから、復興果して可能なりやを一時は危惧したのも無理ではない。けれども試験に堪え復興の意氣に燃えた京濱の罹災者は立ち上つて焼跡にはやくも假小屋を建て復興に全心を打込んだ。殊に、一小區域を除いて悉く灰となつた横濱の復興は、それだけに並々ならぬ努力が必要だつた。横濱實業界の中樞であつた生糸及絹織物貿易の關係者は、神戸に事業を移さねばならなかつたが、再び元の横濱に復興し諸經濟施設を整備しなければ貿易第一港たる面目を躍如たらしめることは出来ない。縣市民の辛苦は並大抵ではなかつ

たが、政府もまた絶大の支援を惜しまず復興事業は着々と進捗して行つた。既定計畫では十四年開校の豫定であつた本校が一年繰上げ開校に變更されて大正十三年開校と決定したのは震災直後であり十二月十日には夙くも文部省直轄學校官制を改めて本校が加へられたのも、畢竟本校を以て横濱復興の魁たらしめんとする官民の熱意に任かならなかつた。

かくて大正十三年開校と決定した本校は、十二年十二月十八日長崎高等商業學校田尻常雄校長が本校校長を拜命し、續いて下田禮佐教授、齋藤、武石兩書記が任命されて、ここに創立事務、開校準備が開始されたのである。

當時、文部省も焼失して假建築が出来上らなかつたため、丸の内の臺灣銀行の二、三階を借受けて文部省の事務が執られてゐたが、隨て本校の創設事務もこの臺灣銀行の二階の一室で始められたのである。この部屋は六坪ほどの極めて狭い室であつた上に、この年度に同時に創設される高松高商、長岡高工、岐阜高農の三専門學校の關係者とともに机を並べて執務してゐたのだからお互に目白押しの状態でありながら創設といふ基礎工作に孰れも没頭して寧日なき有様であつた。

この創設當面の問題は學校敷地と校舍建造の二つであつた。敷地は、政府と縣市との交渉の問題であつたが、敷地候補地として神奈川齋藤分、本牧箕輪臺、南太田富士見臺の三ヶ所が擧げられてゐたが、結局南太田富士見臺即ち現在の土地が選定されることとなつた。ここは當時多少の畑地のほかは雜木林で、どこから登るにも急坂

であつたから人の往來も稀で道らしい道さへなく、敷地も邱あり谷ありで起伏し地均し工事が容易でない場所であり、毎日の登校には相當の不便を伴ふと見られたが、それだけに俗塵を離れてをり、前面に横濱港を俯瞰し、後背には富嶽の靈峰を控え、學園建設の地としては却て恵まれてゐるといへる。

敷地決定までには相當の迂餘曲折があつたが、それは學校當局としては關與するところがなかつた。學校が創設に當つて肝膽を砕いた問題は校舍建築であつた。

本創設事業の豫算明細書を一見すると判るやうに新設學校の校舍は極く一部の特殊建物以外は全部木造建築となつてゐた。本校もまた延千八百七十九坪中、鐵筋コンクリートの部分延三百三十坪を除いた千五百餘坪は木造建築の豫定でありその豫算が計上されてゐたのである。然るに横濱大震災に全市家屋殆んど倒壊焼失の厄に遭つた直後であり、横濱百年の計から見ても、その國際港たる地位から考へても、鐵筋コンクリートの耐震耐火建造物が要望され、堅牢なる毅然たる學舎が翹望されたのであるが、田尻校長は赴任と同時にこの堅牢校舍の實現を深く決意するところがあつた。けれどもこれは實際には容易ならぬ難事業であつた。といふのは政府の事業施設は、總豫算書の附屬明細書に掲記された内容に基いて實施されるのが原則である。この内容に根本的變更を加へることはおそろしく不可能といふのが通則である。木造を鐵筋コンクリート造にすることは先づ建築費が著しく違ふ、これまた難點である。この大障礙を突破して堅牢校舍の實現を來すことは容易でなく、交渉に交渉を重ねて一、二ヶ月が忽ち経過してしまつたが、遂に當局も本校側の熱心に動かされ且つ環境から見てかかる建築をより

妥當なりとしたから、ここに本省要路の理解を捷ち得て、遂に寄宿舎、生徒集會所その他急を要せざる建物の建築を延ばして本館建築費を捻出するといふ妥協點に到達し、學舎建築の問題は漸く解決した。この間における田尻校長及び齋藤照之助會計主任の勞苦は一方ならぬものがあつたと想はれる。直轄學校において本館を鐵筋コンクリート建としたのは本校を以て嚆矢とするが、設計變更といひ學校最初の鐵筋建築のため本省建築課が細心の準備を要したことといひ、新設或は復舊工事の繁忙さといひ、孰れも本建築着手を遷延させるものばかり重なつて、本校側の焦燥の裡漸く、十三年六月十八日に本校敷地に建築工事が起され物置一棟が八月十日に竣工、文部省建築課横濱出張所の標札がここに掲げられ、現場に工事の基礎が成つたのである。十一月に入つて生徒控所、柔剣道場、銃器室等が着工され翌年三月竣工した。これは本館が竣工するまで内部を幾つかに仕切り、破目板を張つて教室に使用した。本館工事は、十二月十五日入札の結果、竹中組の手によつて請負はれ、大正十五年三月落成したのであるが、十四年の四月新學期からは高工の假校舍の一個から現在の清水ヶ丘の假教室に移轉して授業を開始し事務を執つたのであるから、草創の際とはいへ、假教室の不備、登校路の險惡泥濘には當時の教職員も生徒も尠からず惱まされたものである。けれども假りにも我家の氣易さと親しさとは、高工の校舍に間借りしてゐた一年間の經驗を持つものには十分に味へたところだ。

本校當初の建築豫算及びその後の建築變更の内容の詳細は次の通りである。

施行豫算各目明細書

本館	木造二階建	一、〇九二坪（延坪以下同ジ）
講堂	同 平家建	一一七坪
實験室	同 二階建	二七〇坪
特別教室	同 平家建	七〇坪
商品陳列室	鐵筋コンクリート二階建	一九二坪
書庫	同 三階建	七二坪
瓦斯發生器室	同 平家建	六坪
倉庫	同 二階建	六〇坪
計		一、八七九坪

この建築費次の如し

木造	坪數	一、五四九坪	坪當一八〇圓
鐵筋コンクリート建坪數		三三〇坪	坪當三五〇圓

隨て上述の建物を全部本館内に取入れ、これを鐵筋コンクリート建とすることは、單に施行豫算の變更手續に關する問題のみではなく、かくて生ずる豫算金額の不足をいかにして捻出すべきかといふ根本問題が解決されない限り、其の變更實施はまづ不可能と看なければならなかつた。それが本校當事者の熱心な努力によつて本館鐵筋コンクリート建と決定したことは既に敘べた通りであるが、十三年十二月十五日入札即日開札の結果は意外にも次の如く有利な契約を結ぶことが出来た。

本館鐵筋コンクリート建延總坪一、一八三坪九八
落札價格 四二五、八〇〇圓（坪當三三二圓餘）

豫定價格 五八六、二三四圓（坪當三二〇圓餘）
差 引 一六〇、四三四圓

即ち豫定價格より十六萬圓約三割近き金額が浮いたのだ。しかも落札者は堅實な竹中組であつた。當事者は實に歡喜したので、それは無理がなかつた。蓋、本館設計の變更のために他の附設工事が相當に縮減を余儀なくされて坪數において六割以上の削減をして漸く建築費を捻出することとしたのであるから、いま入札の結果十六萬圓の剩餘金が出来た以上、犠牲となつて縮減された建物を出来るだけ復活させ得ることとなつたからである。

かくて寄宿舎と體育館の建設及び暖房裝置を施設することが計畫され、本省との間に十数度の折衝を重ねて次に掲げるやうな設計變更計算書が出来上つた。寄宿舎は昭和二年九月落工、同十二月竣工。體育館は同二年一月十三日落工、三月末日竣工。實に、直轄諸學校中出色の體育施設は、この體育館の建設に基礎が置かれたのである。

設計變更計算書

實施豫定額

工事名稱	構造	坪數	單價	金額
寄宿舎食堂	木造	八〇	一八〇	一四、四〇〇
貼所及浴室	平家建			

要設計變更額

工事名稱	構造	坪數	單價	金額
同上	木家建造	一二〇	一八〇	二一、六〇〇
雨天體操場兼體育用具置場	鐵骨木家建造	一二六	二八〇	三五、二八〇
倉庫	木家建造	四五	一八〇	八、一〇〇
學生集會所	同 平家建造	六六	二〇〇	一三、二〇〇
自助車庫	同 同	一五	一五〇	二、二五〇
本館付帶工費				六、五〇〇
暖房給水瓦斯電燈				一、四、五〇〇
周圍境界地均シ及排水				二、三、二九〇
合計				二、四、七二〇
差 引				八、四三〇
殘 高				一七

給水瓦斯及電燈
周圍境界及地均シ並排水
既済ノ入札剩餘金
合計

二一、四六八
一七、〇〇〇
一八〇、二八二
二三三、一五〇

創立の年 臺灣銀行二階の假事務室で凡そ三ヶ月、田尻校長、下田教授、齋藤武石兩書記の四人で創設事務と本校規程と生徒募集準備とが進められた。田尻校長、下田教授、武石書記の三氏は長崎高商から、齋藤書記は長崎醫大から執れも創設の意氣に燃えて轉任した人々だし、校長さへなほ四十八歳の壯年期にあつたのだから蓋し創設者としては適役揃ひであつたらう。

間もなく數名の教官を加へ、大正十三年三月二十七、八、九の三日間、横濱、東京、京都、金澤の四ヶ所で入學試験を行つた。受験者は一、〇二八名の多數に上つた。これより先き、本校の本據は、このほど漸く二、三棟竣工した弘明寺の横濱商工の假校舎の一部に据はり、事務はここで執ることとなつてゐた。受験生一、〇二八名中、一三五名を選抜入學を許可して大正十三年四月二十一日始めての入學式を舉行し、翌日から商工校舎の一部を使用して授業を開始した。

創立の年は勿論一學年だけであつて、その各擔當教官は次の通りであつた。

國語、漢文、世界近世史	栗林教授
商業地理	下田教授
簿記	古館教授
法學通論、民法	不二門教授
英語	河村教授

經濟原論	井上龜三講師
フランス語	徳増教授(九月以降)
	増田俊雄講師
	時田教授(九月以降)

商學	横山秀講師
商業英語	渡邊輝一講師
商業算術	小幡助教授
體操	下津屋助教授
體操、教練	石川(小白)講師
珠算	山崎講師
修身	友枝講師
支那語	清水元助講師
英語	デヴィス講師
獨逸語	渡邊輝一講師

この教授陣を見よ。教育上の鍊達の教官と新進氣鋭の若い教官が巧みに配合されてゐるのだ。古館教授は二ツ

橋で田尻校長と同級であり大倉商業に長く教鞭を執つた長老であるし、下田教授は長崎高商に、栗林、河村、時田、小幡、下津屋各教官はそれぞれ各學校で講義の經驗を持つてゐた。不二門、徳増兩教授は文部省在外研究員として滯歐留學から歸朝したばかりだし、横山、渡邊、井上講師は大學を卒業したばかりの潑刺たる青年教官であつた。先輩を持たない第一回入學生は、經驗ある教官に各種制度の組織を指示され、青年教官を指導者協力者として各種學生組織の創設に懸命の努力を拂つて、文字通り學校一體化の實を示した。

學友會もかうした雰圍氣の裡に着々と準備が進められ、次の如き各部を包括して設立された。即ち、總務、雜誌、語學、講演、音樂、庭球、野球、競技、蹴球、劍道、柔道の十一部が置かれ、會長に田尻校長、副會長に古館教授を推戴し、各部に部長副部長が任命され、續いて生徒會員の幹事及び委員が發表された。生徒會員の會費は年額十圓、入會金は五圓と決定した。學友會誌第一號は夙くも十四年二月二十三日に發行された。

かくて狭い高工の假校舍の一部を借受けた不便不如意な環境の裡に創業一ケ年の授業が続けられ、その間に各種の學校施設の内容充實の準備が進められた。南太田丘上の現在の校庭がぼつぼつ出来上りかけて来るや、學生達は高工假校舍から、ここまで出かける不便を意とせず、伸び伸びとここで運動競技に没頭した。現在の校舎に引移つてからも、山を堀り崩して地均をしたのだから校庭は赭土で軟らかく、風が吹けば土埃りで眼をあいゐられない始末だつた。

大正十四年三月末待望の南太田假教室への移轉が實現した。四月からはいよいよ自分の學校に登校し得るの

だ。それにしても高工自らが假校舍の不如意の裡にありながら、本校へその一部を割いて一ケ年間、相ともに不便を忍んで貰つた好意に對しては、感謝のほかになく、一日高工教職員を招いて、ささやかな感謝の饗宴を張つた。かくて十四年三月を以て高工假校舍を去つたのである。

本校所在地町名	創立當時	横濱市南太田町
現 在		横濱市中區清水ヶ丘
本校敷地坪數	創立當時	一四、一三八坪
	現 在	本校 一四、九〇六坪 八八七 寄宿舍 一、四四八坪

第二 創業時代より開校十周年まで

(大正末期より昭和九年まで)

一 教育組織

學科課程 大正十三年創立に當つて學科課程が制定された。それは既設高商の學科課程を參考し斟酌して作られたものであつて、當時一般的にさうであつたやうに課目羅列主義を採り授業時數は毎週三十五時間といふ、かなり多い時間を課してゐた。學科目と各學年の毎週教授時數とは次の如くであつた。

學科	目	第一學年			第二學年			第三學年		
		中學出	第一學期	第二學期	中學出	第一學期	第二學期	中學出	第一學期	第二學期
修身		—	—	—	—	—	—	—	—	—
國語	漢文	—	—	—	—	—	—	—	—	—
作文	漢文	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商業	通論	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貨幣及銀行		—	—	—	—	—	—	—	—	—
外國爲替		—	—	—	—	—	—	—	—	—
取引所		—	—	—	—	—	—	—	—	—
交通論		—	—	—	—	—	—	—	—	—
稅關及倉庫		—	—	—	—	—	—	—	—	—

保險學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
簿記	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
英文總記	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
會計學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
原價計算	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商業地理	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
海外經濟事情	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商品學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商品實驗及	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商業實戰	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
經濟原論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商工心理學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商業政策	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工業政策	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
植民政策	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
財政學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
統計學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
法學通論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
民法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
國際公法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
國際私法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
國際關係法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
國際私法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
英語	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第支那語	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

科目	第一學期		第二學期		合計	
	時數	備考	時數	備考	時數	備考
英語	三		三		三	
獨逸語	三		三		三	
佛蘭西語	三		三		三	
國語	三		三		三	
算術	二		二		二	
珠算	二		二		二	
理化	二		二		二	
工業	二		二		二	
商業	二		二		二	
世界近世史	二		二		二	
研究指導	二		二		二	
體操	三		三		三	
合計	三五		三五		三五	

備考

- 一、本表中授業時數ニ括弧ヲ附シタルハ選擇科目ニシテ第三學年第一學期ニ於テハ植民政策、統計學及商事關係法ノ中二科目四時間ヲ、同第二學期ニ於テハ工業政策、商工心理學及國際私法ノ中二科目四時間ヲ選擇セシム
 - 二、第二外國語ハ支那語、露西亞語、獨逸語、佛蘭西語及英語ニ就キ其ノ一ヲ選擇セシム但シ一旦選擇シタルモノハ中途改廢スルコトヲ許サズ又志望者ナキトキ又ハ學校ノ都合ニ依リ之ヲ缺クコトアルヘシ
 - 三、以上ノ外尙隨意學科目トシテ志望者ニ限リ經濟史、論理學、心理學、哲學概論、教育學、社會學等ヲ履修セシム
- 經濟史ハ第三學年ニ於テ一學年ヲ通ジ、論理學ハ第一學年第二學期、心理學ハ第二學年第一學期、哲學概論ハ第二學年第二學期、教育學ハ第三學年第一學期、社會學ハ第三學年第二學期ニ於テ之ヲ履修ス

學科目の數は、實に四十二の多數で、これでは學生は應接に遑ないであらう。この學科目課程を見ると、英語に八時間が充てられてゐる以外に、第二外國語の中で更に英語を選修し得る點と、基礎學が正科目に勉いのを考慮して隨意科目にこれを取り入れて志望者に履修の道を開いてゐる點等が目立つ。けれども最も顯著な特色は研究指導即ちゼミナル制を創立當初から執つてゐる點であり、兩來學科課程の改正は三度行はれたが、十人内外の少數の生徒を一人の教官が每週一、二時間専門學科の指導をすることともに親しく生徒に接して教養上の相談相手となるといふ、この制度は繼續強化され、教官も亦熱心にこの制度を支持し活用してゐる。昨十七年文部省の方針に則れる高等商業學校學科課程の全面的改正に際して、この制度は「演習」といふ名稱で執り上げられ、各高商に勸奨することになつたのは、師弟近接教育の効果を認めたからにほかならぬ。

創立當時制定の學科課程が羅列主義であつて、基礎學と専門學との間に體系が樹てられてゐない憾みがあり、その合理的整頓は兩來多年の懸案であつたが、六年六月から委員の手で具體案を審議研究の結果成案を得たので十一月教官會議にかけて検討可決して文部省に申請、その認可によつて、七年四月の新學期から實施することとなつた。これが第一次改正である。

改正の主眼とした點は次の如くである。

一、學科の體系的配列 即ち第一學年に於ては基礎課程に意を注ぎ、中學、商業出身者の知識の平均化をより徹底せしめ、第二學年には主として總論を、第三學年に入つて特殊科目を講ずることとした。

二、第三學年は選擇科目を主體とする。即ち約二十の提示課目の中、各自十を選擇せしむ。これによつて教授側の商業經濟課目の負擔は更に過重となるが學生にとつては多大の便宜を蒙るわけである。

三、ゼミナール重要視 第二學年に於て一週一時間のプロゼミナールを設置し、専ら原書講讀に充て、第三學年に於ては之を正課となし一週二時間を割當てること。プロゼミナールからゼミナールへの移動に際しては學生の自由變更を許す建前であつたが、實際上は全く變更なく二ヶ年間を同じ指導教官に屬してゐた。

第一次改正學科課程表 (昭和七年)

必修科目	選擇科目	第一學年			第二學年			第三學年		
		第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
修身		一	一	一	一	一	一	一	一	一
國語作文書法		(中)三	(中)三	二						
英語		(中)八	(中)八	七	七	七	五	五		
英語會話		(中)一〇	(中)一〇				(中)一〇	(中)一〇		
其他ノ外國語		(中)三	(中)三	四	三	三	三	二		
高等數學		(中)二	(中)二							
商業數學		(中)二	(中)二							
珠算		(中)一	(中)一							(中)一

理化學		(中)二	(中)二							
近世史		(中)三	(中)三							
法學通論		(中)四	(中)四							
民法				二	二	二	二	二	二	二
商法										
商事關係法							(中)一	(中)一		
國際法									(中)二	(中)二
經濟學原論		二	二	二	二	二	二	二	二	二
景氣論									(中)二	(中)二
商業政策							(中)二	(中)二	二	二
商業史					二	二	二	二	二	二
商業地理					二	二	二	二	二	二
外國經濟事情										
財政學										
統計學										
商業通論		(中)一	(中)一							
商業簿記		(中)四	(中)四							
銀行簿記		(中)二	(中)二							
工業簿記及算							二	二	二	二
英文簿記及タイ										
會計學									二	二

一、第一學年ニ於テ（商）印ヲ付シタルハ商業學校出身者及之ニ準ズル者ニ（中）印ヲ付シタルハ其ノ他ノ者ニ之ヲ

二、選擇學科目ハ第三學年ニ於テ第一期十八時間ノ中八時間ヲ第二學期十九時間ノ中九時間ヲ選修セシム
三、其ノ他ノ外國語ハ支那語獨逸語佛蘭西語西班牙語和蘭語ニツキ其ノ一ヲ選修セシム 但シ一旦選修シタルモノハ半途改廢スルコトヲ許サズ又志望者ナキトキ又ハ學校ノ都合ニ依リ之ヲ缺クコトアルベシ

學年學期 學年は二學期制とし、第一學期は四月一日より十月三十一日まで、第二學期は十一月一日より翌年三月三十一日までとした。隨て試験は學期試験、學年試験各一回宛である。試験の結果學年成績評點三十點以上五十點未滿のもの三科目以内に於て、諸學科目總平均六十點以上を得たるものに對しては其の學科目について再試験を施した。この再試験制度も理想通りには行かず却てこれを惡用する懸念さへあつたので後にはこれを廢し現行の如き制度を執ることとなつた。

訓育の方針 本校の生徒心得第一條は生徒の心得べき道を儼として示してゐる。即ち

第一條 生徒ハ校規師訓ヲ遵奉シ左記綱領ヲ遵守スベシ

一、徳操ヲ磨キ學業ヲ勵ムベシ

二、心身ヲ鍊リ質實剛健ナルベシ

三、禮節ヲ尚ビ信義ヲ敦フスベシ

この大綱を基礎として訓育し「信頼し得る人物」たらしめんとするのが本校訓育の方針である。學業錬磨には缺席は禁物である。本校は授業時数の三分の一以上を缺席したものは、原則として受験資格を喪失するといふ規程を設けて懈怠的缺席を防止するにとともに（生徒心得第七條）卒業に當り、皆勤者及精勤者には賞状を授與してこれを褒賞し、更に數年後には思想指導費を割いて皆勤、精勤賞を與へることとした。又特待生制度を規定し（規則第二十六條）品性學業、衆の模範とするに足るものを選んで特待生とし、次學年度中授業料を免除し、學業琢磨に拍車をかけさせるとともに優秀生を表彰することとした。一、二學年より進級するに際して毎年各學年それぞれ二人乃至四人の特待生を選んでゐる。

二 創業の完成

全學年完成 第二回入學試験期が巡つて來た。志望者數は一、一四三名で、第一回の時より百二十名ばかり多し。試験地は本校のほか京都、福岡とである。第三回入學志望者は九四七名で前回より二百名ばかり減つた。試験地は本校と京都である。本校以外の土地で試験を施行したのは、志願者を全國的に募集し、各地方の特色を

綜合して學生相互の間に地方的特質を接觸攝取させて、偏らぬ校風を培養せんとする趣旨によつたのであるが、創立四、五年を経過し大體所期の目的を達したことと、本校の存在が全國に滲透して各地から志願者の集る見通しがついたので、昭和三年まで地方に於ける試験をやめた。

第二回は一五四名、第三回は一五一名の入學生を以て入學式を舉行し、かくて一學年から三學年まで全學年が揃ひ、四百五十の元氣のよい優秀な生徒が學園に充滿することとなつた。第三回入學生は入學と同時に現在の白雲の本館で受講したが、第一回生の如きは一年の時は高工の間借で、二年の時は現在の生徒控室で、三年の時に漸く本館に移るといふ風に毎年引越し状態を續けたものだ。

施設漸次整ふ 當時の文相岡田良平氏は大正十四年六月十日來校、本校の状況視察を遂げたが、本館は建築中で、例の假教室や假事務室での状況を具さに巡視されたのである。十五年十二月九日教育勅語謄本を拜戴、昭和三年十月九日、畏くも天皇皇后兩陛下の御眞影を拜戴して、ここに學園の基本が整つた。十五年三月本館竣工翌二年三月體育館、十二月寄宿舎が竣工するといふ風に諸施設は順を追ふて整備し、内容外觀ともに一通り充實したのである。かくて早くも第一回生の卒業期を迎へた。

昭和二年三月十五日に第一回卒業證書授與式を舉げて百十七名の本校最初の卒業生を社會に送り出したのであるが、先輩を持たぬ新卒業生の就職状況こそ、田房校長の最も關心を寄せたところであつて、假令高等の學術技藝を授け教養を深からしめても、これを適所に就かしめて社會的活動をさせなければ、佛造つて魂を入れざるに

等しいとは校長の持論であり、殊に始めての卒業生のことであるからその就職状況如何は微妙に將來に影響するところがあり、校長の苦慮はたしかに大きいものがあつた。

高等専門學校の創設擴張は好況時代の社會的要請に促がされたものであるが、創設擴張計畫の實施當初より既に恐慌續いて不況に見舞はれた社會が果して幾何の新卒業生を求むるであらうか。目出度く卒業はしたが向ふべきところが塞がれてゐては卒業生の歎きは察するに餘りがある。これは當時學校責任者のすべてに共通した悩みであり、それだけに就職運動が激甚を極めたのは當然であらう。

かうした不遇の環境にはあつたけれども、本校の卒業生は比較的恵まれた事情の下にあつた。否、一般狀勢から見れば頗る恵まれた事情にあつたにいへよう。それは偏へに田尻校長の献身的奔走の結果である。田尻校長は長崎高商校長時代から既に「就職の神様」と定評のあつた人で、平生から實業界巨頭要人と廣く交はり知己多く就職戰術は常に備へがあつた。これは實は言ひ易くして實行し難いことであるが、校長のはそれが全く身についてゐて少しも附け焼刃でない。明朗豁達、氣の置けない性格は知己を各方面に多くする。この人徳を以て、しかも義務的事務的にするのではなく全く献身的に就職の斡旋に東奔西走するのであるから、流石の不況時代に拘らず、日本銀行、三井、三菱等巨大銀行會社を始め各方面からの申込員數二百三十一に達し、卒業生中の就職希望者九十五人に對して二・七八倍といふ好況であつた。さうして卒業までに面會或は就職、試験等の難關を突破したものは八十三名、残れる十二名も卒業後間もなく各方面に就職して、不況時代としては幸先きよき出發をなし得た譯である。

かくて創業の大責務は果された。深刻なる不況の世運の間に在つて、入學志望者は年々一千人を前後し收容人員の七倍を數へ、しかも生徒の素質頗る良く、優秀なる人材養成の道場として社會の認承を得、卒業生の就職状況また上述の如くであつたから、次に掲げる内容の整備と好學的活動と相俟つて、爰に創業は完成したといへるであらう。

三 研究調査機關

研究所、調査部創設 經濟學は社會科學といはれる如く、文化科學の中にあつても恒に社會事象と深き關係を持ち、恰も自然科學における實驗の必要なるが如く、實證的研究が必要である。本校教授陣も漸を逐ふて充實して來たから、この研究上の要望が具體化して、十四年匆々岩本教授が創立準備に當り、十月十日の創立委員會によつて研究所規程が確定し、委員及調査部長が創立委員から選ばれた。常務委員古館教授、調査部長岩本教授以下八名の委員が別記の如き研究調査事業を擔當することになつた（研究所規程第三條參照）。

横濱高等商業學校研究所規程（抄）

- 第一條 横濱高等商業學校ニ研究所ヲ置キ横濱高等商業學校研究所ト稱ス
- 第二條 本所ハ商業及經濟ニ關スル調査研究ヲ爲シ學術ノ進歩ト實務ノ發達ヲ圖ルヲ以テ目的トナス
- 第三條 本所ハ左ノ事業ヲ行フ

- 一、商業及經濟ニ關スル調査研究
 - 二、調査研究資料ノ蒐集及其ノ整理
 - 三、講習會講演會研究會等ノ開催
 - 四、公刊物ノ發行
 - 五、調査研究ノ獎勵
 - 六、其ノ他本所ノ目的ヲ達スルニ適當ナリト認ムル事業
- 第八條 調査研究ニ關スル事務ヲ行フ爲メ調査部ヲ置ク

この研究所は當初専ら調査部の事業を中心とし、研究所自體としては特別の事業を行はなかつたが、研究所が幹事役となり委員が活動の中核體となつて次の如き研究會を作り逐次發展して、現在の太平洋貿易研究所の開設に誘導したのである。

嗣後會 教官が順次研究のため精讀した著書の紹介と批判を發表し、これを議題として討論する全教官の會合。大正十四年六月第一回例會を教官室に開き、爾後毎月一回開催して十數回に及んだ。

貿易研究會 世界貿易の實證的研究を目的とし、次の如き地域的分擔を定めて毎水曜日順次報告することとし、昭和十二年に入るや直ちに實行した。

德 增 教授——イギリス。	渡 邊 教授——イタリヤ。
井上鑑三教授——ドイツ。	森 田 教授——日 本。
井上龜三教授——アメリカ。	大 竹 教授——フランス。
越村助教授——ロシア。	岡 野 教授——世界貿易。

然るに報告が一巡した頃、森田教授の渡歐、越村助教授の應召のために、兩氏の擔當學科を殘留の教授の間で分擔引受けることとなつて、新しい講義準備に忙殺され、研究報告會を繼續することは加重となつたので、一時會合を中止した。これは十五年に至つて、商學會研究報告會として復活した。これ等一聯の眞摯な研究會合の雰囲気は漸く結實して十五年末の太平洋貿易研究所の開設となつたのであるが、同研究所については後述するところに譲る。

研究所季報發刊 調査部においては、商業經濟の内外各般に亙る調査研究資料を汎く蒐集整理し索引を作成すると同時に、謄寫して受入資料目錄及び重要經濟問題の論題目錄を毎月各教官に配布してゐたが、積極的に部員の研究乃至調査を資料として提供し同時に本校が未だ研究發表の機關雜誌を持たなかつたその缺を充たさんとして、昭和三年六月研究所委員會を開き、季報發行に決し、十月二十日、研究所季報第一號が發刊された。内容は次の如くである。

季報第一號目次

セリグマン「月賦販賣研究」の紹介
最近英國産業における集中と獨占
内外重要經濟日誌 昭和三年四月—九月
主要受入資料及定期刊行物目錄

德 增 教授
井上龜三教授

第二號は四年一月、大竹教授の法律と契約の凋落（一）、下田教授の南米經濟に關する二名著を讀みて、の二

つの紹介論文。第三號は同年四月、小宮山教授の聯結貸借對照表に就て、第四號は同年八月、大竹教授の前掲のもの續きと井上鑑三教授のウエイト「消費經濟學」の紹介論文を載せてゐる。季報はこの第四號を以て新に發刊される商學會の雜誌「商學」に包攝されることとなり廢刊した。

商學會の設立と「商學」の發行 研究發表の機關雜誌を持ちたいことは、かねてからの念願であり、教授陣容の充實は十分機關雜誌の内容を豊富になし得る自信があつたが、學校の機關雜誌は大なる市場性を持たないし、當時市場性多しといはれた一、二の大學の有名な機關雜誌さへ收支償はず、財政的行詰りに當惑してゐたことを洩れ聞いてゐたので、機關雜誌發刊には慎重の態度を執つてゐた。然るに卒業生及在學生の間から發刊の要望が起つて來たし、その發行を喜んで引受ける出版番肆同文館の森山誼二氏があつたので、昭和四年春、本校教官と生徒とを以て會員とする商學會を組織し、この組織によつて雜誌「商學」を發刊する運びとなつた。

横濱高等商業學校商學會規則

- 第一條 本會ハ横濱高等商業學校商學會ト稱ス
- 第二條 本會ハ雜誌「商學」ノ發行ヲ目的トス
- 第三條 本會ハ事務所ヲ横濱高等商業學校内ニ置ク
- 第四條 本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス
 - 一、特別會員 本校教官
 - 二、普通會員 本校生徒

- 三、贊助會員 本校卒業生ニシテ本會ニ入會スルモノ
- 第五條 本會々員ニハ雜誌「商學」ヲ年二回頒布ス
- 第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 一、會長 一名
 - 二、幹事 若干名

- 會長ハ會務ヲ總理ス
- 幹事ハ會長ヲ輔ケテ會務ヲ處理ス
- 第七條 會長ハ校長之ニ當リ幹事ハ特別會員中ヨリ會長之ヲ指名ス
- 幹事ノ任期ハ二ケ年トス
- 第八條 會員ハ會費トシテ年額金二圓ヲ納ムルモノトス

會長	校長	田 尻	常 雄
幹事	教授	下 田	禮 佐
同	同	小 山	宮 敬保
同	同	德 增	榮 太郎
同	同	大 竹	綠
同	同	井 上	鐵 三

かくて第一號は四年七月十日に發行され、三百二十三頁の堂々たる體裁と次の如き豊富なる内容を盛つて現はれた。

鎖國時代に於ける支那の對歐貿易に就て
聯結貸借對照表に關する問題若干

農家經濟に於ける勞働力の自己搾取

CIF約款 ワルソー・ルール

フールト・ホイットマン論

時 論

最近の金解禁問題

賠償問題と獨逸の經濟

資料及紹介

ミルス氏の物價變動研究

市販柴油の研究

下田 證 佐
小宮山 敬 保
井上 鑑 三
不二門 龍 觀
西 村 桐

森田 優 三
岡野 鑑 記

森田 優 三
南 稻 康 博

外郭研究團體 商學の發刊より一足先きに、本邦貿易の太宗たる生糸の經濟學的研究團體が井上鑑三教授を中心とし、本校若手教授と生糸貿易の學究的社員とによつて結成され、二年九月一日その機關雜誌「生糸經濟研究」が創刊された。井上教授は全心を打込んで生糸の經濟的研究に没頭し、帝鑑ビル内に自ら事務所を設け大量の奮闘目覺しきものがあつただけに、不定期ではあるがその後發行された續輯とも學界、實業界の稱賛を瀛ち得た。七年三月の第六輯以後は暫く休刊したが再び十年に至つて井上教授單獨で「生糸經濟研究所彙報」を發行した。これは一、二回で中止したやうだが、この間における同教授の學問的熱意には洵に敬服のほかなかつた。十四年四月忽焉として世を去つたが、春秋に富み且つ眞學な學究として將來を囑望されたのに實に惜しいことを

した。

四 夜學部附設

夜學部の目的 本校は廣く門戸を開放して、晝間實務に従事するものために専門學校程度の、商業上必要なる學術の講習を行はんとして、夜學部の附設を文部省に申請中であつたが、大正十五年四月廿八日附を以て認可されたので、直ちに講習生の募集を行ひ五月十日第一回の講習を開始した。

夜學部の規則は次の如くである。

横濱高等商業學校夜學部規則

第一章 目 的

第一條 本夜學部ハ主トシテ實務ニ従事スル者ノ爲ニ商業上必要ナル學術ノ講習ヲ行フ

第二章 講習期間及學科目

第二條 講習ハ毎年左ノ三期ニ之ヲ行フ

春期講習 四月ヨリ六月迄ノ間ニ於テ五週間

秋期講習 九月ヨリ十二月迄ノ間ニ於テ五週間

冬期講習 一月ヨリ三月迄ノ間ニ於テ五週間

第三條 毎期ノ講習ハ左ノ學科目中三科ニ付之ヲ行フ

商業 通 論 商業 英語 商 品 學
商業 地理 商工 心理

- 貿易論 海外經濟事情 稅關
倉庫 金庫 銀行 海運保險 火災保險
外國爲替 取引所 海運保險
生命保險 海上保險
商業簿記 銀行簿記 工業簿記
英文簿記 會計學 商業數學
貿易實務(英語) 英文商業通信
經濟原論 貨幣論 財政學
商工經營論 統計學 經濟統計
商業政策 工業政策 社會政策
經濟史
法學通論 民法 商法
商事特別法 國際法
右ノ外隨時課外講演ヲ行フコトアルヘシ
- 第四條 前條ノ學科目ハ時宜ニヨリ之ヲ分合スルコトアルヘシ
但シ六期ヲ通シテ十五學科目ヲ下ラサルモノトス
- 第五條 各學科目ノ講習ハ十回(二十時間)ノ授業ヲ以テ完了スルモノトス
但シ都合ニ依リ之ヲ増減スルコトアルヘシ
- 第三章 講習生
- 第六條 講習生ハ每期之ヲ募集ス

第七條 講習生ハ中等學校卒業者又ハ本校ニ於テ適當ト認メタル者ニ限ル

第八條 講習志願者ハ講習願書及履歴書ヲ提出スヘシ

講習ヲ繼續セントスル者ハ講習繼續願書ヲ提出スルコトヲ要ス

第九條 入學ハ願書受付ノ願ニヨリ之ヲ許可ス

但シ講習繼續者ハ右ノ順位ニ依ラスシテ入學ヲ許可スルコトアルヘシ

第十條 講習生ハ一學科目又ハ數學科目ノ講習ヲ受クルコトヲ得

第十一條 不都合ノ行爲アリタル講習生ハ之ヲ除名ス

第四章 講習證明及學力檢定

第十二條 講習補助者ニハ講習證書ヲ授與ス

第十三條 講習證書ヲ有スル者ハ其講習學科目ニ付本校指定ノ期日ニ學力檢定試験ヲ受クルコトヲ得

第十四條 學力檢定試験ニ合格シタル者ニハ檢定合格證書ヲ授與ス

第十五條 十五學科目以上ノ檢定合格證書ヲ有スル者ニハ夜學部講習卒業證書ヲ授與ス

第五章 講習料

第十六條 入學ヲ許可セラレタル者ハ直チニ講習料ヲ納付スヘシ

一旦收納シタル講習料ハ之ヲ返還セス

一學科目一期ニ付 金 參圓

二學科目一期ニ付 金 四圓

三學科目一期ニ付 金 五圓

第十七條 講習料ヲ納付シタル者ニハ講習券ヲ交付ス

講習券ハ講習時間毎ニ之ヲ携帯スヘシ

講習會の經過 教室は小使室傍の元の事務室を充てたので六十名を限つて募集した。男女共學を標榜したが、

講習場が、婦人には極めて不適當なこの山頭にあり、登校路は不氣味に暗いのでおそらく一人も婦人の聴講生はあるまいと想像してゐたが、案外にも第一回四十八名の中には三人の若い熱心な婦人を交へた。

第一回は五月十日から五週間毎日午後六時半から二時間一課目を講習し、三課目各十回を輪講して講了することとした。不二門教授の法學通論、徳増教授の經濟原論（總論及生産論）、古館教授の商業簿記といふ講習科目であつた。五週間と云へば相當長い期間であり、しかも夜間この山へ登つて來るのだから餘程の熱心なものでなければ續かない。幸ひにも殆んど全部の聴講生が最後まで頑張つて好成績を収めて第一回を修了した。第一回聴講生の勤務先別は、官吏一〇、公吏四、銀行員九、會社員二一、小學校教員三、新聞記者一である。

第二回以降の講習開始日は次の如し。

第二回	大正一五、九、一三	第三回	昭和二、一、一七
第四回	昭和二、四、一八	第五回	同 二、九、一九
第六回	同 三、一、二三	第七回	同 三、五、一
第八回	同 三、九、一七	第九回	同 四、一、二一
第十回	同 四、五、六		

一回の講習に三課目宛としたから三十課目に亘り大體高等商業學校の學科目の全般が一通り講了したのである。ところで同が重なるにつれて聴講生の数は減少し第九回は二十五名、第十回は十七名となつた。これでは教授側も張合がなし、學校の負擔も大きくなる。そもそも、この山の上で夜間繼續的講習をするといふのが無理で

あつたから聴講生の減少するのは當然である。かうした経験から、市内の中心地に適當な會場が得られるまで夜學部は無期閉鎖することとなつた。

五 開 校 式

開校式祝賀日程 弘明寺高工の假校舍から南太田の假教室へ、さうして三年目に漸く本館へ引移るといふ進しい状態だつたが、この間に三學年九學級は完成したので、いよいよ開校の式典を擧げることとなつて準備を進め大正十五年十月二十一日（木曜日）を以て式典の當日と決定、次の如き日程によつて祝賀行事を展開することとなつた。

開校式祝賀日程

十月二十一日（木）	開 校 式
	提 灯 行 列（夜）
十月二十二日（金）	名士學術講演會
十月二十三日（土）	大 運 動 會
十月二十四日（日）	野球、庭球、卓球 柔道、籠球、大會 管 樂 大 會（夜）
十月二十五日（月）	校 内 辯 論 大 會

運動各部大會續キ

十月二十六日(火)

語學大會

十月二十七日(水)

學生娛樂大會(夜)

十月三十一日(日)

蹴球大會、剣道大會

自十月二十一日

横濱文化史料展覽會

至十月二十六日

各教室裝飾、寫眞ボスター展覽會

開校祝賀式典 二十一日午前十時から講堂に於て岡田文部大臣臨場の下に盛大な祝賀式典が舉げられた。

開校式次第

大正十五年十月二十一日

午前十時

- 一、開式
- 一、君ヶ代合唱
- 一、工事報告
- 一、學校長式辭
- 一、文部大臣祝辭
- 一、來賓祝辭
- 一、祝電披露
- 一、生徒總代祝辭
- 一、校歌合唱
- 一、閉式

當日は天氣快晴、絶好の開校日和であつた。玄關には裝飾を施し、正門前及裏門にはそれぞれアーチを設け、屋上に國旗及本校徽章入の旗數本を樹て且つ萬國旗を吊し、校内各室には生徒の手に成る各種の裝飾があつた。

式は古館教授の開式挨拶によつて開始、君ヶ代合唱の後、工事報告あり。次で田尻校長の式辭、岡田文部大臣の祝辭及び池田神奈川縣知事、有吉市長、ホルムス英國總領事、佐野商大學長、渡邊名古屋高商校長、東京、横濱商業會議所會頭の祝辭があつた。

式後直ちに饗宴場(三階合併教室)に於て祝宴を催し、宴了つて來賓を自動車にて市内の復興狀況等を案内、三溪園を廻る。尙主なる來賓に對し當日午後五時より市内八百政に市長の招宴があつた。

學校長式辭

本日本校開校式ヲ舉行スルニ當リ、文部大臣閣下ヲ初メ閣下各位ノ御臨場ヲ辱ウ致シマシテコニ盛大ナル式ヲ舉ゲ得マスルコトハ本校無上ノ光榮トシ、御厚情ニ對シ本校一同ヲ代表シテ厚ク御禮ヲ申上ケマス。又本校創設ニ當リマシテ文部當局ヲ初メ縣市官民各位ノ非常ナル御盡力ト御同情ニ對シ深ク感謝ノ意ヲ表スル次第デアリマス。

此ノ記念スベキ機會ニ於テ簡單ニ本校ノ沿革及抱負ノ一端ヲ述ベテ式辭ト致シタイト思ヒマス。

本校ハ震災直後ニ創設セラレタル學校デアリマシテ大正十三年四月學生ヲ收容シ授業ヲ開始スルニ當リマシテ、本校舎ハ未ダ影ダニ見ルコトガ出來ナカツタメ、漸ク高等工業學校ノバラツク建一棟ノ一部ヲ借用シテ授業ヲ開始シタノデアリマス。所謂居候生活ヲナスコト滿一ヶ年ニシテ翌十四年本校敷地ニ移轉シマシタ。然ルニ本館ハ建築ノ最中ニアツテ、漸ク生徒控所及武道々場ヲ仕切り臨時教室トナシ授業ヲ開始シマシタ。教職員全部本館ニ移轉シマシタノハ漸ク本年ノ四月カラデアリマシタ。

以上述べマシタ通り本校ハ震災ニハ遭ハナカッタガ震災ニ遭遇シタルモノト殆ンド同一ノ不自由極マル生活ヲ綴ケマシタ。併シコノ悲惨ナル生活ハ私達ニ大ナル刺激ヲ與ヘ精神ヲ緊張セシメタルコトヲ感謝致シテキル次第デアリマス。

次ニ本校ハ如何ナル主義ヲ目標トシテキルカトイフコトハ短時間ニ之ヲ述ベルコトハ困難デアリマスガ、一言ニシテイヘバ凡テテ信賴シ得ル人物ヲ養成スルコトヲ主眼ト致シテ居リマス。獨立自營タルト他ニ使用セラルルトヲ問ハズ自ラヲ深ク信ズルト共ニ他ヨリ安心シテ全任セラルル人物ヲ養成スルコトヲ期待シテ居ルノデアリマス。カカル人物タルニハ品性高潔、思想穩健ナルト共ニ、進歩的ナ商業社會ノ進運ニ適應スルダケノ智能ト技術トヲ有シ且如何ナル職務ニモ堪ヘ得ル健康ヲ有スルコト等敢テ喋々ヲ要セザル所デアリマス。現時我國ニ於テハ人口ノ増加ト共ニ各學校出身者ハ何レモ其ノ就職難ニ困リ切ツテ居ル有様デアリマス。カクノ如ク人ハ有り餘ツテキルガ、全部ヲ任セ得ル信賴スベキ人物ハ曠天ノ星ノ様デアルトイフコトハ實業界ノ有力者ヨリ常ニ聞クトコロデアリマス。之ヲ例ヘレバチヨウ武蔵野ニ草ハシナジナ多ケレド摘菜ニスレバサテモ少シトイフノト同一デアリマス。本校ハ武蔵野原ニ生ヒ茂ツテキル雜草タラズシテ其ノ摘菜タラシコトヲ期待シテ居ルノデアリマス。

我横濱ハ帝都ノ支關デアツテ文化ノ關門タルト共ニ實ニ我國ノ對外貿易上最重要ナル地位ヲ占メテ居ルノデアリマス。我國輸出貿易ノ大宗タル生糸ハ震災後ノ今日ト雖モ尙其ノ八割五分ヲ占メテ居リマス。我國總貿易額ノ三分ノ一ハ實ニ我横濱港ヲ經由スルノデアリマス。本校ガカカル地位ニアル關係上對外貿易或ハ海外發展トイフガ如キ事項ニツイテハ格段ノ注意ヲナシ研究ヲナシテ居ル積リデアリマス。

我横濱ハ過般ノ大震災ノタメ端カラ端マデ谷底ヨリ山ノ頂上ニ至ルマデ悉ク燃エ盡サレマシタ。一木一草ニ至ルマデ燃エ盡サレ殘ルハ灰ト燒ケタル土ダケデアリマス。コノ燃エ盡シタル灰ノ中カラ燒ケタル土ノ中ヨリ何物カヲ生ゼシメナケレバナリマセン。即チココニ燃エ盡ルガ如キ復興ノ精神ガ湧出シタノデアリマス。新ニ生レ變ツタ人物ガ出來タノデアリマス。而シテ何者ト雖モ之ヲ防ギ止スルコトノ出來ナイ緊張セル復興精神ガ市民ノ間ニ熾然トシテ湧出シタノデアリマス。自然ノ力ハ實ニ恐怖スベキモノデアアルガ、マタ人間ノ人モ偉大ナルモノデアアル。吾人ハコノ偉大ナル人力ヲ以テ自然ヲ征服セネバナラナイノデアリマス。今ヤ我横濱ハ震災ニヨリ生レ變ツタ人間ニヨリ緊張セル精神ヲ以テ横濱ノ復興ハ清々トシテ進歩シツアルノデア

リマス。此ノ時ニ當リ、コノ場所即チ不二見ヶ丘ノ高臺ニ於テ本校ガ呱呱ノ聲ヲ上ゲタルコトハ頗ル有意義ナルト共ニ本校ノ大ナル使命ヲ信ジ其ノ責任ノ重且大ナルコトヲ自覺スルモノデアリマス。
感想ノ一端ヲ述ベテ式辭ト致シマス。

文部大臣 祝辭

本日横濱高等商業學校開校ノ式典ヲ舉行スルニ當リ一言慶祝ノ意ヲ表スルコトヲ得ルハ予ノ欣幸トスル所ナリ。
抑々横濱ノ地帝都ノ關門ニ位シ開國以來世界交通ノ衝ニ當リ本邦貿易上最重要ナル地位ヲ占メ我國輸出入貿易總額ノ凡三分ノ一ハ實ニ本港ヲ經由ス。

政府ガ大正十二年十二月此地ニ横濱高等商業學校ヲ創設シタルハ實ニ茲ニ觀ル所アリシナリ。次デ十三年四月始め生徒ヲ收容シ爾來教職員諸氏ノ協力一致ト官民諸氏ノ後援トニ依リ克ク震災直後ノ困難ニ堪ヘ諸施設ノ完成ト内容ノ充實トニ努メ以テ今日アルヲ見ル邦家ノ爲寔ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ。

惟フニ國運ノ隆昌ハ國民ノ經濟的發展ニ俟フ所極メテ大ナルモノアリ國民ノ經濟的發展ハ國民各自ノ自覺ニ依ル而モ世界ノ經濟界益々多事ナラムトスル現下ノ情勢ニ於テ自ラ實業界ニ投ゼムトスル者ハ實ニ商業的才幹ヲ有スルヲ以テ足レリトセズ剛健實實ナル氣風ト高邁ナル人格トヲ兼ネ備ヘザルベカラズ。

本校ハ實ニ國家ノ進運ニ貢獻スベキ模範的實業家ヲ養成シ本邦産業貿易ヲ振興シ又之ニ由リテ横濱ノ復興促進ニ寄與スルノ使命ヲ擔グルモノナルヲ以テ教職員諸君並生徒諸子其ノ責任ノ重且大ナルニ鑑ミ不屈不撓ノ精神ヲ以テ國家ガ本校ニ期待スル所ニ添ハムコトヲ切望シテ止マザルナリ。

終ニ予ハ此機會ニ於テ本校創設ニ際シ多大ノ援助ヲ與ヘラレタル本縣官民諸氏ニ對シ深甚ノ謝意ヲ表シ併セテ本校將來ノ發展ヲ祈ル。一言以テ祝辭トナス。

大正十五年十月二十一日

文部大臣 岡田 良平

東京商科大学長祝辭

四八

横濱高等商業學校新設セラレ諸般ノ設備成テ告ゲ茲ニ本月ヲトシテ開校ノ盛典ヲ舉行セラル吾人同ジク商業教育ノ任ニ膺ル者一層慶賀ノ情ニ堪ヘザルモノアリ。

回顧スレバ横濱ニ於ケル商業教育ハ其起原頗ル遠ク明治十五年故小野金六氏等同市々民二十有餘名ノ發起ヲ以テ創設セラレタル横濱商法學校ヲ以テ濫觴ト爲ス當時本邦ニ於ケル商業學校ハ東京商法講習所及ビ神戸大阪兩商業講習所等アリシガ神戸大阪ノ二講習所ハ内國商業取引ニ必須ナル卑近ノ技術ヲ授クルヲ以テ目的トシ其程度極メテ淺薄ナリシニ反シ横濱商法學校ハ東京商法講習所ト同ジク専ラ外國貿易ニ從事スベキ人材ヲ養成スルヲ以テ目的ト爲シ洋式教育ヲ施シ經濟貿易實務及ビ外國語ニ力ヲ用キタリ然ラバ則チ横濱創立者ノ企圖ハ外國貿易上實際ノ需用ヲ察シテ其教科ヲ擇ミ程度ヲ定メ以テ目的ヲ達成セント期スルニ在リシヤ復タ疑ヲ容レザルナリ爾來本邦經濟ノ發達外國貿易ノ進歩顯著ナルニ伴ヒ東京商法講習所ハ之ニ順應シテ漸次其教課ヲ進メ程度ヲ高メ高等商業學校トナリシニ係ラズ横濱商法學校ハ明治二十一年商業學校通則ニ據リ其第一種學校ヨリ稍高キ中等教育機關トシテ横濱商業學校ト改稱シタルニ過ギズ更ニ征討露ノ兩役ヲ經本邦經濟ニ異常ノ進展ヲ來タシ國光大ニ發揚セラレシ機運ニ際會シ東京高等商業學校ハ益々其程度ヲ高クシ神戸大阪長崎山口小樽ノ各地ニ高等商業學校相繼テ設立セラレ本邦高等商業教育機關漸ク備ヘルニ至リシカ横濱ハ依然中等學校タル横濱商業學校ヲ有セシノミニシテ何等之ニ加フル所アラズ吾人ハ本邦外國貿易上ニ於ケル同港ノ地位歴史並ニ前記横濱商法學校創立ノ趣旨ニ鑑ミ斯ル情態ニ對シ不滿ノ念ナキ能ハズ又横濱市民ノ傍觀シテ何等發策スル所ナキヲ解スル能ハズ夙ニ勇取進取ノ氣象ヲ以テ雄視セル横濱市民ノ意氣何クニ存スルヤヲ疑ハザルヲ得サリキ然ルニ政府ハ疊ニ歐洲大戰後ノ一施設トシテ高等教育機關擴張ヲ計畫シ名古屋彦根和歌山高松大分福島高岡ノ諸市ト共ニ横濱ニモ高等商業學校ヲ新設セラレタリ是レ最モ機宜ニ適シタル措置ニシテ吾人ハ本校ノ設立ニヨリテ横濱ニ當然設置セラルベカリシモノニシテ長ク閑如シタルモノノ設置ヲ見又横濱市民ノ當然有セザルベカラザリシモノヲ新ニ獲タルヲ見欣慰ノ情禁ズル能ハザルト同時ニ其設立時機ノ大ニ後レタルヲ惜マザルヲ得ザルナリ。

然レドモ既往ハ追フベカラズ要ハ將來ニ寄慮スルニ在リ抑々横濱ハ商業教育ニ取リ能ク地利ヲ占メタリト謂フベク教官ノ招聘教材ノ蒐集國際事情ノ觀察生徒ノ募集卒業生ノ就職等他ノ多クノ地方ニ比シテ遙ニ有利ナルハ言フ俟タズ而カモ當路能ク

其人ヲ得創立以來日向ホ淺キニ拘ラズ已ニ其功績ノ見ルヘキモノ頗ル多キガ故ニ吾人ハ此機ニ當リ文政當局ガ益々本校ノ施設ヲ完備スルニ勉メ横濱市民モ亦之ガ設置ニ報ユル爲メ舊テ本校ノ經營ニ利便ヲ與ヘ其傳統的ノ意氣ヲ發揮シ本校ヲシテ克ク其地ノ利ヲ善用シテ其使命ヲ完フスルニ遺憾ナカラシメシコトヲ冀フト同時ニ本校當路者ニ向ツテハ適切ニシテ穩健ナル教育方針ヲ確立シテ能ク校務ヲ經營シ内ハ以テ質實剛健ノ校風ヲ涵養シ外ハ以テ本邦產業貿易ノ振興ニ貢獻シ又横濱港ノ繁榮ニ寄與シ以テ校運ヲ長ヘニ隆昌ナラシメ天下ノ期待ニ負カサルコトヲ切望シテ已マサルナリ爰ニ願望ヲ省ミズ所感ヲ披瀝シテ以テ祝詞ニ代フト云爾。

大正十五年十月二十一日

東京商科大学長 佐野 善作

工事報告

本日横濱高等商業學校ノ開校式ヲ舉行セラル方リ工事施行ノ願末ヲ報告スルハ小官ノ光榮トスルトコロナリ。
疊ニ政府ハ大正八年度以降ノ繼續事業トシテ高等諸學校ノ増設ヲ企發セラレ就中高等商業學校ハ全國ニ七校ヲ新設シ其一校ヲ横濱市ニ設置スルコトトシ豫算額ハ八十三萬三千百圓ト決定セラレタリ依テ神奈川縣ヨリ五十六萬圓ノ寄附ヲ申請許可セラレ敷地ノ購入及地平均工事ハ之ヲ同縣ニ委任シ其完了ヲ俟ツテ大正十三年四月文部省建築廳横濱出張所ヲ開設シ専ラ工事ノ設計監督ニ從事セリ。

元來本校ノ建築ハ木造ノ計擬ナリシモ震災ノ結果耐震耐火の構造ト爲スベキ必要ヲ認メタルヲ以テ主要建物ハ之ヲ鐵筋混凝土造ニ變更シ其ノ變更ト物價騰貴及土地購入増價等ノタメ實行豫算額ヲ設備費ヲ合セテ百十一萬六千九百九十一圓ト改定セラレタリ而シテ其設計ハ實用ヲ旨トシ裝飾的設計ハ成ルベク之ヲ避ケ指名競争入札ニヨリ購買ニ付シ工事ヲ實行シ寄宿舎雨天體操場等ヲ除ク外ハ既ニ其ノ竣工ヲ告ゲタリ。

買収セシ敷地面積ハ一萬八千二百四十八坪餘ニシテ其ノ購入費十九萬五千四百四圓ヲ要シ此一坪當リ十圓七十餘餘ニシテ地平均ハ一萬二千六百二十七圓ヲ要シタリ又竣工セシ建物ノ總延坪ハ二千二百五坪餘ニシテ今日迄ニ支拂及契約済ノ工費ハ五十七萬六千五百五十五圓餘ニシテ本館鐵筋混凝土建延一坪當工費ハ二百四十二圓餘ニ相當セリ又器具機械圖書類ハ本校ニ於テ之ヲ設

備セリ

本工事着手以來前後三ヶ年ニ互リ何等ノ故障ヲ生セズ其工程ヲ進メ近ク全部ノ完了ヲ告ゲントスルニ至リタルハ閣下並諸君ノ後援ニ倚ルニ外ナラザルコトト深ク感謝ノ意ヲ表シ茲ニ工事施行ノ概要ヲ報告ス

大正十五年十月二十一日

文部大臣官房建築課長

文部技師 柴垣 鼎 太郎

開校記念祭プログラム

十月二十一日(木)

(1) 式 典 午前十時—正午

(2) 東電對本校野球戰 於本校グラウンド 午後二時より

(3) 提灯行列 本校生徒全部 午後六時より

(道順) 本校—初音町停留所—電車道—長島町—吉田橋—馬車道—大江橋—榎木町驛前—辨天橋—本町通り—相生町—公園にて解散

二十二日(金)

名士學術講演會(本校大講堂)

一、爲替市場としての横濱 横濱正金銀行頭取 兒玉 維次氏 午後一時より

一、富の經濟と貧の經濟 法學博士 福田 徳三氏 午前九時より

二十三日(土)

運動會 於本校々庭

個人競技、HCS學年對抗競技、縣下中等學校八百米リレー、市内小學校高等科八百米リレー、同等常科四百米リレー、來賓競争、優勝旗授與

二十四日(日)

(1) 近縣中等學校軟式庭球大會(本校コート)午前八時より參加學

校七十餘校

(2) 硬式模範試合(鴨打、河尻、麻生、八木、相澤) 午後三時より

於本校コート

(3) 一高、横濱高工、早大ラレツシニマン、本校、野球爭覇戰 午前八時より

(4) 近縣中等學校柔道大會 本校道場 午前九時より

神奈川、静岡、千葉、埼玉、東京、山梨、各府縣十八校

(5) 全關東卓球個人大會及女子模範試合 午前九時より

參加者 二百餘名

(6) 縣下中等學校バスケットボール大會 午前九時より

神中、二中、三中、關東學院、本牧中、鎌倉師範

(7) 音樂大會 於本校大講堂 午後六時より

一、合唱 本校音樂部員

一、管絃樂

一、序樂祝典

二、未完成シンフォニー

一、合唱 祝 歌

一、マンドリン合奏

一、合唱 船 出

一、マンドリン合奏

一、管絃樂

ラ タ ン 作

シ ュ ー ベ ル ト 作

本校音樂部員

本校音樂部員

本校音樂部員

隨軍戸山學校軍樂隊

二十五日(月)

- 一、二つの印度舞曲
- 二、木琴獨奏
- 三、スラブノ詩史
- 管絃樂指揮
- 合唱指揮
- マンドリン合奏指揮
- 逸
- 青木 水氏
- 平野 主
- フリードマン作
- デトリツヒ作
- スキルトン作
- (1) 神中對横商野球戰 於本校グラウンド 午前八時より
- (2) 辯論大會 於本校大講堂 午後一時より
- 一、移民か移物か
- 一、婦人労働と家庭賃銀
- 一、國民外交の基調
- 一、帝國の前途と海運
- 一、石油を繞る各國の動き
- 一、最近の支那
- 一、爲替問題考察
- 一、保守主義の一考察
- (3) 巢籠會主催 琴古流尺八演奏會 於本校講堂 午後五時より
- (1) 縣下中等學校英語大會 於本校講堂 午後二時より
- (2) 外語劇及朗讀 於本校大講堂 午後六時より
- (イ) 英語—アブラハム・リンカーン(ドリンクウオーター作)
- (ロ) 同—スレッド・オブ・スカールレット (ベル作)

二十六日(火)

- (ハ) 獨逸語—思ひ出
- (ニ) 佛語—群青
- (ホ) 支那語—歸去來之朗讀
- (マ) 支那語—歸去來之朗讀
- (一) 縣下各クラブ蹴球大會 於本校コート 午前八時より
- 白旗、セント・ジョセフ、横濱サツカー、海兵團、本校各クラブ
- (2) 縣下剣道大會 於本校道場 午前八時より
- 返中、神中、二中、三中、横商、實習、工業、鎌中、鎌師、本牧中、横須賀中

二十一日より二十六日まで

校内開放 室内裝飾
横濱文化史料展覽會
神奈川縣下學生寫眞印畫展覽會
ボスター展覽會

横濱文化史料展覽會 記念式典當日、調査部編纂の「横濱の沿革」なる小冊子を來會者に贈呈し、横濱の今昔概観を示した(内容 一、横濱の開港と發展 二、泰西文物輸入港としての横濱 三、横濱沿革誌略)が、記念行事の一として、調査部主催の横濱文化史料展覽會を開き、横濱市史編纂係その他の資料蒐集家から、古地圖、錦繪、寫眞、古書籍、諸参考品等を借受け、これに調査部所藏の錦繪、關係文献を加へ、出品目録を作つて頒ち

出品點數百三十七を一週間に亙り展示し、來會者の多大なる興趣を惹いた。

開校記念論文集刊行 「商學」創刊に先立つこと二年半、季報發行より一年半前の昭和二年三月十日に、開校記念論文集が次の如き内容を以て刊行された(菊版四二五頁)。これは本校の處女出版であり、將來の機關誌刊行の原型となつたものである。卷頭に載せられた田尻校長の發刊の辭はその抱負を語つてゐる。

發刊の辭

本校開校記念事業の一として豫て企圖せられてゐた本校スタッフの商業學經濟學法律學に關する研究論文が上梓刊行せらるるに當つて一言發刊の辭を寄せんとする。

抑々吾々は教育者であると共に學徒でなければならぬ。學生の教導に當ると共に學問研究に眞摯の努力を拂はねばならぬ。而して其研鑽の結果は之を世に發表して江湖の批判を乞ふ事は寔に自己琢磨の道でより兼て學問の向上進歩に資する所以であらう。吾々は夙に創立の際から此志を懷いては居たが創立事業の匆忙の爲めに今日まで其意を果さなかつた。然るに創業の仕事も一期を過し開校式を舉ぐるに際して機會到來し吾々の初志は達せられたのである。

憶ふにスタッフ各自は日頃其專門とする道を邁んで學問的生命をここに捧げ、自己の個性を發揚して學的生活を営んでゐる。然かも各々の聲き出す音色は異なるけれども合しては一の全き旋律を持つ交響樂を完成する如く各自の學問的興味が茲に集成せられて一の論文集となつてこそ學校を中軸とする吾々の協同生活が完きを爲るのである。

吾々は今昭和の初頭に無限に擴大し行くべき旋律の交響樂を江湖に向つて奏でんとする。日新の意氣と不斷の創造的努力隨て學界に雄飛すべき礎石は置かれたのである。

目次

原價計算に關する考察若干
徳川時代に於ける堂島米市場

小宮山 敬保
井上 龜三

商品と工業所有權

商工業に於ける人的因素

収益率の理論

ゲョールラントの「奢侈の概念」に就て

チュルギーの思想の一解釋

獨逸の賠償問題

ペルメイの定理と大數法則(ホルトキウィツチ)

獨逸法に於ける物の賣買と契約不履行

英商法の特質と由來とに就て

譯 讀

爲替市場としての横濱

横濱正金銀行頭取

兒玉 證次

開校式當時の概況

一、職員

學 校 長

田 尻 常 雄

教 授

保險學、交通論

岩 本 啓 治

國語、漢文、世界近世史

栗 林 信 朗

(在外研究中)

(在外研究中)

簿記、原價計算

下 田 禮 佐
西 村 稠 桐
古 館 市 太 郎

法學通論、民法、商事關係法
 商業作文、書法、商業實踐
 英語
 修身、商工心理學、心理學
 英語
 簿記、會計學
 經濟原論、商業史
 佛蘭西語
 民法、商法、國際法
 商業政策、交通論、商業英語
 商業算術、數學
 配屬將校
 助教授
 體操
 講師
 體操、教練
 珠算
 修身
 商業地理
 商業通論、貨幣論、商工經營

不二門龍
 藤田義雄
 光井武八郎
 內山進
 河村重治郎
 小宮山敬保郎
 德增榮太郎
 時田清
 大竹綠
 渡邊輝一
 小幡孫二
 宮城善助
 陸軍歩兵少佐
 下津屋俊夫
 石川寛
 山崎與右衛門
 友枝高彦
 內田寛一
 井上鎧三
 東京高師教授
 東京高師教授
 東京高師教授

銀行論、外國爲替、統計學
 獨逸語
 商業英語、稅關倉庫
 支那語
 理化學
 商品學、工學
 財政學、工業政策
 備外國人教師

森田優三
 小谷惠一郎
 井上龜三
 武田武雄
 田尻彦幸
 南種康博
 岡野鑑記
 エー・ビー・ラウンズ
 伊藤子之吉
 吉川仲衛門
 齋藤照之助
 矢島熙
 武石彌平
 堤善吉
 湯川和平
 吉居德治
 三田村額夫

英語、商業實踐、英文簿記
 柔道教師
 劍道教師
 會計課
 庶務課
 教務課
 會計課
 事務囑託
 圖書課
 醫藥課
 會計課
 同

三田村額夫
 吉居德治
 湯川和平
 堤善吉
 武石彌平
 矢島熙
 齋藤照之助
 吉川仲衛門
 伊藤子之吉
 エー・ビー・ラウンズ

生徒原籍調

(大正十五年九月十五日現在)

本籍	生徒数	二	本籍	生徒数	一本籍	生徒数	一本籍	生徒数
北海道	八	八	青森	一	一	徳島	三	三
東北	四〇	二	山形	一	一	愛媛	一	一
東京	一〇	三	秋田	一	一	高知	一	一
京都	八	二	福岡	一	一	福岡	一	一
大阪	七	一	石川	一	一	大分	一	一
神奈川	一三	三	富山	一	一	佐賀	一	一
兵庫	一〇	二	島根	一	一	熊本	一	一
長崎	九	一	根	一	一	宮崎	一	一
新潟	八	一	山	一	一	鹿兒島	一	一
埼玉	六	一	廣	一	一	沖繩	一	一
群馬	九	一	島	一	一	五	一	一
千葉	一〇	二	和歌山	一	一	計	四二	一

三、研究資料

圖書及雜誌

(大正十五年九月十五日現在)

圖書	冊数	一	雜誌	冊数	一
和漢書	三、一九三冊	一	和漢雜誌	六〇冊	一
洋書	四、四九八冊	一	洋雜誌	六四冊	一
計	七、六九一冊	一	計	一二四冊	一

調査部保管資料

(大正十五年九月十五日現在)

一、官公署銀行會社諸團體公刊資料マンフレット類.....約六五〇部

二、同上.....定期刊行物.....

(内) 國.....一八〇冊

三、新聞記事切抜.....

(内) 國新聞.....八冊

四、銀行會社考課狀.....

(内) 國.....五八〇社

商品標本及機械

(大正十五年九月十五日現在)

種類	別	数	量	價	格
商品	標本	一〇五五	一	五、五〇〇圓	
機械	器具	一〇三〇	一	一九、五〇〇圓	

六 學友會の活動

文化團體 學友會は大正十三年開校匆々結成されたけれども、間借生活の不如意と、百三十ばかりの一年生の少数であつたためにこれといふ活動は出来なかつた。ただ特筆すべきは一年有志の間に國際聯盟協會の學生支部が夙くも結成され、十一月二十二日、本校講堂でその發會式が舉げられ、財務官森賢吾氏の「歐米財政事情」早大教授内ヶ崎作三郎氏の「國家人と國際人との調和」と題する講演があつた。これは學友會の外郭團體ではあつたが、學友會的な活動としてのトップを切つたものであつた。爾來二十年、國際經濟研究會として大きな足跡を残しつつ今日に至るまでこの外郭團體は存続して、國際經濟問題への關心を昂揚してゐるが、日本國際協會(現外政協會)に於ける學生支部としては最古參格である。

この國際經濟研究會は翌十四年一月三十一日に第二回講演會を開催、新渡戸稻造、林毅陸兩博士の講演を、五月廿二日には、第一回國際思想研究講座を開き、外務省の塚本毅氏の講演を聴くといふ如く、文化方面活動の中心をなしてゐた。

學友會講演部は十四年五月三十日その第一回名士講演會を開き、高谷道男氏の「神秘思想の一考案」、堀光龜氏の「太平洋問題」を聴いた。

運動部 十四年に入るや高工野球部との間に定期戦を毎年一回交へようとの議が熟し、開港記念祝賀行事の一つとして、七月二日の開港記念日（後六月二日となる）に決行することとし、第一回定期戦が十四年七月二日、全校應援の下に、新山下町假設グラウンドで行はれた。午後四時開始、七時閉戦といふ記録が残つてゐるが随分長試合だつた。その結果は四A對三で本校が惜敗した。

翌十五年の第二回戦は七月一日新山下町グラウンドに舉行、五對四で本校が勝つた。應援に秘術を盡し、扇子による手拍子、拍手や太鼓で氣勢を上げ、應援戦の觀があつた。兩校應援團の熱狂、兩校フアンの喧騒、遂に横濱名物の一つとなり「濱の早慶戦」と題はれるに至つた。第三回も新山下町グラウンドで昭和二年七月一日に行はれたが、本校は一對〇で惜敗した。第三回は諒闇中であつたから太鼓その他の鳴物入り應援はなかつた。第四回は翌三年七月一日舉行四對三で本校快勝。第四回の決戦場は蒲頭球場（現在大日本航空會社のある場所）であつたが、塵芥焼却場が近くにあり、市中から集められた生の塵芥が近くに積んであつたから眞夏の蠅が風に飛つて大

舉して觀覽席へ飛んで来る。これを追ひ拂ふ扇子が一時に動いて白扇の浪が押し寄せるやうな壯觀を呈する等の景物もあつた。

もとむと定期戦の目的が、兩校の技倆を磨くとともに親睦を圖らうといふにあつたが、兩校とも學校の面目に掛けても勝たうと張切るし、鳴物入の應援團が背後に控えてゐるし、否應援團同志の競争が展開する。これにそれぞれフアンが彌次の應援をするので、試合が丁つても興奮が醒めず、夜の伊勢佐木町まで延長戦が繰り展げられるといふ有様だつた。電車の中で毎朝毎夕顔を合せる兩校の學生が、敗けた方は當分銷沈して顔も上げられないといふやうな拘泥は甚だ面白くないし、定期戦の逆効果である。このことと、試合を實力本位でやるために三回戦にしたいといふ本校側の主張と一本勝負で行かうといふ高工側の主張が妥協點に達せず、定期戦は此の第四回を以て一時中止することとなり、昭和四年五年の二ケ年は定期戦が見られなくなつた。

第一回陸上運動會が、十四年十一月十五日校庭に開かれた。陸上競技に餘興を織込んだやうな運動會で、前垂掛の店員や墨染の坊さん等に假裝して見物人に混つてゐる學生を、見物人に捜し當てさせる等といふ景物が添へられ面白可笑しく秋の一日を過ぎてさうといふ趣向である。

第二回は翌十五年十月二十三日に開催され、學年對抗で優勝した組及び近縣中等學校、市内小學校の對校リレー競走に優勝旗を渡すこととなつた。

昭和二年七月二十三日駒場帝大グラウンドに於ける全國高專野球大會關東预选赛に、野球部は準決勝戦で再度

高工と對戦し一對〇で惜敗してゐる。明治、慶應各豫科と本校との優勝爭奪戦といふ戦前の下馬評は裏切られた。

體育各部も對高工定期戦にその他對校競技と試合に活躍して部史の初めを飾つてゐる。

下津屋助教の指導で體育研究會が成立し會員三十五名を擁した相談會に發足したのが昭和二年六月二十七日であるが、下津屋氏がその席上語られた大きな抱負は、その後の體研の發展を約束するものの如くである。即ち「獨逸の愛國者がナポレオンの暴虐から脱せんとして奮起し、祖國青年の精神作興は體育の向上にありとして獨逸體操を創始した。又フキンランドの奪取されたのを啖いて憤起せるスウェーデンの熱血詩人によつてスウェーデン體操が發明された。かくて現代世界における體育の二大形式たるドイツ及スウェーデン體操は愛國の士によつて起されたのである。我國の文部省はこれ等諸國の體操の長所を採り入れ我國在來の體育方法をも尊重してここに今日の體育形態が出来た。ただ現今の青年は娛樂とか名譽心とかいふ出發點からは、かなり體育をやつてゐるが、もう少し眞の意味の體育を重視しなければならぬ云々」と。本校の體育は後述する如く全國有數のものであつて早くも文部省の表彰を受けたが、教官のこの抱負、この熱意あればこそで洵に故ありといふべきである。

横濱高商新聞發刊 昭和二年新學期を迎へ第二回生が三學年生となるや、新聞發刊の希望が起つた。「新聞は目下の急務だ。學生相互の親睦も新聞を通してであり、先生と學生との意見の疎通も新聞に依るの効は大である。本校發展のために我々の意のあるところを解せられたい」と發起人の三年生は全學生に呼びかけた。基金の

點で杜撰の點があり、多少の迂餘曲折はあつたが、學友會誌年一回發行を一同として他の一回分の費用を新聞發行に充てることに決定して折合がついた。ただ高商校長會議で新聞發刊禁止の内訓があつた際だつたから校長のところでは難色があつたが、學生の誠意が通じ、自重と責任とを以て發行の事に當る旨を誓はしめて遂に發行が許された。發行兼編輯人は三年坂本四郎君が當り、横濱毎朝新報社で印刷した第一號は二年六月三十日、新聞半折大八頁で發刊された。一面は發刊の辭と發刊に至る経緯。二面は論說ウィリアムゴドウィンで全紙幅が埋められ、三面は學校の近況で、下田教授歸朝、渡邊教授渡歐が報道されてゐる。四面は文藝欄、五面は迫り來れる第三回對高工定期野球戦への激勵で飾られ、六、七面は學友會各部の活動狀況が載せられてゐる。八面は全面殆んど廣告に充ててゐるがこれは經費捻出の爲めであつたらう。

第四號までは「横濱高商新聞」であつたが、十一月廿五日發行の第五號から校長揮毫の「横濱高商學報」と改題。四年第十四號から四頁新聞大となつた。三年には雜誌部が學報部と改められ學友會誌一回（學友會誌は六年の十月から不二見ヶ丘と改題）、學報年八回發行することとなつた。

その頃の學友會 昭和二年、籠球部が學友會の部として認められ、卓球部が庭球部から獨立し、競技部の内に水泳を含むこととなつた。

翌三年學友會の基礎を確立するため基金として三百圓を積立て爾後毎年之を繼續することとした。四年經費不足を補ふため會費を年額十一圓とした。又御大典記念事業として椎三十七本を校庭に植える。五年度から弓道と

體育研究會に學友會より補助金提出。弓道場が校庭南隅に設置された。弓道部は六年に獨立する。七年ラグビー部、九年排球部が獨立する。運動各部の更衣所が體育館西側に添ひて新設されたのは八年である。

五年對南大専門部との定期綜合競技會を開くことになり優勝旗を作製した。第一回は六月廿九日國立の南大グランドで行はれ、本校側は、野球、柔道、劍道、蹴球の四種目に勝ち、陸上競技、縮球、水泳、弓道の四種目に敗れて同点となり、勝敗の鍵は翌三十日の庭球戦が握ることになったが、果然非常な接戦となり遂に専門部を倒して勝ち、綜合成績九種目中五點を擧げて優勝した。第二回は翌六年六月二十八日本校校庭で展開。本校は九種目中、劍道、柔道、陸上競技、野球、蹴球、水泳に勝ち、縮球、庭球、弓道に敗れたが綜合點六對三で連續優勝した。對一橋専門部定期競技會は僅かに二回で中止し、豪華絢爛たる優勝旗は、兩校學生の手によつて七年、六郷河畔で燒却された。

文化方面では、開校當初から實力を備へた語學部が毎年秋の開校記念行事に外語劇を開いて横濱の人氣を凌つてゐたが、昭和五年十一月二十二日午後五時半から講堂で舉行された外語劇は、先づ西村教授の開會の挨拶に始まり、佛語劇ユーゴーの「ジャン・ヴァルジャン」、英語劇「酒場の夜」支那語劇長與善郎原作「韓信の死」(原作者長與氏が當夜わざわざ觀賞に來られてゐた)、西班牙語の演説、獨逸語劇「アルト ハイデルベルヒ」が上演された。六年は西語劇「罪は若きにあり」獨語劇「ウイリアム テル」佛語劇「アルルの女」英語劇「息子」華語劇「鴻門之會」を上演、毎回學生の熱演に觀衆を魅了し去り盛會を極めつつ最近まで續いてゐる。

七 貿易別科創設

貿易別科創設の事由 不況は人口過剩現象として現はれる。この内地の過剩人口を海外へ移植させ、かねて國威伸展を圖らうとする拓殖計畫が政府によつて執り上げられ、その移植民の現地指導者を養成する教育機關を本校と長崎、山口の三高商に附設することとなり、昭和四年四月、長崎、山口兩校に支那貿易科、本校に南米貿易科が開設された。

この貿易別科は修業年限一ケ年、この短期間に南米移住並に南米貿易に必要な學科を教授し、卒業後は直ちに南米に移住させるか或は南米貿易に従事せしむる方針である。

南米は新興國多く、地域廣大で資源豊富だから將來我國の有望なる輸出市場であり、日本人移住の好適地である。のみならず勞力の不足を補ふために入植者を歓迎してゐたから、政府が南米貿易科を本校に附設したことは商權擴張の點からも人口問題解決の手段としても誠に時宜を得たものであつた。

南米の天地で活動する人材養成といふのだから別科の學科目は自ら異色があり、特に著しい點は、スペイン語(又はポルトガル語)を第一外國語とし、毎週九時間を課し、英、佛語等を第二外國語としたこと及び農業大意と農業實習とが課せられてゐることである。

學科目及每週教授時數

學科目	學期	
	第一學期	第二學期
修身	一	一
商業通論	二	二
簿記	三	三
南米經濟事情	四	四
貿易大意及外國爲替	二	二
貿易實験	二	二
タイプライティング	二	二
經濟大意	二	二
農業大意	三	三
移植民論	一	一
國際法	一	一
スペイン語	九	九
英語	三	三
體操	二	二
農業實習	每週一回以上	
合計	三五 外ニ實習時間	三五

入學資格は一般專門學校と同一である。

定員三十名に對する第一回受験者は二四〇名で、四年四月二十七、八日に入學試験を行ひ三十九名の入學を許可した。

これ等別科生の生徒としての取扱は全く本科生と同一であつて、教官もスペイン語と農業大意の教官以外はすべて本科の教官が出講することとなつてゐる。

南米に横濱高商村建設の意氣 四年四月入學した別科生中三十四名が一ケ年後の五年三月卒業したが、その内の十五名は遠く南米ブラジルに渡航入植して横濱高商村を建設し新天地を開拓して今後の入植者の先驅ともなり廣漠たる南米の原野で活躍すべく五月下旬相率ゐて壯舉に上つた。これ等の一行はブラジル國サンパウロ州アラサツパ川郡アリアンサ植民地に在る力行會の農事練習所に入り、四五年の實際経験を積んだ上、附近の日本人農場の分譲を受けて自作農を経営し、すべて相當な地主として大農經營をなしてゐるものもあつたし、都會へ出て商業を營んでゐるものもあつた。さうして引續いて渡航入植した別科卒業生と協力して所期の目的に邁進してゐた。

八 開校五周年(昭和四年)前後

教官の動靜 開校間もなき大正十四年三月には下田教授が在外研究員として渡歐、續いて西村教授が出發したが、昭和二年五月下田教授歸朝と入れ替りに同月、渡邊教授が渡歐し、三年四月には光井教授が英國へ向け出發した。四年三月になると井上龜三教授が獨逸へ出發した。井上教授は大正十三年開校當時講師として經濟學を講述してゐたがその年の冬、近衛聯隊へ入隊のため一旦辭任、除隊後再び教授として歸つて來られたのである。

が、ここに留學の日が來たのである。光井教授は五年六月歸朝。

井上龜三教授が六年六月歸朝するや九月には井上鏗三教授が渡歐した。井上鏗三教授は九年五月歸朝したが、文部省の在外研究員規程が變更窮屈となり、留學の順に當つてゐた森田教授は十二年まで待たねばならなかつた。

これより先、大正十五年七、八月商工農の専門學校教授十二名から成る實業教育視察團が、滿支方面の教育狀況視察に出かけたが、田尻校長はその團長として、一行を率ゐて七月廿五日横濱發九月四日横濱歸着まで一ヶ月餘に亘り滿支各方面視察を遂げた。この行には支那語教官武田武雄講師が同道し現地見學と同時に通譯の勞をとつた。

昭和四年十一月末には、田尻校長、浦鹽經由で學事視察のため渡歐、獨逸で井上教授、イギリスで光井教授と邂逅、歐米各地を巡遊視察して五年十月二十日に歸朝された。

四年五月には德増教授が全國經濟調查機關聯合會の鮮滿産業視察團に加はり、約一ヶ月朝鮮滿洲を視察した。七年に同じやうな視察團で井上龜三教授が鮮滿を旅行した。

貿易別科新設に伴ひ中南米の實際事情を現地に視察調査する必要は夙くから痛感されてゐたが、七年に至つてその希望が實現し、下田教授は七月九日出發、十二月初旬まで滿五ヶ月間中南米の現地研究を遂げて歸朝した。果然本校に於ける中南米認識は深められ、別科卒業生の渡航希望を高めた。

國際オリンピック大會が七年夏、ロサンジェルスで開催されたが、日本體育界に重きをなす下津屋助教は體操監督として羅馬へ派遣されることとなり、六月三十日横濱を出帆してオリンピックの槍舞臺に選手の活躍を指導監督した。いま同教授が體育の時間に着てゐる胸部に日章旗をつけた紺色の運動着こそ其の時の記念の嗜着である。

應召出征の職員生徒 昭和三年五月濟南事件起り、在留邦人約百名が南軍に慘殺されたので五月八日第三次山東出兵となつた。名古屋第三師團に勳員令が下り、本校に於ても圖書課の増田彌之助氏が豫備陸軍三等主計として召集直ちに濟南へ出發、三年生長野芳朗、二年生三浦鏐一、一年生鈴木富雄の三君が應召した。

六年の滿洲事變には卒業生にも本校にも直接の影響はなかつたが、八年に至り第六回卒業の宮川保君が北滿共匪討伐中に名譽の戦死を遂げ、本校卒業生最初の戦死者を出した。

野外教練と查閱 野外演習と呼ばれた野外教練は大正十四年十二月四、五日高工を假設敵として戸塚藤澤間に行はれたのが抑々の始めで、配屬將校宮城善助少佐が統率した。第一日の四日午前八時四十分本校出發戸塚方面へ進撃、同夜は戸塚附近に宿泊、翌日午後二時歸校した。校庭に於て閱兵式舉行。廣瀬第一旅團長、伊藤第四十九聯隊長、横濱憲兵分隊長等列席。廣瀬旅團長、宮城少佐の講評、田尻校長の訓辭があり萬歳三唱して解散した。爾來毎年野外教練を舉行、或は箱根に或は一の宮に或は富士の裾野に二、三泊の嚴格なる軍隊的生活を送らせた。校長始め教官が交替で同行監督見學に當つた。さうして毎秋第一旅團長の查閱を受けたが昭和七年には、畏

くも朝香宮殿下が第一旅團長として台臨、十一月十七日査閲下調、十二月十五日査閲を賜はられた。

校歌成る 大正十五年開校式舉行の時に暫行的な校歌があつた。作詞者は判らないし果して合唱されたかどうかとも、いま記憶されてゐないが、歌詞は次の通りである。

校 歌 (暫行)

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 一、紅の光の朝夕に
港開きて千歳の
立つはふぎばし見よわれの | 寄せし黒船夢破り
榮いやません横濱に
高等商業學校を |
| 二、富士見丘の三層の
空を涵して四つの海
後は箱根の連山と | 高樓はるか見渡せば
めぐる潮ぞ心地よき
八条芙蓉の峰の影 |
| 三、林の如く帆船の
勇み希望の豊かなる
勵み日夜にたゆまんや | 並ぶや雷の象徴と
健兒幾百一團の
想は廣し海ととも |
| 四、あゝあゝ亜細亞最大の
邦の若き子青春の
見ずや世界の厚生と | 大陸それのさきがけの
理想は高しまた遠く
利用につぐ我が使命 |

この暫行校歌が用ひられなかつたのは、恐らく歌詞が校歌として不十分であつたためであらう。その後、昭和二年頃、學生に校歌の募集をしたけれども、物にならず、昭和四年開校五周年が巡り來るので、御大典奉祝歌の

作者として文名の高かつた正富汪洋氏に歌詞をたのみ、山田耕筈氏に作曲を煩はして出來たのが現在の校歌である。四年十月完成。

校 歌

- 一、氣高く清き富士が嶺よ
富士見が丘のますらをよ
明るく晴れし大空の
廣き心に雄々しくも
立てるは山よわれわれよ
- 二、黒雲ひくぐまよふとも
海原いたく荒ぶとも
鍛へし腕や世を蓋ふ
強き氣をもてしるべぞと
示すは旗よわれわれよ
- 三、ああ横濱に寄せかへる

文化の潮に乗り出でて
他國の岸をうち洗ひ
わがなす事業に驚けと
躍るは濤よわれわれよ

四、おゝ肩あげて唱はまし

雄圖は心に智慧包む
まことの愛に微笑みて
行く行くところ野に市に
薫るは花よわれわれよ

開校五周年記念祭 當時不況の眞只中であつたので緊縮一點張りの五周年記念祭は四年十月二十一日の開校記念日を中心として舉行された。

その勢頭にはすでに寮生を容れてゐた寄宿寮の寮祭が十月十七日に開かれ、(第一回寮祭は三年十月十七日に舉行)各室の飾付は寮生の智慧を絞つて趣向がこらされ、二十日大運動會、十九、二十、二十一の三日間寫眞展覽會、二十二日記念講演會―日銀副總裁深井英伍氏の「金解禁と其準備」慶大教授小泉信三氏の「マルクシズム

とボルシェヴィズム批判」、二十六日近縣中等學校陸上競技會と同柔道大會、十一月三日庭球大會、九日體育會と音楽會、十日近縣中等學校剣道大會、十七日全關東學生卓球大會等が催され、二十三日に外語劇を以て終了したが、平年以上に特別の行事はなかつた。

消費組合設置 教職員及び生徒の共益を目的としその消費經濟の合理化を計らんために井上鎧三教授の指導の下に組織されたもので、昭和五年に設置された。生徒が理事として、教官組合長の監督の下に業務の執行に當り勞働奉仕である。

資本金は、組合員たる教職員が就任し生徒が入學した際に金三圓を出資して活用し、退會卒業の際出資金を返戻する。

事業として、書籍文房具その他の學用品の販賣、食堂の管理等をなし、設立以來原價主義を採用し、且つ市内相模屋百貨店と六分引(後、越前屋と八分引)丸善と五分引の特約販賣を受けてゐたが、昭和十七年四月以降は書籍の定價賣りが書籍組合の嚴守するところとなり又市内商店の割引販賣の特點もなくなり自ら市價販賣となつた。現在は報國國生活部購買班となつてゐるが詳細は後述する。

對高工野球定期戰の復活 兩校の主張、三回戰か一回戰かの主張が相容れずに、四、五の二ヶ年は中絶してゐたが、これはたしかに横濱球界にとつて遺憾のことであり六年に到つて、三回戰による定期戰が復活して俄然兩校の選手は勿論應援團は緊張し横濱球界は色めき立つた。「濱の早慶戰」であり、最も人氣のある對校試合だつ

たからだ。

本校は前年の五年左怪腕投手荒木八郎の入學によつて一段と強味を増し、五年度全國高專大會の覇者四高を迎へて三對二で退け、更に、有名な小川、佐藤、三原、夫馬の巨豪を抱へた早大新人軍と一戦を交へたが、荒木のカーブとドロップに早大の健将も全く手が出せず、三振十三を喰ひ安打僅かに三本を散發したのみで、五人對一で本校のために敗退した。その他帝大とは十五對五の大差で勝ち、中央大學專修大學に對しては新人を配して對戦しながら大きな差を以て退けてゐる等陸目の活躍振りであつた。

二勝二敗の後を受けた復活第五回定期戦は六年五月三十一日その第一回戦を公園球場で交へた。宮崎麗見の中心堅芝生席に叩き込んだ大本壘打等安打十二を數へ、十二人對五で本校が第一回戦を獲得、第二回戦は開港記念日に舉行、これまた六對三で本校勝ち、かくて復活第五回戦はストリートで本校の勝つところとなつた。

復活定期戦のすばらしい人氣は、入場券が僅かに賣出後十八分間で賣盡したことや前賣券がプレミアム付で賣買されたこと等で十分窺はれる。それだけに試合終了のエール「ハイザート高工」と「フレイ高商」が涙を以て應酬される悲愴の場面を展開する。

翌七年も八年も本校が優勝し三年連覇といふ輝しい戦績を残した。八年にはマイクロフォンがネット裏に据えられ、當時野球放送の第一人者松内則三氏によつて、この定期戦の實況が放送された。

因に復活第一定期戦のすばらしい人氣は次の入場者數及び入場料總收入の記録によつて瞭かである。

第一日	入場者總數	一萬五千六百六名
第二日	同	一萬六千六百九十二名
合 計		三萬一千七百九十八名
總收入額		八千三百五十九圓六十錢

九 就 職 状 況

不況の深化 本校は大正十三年四月に開校し昭和二年三月に第一回卒業生百十七名を出したのであるが、大正末期は九年恐慌以來の不況が続いてをり、關東大震災の打撃で、弱り目に祟り目の經濟界に始めての卒業生が出て行くのだから、本校としてはその就職については頗る心を痛めた。けれども就職運動については十分自信のある田尻校長の献身的轉旋の甲斐があつて、先きにも敍べた如く採用申込員數は就職希望者の二・七八倍、卒業までに十二名を残して就職が決定した。先づ當時の狀勢から言つて最上の成績だつたといつてよく、滑し出しは上々であつた。

然るに不況は漸次深刻になる。昭和二年三月には東京渡邊銀行の破綻を動機として、四月二十一日には十五銀行が突如休業し、金融界一角の崩壊を動機として金融恐慌は全國に波及し四月より九月に至る四ヶ月で休業せる銀行總數三十七行に上つた。四年七月には井上蔵相が金解禁を敢行して、株式は慘落、濱口内閣は緊縮實行豫算

を決定。この時に恰も紐育株式市場の恐慌に端を發した世界的恐慌は、我國の經濟界にも甚しい影響を及ぼし、五年に入るや、金の流出、輸出貿易の不振、物價低落、金利低下等となつて現はれ、一般事業界の不振はいよいよその深刻の度を加へて行つた。更に六年九月には滿洲事變勃發して大陸に於ける市場を喪失するといふ状態で、四年から七年頃に至る時代は方に不況の最も深刻化した時であつて生活難失業苦の聲は巷間に滿ち溢れてゐた。當時文部省の統計に表はれた諸學校の就職率は僅かに平均三、四割に過ぎず、卒業生の就職の機會は塞がれ思想險惡の重大原因をなした。

就職難時代 卒業期の學生が就職に心を奪はれる状態は實に同情の限りである。二年十月二十三日附の「横濱高商新聞」(第四號)の社説には早くも「就職難」の見出しで學生の關心の大きいことを示してゐる。五年四月二十五日付「高商學報」(第二十三號)の二面には「就職戦線」を語ると題して、本科百五十六名昨年より約三十名多く更に別科第一回生三十四名の卒業生を加へたが、事業界は不振を極め緊縮一點張りであり、田尻校長は渡歐不在中であつて、條件が頗る悪い。けれども古館校長代理の熱心なる努力と諸教授の援助により、卒業までに九十八人の決定を見たが、なほ三十四人の未決定者があつたことを報じてゐる。おそらく最大の就職難の年であつたらう。六年一月二十七日付「高商學報」(第二十九號)には三面に初號の大見出しで「目下卒業期迫り就職戦線は展開する」「どんな處でも口さへあれば」「不況の中に決死の運動」と悲痛な活字を列べ「全國大學専門學校の卒業生約三萬は何處へ行く、暗澹たる就職戦線をめぐつて身の振方へ四苦八苦の態である。各學校と

も就職の斡旋、賣り込み運動に狂奔してゐる」と説明をつけ、本校も本科百三十餘名、別科二十六名の卒業生を出す筈だが、幸ひに田尻校長の大活動で、日本銀行三井三菱等の巨大銀行、明治製糖、満鐵、大阪商船の大會社を始め八十有餘の銀行會社から一名乃至三、四名宛の申込があり、すでに三、四名は決定し「案外實行きがよさう」だと報じてゐる。

かくの如く不況のどん底にあり就職に最も困難を極めた時代に、多少明るい報道のあつたのは、卒業式までに就職希望者の八、九割を就職せしめ得たし、八、九月頃までには殆んど全部の就職を實現せしめることが出来た本校當局の自信と實績とを反映するものであらう。

けれども當時の就職がいかに困難であつたかは、申込側の採用條件が孰れも成績優秀、身體強健といふ最上の條件をつけてゐたし、就職試験がまた頗る難關であつて採用の爲めといふよりもむしろ體よく拒絶する爲めのものともいふべきだつた。蓋、官廳銀行會社の幹部の机には、それぞれ傳手を求めて集まつた履歴書が山積し、やむを得ず斷る口實の爲めに採用試験をやるといふところも尠くなかつた。「就職戦術」とか「就職の秘訣」等といふ際物的刊行物が、溺れる者藁をも攫むの例への通り盛んに賣れたのもこの頃である。七、八名の採用に千人数の申込者があつた(東京某大新聞社)などといふのもこの時代の風景であつた。

かかる極度の不況、就職難の時代に、卒業一ヶ月後に九割前後(昭和五年は最低で七割四分)の就職決定を見(別表(二三頁)参照)未決定者も夏頃までには殆んど全部が就職したのであるから、「横濱高商には入學難は

あるが就職難は無い」とまで世間から囁はれたのも故ありといへるであらう。かかる結果を擧げることの出来たのは、全く田尻校長の献身的努力の功績であつて、萬人の等しく認めるところである。就職事務を執る庶務課の勞苦もそれだけに一通りでなかつた。

なほ二三頁の表「卒業一ヶ月後ニ於ケル卒業生就職状況」は毎年四月二十日現在を以て文部省へ報告した記録によつて作成したものであるが、昭和八、九年頃までは毎年若干の未就職者を殘してゐるけれども、これは當時三井、三菱、日本銀行等の最有効會社が、學生の勉學を妨げざる趣旨を以て「六社協定」なるものを作り、卒業試験終了までは採用銓衡を一切差し控へることを申合せ、他の銀行會社も多くこれに倣つたため、就職決定時期が著しく遅れ、隨て前述の調査期日には尙若干の未就職者を殘したのであるが、これも七、八月頃までには全部決定し、長く浪人の状態にあるものは皆無であつた。

對界好轉と就職状況 世界的不況はいよいよ激化して來たが、六年六月オーストリアの大銀行クレディット・アンシュタルトの破綻を口火として金融大恐慌が世界的に波及し、英國が金本位を離脱した。我國でも正貨準備が十月末には七億圓を割る状態となり遂に十二月金輸出再禁止の止むなきに立到つた。

七年に入るや一月上海事件が起り二月には事件が擴大する。國內には血盟團事件や五・一五事件が起つて物情騒然たるものがあつた。一般産業界の萎靡沈滞、失業者の激増も著しかつたが農村の疲弊はその極に達して社會思想もまた頗る險惡となつて直接行動によるテロ事件が頻發したのである。

七年の上半期は、財界は全面的に極度の沈滞に陥つてゐたが、久しきに亙る不況の繼續中に合理化が進められて事業界は着々と整理され堅實なる基礎が出来、不況は漸く底をついて緩慢ながらもやや上向を示して來た。殊に貿易は金輸出禁止に因る爲替低落、國際情勢險惡化に備へる準備態勢等によつて、輸出入とも顯著に恢復し、前年に比して輸出二三%、輸入一六%をそれぞれ増加し、貿易關係事業と軍需工業には景氣恢復の兆が現はれて來たが、全事業界はなほ未だ不況状態を脱せず、所謂跛行景氣がここ二、三年続いたのである。オックスワ英帝國會議が開かれてブロッツ経済形成の先驅を作つたのは七年七月から八月にかけてであり、爲替安と生産費安に乗じて世界各國に本邦製品が氾濫し各國の關稅障壁を突破して遂に直接貿易抑壓策を執らなければならぬようになつたのも、九年頃であつた。

跛行景氣とはいへ景氣は上昇して來たから追がの就職難も餘程緩和された。八年四月二十八日の高商學報第四十六號には「不況を一職して就職率九十二パーセント 依然就職界の王者を誇る」といふ見出しが現はれてゐるが卒業までに假令全部の就職決定を見なかつたにせよ、かなり希望のある明るい情勢が反映してゐる。更に翌九年一月二十六日の學報第五十二號には「非常時の波に乗つて採用申込殺到 就職難今いづこ」といふやうな景氣のよい見出しで大會社の採用申込協定（所謂六社協定）が自然消滅して申込は早まり、各會社からの申込殺到で、庶務課はその整理に忙殺されてゐると報告され、事實卒業までに殆んど全部の決定を見てゐるが一月中にすでに六十名ばかりは就職が決定した。まさに「春は朗らか」であつた。

たが、後にはその一部を以て皆勤動者精神者の賞品として今日及んでゐる。學左の生思想國家として選慮すべき状態であつたが、畏くも陛下に於て御念遊さば更に、昭和四年五月、五帝大國總長を宣中に召され學の思想に於て御下問遊された。文部當局は更に積極的思想の發達に於て、九年五月には國民精神文化研究所を開設、翌六月には從來の學生會を擴張して思想局を省内に設置した。これ以後、後、學局に擴大した。

たが、後にはその一部を以て皆勤勸学者精神者への實品の充てられて今日に及んでゐる。法に使用された。本校ではこの毒疫費をミナミに於ける話會、佛教青年會、基督教青年會等へ補助の用に際し出して加算計上し又社教會新局を設けた。この思想毒疫費は大學高等學校に分與されて、各種思想毒疫方を追ひ出し、同時に學樹をとめて、學生の思想を取つてこれを毒すべく昭和四年文部省からは思想毒疫費十萬圓を出すと同時に、時對策思想毒疫費を設け、これと同時、に、思想對策を施すと、思ふ所を語り、失業防止委員會（五年四月）失業對策委員會設置（七年七月）等に乘り出るとして、學校頻々とした。

件が四年四月所「四・一六事件」として、多数の検察を見たが、また大東門「學軍學校」の學生の檢察とそれものが各々六月、第二共共黨事件が昭和三年三月所「三・一五事件」として八百五十五名が起訴され、第三共共黨事件が二十年の彈壓は愈々加へて來て、思想、實效、方方の團體檢入の手續が伸びて行つた。第一共共黨事件が二十年の農方、農民及工場勞働者の勞働運動は益々熾烈を極め、社會の安寧秩序を脅かすや否や、檢察となつて來たので、政府

多、い、理、醜、の、に、趨、り、易、い、若、い、生、の、教、化、に、當、る、を、文、文、府、を、始、め、校、校、局、の、こ、の、赤、化、思、想、に、對、す、る、對、策、は、何、に、苦、
眞、無、垢、若、い、生、を、或、は、赤、色、思、想、に、無、批、判、に、引、き、入、れ、井、團、園、に、無、反、省、に、加、盟、せ、さ、せ、た、。感、激、性、の、夢、の、純、
か、う、し、た、時、代、で、あ、る、か、ミ、レ、ン、ベ、ル、か、ら、の、指、令、が、本、の、井、井、産、産、黨、が、生、活、に、動、き、か、け、て、た、。

師の跡につく。世は留まらず、色に發りてしまふた。

學問が流行となる。理論は實踐によつて裏付けられなければならない。學者が實際運動に投ずる。學生は捐募から説教を食ひ、反資本主義社會主義者と提へ、反資本主義社會主義者を擁護する。學問が研究的なものとされ、社會科學研究會が各學校に出来る。議論、競争、創作、その原因を求めて資本主義主權組織の缺陷にありとす。競爭、失業、生活苦はどこから來るか、その原因を求めて資本主義主權組織の缺陷にありとす。

握つても就職職能が出来ないで浪人を餘さなくれる。世をえて生活苦の時代である。

落して農村恐慌を來してゐるところへ都市部から失業者が流れ込んで來て人口過剩に苦しむ。學生卒業證書を學費の恐慌の間に不景氣の連鎖環である。會社は事業を縮小する。失業者が出る。農村では農産物價格が暴落、恐慌、大正九年の恐慌、十二年の大東亞恐慌、昭和二年の金融恐慌、四年の金融恐慌、五年の恐慌、

本校の學生も當時の思潮に影響され、社會問題の研究に没頭したことは當時の學報の論調や收載記事によつて窺ふことが出来るけれども、極端に趨るものなく、自制して實踐運動へ誘惑されたものは殆んどなかつたのは、恒に穩健中正を尚び、時流に乗る無批判無反省の盲目的行動を嚴に戒めてゐた學校當局の訓育の徹底と、學生自身の批判的研究態度堅持との結果であつたことは疑ひないところであり、時代思潮に掉しながらもこれをよく乗り切つて決して押し流されず、毅然たる姿勢を把持し得たことは、蓋し誇るに足りるであらう。

本校の直接訓育機關は生徒課であつて創立當初から昭和三年までは、官制上、教授中から生徒監が補職されてゐた。第一次生徒監は栗林教授、生徒監心得に小幡助教が任ぜられ、その後、岩本、藤田、下田教授が相次で生徒監の任にあつた。昭和三年十月二十九日官制の改正により、生徒監の補職は廢され生徒主事及生徒主事補が任ぜられることとなり、内山教授が生徒主事兼教授に、小谷助教が生徒主事補、兼助教に任ぜられた。その後内山主事の轉任に伴ひ八年十一月以降、岡野教授が生徒主事となり、又下田、藤田、南種、不二門教授が兼任生徒主事となつた。岡野主事轉任により十四年以降は黒澤教授が主事となつた。主事補は小谷氏の後、九年より十三年まで富成助教、十四年より十七年轉任まで武市助教が任ぜられた。内山主事及岡野主事初期時代が最も思想問題險惡化し世相甚だ面白からぬ時であつて、生徒主事は事實上、思想主事として文部省、檢察當局等の對策に呼應して、思想對策に異常な苦心を拂はれたのである。

社會教育へ進出 文部省は思想對策の一つとして且つ専門教育の社會的開放の目的を以て昭和四年社會教育局

を新設したが、これより先き昭和二年頃から大學専門學校の教官を動員して各地に成人教育講座を開設した。

「國民教育を了へて實務に従事せらるるものに對し須要なる知識を、なるべく平易に講述して國民生活の實情に適せしめん」とする主旨を以て早くも昭和二年十月には文部省より本校に成人講座開設が委嘱された。

二年十月三十一日開講、講堂は南吉田小學校で講義時間は毎夕六時半から九時までであつた。

講習要目及講師

(イ) 公民科

- | | |
|-----------|-----------|
| 一、縣政について | 知事 池田 宏 |
| 二、市政について | 市長 有吉 忠一 |
| 三、日常生活と法律 | 教授 不二門 龍親 |

(ロ) 商業科

- | | |
|-----------------------|----------|
| 一、横濱港の重要輸出品と其相手國の經濟事情 | 教授 下田 龍佐 |
| 二、金融と外國爲替 | 講師 森田 優三 |

(ハ) 財政科

- | | |
|-------------------|----------|
| 一、普通選舉の實施と國民の財政知識 | 講師 岡野 鑑記 |
| 二、地租と委譲 | |

成人講座は聴講無料で資格は男子二十歳、女子十八歳以上にして現に在學中にあらざる者は何人でも差支なく聴講が出来、二百餘名の申込があつて盛會だつた。

成人講座に併んで、市民の精神文化涵養のため市民講座が第二隣保館で十月中旬から十二月中旬まで開かれ、本校からは岩本教授が商業概論、不二門教授が法學通論、徳増教授が經濟原論を講述し、高工教授も機械工業、化學工業を講じた。

成人講座は開催當時の社會事情を反映してその講義内容を定めるから、昭和二年以降隔年委嘱を受け開講した講座の題目を顧みるとその時代のトピックスを識ることが出来る。試みに四年十一月四日から開講された成人講座の題目を掲げると次の如くである。

四日(月)	失業対策の種々相	徳増	教授
五日(火)	緊縮、解禁、好況	森田	教授
六日(水)	國債整理問題	岡野	教授
七日(木)	フアシストについて	渡邊	教授
八日(金)	消費經濟の合理化	井上	教授
九日(土)	新民事訴訟法について	不二門	教授
七年十二月九日から四日間横濱貿易新報講堂を會場とした公民(成人が改稱)講座の題目は			
一、現代經濟生活の特質	徳増	教授	
二、日滿の經濟諸關係の現在と將來	井上	教授	
三、非常時財政の解剖と批判	岡野	教授	
四、最近我國の外國爲替事情	森田	教授	

であつて非常時局をよく反映してゐる。

十一 開校十周年記念式

開校十年間の回顧 本校創立後三年にして世は大正から昭和に代つた。この間、大正天皇御大葬の哀しみ。閣下、今上天皇御即位の大典と、國民は國家の大儀を送り迎へまつた。社會的には世界不況の深刻化による經濟的脅威に暴され失業苦、就職難と思想險惡化に悩まされた。更に上海事件の起るあり、滿洲事變の勃發あり、一方には盟邦滿洲國が建設されるとともに他方にはこれを契機として國際聯盟を脱退するなど國際關係はいよいよ緊迫の度を加へ來つて所謂準戰態勢を執らざるを得なくなつた。

創立匆々の本校としては、これ等内外の多事多端は方に大きな試煉であつた。然るに幸なる哉、田尻校長の献身的創業の努力の下、教職員和衷協力し、更に優秀なる素質の學生が全國より來り學んで、業を卒へるや、社會各方面に活躍して國家有爲の人材として母校の榮譽を昂めるありて、本校の眞價世の認むるところとなる。開校十ケ年、それは基礎建設期でもあり搖籃期でもあるが、この建設期に當りて社會不況の厳しき試煉に逢遭したるは却て愈々勇猛心を奮ひ立たせて將來の發展大成に培ふところとなれるものと信じ、寧ろ本校にとりては天與の恵みであつた。

十年鏖骨彫心の學園を記念すべき開校十周年記念式と記念祭とが、昭和九年十月中旬を期して舉行された。

十周年記念行事日程

十月十四日(日)

一、同窓會主催物故者慰靈祭

午後一時三十分(本校講堂)

一、同窓會大會

午後三時三十分(開港記念會館)

十月十七日(水)

一、近府縣中等學校柔道大會

午前八時三十分(本校道場)

十月廿一日(日)

一、記念式

午前十時(本校講堂)

一、表彰式

午前十一時三十分(同上)

一、名士講演會

午後一時(同上)

演題及講師

國際關係の推移と我國民の覺悟 特命全權大使 出淵 勝次氏

日本民族の進出に就て 衆議院議員 安達 謙藏氏

一、提灯行列

午後五時(雨天順延)

一、三曲大演奏會

午後五時三十分(開港記念會館)

一、露糸經濟資料文獻展觀

十四日—二十一日 (調查部閱覽室)

十月廿二日(月)

一、映畫大會

午後六時(本校講堂)

十月廿三日

廿四日(火)
廿五日(水)

一、第三同校內體育大會

各午前八時(本校々々庭
武道場體育館)

十月廿八日(日)

一、近府縣中等學校劍道大會

午前八時(本校道場)

十一月三日(土)

一、近府縣中等學校蹴球大會

各午前九時(本校々々庭)

十一月四日(日)
五日(月)

一、近府縣中等學校蹴球大會

各午前九時(本校體育館)

十一月十日(土)

一、祝賀音樂大演奏會

午後一時三十分（開港記念會館）

十一月十一日（日）

一、全關東卓球個人選手權大會

午前九時（本校體育館）

一、近府縣中等學校陸上競技大會

午前八時（本校競技場）

十一月十七日（土）

一、室內體育大會

午後零時三十分（本校體育館）

十一月十八日（日）

一、近府縣中等學校庭球大會

午前八時（本校コート）

一、近府縣中等學校弓道大會

午前八時三十分（本校弓道場）

十二月二日（土）

一、外語劇大會

各午後五時（本校講堂）

記念式典 菊薫る秋晴の十月二十一日感激と歡喜に包まれて輝く開校十周年記念式典が本校講堂に催された。定刻、五百の在校生と百餘名の同窓會員で式場の階上階下がいつぱいになる。聽て教職員來賓が入場する。次で校長が先導して松田文部大臣が臨場され、式典が開始された。

橫濱高等
商業學校

開校十周年記念式次第

昭和九年十月三十一日午前十時

開式

- 一 君が代 合唱
- 一 校長 式辭
- 一 文部大臣 祝辭
- 一 來賓 祝辭
- 一 卒業生總代 祝辭
- 一 生徒總代 祝辭
- 一 校歌 合唱
- 閉式

十年勤續者表彰式

開 式

- 一 校長表彰狀並記念品授與
- 一同窓會記念品贈呈
- 一同窓會代表挨拶
- 一 勤續者代表謝辭

閉 式

田尻校長の式辭(要旨)

私が本校校長として赴任したのは大正十二年十一月末であつた。當時横濱は焦土と化し現在のこの場所から見ると一面の饒野原であつた。自分はこれを見て横濱復興のために努力しなければならぬと感じた。大正十三年四月開校し横濱高工のバラツクの一部を借受け、そこで授業をする有様であつたが、一年経て現在の場所へ移り、生徒控室と武道場を教場として使つた。その三年目に本館が出来上つた。今日の市の復興と校舎の建築とを見て誠に今昔の感に堪へぬものがある。

さて本校の教育方針は信頼するに足る人物を養成することにある。幸ひ現在まで八回千百人の卒業生を出し、本校の教育方針によつて孰れも社會各方面で大いに活躍してゐることは欣快とするところである。又貿易別科の卒業生も海外において活躍してゐる。本日は意義ある十周年記念日に際し文部大臣閣下を始め縣市の閣下各位の御臨場を仰ぎ誠に感謝に堪へぬところであるが、我々は今後とも自重し協力一致して過去十年の光輝ある歴史を傷けぬように行きたい。

文 部 大 臣 祝 辭

横濱高等商業學校へ開校十周年ヲ迎ヘテ茲ニ其ノ記念式ヲ舉行セラルルニ當リ一言祝辭ヲ述べルハ余ノ欣快トスルトコロナリ

惟フニ本校ハ大正十二年恰モ我カ産業貿易ノ大ニ伸長ヲ要スルノ秋ニ際シ我カ國貿易港トシテ權要ノ地位ヲ占ムル横濱ノ地ヲトシテ創立セラレ爾來漸々トシテ發展向上ノ一路ヲ辿ルコト正ニ十年此ノ間卒業生ヲ出スコト千有餘人校運今日、隆昌ヲ致セルハ慶賀ニ堪ヘズ 抑々十年ハ事物更新ノ一轉機ナリサレバ此ノ機會ニ於テ既往ノ成績ヲ顧ミ式典ヲ舉ゲテ其ノ慶ヲ共ニシ更ニ人心ヲ新ニシテ一段ノ躍進ヲ將來ニ期スルハ誠ニ意義深キ好舉ト謂フヘシ 今ヤ内外事滋クシテ學國緊張ヲ要スルノ時機ニ際會ス職員各位生徒諸子ハ其ノ責任ノ容易ナラサルヲ自覺シ今日ノ慶典ヲ契機トシテ奮起勵精益々其ノ使命ノ達成ニ邁進セラレンコトヲ望ム

昭和九年十月二十一日

文部大臣 松 田 源 治

東京商科大學長佐野善作氏祝辭

閣下竝ニ諸君

本日此處ニ本校創立第十周年記念祝典ニ參列スルノ榮ヲ得祝辭ヲ呈シマスルコトハ私ノ欣幸トスル所デ御座イマス。

創立記念式ハ近年一ノ流行事ノ如クニナリマシテ官公署ヲ始メトシ協會學校并社病院會社組合商店果テハ劇場娛樂場ノ類ニ至ルマデ其創立後或年數ヲ經マスト記念式ヲ舉ゲ御祝ヲ致シマス。流行事デアリマスカラ記念式ハ必ズシモ有意義有價值ノモノノミニ限ラズ中ニハ至ツテ詰ラズモノモアル様デアリマス。勿論其ノ之ヲ行ヒマス當事者ニ取リマシテハ主觀的ニ有意味デアリ時トシテハ廣告宣傳ノ手段タルニトモアル様デアリマスガ之ヲ社會カラ見テ客觀的ニ果シテ祝賀ヲスベキ價值アリマ否ヤハ其ノ個々ノ場合ニ就テ判斷スルノ外アリマセン。

ソレデ今本校ノ創立十周年記念式ニ就テデアリマスガ私ハ之ニ甚ダ大ナル價值アルコトヲ認ムル者デアリマス。仍テ其ノ然

ル所以ヲ述ベマシテ以テ今日ノ祝辭ト致シタト思フノデアリマス。

抑々學校ノ記念式ノ價值ハ之ヲ其現實ノ成績ニ照シテ判斷スルカ又將來或成績ヲ成シ遂ゲ得ベキ力ノ有無多少ニヨツテ判斷スルカ或ハ又右二者双方ニ之ヲ求ムルカデアリマスガ創立十年ト云フガ如キ日尙淺キモノニアリマシテハ之ヲ現實ノ成績ニ徴スルハ無理デアリマシテ將來或成績ヲ得ベキ力ノ存在ニ依テ決メルヨリ外ハナイノデアリマス。而テ私ハ本校ノ場合ニ於テ其力ノ存在ヲ本校教育ノ方針ト教職員諸氏ノ努力トニ認ムル者デアリマス。本校ノ教育方針ノ寔ニ雄偉ニシテ而カモ克ク時勢ニ適合シ教職員諸氏ノ熱誠努力ノ眞ニ尋常ナラザルコトハ本校ヲ識ル吾々ノ齊シク認ムル所デアリマシテ是レガ變テ異常ナル業績トシテ現ハレ來ルベキハマタ吾々ノ齊シク期待スル所デアリマス。

本校ノ教育方針ノ如何ナルモノナルヤハ先刻支關テ頂戴シマシタ「本校要覽」トイフ刷物ノ中ノ「本校施設ノ大要」ト題スル部分ニ掲グル所デアリマスガ之ヲ要約シマスレバ「本校ハ夙ニ現代教育ノ最大缺陷ガ德育ノ不振ニ在ルコトヲ認メ特ニ人格ノ陶冶ニ重キヲ置キ實業家トシテ吾人ノ信賴スルニ足ルベキ人物ヲ養成スルコトヲ目標トス」ト云フノデアリマス。而シテ其ノ「實業家トシテ吾人ノ信賴スルニ足ルベキ人物」トハ如何ナル人物ヲ意味スルヤト申シマスルト其レハ普通世間デイフ所ヨリモズツト輪郭ノ大キイモノデアリマシテ管ニ取引上ノ約束ヲ守ルトカ信用ヲ重ンズルトカ物堅イトカイフ棟ナ人物タルニ止マラズシテ更ニ高邁ナ器宇宏大ナ大乗ノ人ナ格デアツテ克ク實業家ノ社會的使命ヲ理解シ其本分ヲ盡シ得ベキ實力ト意思ト勇氣トヲ有スル所ノ信賴スベキ人物トイフノデアリマス。即チ本校ノ學徒ニ對シテ冀求要望セラルル所ハ或學者ノ實業ヲ借リテ申セバ「人ハ實業家タル前ニ先ヅ社會人タルベク經濟人タル前ニ倫理人タルベシ」トイフノデアリマシテ本校ハ斯ル人物ヲ養成シテ實業界ニ送ルコトヲ教育ノ本旨トシテ居リソレニ向ツテ校長以下全職員力不斷ニ精進シツツアルノデアリマス。

御承知ノ通り我國資本主義産業組織ノ下ニオケル自由競争制度ハ幾多ノ害惡ヲ生ミ今ヤ殆ンド行キ詰ツテ窮極ニ達シタルカノ如キ觀ヲ呈シテ居リマスガソレハ組織制度ノ罪ト云フヨリモ寧ロ人ノ罪デアツテ畢竟實業界ニ其人ヲ缺キ實業家ノ社會的使命ヲ理解セル所謂信賴スルニ足ルベキ人物ニ乏シイ結果デアリマス。故ニ此窮極ヲ打開シ我經濟組織ヲ支持シ向上セシムルノ途ハ唯ダ實業ニ從事スル者ヲシテ克ク其社會的使命ヲ覺ラシメ其本分ヲ盡シシムルヨリ外アリマセン。即チカカル人物ノ養成ハ寔ニ刻下ノ急務デアリマシテ其養成ニ努ムルコトハ眞ニ急キ事業デアリマス。

今ヤ我商業教育ハ此問題ニ直面シテ從來ノ如ク徒ラニ實際界ニ阿諛追隨シツツ其ノ當面ノ仕事ヲ風習仕來リナドノ末ニ役ニ立ツ事務家ヲ養成スルヲ以テ能事トセズ又單ニ物堅キ保守的使用人ヲ養成スルヲ以テ足レリトセズ一步社會ニ先ヅ一頭地高キニ身ヲ置イテ世ヲ指導シ其風紀ノ肅正腐敗ノ淨化ニ當リ得ベキ開士ヲ養成スルヲ以テ目的トスルニ至リマシタ。而テコノ方針ニヨル活動ヲ商業教育ノ革正運動又ハ倫理運動ト申シマス。

然リ而テ私ハ今本校ノ田尻校長ノ人格ニ於テコノ倫理運動ニオケル最も有力ナルチャムビヨノ一人ヲ見出し其ノ主宰セララル本校ガ此運動ノ一大道場デアリ一大陣營デアルコトヲ知り又今日マデ社會ニ送り出セル一千有餘ノ卒業生ガ此運動ノ前線ニ立チテ奮闘シツツアルヲ認メ尙現在及將來ニオケル本校ノ學生生徒ガ何レモ此運動ニ參加スベキコトヲ期待シマシテ本校創立第十周年記念式ノ大ニ價值アルコトヲ認識スル次第デアリマス。

私カニ思ヒマスノニ田尻校長始メ本校職員諸氏ハ此今日ノ記念式ヲ舉行セラレソレニ依テ其ノ平素努力セラレツツアル所ノ教育運動ノタメニ内ニ向ツテハ益々人ノ和ヲ闡リ結束ヲ固クシ外ニ向ツテハ其意義精神ヲ天下ニ宣明シ之ヲ契機トシテ以テ大ニ爲ストコアラントノ意圖ヲ有セララルノデアリマセウ。果シテ然リト致シマシタラバ此記念式典ハ主觀的ニモ亦客觀的ニモ寔ニ意義アリ價值アルモノト謂ハナケレバナリマセン。私ハ今ヲ距ル八年前大正十五年本月日本本校開校式ニ臨ミマシテ此壇上カラ祝辭ヲ述ベマスルト共ニ其處ニ列席セラレタル横濱市有力者諸氏ニ對シ失禮デハアリマシタガ聊カ苦言ヲ提シ商業教育ニ於テ横濱市ノ當時稍々立遅レタコトヲ指摘シテ御注意申シタコトヲ記憶致シテ居リマス。然ルニ今日ハ如何デアリマス。横濱市ニハ立派ナ高等商業ガ二校モアリ而カモ本校ノ如キ倫理運動ノ陣頭ニ立チ大ニ實際界ヲ革正セントシツツアルモノアルヲ見マシテ實ニ今昔ノ感ニ堪ヘマセン。私ハ日本本校ノ記念式ノ價值ヲ十分認識致シマシテ田尻校長始メ本校教職員諸氏ニ對シテ深甚ノ敬意ヲ拂フト同時ニ邦家ノタメ又横濱市ノタメ衷心ヨリ本校ノ前途ヲ祝福セント欲スル者デ御座イマス。甚ダ不敏ニ長話シテ致シマシタガ之ヲ以テ祝辭ト致シマス。

なほこのほかに横山知事大西市長有吉商工會議所會頭ボイスアメリカ總領事渡邊名古屋高商校長の祝辭があつた。

十年勤績者表彰式 開校十年記念式典終了後引續いて十年勤績者表彰式に移り、校長教授書記守衛使丁二十二氏に對し學校より表彰狀と記念品授與、同窓會より記念品の贈呈があつた。

表彰狀

官職氏

名

本校創立以來精勵恪勤克ク其ノ職ニ任シ勤績茲ニ十年功績勲カラス仍テ之ヲ表彰ス

昭和九年十月二十一日

横濱高等商業學校長正四位勲二等 田 尻 常 雄

十年勤績者

氏 名

任命年月日

在職年月數

校長 田 尻 常 雄	大正二、二、一八	十年十ヶ月
教授 下 田 禮 佐	同 一三、一、二二	十年九ヶ月
同 古 館 市 太 郎	同 一三、三、一五	十年七ヶ月
同 不 二 門 龍 觀	同 一三、四、二一	十年六ヶ月

同 河 村 重 治 郎	同 一三、五、一七	十年五ヶ月
同 德 増 榮 太 郎	同 一三、八、三一	十年一ヶ月半
同 時 田 清	同 一三、八、三一	十年一ヶ月半
同 波 邊 輝 一	同 一三、二、二九	十年七ヶ月半
同 小 幡 孫 二	同 一三、四、二	十年六ヶ月半
同 下 津 屋 俊 夫	同 一三、三、三一	十年六ヶ月半
講師 小 白 寛	同 一三、三、三一	十年六ヶ月半
同 山 崎 與 右 衛 門	同 一三、四、七	十年六ヶ月
書記 齋 藤 照 之 助	同 一三、一、二三	十年九ヶ月
同 矢 島 照	同 一三、三、三一	十年六ヶ月半
同 吉 居 德 治	同 一三、四、一一	十年六ヶ月
雇 植 岡 金 次 郎	同 一三、三、三一	十年六ヶ月半
同 櫻 井 巳 之 吉	同 一三、四、一〇	十年六ヶ月
守衛 鈴 木 二 郎	同 一三、六、八	十年四ヶ月半
小使 澁 谷 省 三 郎	同 一三、五、一四	十年五ヶ月

同	手	東	松	太	郎	同	一三、四、一	十年六ヶ月半
同	關	谷	な	か	同	一三、四、三〇	十年五ヶ月半	
雇	小	川	ゆ	き	同	一三、一一、五	九年十一ヶ月半	

午後一時から本校講堂に於て次の如き名士講演があり頗る盛會であつた。

國際關係の推移と我國民の覺悟

出 淵 勝 次氏

日本民族の進出に就て

安 達 謙 藏氏

調査部閲覧室には調査部の蒐集保管してゐる蠟糸經濟資料二百五十四點を整理展觀して一般の興味を惹いた。夜は開港記念會館に三曲大演奏會を催し、學生の提灯行列が、學校正門から伊勢佐木町櫻木町驛前紅葉坂の順路を経て伊勢山太神宮に參拜萬歳を三唱して野毛、日之出町前里町を歸路にとつて學校へ歸着し、學校を擧げて祝賀に徹した。

記念祭の夜のだよめきを偲ばせる記事を「學報第五十八號」から轉載しておかう。

丘上に月微笑む歡喜の渦卷

舞へや歌へや若人の意氣

秋の夕暮、丘の白堊も金色に映えプラタナスもその長い影を地上に落す頃、お祝の赤飯に腹を拵へたカレツヂヤンは晩秋の

聲さも物かは、元氣一杯で不二見ヶ丘を街道に進出して行つた。各々大きな船玉のやうなお提灯を高くかかげて「高商よいとこ、十とせの祝よ」の連發だ。丘の上り口の巡査がにこにこしながら「學生諸君大いにやるべし」。これより整然と四列になつて前里町より伊勢佐木町まで乗りこんで行く……「高商々々横濱高商は野球が強い……」街の兄貴が盛んに應援する。伊勢佐木町に入れば折からの雜間もサツと二つに割れて沿岸に垣を築いた群衆が盛んな拍手を送る「高商頑張れ」……提灯の光りもまばらになつて丘を登る。月冴えて白堊が夢の城の如く輝いてゐる。月光に満ちた校庭に師屋寮が友待畑にボツンと突立つてゐる。今宵一夜は裸になつて踊り狂ふ意氣だ。さあ踊れよ十とせの祝ひだ。手拍子足拍子恰好よろしく太鼓に合せてドドンと踊りぐるぐるまはる。秋の夜空は全く澄んで月も微笑む狂喜のカレツヂヤン、天にも舞けとさんざめき大地も動けと踊り狂ふ。高商よいとこ、十とせの祝ひよ。

慰靈祭 記念式典に先立ち十月十四日午後一時半から本校講堂に於て、物故教職員、同窓會員、在學生七十六名の慰靈祭が、神式により嚴肅に執り行はれた。遺族、教職員、同窓會員、生徒參列、校長祭文を奏して物故者の冥福を祈つた。物故者は教職員では生徒主事補兼助教小谷憲一郎氏、囑託湯川和平氏、雇員鈴木茂三氏の三氏、同窓會員千ヶ崎博君等四十氏、在學生三十三氏（寫眞參照）であつた。

祭 文

維時昭和九年十月十四日横濱高等商業學校同窓會員相寄り茲ニ清境ヲ設ケテ物故教職員同窓會員並ニ生徒諸君ノ靈ヲ祀ル
本校創立以來正二十春秋其ノ間ニ永訣シタルモノハ職員ニ於テ生徒主事補兼助教小谷憲一郎君、囑託湯川和平君、雇員鈴木茂三君、同窓會員ニ於テ千ヶ崎博君外三十九人、生徒ニテ鶴岡立助君外三十二人即ち合セテ七十六人ヲ算ス
爾ルニ物故職員ハ共ニ熱誠職ニ盡シ私ヲ棄テテ公ニ就キ病魔ノ身ニ迫ルヲ知ラズ終ニ身ヲ以テ職ニ殉シタル者ニシテ實ニ公務員ノ典型タルニ恥ヂズ。物故同窓會員ハ皆學ヲ本校ニ修メ盛雪ノ功空シカラズシテ已ニ各々職ニ就キ之ヨリソノ體得セル人

格識見ヲ以テ之ヲ小ニシテハ一家ノ爲メ大ニシテハ國家社會ノ爲メニ大ニ貢獻スルトコアラントシタル者ナリ闕ラズモ不幸中道ニシテ或ハ二豎ニ殛サレ又ハ不慮ノ災厄ニ近ク而モ其ノ辭ヲ問ハバ皆而立ニ達セズ痛想歎シ堪ヘム。更ニ故宮川保君ニ至リテハ滿洲ニ於テ匪賊討伐ノ戰戰ニ殛レタル者ニシテ「死以テ國恩ニ報ジタルモノナリ」又在學中ニ死去シタル三十餘名ノ生徒諸君ハ志ヲ立テテ兩親ノ膝下ヲ辭シ本校入學ノ榮冠ヲ贏テ得タル年少ノ英才ナリ然ルニ天道此人ヲ嫉視シ未だ弱冠ニシテ夭折ス之ヲ嘆惜スル者豈獨リ兩親遺族ノミト言ハンヤ想フニ方今國際間ノ經濟戰ハ日ニ熾烈ヲ加ヘ國家ノ英才ヲ待望スルコト今日ヨリ急ナルハナシ此秋ニ當リテ七十有餘ノ英魂ヲ祀ル吾人ノ感慨轉タ深シ然リト雖モ人各々命數アリ徒ラニ歸ラザルヲ追想シテ止マザルガ如キハ男子ノ本懷ニアラズ我等ハ協力一致奮發一番以テ不二見ヶ丘學園ノ本領ヲ發揮シテ亡友ノ志ヲ達成セムコトヲ期ス

今茲ニ本校開校十周年ヲ迎フルニ方リ慰靈祭ヲ催シ聊カ在天ノ英靈ヲ慰メントス希クハ來リ饗ケヨ

横濱高等商業學校長 田 尻 常 雄
同窓會長

記念行事 豪華版の一つは十一月十日開港記念會館を會場に充てた祝賀大演奏會である。東京音樂學校生徒三百十名の管絃樂團と合唱團といふ大がかりのものでつた。本校音樂部員の「校歌」「祝歌」について最初に演奏されたのは管絃樂ゴールドマルク作曲の樂劇「サランタラ姫」序曲。次でシューマンの「夢」メンデルスゾーンの「おお雲雀」の混成合唱。井口基成氏のピアノ獨奏。管絃樂「アルルの女」第二組曲。マリア・トル女史のソプラノ獨唱等々文字通り音樂界第一人者の妙技に聴衆はただ陶然たるのみであつた。

十二月一日二日の兩日、金港名物と嘶される外語劇大會が本校講堂で開催された。十周年記念行事といふのでこの外語劇大會を街頭に進出させようといふ語學部員の張切り方だつたが、會場はつましく本校内としたが、

語學研鑽の汗を注いで築き上げた金字塔だけに、エキゾティックな夢幻境を現出して記念祭掉尾の幕を飾つた。スペイン語劇「デメトリオ・モンターノ」の綜合的迫力。支那語劇「五祖と六祖」の坊主ばかりのユーモラスな場面、英語劇の「ヴェニス商人」、獨語劇の「世襲山番人」、佛語劇「スカパンの詭計」孰れも學生の演技としての目標を立派にやつて退け頗る好評であつた。

約二ヶ月に亘る記念行事は上掲プログラムの示すやうに本校主催の各種體育競技會があり、その間には學友會各部の秋のスポーツ行事も織込まれて内容豊富に十分十周年の記念祝賀を果した。

記念事業 一、圖書目錄作成 學生の圖書館藏書の利用度は著しく高く、しかも年々その率が上昇の傾向を辿り(別表「閲覧狀況」参照)藏書數も逐年増加して來るので、圖書利用者の便宜のためには圖書目錄作成が急務であつた。しかし之には相當大きな費用が要るので實現は容易でない。ここに於て十周年記念事業の一つとして圖書目錄作成の件が執上げられ、八年末から準備に着手、分類整理、原稿の完成を急いで九月下旬漸く脱稿、十年十月に至つて印刷完了した。全卷六百三十頁、約一萬四千冊の和漢洋藏書を收載してゐる。この目錄は關係諸學校諸官衙圖書館に寄贈した。

二、プール建設 水泳部は昭和五年に學友會の一部として創設されたが自校プールを持たないために部員は非常に不便不利であつたし地方高商でも夙くから自校プールを持つものが少くなかつたので、プール建設が記念事業の一つとして執り上げられた。記念式準備に着手した九年六月頃から、學友會各部幹事評議員より成る實行委

序文及收載論稿の目次、次の如し。

序

回顧すれば十年前、横濱復興に魁して本校は灰燼の港都に創立されたのであるから、その使命の殊更に重きを痛感し、驚馬に鞭ちつつ日夜變化に専念、然かもなほ足らざらんことを怖れた。而てここに年を開する十年、本校が聊かなりとも復興の演に寄與するところありとすれば本校開設の趣旨の一斑は達せられたと言ふべき歟。

創設以來、本校は「信頼し得る人間を作る」ことを以て校是とし、大家族主義を標榜して協力一致、只管學問の向上、教育の徹底に邁進して來た。斯くて不斷の研鑽は穩健清新の學風となり、不撓の變化は克く醇朴敦厚の校風を興し得たことは洵に悦びに堪へないところである。

今、開校十周年記念の祝典を舉ぐるに當り、記念論文集刊行の企てあるや、全教官が各自の蘊蓄を傾けその專攻するところを發表して一大論文集の編纂せられたるは、偏へに本校教官の平素眞摯なる篤學研究の結晶に外ならない。是れ予の最も欣快とするところである。

一言以て序とする次第である。

昭和九年十月上浣

田尻常雄

目次

第一部

白人の人口減少とその影響
法律行為の解釋
商品保存問題
海上保險に於ける填補の種類

下田禮佐
大竹綠
南種康博
岩本啓治

人間の自然的人間學的性格と「計畫學問」の問題

燃料問題に對する一考察

貸借對照表論の推移と標準貸借對照表

勢力價值學説

——國民社會主義經濟學の一助——

權利行使の方式

英國の減債基金制度

本邦移植民の情勢と其將來の發展策

事業管理への補助としての標準減價相の觀察

我國製紙業に於ける産業統制

——特に洋紙の抄造業に就て——

イギリス重商主義學説と其社會的背景

價格分散と景氣變動

不二門龍親
岡野鑑記
福田要
小宮山敬保
井上龜三
德増榮太郎
森田優三

第二部

マヤの考古學から見たアトランティダ大陸の假説

コーヘンの論理學に於ける體系概念

ドイツ人の惡人

Selig Letter の書き方に就て

Otto Ludwigs Meisterwerke

新渡戸博士著「武士道」の研究

取殘された問題

岡田峻
富成喜馬平
伊東彌
光井武八郎
山中靜三
西村綱
河村重治耶

本科入學志願者及入學者累年比較表

募集年次	種別	中學	入學	商業	志願者	計	中學	入學	商業	志願者	計
大正十三年度	中	入學	商業	志願者	計	中學	入學	商業	志願者	計	
大正十四年度	七三八	二九〇	二九〇	一、〇二八	一、〇二八	八四	五〇	一三四			
大正十五年度	七四九	三九四	三九四	一、〇四七	一、〇四七	九四	五二	一五四			
昭和二年年度	六一一	三三六	三三六	一、〇二〇	一、〇二〇	七〇	五七	一五一			
昭和三年年度	七二三	二九七	二九七	一、〇四八	一、〇四八	七〇	五七	一五一			
昭和四年年度	七〇三	三四五	三四五	一、〇四八	一、〇四八	七〇	五七	一五一			
昭和五年年度	九二五	三四八	三四八	一、〇四八	一、〇四八	七〇	五七	一五一			
昭和六年年度	七〇八	二七三	二七三	一、〇四八	一、〇四八	七〇	五七	一五一			
昭和七年度	七九三	二二七	二二七	一、〇四八	一、〇四八	七〇	五七	一五一			
昭和八年度	九〇一	二七八	二七八	一、〇四八	一、〇四八	七〇	五七	一五一			
昭和九年度	八八一	二五五	二五五	一、〇四八	一、〇四八	七〇	五七	一五一			

貿易別科入學志願者及入學者累年比較表

募集年次	種別	中學	入學	商業	志願者	計	中學	入學	商業	志願者	計
昭和四年度	中	入學	商業	志願者	計	中學	入學	商業	志願者	計	
昭和五年度	二〇五	三五	三五	二四〇	二四〇	三五	四	三九			
昭和六年度	三七	二六	二六	四三	四三	二九	一	四〇			
昭和七年度	三四	七	七	四一	四一	二九	一	四〇			
昭和八年度	五〇	七	七	五七	五七	二九	一	四〇			
昭和九年度	八三	一四	一四	九七	九七	二九	一	四〇			

本科生徒原籍調

(昭和九年十月一日現在)

原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數
北海道	一	青森	二	和歌山	三	和歌山	三
東北	六	山形	七	德島	三	德島	三
関東	三	茨城	六	香川	二	香川	二
中部	五	新潟	八	愛媛	五	愛媛	五
近畿	七	富山	二	福岡	七	福岡	七
四国	三	高知	四	佐賀	四	佐賀	四
九州	八	山口	六	熊本	一	熊本	一
海外	一	鹿兒島	二	鹿児島	一	鹿児島	一
計	一五	計	四六	計	四六	計	四六

貿易別科生徒原籍調

(昭和九年十月一日現在)

原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數
北海道	一	山形	一	和歌山	一	和歌山	一
東北	一	茨城	一	香川	一	香川	一
関東	一	新潟	一	愛媛	一	愛媛	一
中部	一	富山	一	福岡	一	福岡	一
近畿	一	高知	一	佐賀	一	佐賀	一
四国	一	山口	一	熊本	一	熊本	一
九州	一	鹿兒島	一	鹿児島	一	鹿児島	一
海外	一	計	三	計	三	計	三

(昭和九年十月一日現在)

科別及同次												
種別	官公吏	學校教員	銀行會社員	新聞雜誌社員	個人商店員	自家營業者	上級學校入學者	入營者	外國留學者	南米渡航者	死	不計
第一回	七	八	五	一	六	八				七	五	二
第二回	七	五	八	三	一	三				六	三	〇
第三回	九	六	八	二	七	二				九	一	三
第四回	一五	七	九	七	一	八	一			六	七	一五
第五回	一	七	九	三	六	六	四			一	五	三
第六回	一五	七	九	三	五	八	一五			一	五	四
第七回	九	三	九	一	〇	二	八	△二		二		四
第八回	四		〇九	〇	一	〇	〇				一	五
第一回	六		一五	一	三				二	六	一	四
第二回	三		八		五				二		一	九
第三回	三		八		一	三			七		二	二
第四回	二		九		五	三	四	△一	四		七	二
第五回	一		二		三	四	五		六			三

備考 入營者擲中△印ハ現職ノ儘入營セル者ヲ示ス

三、研究資料

圖書及雜誌

(昭和九年十月一日現在)

圖	書	冊	數	雜	誌	種	類
和漢書	和漢書	九、一六二冊	和雜誌	五一種			
洋書	洋書	七、四〇七冊	洋雜誌	四四種			
計		一六、五六九冊	其他定期刊行物計	三〇種			
				一二五種			

調查部保管資料

(昭和九年十月一日現在)

- | | |
|-------------------------|---------|
| 一、官公署銀行會社諸團體公刊資料パンフレット類 | 約五、〇〇〇部 |
| 二、同上 | 二一〇部 |
| 三、重要新聞記事書抜カード | 二〇〇部 |
| 四、銀行會社考課狀 | 三冊 |
| 外内 | 國 |
| 外内 | 國 |
| 五八〇社 | 五八〇社 |

商品標本及機械類表

(昭和九年十月一日現在)

種別	商標	機械器具	數量	價格
			三、八一五	九、九〇圓
			二、一四九	二五、八五〇圓

第二 創業時代より開校十周年まで

(大正末期より昭和九年まで)

一 教育組織

學科課程 大正十三年創立に當つて學科課程が制定された。それは既設高商の學科課程を參考し斟酌して作られたものであつて、當時一般的にさうであつたやうに課目羅列主義を採り授業時數は毎週三十五時間といふ、かなり多い時間を課してゐた。學科目と各學年の毎週教授時數とは次の如くであつた。

學科	目	第一學年			第二學年			第三學年		
		中學出	第一學期	第二學期	中學出	第一學期	第二學期	中學出	第一學期	第二學期
修身		—	—	—	—	—	—	—	—	—
國語	漢文	—	—	—	—	—	—	—	—	—
作文	漢文	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商業	通論	—	—	—	—	—	—	—	—	—
貨幣及銀行		—	—	—	—	—	—	—	—	—
外國爲替		—	—	—	—	—	—	—	—	—
取引所		—	—	—	—	—	—	—	—	—
交通論		—	—	—	—	—	—	—	—	—
稅關及倉庫		—	—	—	—	—	—	—	—	—

保險學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
簿記	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
英文總記	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
會計學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
原價計算	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商業地理	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
海外經濟事情	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商品學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商品實驗及	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商業實戰	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
經濟原論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商工心理學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商業政策	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
工業政策	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
植民政策	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
財政學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
統計學	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
法學通論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
民法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
商法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
國際公法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
國際私法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
國際關係法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
國際私法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
英語	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第支那語	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

一、本表中授業時數ニ括弧ヲ附シタルハ選擇科目ニシテ第三學年第一學期ニ於テハ植民政策、統計學及商事關係法ノ中二科目四時間ヲ、同第二學期ニ於テハ工業政策、商工心理學及國際私法ノ中二科目四時間ヲ選修セシム

二、第二外國語ハ支那語、露西亞語、獨逸語、佛蘭西語及英語ニ就キ其ノ一ヲ選修セシム但シ一旦選修シタルモノハ半途改廢スルコトヲ許サズ又志望者ナキトキ又ハ學校ノ都合ニ依リ之ヲ缺クコトアルヘシ

三、以上ノ外尙隨意學科目トシテ志望者ニ限り經濟史、論理學、心理學、哲學概論、教育學、社會學等ヲ履修セシム

經濟史ハ第三學年ニ於テ一學年ヲ通ジ、論理學ハ第一學年第二學期、心理學ハ第二學年第一學期、哲學概論ハ第二學年第二學期、教育學ハ第三學年第一學期、社會學ハ第三學年第二學期ニ於テ之ヲ限ス

創立當時制定の學科課程が羅列主義であつて、基礎學と専門學との間に體系が樹てられてゐない憾みがあり、その合理的整頓は兩來多年の懸案であつたが、六年六月から委員の手で具體案を審議研究の結果成案を得たので十一月教官會議にかけて検討可決して文部省に申請、その認可によつて、七年四月の新學期から實施することとなつた。これが第一次改正である。

一、學科の體系的配列　即ち第一學年に於ては基礎課目に意を注ぎ、中學、商業出身者の知識の平均化をより徹底せしめ、第二學年には主として總論を、第三學年に入つて特殊科目を講ずることとした。

二、第三學年は選擇科目を主體とする。即ち約二十の提示課目の中、各自十を選擇せしむ。これによつて教授側の商業經濟課目の負擔は更に過重となるが學生にとつては多大の便宜を蒙るわけである。

三、ゼミナール重要視 第二學年に於て一週一時間のプロゼミナールを設置し、専ら原書講讀に充て、第三學年に於ては之を正課となし一週二時間を割當てること。プロゼミナールからゼミナールへの移動に際しては學生の自由變更を許す建前であつたが、實際上は全く變更なく二ヶ年間を同じ指導教官に屬してゐた。

第一次改正學科課程表 (昭和七年)

必修科目	第一學年			第二學年			第三學年		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
修身	一	一	一	一	一	一	一	一	一
國語作文書法	(中)三	(中)三	二						
英語	(中)八	(中)八	七	七	七	五	五		
英語會話	(中)一〇	(中)一〇				(中)一〇	(中)一〇		
其他ノ外國語	(商)三	(商)三	四	三	三	三	二		
高等數學	(中)二	(中)二							
商業數學	(中)一	(中)一							
珠算	(中)一	(中)一							(中)一

理化學	(商)二	(商)一							
近世史	(商)三	(商)一							
法學通論	(商)四								
民法		二	二	二	二	二	二	二	二
商法									
商事關係法						(中)一	(中)一		
國際法								(中)一	(中)一
經濟學原論	二	二	二	二	二	二	二	二	二
景氣論								(中)一	(中)一
經濟學史								(中)一	(中)一
商業政策								(中)一	(中)一
商業史								二	二
商業地理								二	二
外國經濟事情								二	二
財政學								二	二
統計學								二	二
商業通論	(中)一	(中)一						二	二
商業簿記	(中)四	(中)二						二	二
銀行簿記		(中)二						二	二
工業簿記及原價計算								二	二
英文簿記及タイプライティング			一	一	一	一	一	一	一
會計學								二	二

一、第一學年ニ於テ（商）印ヲ付シタルハ商業學校出身者及之ニ準ズル者ニ（中）印ヲ付シタルハ其ノ他ノ者ニ之ヲ

二、選擇學科目ハ第三學年ニ於テ第一期十八時間ノ中八時間ヲ第二學期十九時間ノ中九時間ヲ選修セシム
三、其ノ他ノ外國語ハ支那語獨逸語佛蘭西語西班牙語和蘭語ニツキ其ノ一ヲ選修セシム 但シ一旦選修シタルモノハ半途改廢スルコトヲ許サズ又志望者ナキトキ又ハ學校ノ都合ニ依リ之ヲ缺クコトアルベシ

學年學期 學年は二學期制とし、第一學期は四月一日より十月三十一日まで、第二學期は十一月一日より翌年三月三十一日までとした。隨て試験は學期試験、學年試験各一回宛である。試験の結果學年成績評點三十點以上五十點未滿のもの三科目以内に於て、諸學科目總平均六十點以上を得たるものに對しては其の學科目について再試験を施した。この再試験制度も理想通りには行かず却てこれを惡用する懸念さへあつたので後にはこれを廢し現行の如き制度を執ることとなつた。

訓育の方針 本校の生徒心得第一條は生徒の心得べき道を儼として示してゐる。即ち

第一條 生徒ハ校規師訓ヲ遵奉シ左記綱領ヲ確守スベシ

一、徳操ヲ磨キ學業ヲ勵ムベシ

二、心身ヲ鍊リ質實剛健ナルベシ

三、禮節ヲ尚ビ信義ヲ敦フスベシ

この大綱を基礎として訓育し「信頼し得る人物」たらしめんとするのが本校訓育の方針である。學業錬磨には缺席は禁物である。本校は授業時数の三分の一以上を缺席したものは、原則として受験資格を喪失するといふ規程を設けて懈怠的缺席を防止するにとともに（生徒心得第七條）卒業に當り、皆勤者及精勤者には賞状を授與してこれを褒賞し、更に數年後には思想指導費を割いて皆勤、精勤賞を與へることとした。又特待生制度を規定し（規則第二十六條）品性學業、衆の模範とするに足るものを選んで特待生とし、次學年度中授業料を免除し、學業琢磨に拍車をかけさせるとともに優秀生を表彰することとした。一、二學年より進級するに際して毎年各學年それぞれ二人乃至四人の特待生を選んでゐる。

二 創業の完成

全學年完成 第二回入學試験期が巡つて來た。志望者數は一、一四三名で、第一回の時より百二十名ばかり多し。試験地は本校のほか京都、福岡とである。第三回入學志望者は九四七名で前回より二百名ばかり減つた。試験地は本校と京都である。本校以外の土地で試験を施行したのは、志願者を全國的に募集し、各地方の特色を

綜合して學生相互の間に地方的特質を接觸攝取させて、偏らぬ校風を培養せんとする趣旨によつたのであるが、創立四、五年を経過し大體所期の目的を達したことと、本校の存在が全國に滲透して各地から志願者の集る見通しがついたので、昭和三年まで地方に於ける試験をやめた。

第二回は一五四名、第三回は一五一名の入學生を以て入學式を舉行し、かくて一學年から三學年まで全學年が揃ひ、四百五十の元氣のよい優秀な生徒が學園に充滿することとなつた。第三回入學生は入學と同時に現在の白雲の本館で受講したが、第一回生の如きは一年の時は高工の間借で、二年の時は現在の生徒控室で、三年の時に漸く本館に移るといふ風に毎年引越し状態を續けたものだ。

施設漸次整ふ 當時の文相岡田良平氏は大正十四年六月十日來校、本校の状況視察を遂げたが、本館は建築中で、例の假教室や假事務室での状況を具さに巡視されたのである。十五年十二月九日教育勅語謄本を拜戴、昭和三年十月九日、畏くも天皇皇后兩陛下の御眞影を拜戴して、ここに學園の基本が整つた。十五年三月本館竣工翌二年三月體育館、十二月寄宿舎が竣工するといふ風に諸施設は順を追ふて整備し、内容外觀ともに一通り充實したのである。かくて早くも第一回生の卒業期を迎へた。

昭和二年三月十五日に第一回卒業證書授與式を舉げて百十七名の本校最初の卒業生を社會に送り出したのであるが、先輩を持たぬ新卒業生の就職状況こそ、田房校長の最も關心を寄せたところであつて、假令高等の學術技藝を授け教養を深からしめても、これを適所に就かしめて社會的活動をさせなければ、佛造つて魂を入れざるに

等しいとは校長の持論であり、殊に始めての卒業生のことであるからその就職状況如何は微妙に將來に影響するところがあり、校長の苦慮はたしかに大きいものがあつた。

高等専門學校の創設擴張は好況時代の社會的要請に促がされたものであるが、創設擴張計畫の實施當初より既に恐慌續いて不況に見舞はれた社會が果して幾何の新卒業生を求むるであらうか。目出度く卒業はしたが向ふべきところが塞がれてゐては卒業生の歎きは察するに餘りがある。これは當時學校責任者のすべてに共通した悩みであり、それだけに就職運動が激甚を極めたのは當然であらう。

かうした不遇の環境にはあつたけれども、本校の卒業生は比較的恵まれた事情の下にあつた。否、一般狀勢から見れば頗る恵まれた事情にあつたにいへよう。それは偏へに田尻校長の献身的奔走の結果である。田尻校長は長崎高商校長時代から既に「就職の神様」と定評のあつた人で、平生から實業界巨頭要人と廣く交はり知己多く就職戰術は常に備へがあつた。これは實は言ひ易くして實行し難いことであるが、校長のはそれが全く身についてゐて少しも附け焼刃でない。明朗豁達、氣の置けない性格は知己を各方面に多くする。この人徳を以て、しかも義務的事務的にするのではなく全く献身的に就職の斡旋に東奔西走するのであるから、流石の不況時代に拘らず、日本銀行、三井、三菱等巨大銀行會社を始め各方面からの申込員數二百三十一に達し、卒業生中の就職希望者九十五人に對して二・七八倍といふ好況であつた。さうして卒業までに面會或は就職、試験等の難關を突破したものは八十三名、残れる十二名も卒業後間もなく各方面に就職して、不況時代としては幸先きよき出發をなし得た譯である。

かくて創業の大責務は果された。深刻なる不況の世運の間に在つて、入學志望者は年々一千人を前後し收容人員の七倍を數へ、しかも生徒の素質頗る良く、優秀なる人材養成の道場として社會の認承を得、卒業生の就職状況また上述の如くであつたから、次に掲げる内容の整備と好學的活動と相俟つて、爰に創業は完成したといへるであらう。

三 研究調査機關

研究所、調査部創設 經濟學は社會科學といはれる如く、文化科學の中にあつても恒に社會事象と深き關係を持ち、恰も自然科學における實驗の必要なるが如く、實證的研究が必要である。本校教授陣も漸を逐ふて充實して來たから、この研究上の要望が具體化して、十四年匆々岩本教授が創立準備に當り、十月十日の創立委員會によつて研究所規程が確定し、委員及調査部長が創立委員から選ばれた。常務委員古館教授、調査部長岩本教授以下八名の委員が別記の如き研究調査事業を擔當することになつた（研究所規程第三條參照）。

横濱高等商業學校研究所規程（抄）

- 第一條 横濱高等商業學校ニ研究所ヲ置キ横濱高等商業學校研究所ト稱ス
- 第二條 本所ハ商業及經濟ニ關スル調査研究ヲ爲シ學術ノ進歩ト實務ノ發達ヲ圖ルヲ以テ目的トナス
- 第三條 本所ハ左ノ事業ヲ行フ

- 一、商業及經濟ニ關スル調査研究
 - 二、調査研究資料ノ蒐集及其ノ整理
 - 三、講習會講演會研究會等ノ開催
 - 四、公刊物ノ發行
 - 五、調査研究ノ獎勵
 - 六、其ノ他本所ノ目的ヲ達スルニ適當ナリト認ムル事業
- 第八條 調査研究ニ關スル事務ヲ行フ爲メ調査部ヲ置ク

この研究所は當初専ら調査部の事業を中心とし、研究所自體としては特別の事業を行はなかつたが、研究所が幹事役となり委員が活動の中核體となつて次の如き研究會を作り逐次發展して、現在の太平洋貿易研究所の開設に誘導したのである。

嗣後會 教官が順次研究のため精讀した著書の紹介と批判を發表し、これを議題として討論する全教官の會合。大正十四年六月第一回例會を教官室に開き、爾後毎月一回開催して十數回に及んだ。

貿易研究會 世界貿易の實證的研究を目的とし、次の如き地域的分擔を定めて毎水曜日順次報告することとし、昭和十二年に入るや直ちに實行した。

德 增 教授——イギリス。	渡 邊 教授——イタリヤ。
井上鑑三教授——ドイツ。	森 田 教授——日 本。
井上龜三教授——アメリカ。	大 竹 教授——フランス。
越村助教授——ロシア。	岡 野 教授——世界貿易。

然るに報告が一巡した頃、森田教授の渡歐、越村助教授の應召のために、兩氏の擔當學科を殘留の教授の間で分擔引受けることとなつて、新しい講義準備に忙殺され、研究報告會を繼續することは加重となつたので、一時會合を中止した。これは十五年に至つて、商學會研究報告會として復活した。これ等一聯の眞摯な研究會合の雰囲気は漸く結實して十五年末の太平洋貿易研究所の開設となつたのであるが、同研究所については後述するところに譲る。

研究所季報發刊 調査部においては、商業經濟の内外各般に亙る調査研究資料を汎く蒐集整理し索引を作成すると同時に、謄寫して受入資料目録及び重要經濟問題の論題目録を毎月各教官に配布してゐたが、積極的に部員の研究乃至調査を資料として提供し同時に本校が未だ研究發表の機關雜誌を持たなかつたその缺を充たさんとして、昭和三年六月研究所委員會を開き、季報發行に決し、十月二十日、研究所季報第一號が發刊された。内容は次の如くである。

季報第一號目次

セリグマン「月賦販賣研究」の紹介
最近英國産業における集中と獨占
内外重要經濟日誌 昭和三年四月—九月
主要受入資料及定期刊行物目録

德 增 教授
井上龜三教授

雜 記

第二號は四年一月、大竹教授の法律と契約の凋落（一）、下田教授の南米經濟に關する二名著を讀みて、の二

つの紹介論文。第三號は同年四月、小宮山教授の聯結貸借對照表に就て、第四號は同年八月、大竹教授の前掲のもの續きと井上鑑三教授のウェイト「消費經濟學」の紹介論文を載せてゐる。季報はこの第四號を以て新に發刊される商學會の雜誌「商學」に包攝されることとなり廢刊した。

商學會の設立と「商學」の發行 研究發表の機關雜誌を持ちたいことは、かねてからの念願であり、教授陣容の充實は十分機關雜誌の内容を豊富になし得る自信があつたが、學校の機關雜誌は大なる市場性を持たないし、當時市場性多しといはれた一、二の大學の有名な機關雜誌さへ收支償はず、財政的行詰りに當惑してゐたことを洩れ聞いてゐたので、機關雜誌發刊には慎重の態度を執つてゐた。然るに卒業生及在學生の間から發刊の要望が起つて來たし、その發行を喜んで引受ける出版番肆同文館の森山誼二氏があつたので、昭和四年春、本校教官と生徒とを以て會員とする商學會を組織し、この組織によつて雜誌「商學」を發刊する運びとなつた。

横濱高等商業學校商學會規則

- 第一條 本會ハ横濱高等商業學校商學會ト稱ス
- 第二條 本會ハ雜誌「商學」ノ發行ヲ目的トス
- 第三條 本會ハ事務所ヲ横濱高等商業學校内ニ置ク
- 第四條 本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス
 - 一、特別會員 本校教官
 - 二、普通會員 本校生徒

- 三、贊助會員 本校卒業生ニシテ本會ニ入會スルモノ
- 第五條 本會々員ニハ雜誌「商學」ヲ年二回頒布ス
- 第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

- 一、會長 一名
- 二、幹事 若干名
- 會長ハ會務ヲ總理ス
- 幹事ハ會長ヲ輔ケテ會務ヲ處理ス
- 第七條 會長ハ校長之ニ當リ幹事ハ特別會員中ヨリ會長之ヲ指名ス
- 幹事ノ任期ハ二ケ年トス
- 第八條 會員ハ會費トシテ年額金二圓ヲ納ムルモノトス

會長	校長	田 尻	常 雄
幹事	教授	下 田	禮 佐
同	同	小 山	宮 敬保
同	同	德 增	榮 太郎
同	同	大 竹	綠
同	同	井 上	鐵 三

かくて第一號は四年七月十日に發行され、三百二十三頁の堂々たる體裁と次の如き豊富なる内容を盛つて現はれた。

鎖國時代に於ける支那の對歐貿易に就て
聯結貸借對照表に關する問題若干

農家經濟に於ける勞働力の自己搾取

CIF約款 ワルソー・ルール

フールト・ホイットマン論

時 論

最近の金解禁問題

賠償問題と獨逸の經濟

資料及紹介

ミルス氏の物價變動研究

市販柴油の研究

下田 證 佐
小宮山 敬 保
井 上 鑑 三
不二門 龍 觀
西 村 桐

森田 優 三
岡 野 鑑 記

森田 優 三
南 稻 康 博

外郭研究團體 商學の發刊より一足先きに、本邦貿易の太宗たる生糸の經濟學的研究團體が井上鑑三教授を中心とし、本校若手教授と生糸貿易の學究的社員とによつて結成され、二年九月一日その機關雜誌「生糸經濟研究」が創刊された。井上教授は全心を打込んで生糸の經濟的研究に没頭し、帝鑑ビル内に自ら事務所を設け大童の奮闘目覺しきものがあつただけに、不定期ではあるがその後發行された續輯とも學界、實業界の稱賛を瀛ち得た。七年三月の第六輯以後は暫く休刊したが再び十年に至つて井上教授單獨で「生糸經濟研究所彙報」を發行した。これは一、二回で中止したやうだが、この間における同教授の學問的熱意には洵に敬服のほかながつた。十四年四月忽焉として世を去つたが、春秋に富み且つ眞學な學究として將來を囑望されたのに實に惜しいことを

した。

四 夜學部附設

夜學部の目的 本校は廣く門戸を開放して、晝間實務に従事するものために専門學校程度の、商業上必要なる學術の講習を行はんとして、夜學部の附設を文部省に申請中であつたが、大正十五年四月廿八日附を以て認可されたので、直ちに講習生の募集を行ひ五月十日第一回の講習を開始した。

夜學部の規則は次の如くである。

横濱高等商業學校夜學部規則

第一章 目 的

第一條 本夜學部ハ主トシテ實務ニ従事スル者ノ爲ニ商業上必要ナル學術ノ講習ヲ行フ

第二章 講習期間及學科目

第二條 講習ハ毎年左ノ三期ニ之ヲ行フ

春期講習 四月ヨリ六月迄ノ間ニ於テ五週間

秋期講習 九月ヨリ十二月迄ノ間ニ於テ五週間

冬期講習 一月ヨリ三月迄ノ間ニ於テ五週間

第三條 毎期ノ講習ハ左ノ學科目中三科ニ付之ヲ行フ

商業 通 論 商業 英語 商 品 學
商業 地理 商工 心理

- 貿易論 海外經濟事情 稅關
倉庫 金庫 銀行 海運 火災保險
外國爲替 取引所 海保 海運
生命保險 海上保險
商業簿記 銀行簿記 工業簿記
英文簿記 會計學 商業數學
貿易實務(英語) 英文商業通信
經濟原論 貨幣論 財政學
商工經營論 統計學 經濟統計
商業政策 工業政策 社會政策
經濟史
法學通論 民法 商法
商事特別法 國際法
右ノ外隨時課外講演ヲ行フコトアルヘシ
- 第四條 前條ノ學科目ハ時宜ニヨリ之ヲ分合スルコトアルヘシ
但シ六期ヲ通シテ十五學科目ヲ下ラサルモノトス
- 第五條 各學科目ノ講習ハ十回(二十時間)ノ授業ヲ以テ完了スルモノトス
但シ都合ニ依リ之ヲ増減スルコトアルヘシ
- 第三章 講習生
- 第六條 講習生ハ每期之ヲ募集ス

第七條 講習生ハ中等學校卒業者又ハ本校ニ於テ適當ト認メタル者ニ限ル

第八條 講習志願者ハ講習願書及履歴書ヲ提出スヘシ

講習ヲ繼續セントスル者ハ講習繼續願書ヲ提出スルコトヲ要ス

第九條 入學ハ願書受付ノ願ニヨリ之ヲ許可ス

但シ講習繼續者ハ右ノ順位ニ依ラスシテ入學ヲ許可スルコトアルヘシ

第十條 講習生ハ一學科目又ハ數學科目ノ講習ヲ受クルコトヲ得

第十一條 不都合ノ行爲アリタル講習生ハ之ヲ除名ス

第四章 講習證明及學力檢定

第十二條 講習補助者ニハ講習證書ヲ授與ス

第十三條 講習證書ヲ有スル者ハ其講習學科目ニ付本校指定ノ期日ニ學力檢定試験ヲ受クルコトヲ得

第十四條 學力檢定試験ニ合格シタル者ニハ檢定合格證書ヲ授與ス

第十五條 十五學科目以上ノ檢定合格證書ヲ有スル者ニハ夜學部講習卒業證書ヲ授與ス

第五章 講習料

第十六條 入學ヲ許可セラレタル者ハ直チニ講習料ヲ納付スヘシ

一旦收納シタル講習料ハ之ヲ返還セス

一學科目一期ニ付 金 參圓

二學科目一期ニ付 金 四圓

三學科目一期ニ付 金 五圓

第十七條 講習料ヲ納付シタル者ニハ講習券ヲ交付ス

講習券ハ講習時間毎ニ之ヲ携帯スヘシ

講習會の經過 教室は小使室傍の元の事務室を充てたので六十名を限つて募集した。男女共學を標榜したが、

講習場が、婦人には極めて不適當なこの山頭にあり、登校路は不氣味に暗いのでおそらく一人も婦人の聴講生はあるまいと想像してゐたが、案外にも第一回四十八名の中には三人の若い熱心な婦人を交へた。

第一回は五月十日から五週間毎日午後六時半から二時間一課目を講習し、三課目各十回を輪講して講了することとした。不二門教授の法學通論、徳増教授の經濟原論（總論及生産論）、古館教授の商業簿記といふ講習科目であつた。五週間と云へば相當長い期間であり、しかも夜間この山へ登つて來るのだから餘程の熱心なものでなければ續かない。幸ひにも殆んど全部の聴講生が最後まで頑張つて好成績を収めて第一回を修了した。第一回聴講生の勤務先別は、官吏一〇、公吏四、銀行員九、會社員二一、小學校教員三、新聞記者一である。

第二回以降の講習開始日は次の如し。

第二回	大正一五、九、一三	第三回	昭和二、一、一七
第四回	昭和二、四、一八	第五回	同 二、九、一九
第六回	同 三、一、二三	第七回	同 三、五、一
第八回	同 三、九、一七	第九回	同 四、一、二一
第十回	同 四、五、六		

一回の講習に三課目宛としたから三十課目に亘り大體高等商業學校の學科目の全般が一通り講了したのである。ところで同が重なるにつれて聴講生の数は減少し第九回は二十五名、第十回は十七名となつた。これでは教授側も張合がなし、學校の負擔も大きくなる。そもそも、この山の上で夜間繼續的講習をするといふのが無理で

あつたから聴講生の減少するのは當然である。かうした經驗から、市内の中心地に適當な會場が得られるまで夜學部は無期閉鎖することとなつた。

五 開 校 式

開校式祝賀日程 弘明寺高工の假校舍から南太田の假教室へ、さうして三年目に漸く本館へ引移るといふ進しい状態だつたが、この間に三學年九學級は完成したので、いよいよ開校の式典を擧げることとなつて準備を進め大正十五年十月二十一日（木曜日）を以て式典の當日と決定、次の如き日程によつて祝賀行事を展開することとなつた。

開校式祝賀日程

十月二十一日（木）	開 校 式
	提 灯 行 列（夜）
十月二十二日（金）	名士學術講演會
十月二十三日（土）	大 運 動 會
十月二十四日（日）	野球、庭球、卓球 柔道、籠球、大會 管 樂 大 會（夜）
十月二十五日（月）	校 内 辯 論 大 會

運動各部大會續キ

十月二十六日(火)

語學大會

十月二十七日(水)

學生娛樂大會(夜)

十月三十一日(日)

蹴球大會、剣道大會

自十月二十一日

横濱文化史料展覽會

至十月二十六日

各教室裝飾、寫眞ボスター展覽會

開校祝賀式典 二十一日午前十時から講堂に於て岡田文部大臣臨場の下に盛大な祝賀式典が擧げられた。

開校式次第

大正十五年十月二十一日

午前十時

- 一、開式
- 一、君ヶ代合唱
- 一、工事報告
- 一、學校長式辭
- 一、文部大臣祝辭
- 一、來賓祝辭
- 一、祝電披露
- 一、生徒總代祝辭
- 一、校歌合唱
- 一、閉式

當日は天氣快晴、絶好の開校日和であつた。玄關には裝飾を施し、正門前及裏門にはそれぞれアーチを設け、屋上に國旗及本校徽章入の旗數本を樹て且つ萬國旗を吊し、校内各室には生徒の手に成る各種の裝飾があつた。

式は古館教授の開式挨拶によつて開始、君ヶ代合唱の後、工事報告あり。次で田尻校長の式辭、岡田文部大臣の祝辭及び池田神奈川縣知事、有吉市長、ホルムス英國總領事、佐野商大學長、渡邊名古屋高商校長、東京、横濱商業會議所會頭の祝辭があつた。

式後直ちに饗宴場(三階合併教室)に於て祝宴を催し、宴了つて來賓を自動車にて市内の復興狀況等を案内、三溪園を廻る。尙主なる來賓に對し當日午後五時より市内八百政に市長の招宴があつた。

學校長式辭

本日本校開校式ヲ舉行スルニ當リ、文部大臣閣下ヲ初メ閣下各位ノ御臨場ヲ辱ウ致シマシテコニ盛大ナル式ヲ擧ゲ得マスルコトハ本校無上ノ光榮トシ、御厚情ニ對シ本校一同ヲ代表シテ厚ク御禮ヲ申上ケマス。又本校創設ニ當リマシテ文部當局ヲ初メ縣市官民各位ノ非常ナル御盡力ト御同情ニ對シ深ク感謝ノ意ヲ表スル次第デアリマス。

此ノ記念スベキ機會ニ於テ簡單ニ本校ノ沿革及抱負ノ一端ヲ述ベテ式辭ト致シタイト思ヒマス。

本校ハ震災直後ニ創設セラレタル學校デアリマシテ大正十三年四月學生ヲ收容シ授業ヲ開始スルニ當リマシテ、本校舎ハ未ダ影ダニ見ルコトガ出來ナカツタメ、漸ク高等工業學校ノバラック建一棟ノ一部ヲ借用シテ授業ヲ開始シタノデアリマス。所謂居候生活ヲナスコト滿一ヶ年ニシテ翌十四年本校敷地ニ移轉シマシタ。然ルニ本館ハ建築ノ最中ニアツテ、漸ク生徒控所及武道々場ヲ仕切り臨時教室トナシ授業ヲ開始シマシタ。教職員全部本館ニ移轉シマシタノハ漸ク本年ノ四月カラデアリマシタ。

以上述べマシタ通り本校ハ震災ニハ遭ハナカッタガ震災ニ遭遇シタルモノト殆ンド同一ノ不自由極マル生活ヲ綴ケマシタ。併シコノ悲惨ナル生活ハ私達ニ大ナル刺激ヲ與ヘ精神ヲ緊張セシメタルコトヲ感謝致シテキル次第デアリマス。

次ニ本校ハ如何ナル主義ヲ目標トシテキルカトイフコトハ短時間ニ之ヲ述ベルコトハ困難デアリマスガ、一言ニシテイヘバ凡テテ信賴シ得ル人物ヲ養成スルコトヲ主眼ト致シテ居リマス。獨立自營タルト他ニ使用セラルルトヲ問ハズ自ラヲ深ク信ズルト共ニ他ヨリ安心シテ全任セラルル人物ヲ養成スルコトヲ期待シテ居ルノデアリマス。カカル人物タルニハ品性高潔、思想穩健ナルト共ニ、進歩的ナ商業社會ノ進運ニ適應スルダケノ智能ト技術トヲ有シ且如何ナル職務ニモ堪ヘ得ル健康ヲ有スルコト等敢テ喋々ヲ要セザル所デアリマス。現時我國ニ於テハ人口ノ増加ト共ニ各學校出身者ハ何レモ其ノ就職難ニ困リ切ツテ居ル有様デアリマス。カクノ如ク人ハ有り餘ツテキルガ、全部ヲ任セ得ル信賴スベキ人物ハ曠天ノ星ノ様デアルトイフコトハ實業界ノ有力者ヨリ常ニ聞クトコロデアリマス。之ヲ例ヘレバチヨウ武蔵野ニ草ハシナジナ多ケレド摘菜ニスレバサテモ少シトイフノト同一デアリマス。本校ハ武蔵野原ニ生ヒ茂ツテキル雜草タラズシテ其ノ摘菜タラシコトヲ期待シテ居ルノデアリマス。

我横濱ハ帝都ノ支關デアツテ文化ノ關門タルト共ニ實ニ我國ノ對外貿易上最重要ナル地位ヲ占メテ居ルノデアリマス。我國輸出貿易ノ大宗タル生糸ハ震災後ノ今日ト雖モ尙其ノ八割五分ヲ占メテ居リマス。我國總貿易額ノ三分ノ一ハ實ニ我横濱港ヲ經由スルノデアリマス。本校ガカカル地位ニアル關係上對外貿易或ハ海外發展トイフガ如キ事項ニツイテハ格段ノ注意ヲナシ研究ヲナシテ居ル積リデアリマス。

我横濱ハ過般ノ大震災ノタメ端カラ端マデ谷底ヨリ山ノ頂上ニ至ルマデ悉ク燃エ盡サレマシタ。一木一草ニ至ルマデ燃エ盡サレ殘ルハ灰ト燒ケタル土ダケデアリマス。コノ燃エ盡シタル灰ノ中カラ燒ケタル土ノ中ヨリ何物カヲ生ゼシメナケレバナリマセン。即チココニ燃エ盡ルガ如キ復興ノ精神ガ湧出シタノデアリマス。新ニ生レ變ツタ人物ガ出來タノデアリマス。而シテ何者ト雖モ之ヲ防ギ止スルコトノ出來ナイ緊張セル復興精神ガ市民ノ間ニ熾然トシテ湧出シタノデアリマス。自然ノ力ハ實ニ恐怖スベキモノデアアルガ、マタ人間ノ人モ偉大ナルモノデアアル。吾人ハコノ偉大ナル人力ヲ以テ自然ヲ征服セネバナラナイノデアリマス。今ヤ我横濱ハ震災ニヨリ生レ變ツタ人間ニヨリ緊張セル精神ヲ以テ横濱ノ復興ハ清々トシテ進歩シツアルノデア

リマス。此ノ時ニ當リ、コノ場所即チ不二見ヶ丘ノ高臺ニ於テ本校ガ呱呱ノ聲ヲ上ゲタルコトハ頗ル有意義ナルト共ニ本校ノ大ナル使命ヲ信ジ其ノ責任ノ重且大ナルコトヲ自覺スルモノデアリマス。
感想ノ一端ヲ述ベテ式辭ト致シマス。

文部大臣 祝辭

本日横濱高等商業學校開校ノ式典ヲ舉行スルニ當リ一言慶祝ノ意ヲ表スルコトヲ得ルハ予ノ欣幸トスル所ナリ。
抑々横濱ノ地帝都ノ關門ニ位シ開國以來世界交通ノ衝ニ當リ本邦貿易上最重要ナル地位ヲ占メ我國輸出入貿易總額ノ凡三分ノ一ハ實ニ本港ヲ經由ス。

政府ガ大正十二年十二月此地ニ横濱高等商業學校ヲ創設シタルハ實ニ茲ニ觀ル所アリシナリ。次デ十三年四月始め生徒ヲ收容シ爾來教職員諸氏ノ協力一致ト官民諸氏ノ後援トニ依リ克ク震災直後ノ困難ニ堪ヘ諸施設ノ完成ト内容ノ充實トニ努メ以テ今日アルヲ見ル邦家ノ爲寔ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ。

惟フニ國運ノ隆昌ハ國民ノ經濟的發展ニ俟フ所極メテ大ナルモノアリ國民ノ經濟的發展ハ國民各自ノ自覺ニ依ル而モ世界ノ經濟界益々多事ナラムトスル現下ノ情勢ニ於テ自ラ實業界ニ投ゼムトスル者ハ實ニ商業的才幹ヲ有スルヲ以テ足レリトセズ剛健實實ナル氣風ト高邁ナル人格トヲ兼ネ備ヘザルベカラズ。

本校ハ實ニ國家ノ進運ニ貢獻スベキ模範的實業家ヲ養成シ本邦産業貿易ヲ振興シ又之ニ由リテ横濱ノ復興促進ニ寄與スルノ使命ヲ擔グルモノナルヲ以テ教職員諸君並生徒諸子其ノ責任ノ重且大ナルニ鑑ミ不屈不撓ノ精神ヲ以テ國家ガ本校ニ期待スル所ニ添ハムコトヲ切望シテ止マザルナリ。

終ニ予ハ此機會ニ於テ本校創設ニ際シ多大ノ援助ヲ與ヘラレタル本縣官民諸氏ニ對シ深甚ノ謝意ヲ表シ併セテ本校將來ノ發展ヲ祈ル。一言以テ祝辭トナス。

大正十五年十月二十一日

文部大臣 岡田 良平

東京商科大學長祝辭

四八

横濱高等商業學校新設セラレ諸般ノ設備成テ告ゲ茲ニ本月ヲトシテ開校ノ盛典ヲ舉行セラル吾人同ジク商業教育ノ任ニ膺ル者一層慶賀ノ情ニ堪ヘザルモノアリ。

回顧スレバ横濱ニ於ケル商業教育ハ其起原頗ル遠ク明治十五年故小野金六氏等同市々民二十有餘名ノ發起ヲ以テ創設セラレタル横濱商法學校ヲ以テ濫觴ト爲ス當時本邦ニ於ケル商業學校ハ東京商法講習所及ビ神戸大阪兩商業講習所等アリシガ神戸大阪ノ二講習所ハ内國商業取引ニ必須ナル卑近ノ技術ヲ授クルヲ以テ目的トシ其程度極メテ淺薄ナリシニ反シ横濱商法學校ハ東京商法講習所ト同ジク専ラ外國貿易ニ從事スベキ人材ヲ養成スルヲ以テ目的ト爲シ洋式教育ヲ施シ經濟貿易實務及ビ外國語ニ力ヲ用キタリ然ラバ則チ横濱創立者ノ企圖ハ外國貿易上實際ノ需用ヲ察シテ其教科ヲ擇ミ程度ヲ定メ以テ目的ヲ達成セント期スルニ在リシヤ復タ疑ヲ容レザルナリ爾來本邦經濟ノ發達外國貿易ノ進歩顯著ナルニ伴ヒ東京商法講習所ハ之ニ順應シテ漸次其教課ヲ進メ程度ヲ高メ高等商業學校トナリシニ係ラズ横濱商法學校ハ明治二十一年商業學校通則ニ據リ其第一種學校ヨリ稍高キ中等教育機關トシテ横濱商業學校ト改稱シタルニ過ギズ更ニ征清討露ノ兩役ヲ經本邦經濟ニ異常ノ進展ヲ來タシ國光大ニ發揚セラレシ機運ニ際會シ東京高等商業學校ハ益々其程度ヲ高クシ神戸大阪長崎山口小樽ノ各地ニ高等商業學校相繼テ設立セラレ本邦高等商業教育機關漸ク備ヘルニ至リシカ横濱ハ依然中等學校タル横濱商業學校ヲ有セシノミニシテ何等之ニ加フル所アラズ吾人ハ本邦外國貿易上ニ於ケル同港ノ地位歴史並ニ前記横濱商法學校創立ノ趣旨ニ鑑ミ斯ル情態ニ對シ不滿ノ念ナキ能ハズ又横濱市民ノ傍觀シテ何等發策スル所ナキヲ解スル能ハズ夙ニ勇敢進取ノ氣象ヲ以テ雄視セル横濱市民ノ意氣何クニ存スルヤヲ疑ハザルヲ得サリキ然ルニ政府ハ疊ニ歐洲大戰後ノ一施設トシテ高等教育機關擴張ヲ計畫シ名古屋彦根和歌山高松大分福島高岡ノ諸市ト共ニ横濱ニモ高等商業學校ヲ新設セラレタリ是レ最モ機宜ニ適シタル措置ニシテ吾人ハ本校ノ設立ニヨリテ横濱ニ當然設置セラルベカリシモノニシテ長ク閑如シタルモノノ設置ヲ見又横濱市民ノ當然有セザルベカラザリシモノヲ新ニ獲タルヲ見欣慰ノ情禁ズル能ハザルト同時ニ其設立時機ノ大ニ後レタルヲ惜マザルヲ得ザルナリ。

然レドモ既往ハ追フベカラズ要ハ將來ニ寄慮スルニ在リ抑々横濱ハ商業教育ニ取リ能ク地利ヲ占メタリト謂フベク教官ノ招聘教材ノ蒐集國際事情ノ觀察生徒ノ募集卒業生ノ就職等他ノ多クノ地方ニ比シテ遙ニ有利ナルハ言ハ俟タズ而カモ當路能ク

其人ヲ得創立以來日向ホ淺キニ拘ラズ已ニ其功績ノ見ルヘキモノ頗ル多キガ故ニ吾人ハ此機ニ當リ文政當局ガ益々本校ノ施設ヲ完備スルニ勉メ横濱市民モ亦之ガ設置ニ報ユル爲メ舊テ本校ノ經營ニ利便ヲ與ヘ其傳統的ノ意氣ヲ發揮シ本校ヲシテ克ク其地ノ利ヲ善用シテ其使命ヲ完フスルニ遺憾ナカラシメシコトヲ冀フト同時ニ本校當路者ニ向ツテハ適切ニシテ穩健ナル教育方針ヲ確立シテ能ク校務ヲ經營シ内ハ以テ質實剛健ノ校風ヲ涵養シ外ハ以テ本邦產業貿易ノ振興ニ貢獻シ又横濱港ノ繁榮ニ寄與シ以テ校運ヲ長ヘニ隆昌ナラシメ天下ノ期待ニ負カサルコトヲ切望シテ已マサルナリ爰ニ願望ヲ省ミズ所感ヲ披瀝シテ以テ祝詞ニ代フト云爾。

大正十五年十月二十一日

東京商科大學長 佐野 善作

工事報告

本日横濱高等商業學校ノ開校式ヲ舉行セラル方リ工事施行ノ願末ヲ報告スルハ小官ノ光榮トスルトコロナリ。
疊ニ政府ハ大正八年度以降ノ繼續事業トシテ高等諸學校ノ増設ヲ企發セラレ就中高等商業學校ハ全國ニ七校ヲ新設シ其一校ヲ横濱市ニ設置スルコトトシ豫算額ハ八十三萬三千百圓ト決定セラレタリ依テ神奈川縣ヨリ五十六萬圓ノ寄附ヲ申請許可セラレ敷地ノ購入及地平均工事ハ之ヲ同縣ニ委任シ其完了ヲ俟ツテ大正十三年四月文部省建築廳横濱出張所ヲ開設シ専ラ工事ノ設計監督ニ從事セリ。

元來本校ノ建築ハ木造ノ計擬ナリシモ震災ノ結果耐震耐火の構造ト爲スベキ必要ヲ認メタルヲ以テ主要建物ハ之ヲ鐵筋混凝土造ニ變更シ其ノ變更ト物價騰貴及土地購入増價等ノタメ實行豫算額ヲ設備費ヲ合セテ百十一萬六千九百九十一圓ト改定セラレタリ而シテ其設計ハ實用ヲ旨トシ裝飾的設計ハ成ルベク之ヲ避ケ指名競争入札ニヨリ購買ニ付シ工事ヲ實行シ寄宿舎雨天體操場等ヲ除ク外ハ既ニ其ノ竣工ヲ告ゲタリ。

買収セシ敷地面積ハ一萬八千二百四十八坪餘ニシテ其ノ購入費十九萬五千四百四圓ヲ要シ此一坪當リ十圓七十餘餘ニシテ地平均ハ一萬二千六百二十七圓ヲ要シタリ又竣工セシ建物ノ總延坪ハ二千二百五坪餘ニシテ今日迄ニ支拂及契約済ノ工費ハ五十七萬六千五百五十五圓餘ニシテ本館鐵筋混凝土建延一坪當工費ハ二百四十二圓餘ニ相當セリ又器具機械圖書類ハ本校ニ於テ之ヲ設

備セリ

本工事着手以來前後三ヶ年ニ互リ何等ノ故障ヲ生セズ其工程ヲ進メ近ク全部ノ完了ヲ告ゲントスルニ至リタルハ閣下並諸君ノ後援ニ倚ルニ外ナラザルコトト深ク感謝ノ意ヲ表シ茲ニ工事施行ノ概要ヲ報告ス

大正十五年十月二十一日

文部大臣官房建築課長

文部技師 柴垣 鼎 太郎

開校記念祭プログラム

十月二十一日(木)

(1) 式 典 午前十時—正午

(2) 東電對本校野球戰 於本校グラウンド 午後二時より

(3) 提灯行列 本校生徒全部 午後六時より

(道順) 本校—初音町停留所—電車道—長島町—吉田橋—馬車道—大江橋—榎木町驛前—辨天橋—本町通り—相生町—公園にて解散

二十二日(金)

名士學術講演會(本校大講堂)

一、爲替市場としての横濱 横濱正金銀行頭取 兒玉 維次氏 午後一時より

一、富の經濟と貧の經濟 法學博士 福田 徳三氏 午前九時より

二十三日(土)

運動會 於本校々庭

個人競技、HCS學年對抗競技、縣下中等學校八百米リレー、市内小學校高等科八百米リレー、同等常科四百米リレー、來賓競争、優勝旗授與

二十四日(日)

(1) 近縣中等學校軟式庭球大會(本校コート)午前八時より參加學

校七十餘校

(2) 硬式模範試合(鴨打、河尻、麻生、八木、相澤) 午後三時より

於本校コート

(3) 一高、横濱高工、早大ラレツシニマン、本校、野球爭覇戰 午前八時より

(4) 近縣中等學校柔道大會 本校道場 午前九時より

神奈川、静岡、千葉、埼玉、東京、山梨、各府縣十八校

(5) 全關東卓球個人大會及女子模範試合 午前九時より

參加者 二百餘名

(6) 縣下中等學校バスケットボール大會 午前九時より

神中、二中、三中、關東學院、本牧中、鎌倉師範

(7) 音樂大會 於本校大講堂 午後六時より

一、合唱 本校音樂部員

一、管絃樂

一、序樂祝典 陸軍戸山學校軍樂隊

二、未完成シンフォニー ラタン作

一、合唱 本校音樂部員

一、マンドリン合奏 本校音樂部員

一、合唱 本校音樂部員

一、マンドリン合奏 本校音樂部員

一、管絃樂 陸軍戸山學校軍樂隊

二十五日(月)

- 一、二つの印度舞曲
- 二、木琴獨奏
- 三、スラブノ詩史
- 管絃樂指揮
- 合唱指揮
- マンドリン合奏指揮
- 逸
- 青木 水氏
- 平野 主
- フリードマン作
- デトリツヒ作
- スキルトン作
- (1) 神中對横商野球戰 於本校グラウンド 午前八時より
- (2) 辯論大會 於本校大講堂 午後一時より
- 一、移民か移物か
- 一、婦人労働と家庭賃銀
- 一、國民外交の基調
- 一、帝國の前途と海運
- 一、石油を繞る各國の動き
- 一、最近の支那
- 一、爲替問題考察
- 一、保守主義の一考察
- (3) 巢籠會主催 琴古流尺八演奏會 於本校講堂 午後五時より
- (1) 縣下中等學校英語大會 於本校講堂 午後二時より
- (2) 外語劇及朗讀 於本校大講堂 午後六時より
- (イ) 英語—アブラハム・リンカーン(ドリンクウオーター作)
- (ロ) 同—スレッド・オブ・スカールレット (ベル作)

二十六日(火)

- (ハ) 獨逸語—思ひ出
- (ニ) 佛語—群青
- (ホ) 支那語—歸去來之朗讀
- (マ) 支那語—歸去來之朗讀
- (一) 縣下各クラブ蹴球大會 於本校コート 午前八時より
- 白旗、セント・ジョセフ、横濱サツカー、海兵團、本校各クラブ
- (2) 縣下剣道大會 於本校道場 午前八時より
- 返中、神中、二中、三中、横商、實習、工業、鎌中、鎌師、本牧中、横須賀中

二十一日より二十六日まで

校内開放 室内裝飾
横濱文化史料展覽會
神奈川縣下學生寫眞印畫展覽會
ボスター展覽會

横濱文化史料展覽會 記念式典當日、調査部編纂の「横濱の沿革」なる小冊子を來會者に贈呈し、横濱の今昔概観を示した(内容 一、横濱の開港と發展 二、泰西文物輸入港としての横濱 三、横濱沿革誌略)が、記念行事の一として、調査部主催の横濱文化史料展覽會を開き、横濱市史編纂係その他の資料蒐集家から、古地圖、錦繪、寫眞、古書籍、諸参考品等を借受け、これに調査部所藏の錦繪、關係文献を加へ、出品目録を作つて頒ち

出品點數百三十七を一週間に互り展示し、來會者の多大なる興趣を惹いた。

開校記念論文集刊行 「商學」創刊に先立つこと二年半、季報發行より一年半前の昭和二年三月十日に、開校記念論文集が次の如き内容を以て刊行された(菊版四二五頁)。これは本校の處女出版であり、將來の機關誌刊行の原型となつたものである。卷頭に載せられた田尻校長の發刊の辭はその抱負を語つてゐる。

發刊の辭

本校開校記念事業の一として豫て企圖せられてゐた本校スタッフの商業學經濟學法律學に關する研究論文が上梓刊行せらるるに當つて一言發刊の辭を寄せんとする。

抑々吾々は教育者であると共に學徒でなければならぬ。學生の教導に當ると共に學問研究に眞摯の努力を拂はねばならぬ。而して其研鑽の結果は之を世に發表して江湖の批判を乞ふ事は寔に自己琢磨の道でより兼て學問の向上進歩に資する所以であらう。吾々は夙に創立の際から此志を懷いては居たが創立事業の匆忙の爲めに今日まで其意を果さなかつた。然るに創業の仕事も一期を過し開校式を舉ぐるに際して機會到來し吾々の初志は達せられたのである。

憶ふにスタッフ各自は日頃其專門とする道を邁んで學問的生命をここに捧げ、自己の個性を發揚して學的生活を營んでゐる。然かも各々の聲き出す音色は異なるけれども合しては一の全き旋律を持つ交響樂を完成する如く各自の學問的興味が茲に集成せられて一の論文集となつてこそ學校を中軸とする吾々の協同生活が完きを爲るのである。

吾々は今昭和の初頭に無限に擴大し行くべき旋律の交響樂を江湖に向つて奏でんとする。日新の意氣と不斷の創造的努力隨て學界に雄飛すべき礎石は置かれたのである。

目次

原價計算に關する考察若干
徳川時代に於ける堂島米市場

小宮山 敬保
井上 龜三

商品と工業所有權

商工業に於ける人的因素

収益率の理論

ゲョールラントの「奢侈の概念」に就て

チュルギーの思想の一解釋

獨逸の賠償問題

ペルメイの定理と大數法則(ホルトキウィツチ)

獨逸法に於ける物の賣買と契約不履行

英商法の特質と由來とに就て

譯 讀

爲替市場としての横濱

横濱正金銀行頭取

兒玉 證次

開校式當時の概況

一、職員

學 校 長

田 尻 常 雄

教 授

保險學、交通論

岩 本 啓 治

國語、漢文、世界近世史

栗 林 信 朗

(在外研究中)

(在外研究中)

下 田 禮 佐

簿記、原價計算

西 村 稠 太郎

法學通論、民法、商事關係法
 商業作文、書法、商業實踐
 英語
 修身、商工心理學、心理學
 英語
 簿記、會計學
 經濟原論、商業史
 佛蘭西語
 民法、商法、國際法
 商業政策、交通論、商業英語
 商業算術、數學
 配屬將校
 助教授
 體操
 講師
 體操、教練
 珠算
 修身
 商業地理
 商業通論、貨幣論、商工經營

不二門龍
 藤田義雄
 光井武八郎
 內山進
 河村重治郎
 小宮山敬保郎
 德增榮太郎
 時田清
 大竹綠
 渡邊輝一
 小幡孫二
 宮城善助
 陸軍歩兵少佐
 下津屋俊夫
 石川寛
 山崎與右衛門
 友枝高彦
 內田寛一
 井上鎧三
 東京高師教授
 東京高師教授
 東京高師教授

銀行論、外國爲替、統計學
 獨逸語
 商業英語、稅關倉庫
 支那語
 理化學
 商品學、工學
 財政學、工業政策

備外國人教師

英語、商業實踐、英文簿記
 柔道教師
 劍道教師
 書記
 會計課
 庶務課
 教務課
 會計課
 事務囑託
 圖書課
 庶務課
 會計課
 同

森田優三
 小谷惠一郎
 井上龜三
 武田武雄
 田尻彦幸
 南種康博
 岡野鑑記
 エー・ピー・ラウンズ
 伊藤子之吉
 吉川仲衛門
 齋藤照之助
 矢島熙
 武石彌平
 堤善吉
 湯川和平
 吉居德治
 三田村額夫

生徒原籍調

(大正十五年九月十五日現在)

本籍	生徒数	二	本籍	生徒数	一本籍	生徒数	一本籍	生徒数
北海道	八	八	青森	一	一	徳島	三	三
東北	四〇	二	山形	一	一	愛媛	三	三
東京	一〇	三	秋田	一	一	高知	一	一
京都	八	二	福岡	一	一	福岡	一	一
大阪	七	一	石川	一	一	大分	一	一
神奈川	一三	三	富山	一	一	佐賀	一	一
兵庫	一〇	二	島根	一	一	熊本	一	一
長崎	九	一	根	一	一	宮崎	一	一
新潟	八	一	山	一	一	鹿兒島	一	一
埼玉	六	一	廣	一	一	沖繩	一	一
群馬	九	一	島	一	一	五	一	一
千葉	一〇	二	和歌山	一	一	計	四二	一
茨城	一	一	手	一	一			

三、研究資料

圖書及雜誌

(大正十五年九月十五日現在)

圖書	冊数	一	雜誌	冊数	一
和漢書	三、一九三冊	一	和漢雜誌	六〇冊	一
洋書	四、四九八冊	一	洋雜誌	六四冊	一
計	七、六九一冊	一	計	一二四冊	一

調査部保管資料

(大正十五年九月十五日現在)

一、官公署銀行會社諸團體公刊資料マンフレット類.....約六五〇部

二、同上.....定期刊行物.....

(内) 國.....一八〇冊

三、新聞記事切抜.....

(内) 國新聞.....八冊

四、銀行會社考課狀.....

(内) 國.....五八〇社
(外) 國.....一五社

商品標本及機械

(大正十五年九月十五日現在)

種類	別	数	量	價	格
商品	標本	一〇五五	一	五、五〇〇圓	
機械	器具	一〇三〇	一	一九、五〇〇圓	

六 學友會の活動

文化團體 學友會は大正十三年開校匆々結成されたけれども、間借生活の不如意と、百三十ばかりの一年生の少數であつたためにこれといふ活動は出来なかつた。ただ特筆すべきは一年有志の間に國際聯盟協會の學生支部が夙くも結成され、十一月二十二日、本校講堂でその發會式が舉げられ、財務官森賢吾氏の「歐米財政事情」早大教授内ヶ崎作三郎氏の「國家人と國際人との調和」と題する講演があつた。これは學友會の外郭團體ではあつたが、學友會的な活動としてのトップを切つたものであつた。爾來二十年、國際經濟研究會として大きな足跡を残しつつ今日に至るまでこの外郭團體は存続して、國際經濟問題への關心を昂揚してゐるが、日本國際協會(現外政協會)に於ける學生支部としては最古參格である。

この國際經濟研究會は翌十四年一月三十一日に第二回講演會を開催、新渡戸稻造、林毅陸兩博士の講演を、五月廿二日には、第一回國際思想研究講座を開き、外務省の塚本毅氏の講演を聴くといふ如く、文化方面活動の中心をなしてゐた。

學友會講演部は十四年五月三十日その第一回名士講演會を開き、高谷道男氏の「神秘思想の一考案」、堀光龜氏の「太平洋問題」を聴いた。

運動部 十四年に入るや高工野球部との間に定期戦を毎年一回交へようとの議が熟し、開港記念祝賀行事の一つとして、七月二日の開港記念日（後六月二日となる）に決行することとし、第一回定期戦が十四年七月二日、全校應援の下に、新山下町假設グラウンドで行はれた。午後四時開始、七時閉戦といふ記録が残つてゐるが随分長試合だつた。その結果は四A對三で本校が惜敗した。

翌十五年の第二回戦は七月一日新山下町グラウンドに舉行、五對四で本校が勝つた。應援に秘術を盡し、扇子による手拍子、拍手や太鼓で氣勢を上げ、應援戦の觀があつた。兩校應援團の熱狂、兩校フアンの喧騒、遂に横濱名物の一つとなり「濱の早慶戦」と題はれるに至つた。第三回も新山下町グラウンドで昭和二年七月一日に行はれたが、本校は一對〇で惜敗した。第三回は諒闇中であつたから太鼓その他の鳴物入り應援はなかつた。第四回は翌三年七月一日舉行四對三で本校快勝。第四回の決戦場は蒲頭球場（現在大日本航空會社のある場所）であつたが、塵芥焼却場が近くにあり、市中から集められた生の塵芥が近くに積んであつたから眞夏の蠅が風に飛つて大

舉して觀覽席へ飛んで来る。これを追ひ拂ふ扇子が一時に動いて白扇の浪が押し寄せるやうな壯觀を呈する等の景物もあつた。

もとむと定期戦の目的が、兩校の技倆を磨くとともに親睦を圖らうといふにあつたが、兩校とも學校の面目に掛けても勝たうと張切るし、鳴物入の應援團が背後に控えてゐるし、否應援團同志の競争が展開する。これにそれぞれフアンが彌次の應援をするので、試合が丁つても興奮が醒めず、夜の伊勢佐木町まで延長戦が繰り展げられるといふ有様だつた。電車の中で毎朝毎夕顔を合せる兩校の學生が、敗けた方は當分銷沈して顔も上げられないといふやうな拘泥は甚だ面白くないし、定期戦の逆効果である。このことと、試合を實力本位でやるために三回戦にしたいといふ本校側の主張と一本勝負で行かうといふ高工側の主張が妥協點に達せず、定期戦は此の第四回を以て一時中止することとなり、昭和四年五年の二ケ年は定期戦が見られなくなつた。

第一回陸上運動會が、十四年十一月十五日校庭に開かれた。陸上競技に餘興を織込んだやうな運動會で、前垂掛の店員や墨染の坊さん等に假裝して見物人に混つてゐる學生を、見物人に捜し當てさせる等といふ景物が添へられ面白可笑しく秋の一日を過でさうといふ趣向である。

第二回は翌十五年十月二十三日に開催され、學年對抗で優勝した組及び近縣中等學校、市内小學校の對校リレー競走に優勝旗を渡すこととなつた。

昭和二年七月二十三日駒場帝大グラウンドに於ける全國高專野球大會關東预选赛に、野球部は準決勝戦で再度

高工と對戦し一對〇で惜敗してゐる。明治、慶應各豫科と本校との優勝爭奪戦といふ戦前の下馬評は裏切られた。

體育各部も對高工定期戦にその他對校競技と試合に活躍して部史の初めを飾つてゐる。

下津屋助教の指導で體育研究會が成立し會員三十五名を擁した相談會に發足したのが昭和二年六月二十七日であるが、下津屋氏がその席上語られた大きな抱負は、その後の體研の發展を約束するものの如くである。即ち「獨逸の愛國者がナポレオンの暴虐から脱せんとして奮起し、祖國青年の精神作興は體育の向上にありとして獨逸體操を創始した。又フキンランドの奪取されたのを啖いて憤起せるスウェーデンの熱血詩人によつてスウェーデン體操が發明された。かくて現代世界における體育の二大形式たるドイツ及スウェーデン體操は愛國の士によつて起されたのである。我國の文部省はこれ等諸國の體操の長所を採り入れ我國在來の體育方法をも尊重してここに今日の體育形態が出来た。ただ現今の青年は娛樂とか名譽心とかいふ出發點からは、かなり體育をやつてゐるが、もう少し眞の意味の體育を重視しなければならぬ云々」と。本校の體育は後述する如く全國有數のものであつて早くも文部省の表彰を受けたが、教官のこの抱負、この熱意あればこそで洵に故ありといふべきである。

横濱高商新聞發刊 昭和二年新學期を迎へ第二回生が三學年生となるや、新聞發刊の希望が起つた。「新聞は目下の急務だ。學生相互の親睦も新聞を通してであり、先生と學生との意見の疎通も新聞に依るの効は大である。本校發展のために我々の意のあるところを解せられたい」と發起人の三年生は全學生に呼びかけた。基金の

點で杜撰の點があり、多少の迂餘曲折はあつたが、學友會誌年一回發行を一同として他の一回分の費用を新聞發行に充てることに決定して折合がついた。ただ高商校長會議で新聞發刊禁止の内訓があつた際だつたから校長のところでは難色があつたが、學生の誠意が通じ、自重と責任とを以て發行の事に當る旨を誓はしめて遂に發行が許された。發行兼編輯人は三年坂本四郎君が當り、横濱毎朝新聞社で印刷した第一號は二年六月三十日、新聞半折大八頁で發刊された。一面は發刊の辭と發刊に至る経緯。二面は論說ウィリアムゴドウィンで全紙幅が埋められ、三面は學校の近況で、下田教授歸朝、渡邊教授渡歐が報道されてゐる。四面は文藝欄、五面は迫り來れる第三回對高工定期野球戦への激勵で飾られ、六、七面は學友會各部の活動狀況が載せられてゐる。八面は全面殆んど廣告に充ててゐるがこれは經費捻出の爲めであつたらう。

第四號までは「横濱高商新聞」であつたが、十一月廿五日發行の第五號から校長揮毫の「横濱高商學報」と改題。四年第十四號から四頁新聞大となつた。三年には雜誌部が學報部と改められ學友會誌一回（學友會誌は六年の十月から不二見ヶ丘と改題）、學報年八回發行することとなつた。

その頃の學友會 昭和二年、籠球部が學友會の部として認められ、卓球部が庭球部から獨立し、競技部の内に水泳を含むこととなつた。

翌三年學友會の基礎を確立するため基金として三百圓を積立て爾後毎年之を繼續することとした。四年經費不足を補ふため會費を年額十一圓とした。又御大典記念事業として椎三十七本を校庭に植える。五年度から弓道と

體育研究會に學友會より補助金提出。弓道場が校庭南隅に設置された。弓道部は六年に獨立する。七年ラグビー部、九年排球部が獨立する。運動各部の更衣所が體育館西側に添ひて新設されたのは八年である。

五年對南大専門部との定期綜合競技會を開くことになり優勝旗を作製した。第一回は六月廿九日國立の南大グランドで行はれ、本校側は、野球、柔道、剣道、蹴球の四種目に勝ち、陸上競技、縮球、水泳、弓道の四種目に敗れて同点となり、勝敗の鍵は翌三十日の庭球戦が握ることになったが、果然非常な接戦となり遂に専門部を倒して勝ち、綜合成績九種目中五點を擧げて優勝した。第二回は翌六年六月二十八日本校校庭で展開。本校は九種目中、剣道、柔道、陸上競技、野球、蹴球、水泳に勝ち、縮球、庭球、弓道に敗れたが綜合點六對三で連續優勝した。對一橋専門部定期競技會は僅かに二回で中止し、豪華絢爛たる優勝旗は、兩校學生の手によつて七年、六郷河畔で焼却された。

文化方面では、開校當初から實力を備へた語學部が毎年秋の開校記念行事に外語劇を開いて横濱の人氣を凌つてゐたが、昭和五年十一月二十二日午後五時半から講堂で舉行された外語劇は、先づ西村教授の開會の挨拶に始まり、佛語劇ユーゴーの「ジャン・ヴァルジャン」、英語劇「酒場の夜」支那語劇長與善郎原作「韓信の死」(原作者長與氏が當夜わざわざ觀賞に來られてゐた)、西班牙語の演説、獨逸語劇「アルト ハイデルベルヒ」が上演された。六年は西語劇「罪は若きにあり」獨語劇「ウイリアム テル」佛語劇「アルルの女」英語劇「息子」華語劇「鴻門之會」を上演、毎回學生の熱演に觀衆を魅了し去り盛會を極めつつ最近まで續いてゐる。

七 貿易別科創設

貿易別科創設の事由 不況は人口過剩現象として現はれる。この内地の過剩人口を海外へ移植させ、かねて國威伸展を圖らうとする拓殖計畫が政府によつて執り上げられ、その移植民の現地指導者を養成する教育機關を本校と長崎、山口の三高商に附設することとなり、昭和四年四月、長崎、山口兩校に支那貿易科、本校に南米貿易科が開設された。

この貿易別科は修業年限一ケ年、この短期間に南米移住並に南米貿易に必要な學科を教授し、卒業後は直ちに南米に移住させるか或は南米貿易に従事せしむる方針である。

南米は新興國多く、地域廣大で資源豊富だから將來我國の有望なる輸出市場であり、日本人移住の好適地である。のみならず勞力の不足を補ふために入植者を歓迎してゐたから、政府が南米貿易科を本校に附設したことは商權擴張の點からも人口問題解決の手段としても誠に時宜を得たものであつた。

南米の天地で活動する人材養成といふのだから別科の學科目は自ら異色があり、特に著しい點は、スペイン語(又はポルトガル語)を第一外國語とし、毎週九時間を課し、英、佛語等を第二外國語としたこと及び農業大意と農業實習とが課せられてゐることである。

學科目及每週教授時數

學科目	學期	
	第一學期	第二學期
修身	一	一
商業通論	二	二
簿記	三	三
南米經濟事情	四	四
貿易大意及外國爲替	二	二
貿易實踐	二	二
タイプライティング	二	二
經濟大意	二	二
農業大意	三	三
移植民論	一	一
國際法	一	一
スペイン語	九	九
英語	三	三
農業實習	二	二
合計	三五一 外ニ實習時間	三五

入學資格は一般専門學校と同一である。

定員三十名に對する第一回受験者は二四〇名で、四年四月二十七、八日に入學試験を行ひ三十九名の入學を許可した。

これ等別科生の生徒としての取扱は全く本科生と同一であつて、教官もスペイン語と農業大意の教官以外はすべて本科の教官が出講することとなつてゐる。

南米に横濱高商村建設の意氣 四年四月入學した別科生中三十四名が一ケ年後の五年三月卒業したが、その内の十五名は遠く南米ブラジルに渡航入植して横濱高商村を建設し新天地を開拓して今後の入植者の先驅ともなり廣漠たる南米の原野で活躍すべく五月下旬相率ゐて壯舉に上つた。これ等の一行はブラジル國サンパウロ州アラサツパ川郡アリアンサ植民地に在る力行會の農事練習所に入り、四五年の實際経験を積んだ上、附近の日本人農場の分譲を受けて自作農を経営し、すべて相當な地主として大農經營をなしてゐるものもあつたし、都會へ出て商業を營んでゐるものもあつた。さうして引續いて渡航入植した別科卒業生と協力して所期の目的に邁進してゐた。

八 開校五周年(昭和四年)前後

教官の動靜 開校間もなき大正十四年三月には下田教授が在外研究員として渡歐、續いて西村教授が出發したが、昭和二年五月下田教授歸朝と入れ替りに同月、渡邊教授が渡歐し、三年四月には光井教授が英國へ向け出發した。四年三月になると井上龜三教授が獨逸へ出發した。井止教授は大正十三年開校當時講師として經濟學を講述してゐたがその年の冬、近衛聯隊へ入隊のため一旦辭任、除隊後再び教授として歸つて來られたのである。

が、ここに留學の日が來たのである。光井教授は五年六月歸朝。

井上龜三教授が六年六月歸朝するや九月には井上鏗三教授が渡歐した。井上鏗三教授は九年五月歸朝したが、文部省の在外研究員規程が變更窮屈となり、留學の順に當つてゐた森田教授は十二年まで待たねばならなかつた。

これより先、大正十五年七、八月商工農の専門學校教授十二名から成る實業教育視察團が、滿支方面の教育狀況視察に出かけたが、田尻校長はその團長として、一行を率ゐて七月廿五日横濱發九月四日横濱歸着まで一ヶ月餘に亘り滿支各方面視察を遂げた。この行には支那語教官武田武雄講師が同道し現地見學と同時に通譯の勞をとつた。

昭和四年十一月末には、田尻校長、浦鹽經由で學事視察のため渡歐、獨逸で井上教授、イギリスで光井教授と邂逅、歐米各地を巡遊視察して五年十月二十日に歸朝された。

四年五月には德増教授が全國經濟調查機關聯合會の鮮滿産業視察團に加はり、約一ヶ月朝鮮滿洲を視察した。七年に同じやうな視察團で井上龜三教授が鮮滿を旅行した。

貿易別科新設に伴ひ中南米の實際事情を現地に視察調査する必要は夙くから痛感されてゐたが、七年に至つてその希望が實現し、下田教授は七月九日出發、十二月初旬まで滿五ヶ月間中南米の現地研究を遂げて歸朝した。果然本校に於ける中南米認識は深められ、別科卒業生の渡航希望を高めた。

國際オリンピック大會が七年夏、ロサンジェルスで開催されたが、日本體育界に重きをなす下津屋助教は體操監督として羅馬へ派遣されることとなり、六月三十日横濱を出帆してオリンピックの槍舞臺に選手の活躍を指導監督した。いま同教授が體育の時間に着てゐる胸部に日章旗をつけた紺色の運動着こそ其の時の記念の嗜着である。

應召出征の職員生徒 昭和三年五月濟南事件起り、在留邦人約百名が南軍に慘殺されたので五月八日第三次山東出兵となつた。名古屋第三師團に勳員令が下り、本校に於ても圖書課の増田彌之助氏が豫備陸軍三等主計として召集直ちに濟南へ出發、三年生長野芳朗、二年生三浦鏐一、一年生鈴木富雄の三君が應召した。

六年の滿洲事變には卒業生にも本校にも直接の影響はなかつたが、八年に至り第六回卒業の宮川保君が北滿共匪討伐中に名譽の戦死を遂げ、本校卒業生最初の戦死者を出した。

野外教練と查閱 野外演習と呼ばれた野外教練は大正十四年十二月四、五日高工を假設敵として戸塚藤澤間に行はれたのが抑々の始めで、配屬將校宮城善助少佐が統率した。第一日の四日午前八時四十分本校出發戸塚方面へ進撃、同夜は戸塚附近に宿泊、翌日午後二時歸校した。校庭に於て閱兵式舉行。廣瀬第一旅團長、伊藤第四十九聯隊長、横濱憲兵分隊長等列席。廣瀬旅團長、宮城少佐の講評、田尻校長の訓辭があり萬歳三唱して解散した。爾來毎年野外教練を舉行、或は箱根に或は一の宮に或は富士の裾野に二、三泊の嚴格なる軍隊的生活を送らせた。校長始め教官が交替で同行監督見學に當つた。さうして毎秋第一旅團長の查閱を受けたが昭和七年には、畏

くも朝香宮殿下が第一旅團長として台臨、十一月十七日査閲下調、十二月十五日査閲を賜はられた。

校歌成る 大正十五年開校式舉行の時に暫行的な校歌があつた。作詞者は判らないし果して合唱されたかどうかとも、いま記憶されてゐないが、歌詞は次の通りである。

校 歌 (暫行)

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 一、紅の光の朝夕に
港開きて千歳の
立つはふぎばし見よわれの | 寄せし黒船夢破り
榮いやません横濱に
高等商業學校を |
| 二、富士見丘の三層の
空を涵して四つの海
後は箱根の連山と | 高樓はるか見渡せば
めぐる潮ぞ心地よき
八条芙蓉の峰の影 |
| 三、林の如く帆船の
勇み希望の豊かなる
勵み日夜にたゆまんや | 並ぶや富士の象徴と
健兒幾百一團の
想は廣し海ととも |
| 四、あゝあゝ亜細亞最大の
邦の若き子青春の
見ずや世界の厚生と | 大陸そののさきがけの
理想は高しまた遠く
利用につぐ我が使命 |

この暫行校歌が用ひられなかつたのは、恐らく歌詞が校歌として不十分であつたためであらう。その後、昭和二年頃、學生に校歌の募集をしたけれども、物にならず、昭和四年開校五周年が巡り來るので、御大典奉祝歌の

作者として文名の高かつた正富汪洋氏に歌詞をたのみ、山田耕筈氏に作曲を煩はして出來たのが現在の校歌である。四年十月完成。

校 歌

- 一、氣高く清き富士が嶺よ
富士見が丘のますらをよ
明るく晴れし大空の
廣き心に雄々しくも
立てるは山よわれわれよ
- 二、黒雲ひくぐまよふとも
海原いたく荒ぶとも
鍛へし腕や世を蓋ふ
強き氣をもてしるべぞと
示すは旗よわれわれよ
- 三、ああ横濱に寄せかへる

文化の潮に乗り出でて
他國の岸をうち洗ひ
わがなす事業に驚けと
躍るは瀟々われわれよ

四、おゝ肩あげて唱はまし

雄圖は心に智慧包む
まことの愛に微笑みて
行く行くところ野に市に
薫るは花よわれわれよ

開校五周年記念祭 當時不況の眞只中であつたので緊縮一點張りの五周年記念祭は四年十月二十一日の開校記念日を中心として舉行された。

その勢頭にはすでに寮生を容れてゐた寄宿寮の寮祭が十月十七日に開かれ、(第一回寮祭は三年十月十七日に舉行)各室の飾付は寮生の智慧を絞つて趣向がこらされ、二十日大運動會、十九、二十、二十一の三日間寫眞展覽會、二十二日記念講演會―日銀副總裁深井英伍氏の「金解禁と其準備」慶大教授小泉信三氏の「マルクシズム

とボルシェヴィズム批判」、二十六日近縣中等學校陸上競技會と同柔道大會、十一月三日庭球大會、九日體育會と音楽會、十日近縣中等學校剣道大會、十七日全關東學生卓球大會等が催され、二十三日に外語劇を以て終了したが、平年以上に特別の行事はなかつた。

消費組合設置 教職員及び生徒の共益を目的としその消費經濟の合理化を計らんために井上鎧三教授の指導の下に組織されたもので、昭和五年に設置された。生徒が理事として、教官組合長の監督の下に業務の執行に當り勞働奉仕である。

資本金は、組合員たる教職員が就任し生徒が入學した際に金三圓を出資して活用し、退會卒業の際出資金を返戻する。

事業として、書籍文房具その他の學用品の販賣、食堂の管理等をなし、設立以來原價主義を採用し、且つ市内相模屋百貨店と六分引(後、越前屋と八分引)丸善と五分引の特約販賣を受けてゐたが、昭和十七年四月以降は書籍の定價賣りが書籍組合の嚴守するところとなり又市内商店の割引販賣の特點もなくなり自ら市價販賣となつた。現在は報國國生活部購買班となつてゐるが詳細は後述する。

對高工野球定期戰の復活 兩校の主張、三回戰か一回戰かの主張が相容れずに、四、五の二ヶ年は中絶してゐたが、これはたしかに横濱球界にとつて遺憾のことであり六年に到つて、三回戰による定期戰が復活して俄然兩校の選手は勿論應援團は緊張し横濱球界は色めき立つた。「濱の早慶戰」であり、最も人氣のある對校試合だつ

たからだ。

本校は前年の五年左怪腕投手荒木八郎の入學によつて一段と強味を増し、五年度全國高專大會の覇者四高を迎へて三對二で退け、更に、有名な小川、佐藤、三原、夫馬の巨豪を抱へた早大新人軍と一戦を交へたが、荒木のカーブとドロップに早大の健将も全く手が出せず、三振十三を喰ひ安打僅かに三本を散發したのみで、五人對一で本校のために敗退した。その他帝大とは十五對五の大差で勝ち、中央大學專修大學に對しては新人を配して對戦しながら大きな差を以て退けてゐる等陸目の活躍振りであつた。

二勝二敗の後を受けた復活第五回定期戦は六年五月三十一日その第一回戦を公園球場で交へた。宮崎麗見の中心堅芝生席に叩き込んだ大本壘打等安打十二を數へ、十二人對五で本校が第一回戦を獲得、第二回戦は開港記念日に舉行、これまた六對三で本校勝ち、かくて復活第五回戦はストリートで本校の勝つところとなつた。

復活定期戦のすばらしい人氣は、入場券が僅かに賣出後十八分間で賣盡したことや前賣券がプレミアム付で賣買されたこと等で十分窺はれる。それだけに試合終了のエール「ハイザト高工」と「フレイ高商」が涙を以て應酬される悲愴の場面を展開する。

翌七年も八年も本校が優勝し三年連覇といふ輝しい戦績を残した。八年にはマイクロフォンがネット裏に据えられ、當時野球放送の第一人者松内則三氏によつて、この定期戦の實況が放送された。

因に復活第一定期戦のすばらしい人氣は次の入場者數及び入場料總收入の記録によつて瞭かである。

第一日	入場者總數	一萬五千六百六名
第二日	同	一萬六千六百九十二名
合 計		三萬一千七百九十八名
總收入額		八千三百五十九圓六十錢

九 就 職 状 況

不況の深化 本校は大正十三年四月に開校し昭和二年三月に第一回卒業生百十七名を出したのであるが、大正末期は九年恐慌以來の不況が続いてをり、關東大震災の打撃で、弱り目に祟り目の經濟界に始めての卒業生が行くのだから、本校としてはその就職については頗る心を痛めた。けれども就職運動については十分自信のある田尻校長の献身的轉旋の甲斐があつて、先きにも敍べた如く採用申込員數は就職希望者の二・七八倍、卒業までに十二名を残して就職が決定した。先づ當時の狀勢から言つて最上の成績だつたといつてよく、滑し出しは上々であつた。

然るに不況は漸次深刻になる。昭和二年三月には東京渡邊銀行の破綻を動機として、四月二十一日には十五銀行が突如休業し、金融界一角の崩壊を動機として金融恐慌は全國に波及し四月より九月に至る四ヶ月で休業せる銀行總數三十七行に上つた。四年七月には井上蔵相が金解禁を敢行して、株式は慘落、濱口内閣は緊縮實行豫算

を決定。この時に恰も紐育株式市場の恐慌に端を發した世界的恐慌は、我國の經濟界にも甚しい影響を及ぼし、五年に入るや、金の流出、輸出貿易の不振、物價低落、金利低下等となつて現はれ、一般事業界の不振はいよいよその深刻の度を加へて行つた。更に六年九月には滿洲事變勃發して大陸に於ける市場を喪失するといふ状態で、四年から七年頃に至る時代は方に不況の最も深刻化した時であつて生活難失業苦の聲は巷間に滿ち溢れてゐた。當時文部省の統計に表はれた諸學校の就職率は僅かに平均三、四割に過ぎず、卒業生の就職の機會は塞がれ思想險惡の重大原因をなした。

就職難時代 卒業期の學生が就職に心を奪はれる状態は實に同情の限りである。二年十月二十三日附の「横濱高商新聞」(第四號)の社説には早くも「就職難」の見出しで學生の關心の大きいことを示してゐる。五年四月二十五日付「高商學報」(第二十三號)の二面には「就職戦線」を語ると題して、本科百五十六名昨年より約三十名多く更に別科第一回生三十四名の卒業生を加へたが、事業界は不振を極め緊縮一點張りであり、田尻校長は渡歐不在中であつて、條件が頗る悪い。けれども古館校長代理の熱心なる努力と諸教授の援助により、卒業までに九十八人の決定を見たが、なほ三十四人の未決定者があつたことを報じてゐる。おそらく最大の就職難の年であつたらう。六年一月二十七日付「高商學報」(第二十九號)には三面に初號の大見出しで「目下卒業期迫り就職戦線は展開する」「どんな處でも口さへあれば」「不況の中に決死の運動」と悲痛な活字を列べ「全國大學専門學校の卒業生約三萬は何處へ行く、暗澹たる就職戦線をめぐつて身の振方へ四苦八苦の態である。各學校と

も就職の斡旋、賣り込み運動に狂奔してゐる」と説明をつけ、本校も本科百三十餘名、別科二十六名の卒業生を出す筈だが、幸ひに田尻校長の大活動で、日本銀行三井三菱等の巨大銀行、明治製糖、満鐵、大阪商船の大會社を始め八十有餘の銀行會社から一名乃至三、四名宛の申込があり、すでに三、四名は決定し「案外實行きがよさう」だと報じてゐる。

かくの如く不況のどん底にあり就職に最も困難を極めた時代に、多少明るい報道のあつたのは、卒業式までに就職希望者の八、九割を就職せしめ得たし、八、九月頃までには殆んど全部の就職を實現せしめることが出来た本校當局の自信と實績とを反映するものであらう。

けれども當時の就職がいかに困難であつたかは、申込側の採用條件が孰れも成績優秀、身體強健といふ最上の條件をつけてゐたし、就職試験がまた頗る難關であつて採用の爲めといふよりもむしろ體よく拒絶する爲めのものといふべきだつた。蓋、官廳銀行會社の幹部の机には、それぞれ傳手を求めて集まつた履歴書が山積し、やむを得ず斷る口實の爲めに採用試験をやるといふところも尠くなかつた。「就職戦術」とか「就職の秘訣」等といふ際物的刊行物が、溺れる者藁をも攫むの例への通り盛んに賣れたのもこの頃である。七、八名の採用に千人数の申込者があつた(東京某大新聞社)などといふのもこの時代の風景であつた。

かかる極度の不況、就職難の時代に、卒業一ヶ月後に九割前後(昭和五年は最低で七割四分)の就職決定を見(別表(二三頁)参照)未決定者も夏頃までには殆んど全部が就職したのであるから、「横濱高商には入學難は

あるが就職難は無い」とまで世間から囁はれたのも故ありといへるであらう。かかる結果を擧げることの出来たのは、全く田尻校長の献身的努力の功績であつて、萬人の等しく認めるところである。就職事務を執る庶務課の勞苦もそれだけに一通りでなかつた。

なほ二三頁の表「卒業一ヶ月後ニ於ケル卒業生就職状況」は毎年四月二十日現在を以て文部省へ報告した記録によつて作成したものであるが、昭和八、九年頃までは毎年若干の未就職者を殘してゐるけれども、これは當時三井、三菱、日本銀行等の最有効會社が、學生の勉學を妨げざる趣旨を以て「六社協定」なるものを作り、卒業試験終了までは採用銓衡を一切差し控へることを申合せ、他の銀行會社も多くこれに倣つたため、就職決定時期が著しく遅れ、隨て前述の調査期日には尙若干の未就職者を殘したのであるが、これも七、八月頃までには全部決定し、長く浪人の状態にあるものは皆無であつた。

對界好轉と就職状況 世界的不況はいよいよ激化して來たが、六年六月オーストリアの大銀行クレディット・アンシュタルトの破綻を口火として金融大恐慌が世界的に波及し、英國が金本位を離脱した。我國でも正貨準備が十月末には七億圓を割る状態となり遂に十二月金輸出再禁止の止むなきに立到つた。

七年に入るや一月上海事件が起り二月には事件が擴大する。國內には血盟團事件や五・一五事件が起つて物情騒然たるものがあつた。一般産業界の萎靡沈滞、失業者の激増も著しかつたが農村の疲弊はその極に達して社會思想もまた頗る險惡となつて直接行動によるテロ事件が頻發したのである。

七年の上半期は、財界は全面的に極度の沈滞に陥つてゐたが、久しきに亙る不況の繼續中に合理化が進められて事業界は着々と整理され堅實なる基礎が出来、不況は漸く底をついて緩慢ながらもやや上向を示して來た。殊に貿易は金輸出禁止に因る爲替低落、國際情勢險惡化に備へる準備態勢等によつて、輸出入とも顯著に恢復し、前年に比して輸出二三%、輸入一六%をそれぞれ増加し、貿易關係事業と軍需工業には景氣恢復の兆が現はれて來たが、全事業界はなほ未だ不況状態を脱せず、所謂跛行景氣がここ二、三年続いたのである。オックスワ英帝國會議が開かれてブロッツ経済形成の先驅を作つたのは七年七月から八月にかけてであり、爲替安と生産費安に乗じて世界各國に本邦製品が氾濫し各國の關稅障壁を突破して遂に直接貿易抑壓策を執らなければならぬようになつたのも、九年頃であつた。

跛行景氣とはいへ景氣は上昇して來たから追がの就職難も餘程緩和された。八年四月二十八日の高商學報第四十六號には「不況を一職して就職率九十二パーセント 依然就職界の王者を誇る」といふ見出しが現はれてゐるが卒業までに假令全部の就職決定を見なかつたにせよ、かなり希望のある明るい情勢が反映してゐる。更に翌九年一月二十六日の學報第五十二號には「非常時の波に乗つて採用申込殺到 就職難今いづこ」といふやうな景氣のよい見出しで大會社の採用申込協定（所謂六社協定）が自然消滅して申込は早まり、各會社からの申込殺到で、庶務課はその整理に忙殺されてゐると報告され、事實卒業までに殆んど全部の決定を見てゐるが一月中にすでに六十名ばかりは就職が決定した。まさに「春は朗らか」であつた。

本校の學生も當時の思潮に影響され、社會問題の研究に没頭したことは當時の學報の論調や收載記事によつて窺ふことが出来るけれども、極端に趨るものなく、自制して實踐運動へ誘惑されたものは殆んどなかつたのは、恒に穩健中正を尚び、時流に乗る無批判無反省の盲目的行動を嚴に戒めてゐた學校當局の訓育の徹底と、學生自身の批判的研究態度堅持との結果であつたことは疑ひないところであり、時代思潮に掉しながらもこれをよく乗り切つて決して押し流されず、毅然たる姿勢を把持し得たことは、蓋し誇るに足りるであらう。

本校の直接訓育機關は生徒課であつて創立當初から昭和三年までは、官制上、教授中から生徒監が補職されてゐた。第一次生徒監は栗林教授、生徒監心得に小幡助教が任せられ、その後、岩本、藤田、下田教授が相次で生徒監の任にあつた。昭和三年十月二十九日官制の改正により、生徒監の補職は廢され生徒主事及生徒主事補が任せられることとなり、内山教授が生徒主事兼教授に、小谷助教が生徒主事補、兼助教に任せられた。その後内山主事の轉任に伴ひ八年十一月以降、岡野教授が生徒主事となり、又下田、藤田、南種、不二門教授が兼任生徒主事となつた。岡野主事轉任により十四年以降は黒澤教授が主事となつた。主事補は小谷氏の後、九年より十三年まで富成助教、十四年より十七年轉任まで武市助教が任せられた。内山主事及岡野主事初期時代が最も思想問題險惡化し世相甚だ面白からぬ時であつて、生徒主事は事實上、思想主事として文部省、檢察當局等の對策に呼應して、思想對策に異常な苦心を拂はれたのである。

社會教育へ進出 文部省は思想對策の一つとして且つ専門教育の社會的開放の目的を以て昭和四年社會教育局

を新設したが、これより先き昭和二年頃から大學専門學校の教官を動員して各地に成人教育講座を開設した。

「國民教育を了へて實務に従事せらるるものに對し須要なる知識を、なるべく平易に講述して國民生活の實情に適せしめん」とする主旨を以て早くも昭和二年十月には文部省より本校に成人講座開設が委嘱された。

二年十月三十一日開講、講堂は南吉田小學校で講義時間は毎夕六時半から九時までであつた。

講習要目及講師

(イ) 公民科

- | | |
|-----------|-----------|
| 一、縣政 | 知事 池田 宏 |
| 二、市政 | 市長 有吉 忠一 |
| 三、日常生活と法律 | 教授 不二門 龍親 |

(ロ) 商業科

- | | |
|-----------------------|----------|
| 一、横濱港の重要輸出品と其相手國の經濟事情 | 教授 下田 龍佐 |
| 二、金融と外國爲替 | 講師 森田 優三 |

(ハ) 財政科

- | | |
|-------------------|----------|
| 一、普通選舉の實施と國民の財政知識 | 講師 岡野 鑑記 |
| 二、地租と委譲 | |

成人講座は聴講無料で資格は男子二十歳、女子十八歳以上にして現に在學中にあらざる者は何人でも差支なく聴講が出来、二百餘名の申込があつて盛會だつた。

成人講座に併んで、市民の精神文化涵養のため市民講座が第二隣保館で十月中旬から十二月中旬まで開かれ、本校からは岩本教授が商業概論、不二門教授が法學通論、徳増教授が經濟原論を講述し、高工教授も機械工業、化學工業を講じた。

成人講座は開催當時の社會事情を反映してその講義内容を定めるから、昭和二年以降隔年委嘱を受け開講した講座の題目を顧みるとその時代のトピックスを識ることが出来る。試みに四年十一月四日から開講された成人講座の題目を掲げると次の如くである。

四日(月)	失業対策の種々相	徳増	教授
五日(火)	緊縮、解禁、好況	森田	教授
六日(水)	國債整理問題	岡野	教授
七日(木)	フアシストについて	渡邊	教授
八日(金)	消費經濟の合理化	井上	教授
九日(土)	新民事訴訟法について	不二門	教授
七年十二月九日から四日間横濱貿易新報講堂を會場とした公民(成人が改稱)講座の題目は			
一、現代經濟生活の特質	徳増	教授	
二、日滿の經濟諸關係の現在と將來	井上	教授	
三、非常時財政の解剖と批判	岡野	教授	
四、最近我國の外國爲替事情	森田	教授	

であつて非常時局をよく反映してゐる。

十一 開校十周年記念式

開校十年間の回顧 本校創立後三年にして世は大正から昭和に代つた。この間、大正天皇御大葬の哀しみ。諒闇、今上天皇御即位の大典と、國民は國家の大儀を送り迎へまつた。社會的には世界不況の深刻化による經濟的脅威に疊され失業苦、就職難と思想險惡化に悩まされた。更に上海事件の起るあり、滿洲事變の勃發あり、一方には盟邦滿洲國が建設されるとともに他方にはこれを契機として國際聯盟を脱退するなど國際關係はいよいよ緊迫の度を加へ來つて所謂準戰態勢を執らざるを得なくなつた。

創立匆々の本校としては、これ等内外の多事多端は方に大きな試煉であつた。然るに幸なる哉、田尻校長の献身的創業の努力の下、教職員和衷協力し、更に優秀なる素質の學生が全國より來り學んで、業を卒へるや、社會各方面に活躍して國家有爲の人材として母校の榮譽を昂めるありて、本校の眞價世の認むるところとなる。開校十ケ年、それは基礎建設期でもあり搖籃期でもあるが、この建設期に當りて社會不況の厳しき試煉に逢遭したるは却て愈々勇猛心を奮ひ立たせて將來の發展大成に培ふところとなれるものと信じ、寧ろ本校にとりては天與の恵みであつた。

十年鏖骨彫心の學園を記念すべき開校十周年記念式と記念祭とが、昭和九年十月中旬を期して舉行された。

十周年記念行事日程

十月十四日(日)

一、同窓會主催物故者慰靈祭

午後一時三十分(本校講堂)

一、同窓會大會

午後三時三十分(開港記念會館)

十月十七日(水)

一、近府縣中等學校柔道大會

午前八時三十分(本校道場)

十月廿一日(日)

一、記念式

午前十時(本校講堂)

一、表彰式

午前十一時三十分(同上)

一、名士講演會

午後一時(同上)

演題及講師

國際關係の推移と我國民の覺悟 特命全權大使 出淵 勝次氏

日本民族の進出に就て 衆議院議員 安達 謙藏氏

一、提灯行列

午後五時(雨天順延)

一、三曲大演奏會

午後五時三十分(開港記念會館)

一、露糸經濟資料文獻展觀

十四日—二十一日 (調查部閱覽室)

十月廿二日(月)

一、映畫大會

午後六時(本校講堂)

十月廿三日(火)
廿四日(水)
廿五日(木)

一、第三同校內體育大會

各午前八時(本校々々庭
武道場體育館)

十月廿八日(日)

一、近府縣中等學校劍道大會

午前八時(本校道場)

十一月三日(土)
四日(日)

一、近府縣中等學校蹴球大會

各午前九時(本校々々庭)

十一月四日(日)
五日(月)

一、近府縣中等學校蹴球大會

各午前九時(本校體育館)

十一月十日(土)

一、祝賀音樂大演奏會

午後一時三十分（開港記念會館）

十一月十一日（日）

一、全關東卓球個人選手權大會

午前九時（本校體育館）

一、近府縣中等學校陸上競技大會

午前八時（本校競技場）

十一月十七日（土）

一、室內體育大會

午後零時三十分（本校體育館）

十一月十八日（日）

一、近府縣中等學校庭球大會

午前八時（本校コート）

一、近府縣中等學校弓道大會

午前八時三十分（本校弓道場）

十二月二日（土）

一、外語劇大會

各午後五時（本校講堂）

記念式典 菊薫る秋晴の十月二十一日感激と歡喜に包まれて輝く開校十周年記念式典が本校講堂に催された。定刻、五百の在校生と百餘名の同窓會員で式場の階上階下がいつぱいになる。聽て教職員來賓が入場する。次で校長が先導して松田文部大臣が臨場され、式典が開始された。

橫濱高等
商業學校

開校十周年記念式次第

昭和九年十月三十一日午前十時

開式

- 一 君が代合唱
- 一 校長式辭
- 一 文部大臣祝辭
- 一 來賓祝辭
- 一 卒業生總代祝辭
- 一 生徒總代祝辭
- 一 校歌合唱
- 閉式

十年勤続者表彰式

開 式

- 一 校長表彰狀並記念品授與
- 一 同窓會記念品贈呈
- 一 同窓會代表挨拶
- 一 勤続者代表謝辭

閉 式

田尻校長の式辭(要旨)

私が本校校長として赴任したのは大正十二年十一月末であつた。當時横濱は焦土と化し現在のこの場所から見ると一面の饒野原であつた。自分はこれを見て横濱復興のために努力しなければならぬと感じた。大正十三年四月開校し横濱高工のバラツクの一部を借受け、そこで授業をする有様であつたが、一年経て現在の場所へ移り、生徒控室と武道場を教場として使つた。その三年目に本館が出来上つた。今日の市の復興と校舎の建築とを見て誠に今昔の感に堪へぬものがある。

さて本校の教育方針は信頼するに足る人物を養成することにある。幸ひ現在まで八回千百人の卒業生を出し、本校の教育方針によつて孰れも社會各方面で大いに活躍してゐることは欣快とするところである。又貿易別科の卒業生も海外において活躍してゐる。本日は意義ある十周年記念日に際し文部大臣閣下を始め縣市の閣下各位の御臨場を仰ぎ誠に感謝に堪へぬところであるが、我々は今後とも自負し協力一致して過去十年の光輝ある歴史を傷けぬように行きたい。

文 部 大 臣 祝 辭

横濱高等商業學校へ開校十周年ヲ迎へテ茲ニ其ノ記念式ヲ舉行セラルルニ當リ一言祝辭ヲ述べルハ余ノ欣快トスルトコロナリ

惟フニ本校ハ大正十二年恰モ我カ産業貿易ノ大ニ伸長ヲ要スルノ秋ニ際シ我カ國貿易港トシテ權要ノ地位ヲ占ムル横濱ノ地ヲトシテ創立セラレ爾來漸々トシテ發展向上ノ一路ヲ辿ルコト正ニ十年此ノ間卒業生ヲ出スコト千有餘人校運今日、隆昌ヲ致セルハ慶賀ニ堪ヘズ 抑々十年ハ事物更新ノ一轉機ナリサレバ此ノ機會ニ於テ既往ノ成績ヲ顧ミ式典ヲ舉ゲテ其ノ慶ヲ共ニシ更ニ人心ヲ新ニシテ一段ノ躍進ヲ將來ニ期スルハ誠ニ意義深キ好舉ト謂フヘシ 今ヤ内外事滋クシテ學國緊張ヲ要スルノ時機ニ際會ス職員各位生徒諸子ハ其ノ責任ノ容易ナラサルヲ自覺シ今日ノ慶典ヲ契機トシテ奮起勵精益々其ノ使命ノ達成ニ邁進セラレンコトヲ望ム

昭和九年十月二十一日

文部大臣 松 田 源 治

東京商科大學長佐野善作氏祝辭

閣下竝ニ諸君

本日此處ニ本校創立第十周年記念祝典ニ參列スルノ榮ヲ得祝辭ヲ呈シマスルコトハ私ノ欣幸トスル所デ御座イマス。

創立記念式ハ近年一ノ流行事ノ如クニナリマシテ官公署ヲ始メトシ協會學校并社病院會社組合商店果テハ劇場娛樂場ノ類ニ至ルマデ其創立後或年數ヲ經マスト記念式ヲ舉ゲ御祝ヲ致シマス。流行事デアリマスカラ記念式ハ必ズシモ有意義有價値ノモノノミニ限ラズ中ニハ至ツテ詰ラズモノモアル様デアリマス。勿論其ノ之ヲ行ヒマス當事者ニ取リマシテハ主觀的ニ有價値デアリ時トシテハ廣告宣傳ノ手段タルニトモアル様デアリマスガ之ヲ社會カラ見テ客觀的ニ果シテ祝賀ヲスベキ價値アリマ否ヤハ其ノ個々ノ場合ニ就テ判斷スルノ外アリマセン。

ソレデ今本校ノ創立十周年記念式ニ就テデアリマスガ私ハ之ニ甚ダ大ナル價値アルコトヲ認ムル者デアリマス。仍テ其ノ然

ル所以ヲ述ベマシテ以テ今日ノ祝辭ト致シタイト思フノデアリマス。

抑々學校ノ記念式ノ價值ハ之ヲ其現實ノ成績ニ照シテ判斷スルカ又將來或業績ヲ成シ遂ゲ得ベキ力ノ有無多少ニヨリテ判斷スルカ或ハ又右二者双方ニ之ヲ求ムルカデアリマスガ創立十年ト云フガ如キ日尙淺キモノニアリマシテハ之ヲ現實ノ成績ニ照スルハ無理デアリマシテ將來或業績ヲ得ベキ力ノ存在ニ依テ決メルヨリ外ハナイノデアリマス。而テ私ハ本校ノ場合ニ於テ其力ノ存在ヲ本校教育ノ方針ト教職員諸氏ノ努力トニ認ムル者デアリマス。本校ノ教育方針ノ寔ニ雄偉ニシテ而カモ克ク時勢ニ適合シ教職員諸氏ノ熱誠努力ノ眞ニ尋常ナラザルコトハ本校ヲ識ル吾々ノ齊シク認ムル所デアリマシテ是レガ變テ異常ナル業績トシテ現ハレ來ルベキハマタ吾々ノ齊シク期待スル所デアリマス。

本校ノ教育方針ノ如何ナルモノナルヤハ先刻支那ノ頂戴シマシタ「本校要覽」トイフ刷物ノ中ノ「本校施設ノ大要」ト題スル部分ニ掲グル所デアリマスガ之ヲ要約シマスレバ「本校ハ夙ニ現代教育ノ最大缺陷ガ德育ノ不振ニ在ルコトヲ認メ特ニ人格ノ陶冶ニ重キヲ置キ實業家トシテ吾人ノ信賴スルニ足ルベキ人物ヲ養成スルコトヲ目標トス」ト云フノデアリマス。而シテ其ノ「實業家トシテ吾人ノ信賴スルニ足ルベキ人物」トハ如何ナル人物ヲ意味スルヤト申シマスルト其レハ普通世間デイレフ所ヨリモズツト輪郭ノ大キイモノデアリマシテ管ニ取引上ノ約束ヲ守ルトカ信用ヲ重ンズルトカ物堅イトカイフ棟ナ人物タルニ止マラズシテ更ニ高邁ナ器宇宏大ナ大乗ノ人ナ格デアツテ克ク實業家ノ社會的使命ヲ理解シ其本分ヲ盡シ得ベキ實力ト意思ト勇氣トヲ有スル所ノ信賴スベキ人物トイフノデアリマス。即チ本校ノ學徒ニ對シテ要求スル所ハ或學者ノ實業ヲ借リテ申セバ「人ハ實業家タル前ニ先ヅ社會人タルベク經濟人タル前ニ倫理人タルベシ」トイフノデアリマシテ本校ハ斯ル人物ヲ養成シテ實業界ニ送ルコトヲ教育ノ本旨トシテ居リソレニ向ツテ校長以下全職員力不斷ニ精進シツツアルノデアリマス。

御承知ノ通り我國資本主義産業組織ノ下ニオケル自由競争制度ハ幾多ノ害惡ヲ生ミ今ヤ殆ンド行キ詰ツテ窮極ニ達シタルカノ如キ觀ヲ呈シテ居リマスガソレハ組織制度ノ罪ト云フヨリモ寧ロ人ノ罪デアツテ畢竟實業界ニ其人ヲ缺キ實業家ノ社會的使命ヲ理解セル所謂信賴スルニ足ルベキ人物ニ乏シイ結果デアリマス。故ニ此窮極ヲ打開シ我經濟組織ヲ支持シ向上セシムルノ途ハ唯ダ實業ニ從事スル者ヲシテ克ク其社會的使命ヲ覺ラシメ其本分ヲ盡シシムルヨリ外アリマセン。即チカカル人物ノ養成ハ寔ニ刻下ノ急務デアリマシテ其養成ニ努ムルコトハ眞ニ急キ事業デアリマス。

今ヤ我商業教育ハ此問題ニ直面シテ從來ノ如ク徒ラニ實際界ニ阿諛追隨シツツ其ノ當面ノ仕事ヲ風習仕來リナドノ末ニ役ニ立ツ事務家ヲ養成スルヲ以テ能事トセズ又單ニ物堅キ保守的使用人ヲ養成スルヲ以テ足レトセズ一步社會ニ先ヅ一頭地高キニ身ヲ置イテ世ヲ指導シ其風紀ノ肅正腐敗ノ淨化ニ當リ得ベキ開士ヲ養成スルヲ以テ目的トスルニ至リマシタ。而テコノ方針ニヨリ活動ヲ商業教育ノ革新運動又ハ倫理運動ト申シマス。

然リ而テ私ハ今本校ノ田尻校長ノ人格ニ於テコノ倫理運動ニオケル最も有力ナルチャムビヨノ一人ヲ見出し其ノ主宰セララル本校ガ此運動ノ一大道場デアリ一大陣營デアルコトヲ知り又今日マデ社會ニ送り出セル一千有餘ノ卒業生ガ此運動ノ前線ニ立チテ奮闘シツツアルヲ認メ尙現在及將來ニオケル本校ノ學生生徒ガ何レモ此運動ニ參加スベキコトヲ期待シマシテ本校創立第十周年記念式ノ大ニ價值アルコトヲ認識スル次第デアリマス。

私カニ思ヒマスノニ田尻校長始メ本校職員諸氏ハ此今日ノ記念式ヲ舉行セラレソレニ依テ其ノ平素努力セラレツツアル所ノ教育運動ノタメニ内ニ向ツテハ益々人ノ和ヲ闡リ結束ヲ固クシ外ニ向ツテハ其意義精神ヲ天下ニ宣明シ之ヲ契機トシテ以テ大ニ爲ストコアラントノ意圖ヲ有セララルノデアリマセウ。果シテ然リト致シマシタラバ此記念式典ハ主觀的ニモ亦客觀的ニモ寔ニ意義アリ價值アルモノト謂ハナケレバナリマセン。私ハ今ヲ距ル八年前大正十五年本月日本本校開校式ニ臨ミマシテ此壇上カラ祝辭ヲ述ベマスルト共ニ其處ニ列席セラレタル横濱市有力者諸氏ニ對シ失禮デハアリマシタガ聊カ苦言ヲ提シ商業教育ニ於テ横濱市ノ當時稍々立遅レタコトヲ指摘シテ御注意申シタコトヲ記憶致シテ居リマス。然ルニ今日ハ如何デアリマス。横濱市ニハ立派ナ高等商業ガ二校モアリ而カモ本校ノ如キ倫理運動ノ陣頭ニ立チ大ニ實際界ヲ革新セントシツツアルモノアルヲ見マシテ實ニ今昔ノ感ニ堪ヘマセン。私ハ日本本校ノ記念式ノ價值ヲ十分認識致シマシテ田尻校長始メ本校教職員諸氏ニ對シテ深甚ノ敬意ヲ拂フト同時ニ邦家ノタメ又横濱市ノタメ衷心ヨリ本校ノ前途ヲ祝福セント欲スル者デ御座イマス。甚ダ不敏ニ長話シテ致シマシタガ之ヲ以テ祝辭ト致シマス。

なほこのほかに横山知事大西市長有吉商工會議所會頭ボイスアメリカ總領事渡邊名古屋高商校長の祝辭があつた。

十年勤績者表彰式 開校十年記念式典終了後引續いて十年勤績者表彰式に移り、校長教授書記守衛使丁二十二氏に對し學校より表彰狀と記念品授與、同窓會より記念品の贈呈があつた。

表彰狀

官職氏

名

本校創立以來精勵恪勤克ク其ノ職ニ任シ勤績茲ニ十年功績勲カラス仍テ之ヲ表彰ス

昭和九年十月二十一日

横濱高等商業學校長正四位勲二等 田 尻 常 雄

十年勤績者

氏 名

任命年月日

在職年月數

校長 田 尻 常 雄	大正二、二、一八	十年十ヶ月
教授 下 田 禮 佐	同 一三、一、二二	十年九ヶ月
同 古 館 市 太 郎	同 一三、三、一五	十年七ヶ月
同 不 二 門 龍 觀	同 一三、四、二一	十年六ヶ月

同 河 村 重 治 郎	同 一三、五、一七	十年五ヶ月
同 德 増 榮 太 郎	同 一三、八、三一	十年一ヶ月半
同 時 田 清	同 一三、八、三一	十年一ヶ月半
同 波 邊 輝 一	同 一三、二、二九	十年七ヶ月半
同 小 幡 孫 二	同 一三、四、二	十年六ヶ月半
同 下 津 屋 俊 夫	同 一三、三、三一	十年六ヶ月半
講師 小 白 寛	同 一三、三、三一	十年六ヶ月半
同 山 崎 與 右 衛 門	同 一三、四、七	十年六ヶ月
書記 齋 藤 照 之 助	同 一三、一、二三	十年九ヶ月
同 矢 島 照	同 一三、三、三一	十年六ヶ月半
同 吉 居 德 治	同 一三、四、一一	十年六ヶ月
雇 植 岡 金 次 郎	同 一三、三、三一	十年六ヶ月半
同 櫻 井 巳 之 吉	同 一三、四、一〇	十年六ヶ月
守衛 鈴 木 二 郎	同 一三、六、八	十年四ヶ月半
小使 澁 谷 省 三 郎	同 一三、五、一四	十年五ヶ月

同	手	東	松	太	郎	同	一三、四、一	十年六ヶ月半
同	關	谷	な	か	同	一三、四、三〇	十年五ヶ月半	
雇	小	川	ゆ	き	同	一三、一一、五	九年十一ヶ月半	

午後一時から本校講堂に於て次の如き名士講演があり頗る盛會であつた。

國際關係の推移と我國民の覺悟

出 淵 勝 次氏

日本民族の進出に就て

安 達 謙 藏氏

調査部閲覧室には調査部の蒐集保管してゐる蠟糸經濟資料二百五十四點を整理展觀して一般の興味を惹いた。夜は開港記念會館に三曲大演奏會を催し、學生の提灯行列が、學校正門から伊勢佐木町櫻木町驛前紅葉坂の順路を経て伊勢山太神宮に參拜萬歳を三唱して野毛、日之出町前里町を歸路にとつて學校へ歸着し、學校を擧げて祝賀に徹した。

記念祭の夜のだよめきを偲ばせる記事を「學報第五十八號」から轉載しておかう。

丘上に月微笑む歡喜の渦卷

舞へや歌へや若人の意氣

秋の夕暮、丘の白堊も金色に映えプラタナスもその長い影を地上に落す頃、お祝の赤飯に腹を拵へたカレツヂヤンは晩秋の

變さも物かは、元氣一杯で不二見ヶ丘を街道に進出して行つた。各々大きな船玉のやうなお提灯を高くかかげて「高商よいとこ、十とせの祝よ」の連發だ。丘の上り口の巡査がにこにこしながら「學生諸君大いにやるべし」。これより整然と四列になつて前里町より伊勢佐木町まで乗りこんで行く……「高商々々横濱高商は野球が強い……」街の兄貴が盛んに應援する。伊勢佐木町に入れば折からの雜間もサツと二つに割れて沿岸に垣を築いた群衆が盛んな拍手を送る「高商頑張れ」……提灯の光りもまばらになつて丘を登る。月芽えて白堊が夢の城の如く輝いてゐる。月光に満ちた校庭に師屋寮が友待畑にボツンと突立つてゐる。今宵一夜は裸になつて踊り狂ふ意氣だ。さあ踊れよ十とせの祝ひだ。手拍子足拍子恰好よろしく太鼓に合せてドドンと踊りぐるぐるまはる。秋の夜空は全く澄んで月も微笑む狂喜のカレツヂヤン、天にも舞けとさんざめき大地も動けと踊り狂ふ。高商よいとこ、十とせの祝ひよ。

慰靈祭 記念式典に先立ち十月十四日午後一時半から本校講堂に於て、物故教職員、同窓會員、在學生七十六名の慰靈祭が、神式により嚴肅に執り行はれた。遺族、教職員、同窓會員、生徒參列、校長祭文を奏して物故者の冥福を祈つた。物故者は教職員では生徒主事補兼助教小谷憲一郎氏、囑託湯川和平氏、雇員鈴木茂三氏の三氏、同窓會員千ヶ崎博君等四十氏、在學生三十三氏（寫眞參照）であつた。

祭 文

維時昭和九年十月十四日横濱高等商業學校同窓會員相寄り茲ニ清境ヲ設ケテ物故教職員同窓會員並ニ生徒諸君ノ靈ヲ祀ル
本校創立以來正二十春秋其ノ間ニ永訣シタルモノハ職員ニ於テ生徒主事補兼助教小谷憲一郎君、囑託湯川和平君、雇員鈴木茂三君、同窓會員ニ於テ千ヶ崎博君外三十九人、生徒ニテ鶴岡立助君外三十二人即ち合セテ七十六人ヲ算ス
爾ルニ物故職員ハ共ニ熱誠職ニ盡シ私ヲ棄テテ公ニ就キ病體ノ身ニ迫ルヲ知ラズ終ニ身ヲ以テ職ニ殉シタル者ニシテ實ニ公務員ノ典型タルニ恥ヂズ。物故同窓會員ハ皆學ヲ本校ニ修メ盛雪ノ功空シカラズシテ已ニ各々職ニ就キ之ヨリソノ體得セル人

格識見ヲ以テ之ヲ小ニシテハ一家ノ爲メ大ニシテハ國家社會ノ爲メニ大ニ貢獻スルトコアラントシタル者ナリ闕ラズモ不幸中道ニシテ或ハ二豎ニ殛サレ又ハ不慮ノ災厄ニ近ク而モ其ノ辭ヲ問ハバ皆而立ニ達セズ痛想歎シ堪ヘム。更ニ故宮川保君ニ至リテハ滿洲ニ於テ匪賊討伐ノ戰戰ニ殛レタル者ニシテ「死以テ國恩ニ報ジタルモノナリ」又在學中ニ死去シタル三十餘名ノ生徒諸君ハ志ヲ立テテ兩親ノ膝下ヲ辭シ本校入學ノ榮冠ヲ贏テ得タル年少ノ英才ナリ然ルニ天道此人ヲ嫉視シ未だ弱冠ニシテ夭折ス之ヲ嘆惜スル者豈獨リ兩親遺族ノミト言ハンヤ想フニ方今國際間ノ經濟戰ハ日ニ熾烈ヲ加ヘ國家ノ英才ヲ待望スルコト今日ヨリ急ナルハナシ此秋ニ當リテ七十有餘ノ英魂ヲ祀ル吾人ノ感慨轉タ深シ然リト雖モ人各々命數アリ徒ラニ歸ラザルヲ追想シテ止マザルガ如キハ男子ノ本懷ニアラズ我等ハ協力一致奮發一番以テ不二見ヶ丘學園ノ本領ヲ發揮シテ亡友ノ志ヲ達成セムコトヲ期ス

今茲ニ本校開校十周年ヲ迎フルニ方リ慰靈祭ヲ催シ聊カ在天ノ英靈ヲ慰メントス希クハ來リ饗ケヨ

横濱高等商業學校長 田 尻 常 雄
同窓會長

記念行事 豪華版の一つは十一月十日開港記念會館を會場に充てた祝賀大演奏會である。東京音樂學校生徒三百十名の管絃樂團と合唱團といふ大がかりのものでつた。本校音樂部員の「校歌」「祝歌」について最初に演奏されたのは管絃樂ゴールドマルク作曲の樂劇「サランタラ姫」序曲。次でシューマンの「夢」メンデルスゾーンの「おお雲雀」の混成合唱。井口基成氏のピアノ獨奏。管絃樂「アルルの女」第二組曲。マリア・トル女史のソプラノ獨唱等々文字通り音樂界第一人者の妙技に聴衆はただ陶然たるのみであつた。

十二月一日二日の兩日、金港名物と嘶される外語劇大會が本校講堂で開催された。十周年記念行事といふのでこの外語劇大會を街頭に進出させようといふ語學部員の張切り方だつたが、會場はつましく本校内としたが、

語學研鑽の汗を注いで築き上げた金字塔だけに、エキゾティックな夢幻境を現出して記念祭掉尾の幕を飾つた。スペイン語劇「デメトリオ・モンターノ」の綜合的迫力。支那語劇「五祖と六祖」の坊主ばかりのユーモラスな場面、英語劇の「ヴェニス商人」、獨語劇の「世襲山番人」、佛語劇「スカパンの詭計」孰れも學生の演技としての目標を立派にやつて退け頗る好評であつた。

約二ヶ月に亘る記念行事は上掲プログラムの示すやうに本校主催の各種體育競技會があり、その間には學友會各部の秋のスポーツ行事も織込まれて内容豊富に十分十周年の記念祝賀を果した。

記念事業 一、圖書目錄作成 學生の圖書館藏書の利用度は著しく高く、しかも年々その率が上昇の傾向を辿り(別表「閲覧狀況」参照)藏書數も逐年増加して來るので、圖書利用者の便宜のためには圖書目錄作成が急務であつた。しかし之には相當大きな費用が要るので實現は容易でない。ここに於て十周年記念事業の一つとして圖書目錄作成の件が執上げられ、八年末から準備に着手、分類整理、原稿の完成を急いで九月下旬漸く脱稿、十年十月に至つて印刷完了した。全卷六百三十頁、約一萬四千冊の和漢洋藏書を收載してゐる。この目錄は關係諸學校諸官衙圖書館に寄贈した。

二、プール建設 水泳部は昭和五年に學友會の一部として創設されたが自校プールを持たないために部員は非常に不便不利であつたし地方高商でも夙くから自校プールを持つものが少くなかつたので、プール建設が記念事業の一つとして執り上げられた。記念式準備に着手した九年六月頃から、學友會各部幹事評議員より成る實行委

序文及收載論稿の目次、次の如し。

序

回顧すれば十年前、横濱復興に魁して本校は灰燼の港都に創立されたのであるから、その使命の殊更に重きを痛感し、驚馬に鞭ちつつ日夜變化に専念、然かもなほ足らざらんことを怖れた。而てここに年を開する十年、本校が聊かなりとも復興の演に寄與するところありとすれば本校開設の趣旨の一斑は達せられたと言ふべき歟。

創設以來、本校は「信頼し得る人間を作る」ことを以て校是とし、大家族主義を標榜して協力一致、只管學問の向上、教育の徹底に邁進して來た。斯くて不斷の研鑽は穩健清新の學風となり、不撓の變化は克く醇朴敦厚の校風を興し得たことは洵に悦びに堪へないところである。

今、開校十周年記念の祝典を舉ぐるに當り、記念論文集刊行の企てあるや、全教官が各自の蘊蓄を傾けその專攻するところを發表して一大論文集の編纂せられたるは、偏へに本校教官の平素眞摯なる篤學研究の結晶に外ならない。是れ予の最も欣快とするところである。

一言以て序とする次第である。

昭和九年十月上浣

田尻 常雄

目次

第一部

白人の人口減少とその影響
法律行爲の解釋
商品保存問題
海上保險に於ける填補の種類

下田 禮佐
大竹 綠
南 種康
岩本 啓治

人間の自然的人間學的性格と「計畫學問」の問題

燃料問題に對する一考察

貸借對照表論の推移と標準貸借對照表

勢力價值學説

——國民社會主義經濟學の一論——

權利行使の方式

英國の減債基金制度

本邦移植民の情勢と其將來の發展策

事業管理への補助としての標準減價相の觀察

我國製紙業に於ける産業統制

——特に洋紙の抄造業に就て——

イギリス重商主義學説と其社會的背景

價格分散と景氣變動

不二門 龍親
岡野 鑑記
福田 要
小宮山 敬保
井上 龜三
德増 榮太郎
森田 優三

第二部

マヤの考古學から見たアトランティダ大陸の假説

コーヘンの論理學に於ける體系概念

ドイツ人の惡人

Selig Letter の書き方に就て

Otto Ludwigs Meisterwerke

新渡戸博士著「武士道」の研究

取殘された問題

岡田 峻
富成 喜馬平
伊東 彌
光井 武八郎
山中 靜三
西村 綱
河村 重治郎

本科入學志願者及入學者累年比較表

募集年次		種別	
		中學	商業
大正十三年度	七三八	二九〇	一、〇二八
大正十四年度	七四九	三九四	一、四四三
大正十五年度	六一一	三三六	九四七
昭和二年度	七二三	二九七	一、〇二〇
昭和三年度	七〇三	三四五	一、〇四八
昭和四年度	九二五	三四八	一、二七三
昭和五年度	七七五	二七三	一、〇四八
昭和六年度	七〇八	二二三	九三一
昭和七年度	七九三	二二七	一、〇二〇
昭和八年度	九〇一	二七八	一、一七九
昭和九年度	八八一	二五五	一、一三六
		中學	商業
	八四	五〇	一三四
	一〇二	五二	一五四
	九四	五七	一五一
	一〇七	七〇	一七七
	八六	五九	一四五
	八三	六二	一四五
	一〇九	五〇	一五九
	九六	五四	一五〇
	一〇四	五四	一五八
	一〇一	五一	一五二
	一六	四九	一六五

貿易別科入學志願者及入學者累年比較表

募集年次	種別	入學志願者			入學者		
		中學	商業	計	中學	商業	計
昭和四年度		二〇五	三五	二四〇	三五	四	三九
昭和五年度		七二	二六	九八	二九	一一	四〇
昭和六年度		三七	六	四三	二三	五	二七
昭和七年度		三四	七	四一	二三	五	二八
昭和八年度		五〇	七	五七	二九	四	三三
昭和九年度		八三	一四	九七	二九	六	三五

本科生徒原籍調

(昭和九年十月一日現在)

原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數
北海道	一	青森	二	和歌山	三
東北	六	山形	七	德島	三
関東	三	福島	八	香川	二
中部	五	茨城	六	愛媛	五
近畿	七	奈良	七	福岡	七
四国	八	高知	四	佐賀	四
九州	二	山口	六	熊本	一
長門	一	島根	一	鹿兒島	二
新加坡	一	馬六甲	一	計	四六四
暹羅	一	爪哇	一		
荷屬東印度	一	計	四六四		

貿易別科生徒原籍調

(昭和九年十月一日現在)

原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數
北海道	一	山形	一	和歌山	一
東北	一	福島	一	德島	一
関東	一	茨城	一	香川	一
中部	一	奈良	一	愛媛	一
近畿	一	高知	一	福岡	一
四国	一	山口	一	佐賀	一
九州	一	鹿兒島	一	熊本	一
計	三	計	三	計	三

(昭和九年十月一日現在)

計		死	南米渡航者	外國留學者	入營者	上級學校入學者	自家營業者	個人商店員	新聞雜誌社員	銀行會社員	學校教員	官公吏	種別	科別及同次
二七	五七					八六	一	七五	八七	第一回				本
一三〇	三六					一三	八三	八五	五七	第二回				
二三	一九					一二	七二	八五	六九	第三回				
一五六	七六	一				一三	八一	九七	七五	第四回				
一三三	五一					四六	六	九三	七一	第五回				
一四四	五五	一一				一五	八五	七九	七五	第六回				科
一四四	二		△二	二	八	一二	一〇	九九	三九	第七回				
四四					一〇	一一	一〇	一〇九	四	第八回				
三四	一六	二			三		一五	六		第一回			貿易別科	
一九	一二				五		八	三		第二回				
二二	七				三	一	八	三		第三回				
二七	四		△一	四	三	五	九	二		第四回				
三一	六				五	四	三	一		第五回				

備考 入營者擲中△印ハ現職ノ儘入營セル者ヲ示ス

三、研究資料

圖書及雜誌

(昭和九年十月一日現在)

圖	書	冊	數	種	類
和漢書	和漢書	九、一六二冊	和雜誌	五一種	
洋書	洋書	七、四〇七冊	洋雜誌	四四種	
計		一六、五六九冊	其他定期刊行物計	三〇種	
				一二五種	

調查部保管資料

(昭和九年十月一日現在)

- | | |
|-------------------------|---------|
| 一、官公署銀行會社諸團體公刊資料パンフレット類 | 約五、〇〇〇部 |
| 二、同上 | 二一〇種 |
| 三、重要新聞記事書抜カード | 二〇〇種 |
| 四、銀行會社考課狀 | 三種 |
| 外内 | 外内 |
| 國 | 國 |
| 五八〇社 | |

商 品 標 本 及 機 械 類 表

(昭和九年十月一日現在)

種別	數量	價格
商標本	三、八一五	九、九〇圓
機械器具	二、一四九	二五、八五〇圓

沿革 後篇

第三 開校十周年以降二十周年まで

第三 開校十周年以降二十周年まで

(昭和十年より十八年年五月まで)

一 日本の大轉換期と教育の新方向

自由經濟より拘束經濟へ 自由競争と無拘束なる營利追求とを基本として展開する資本運動は經濟周期の波動を作り、好況の山から恐慌不況の底へ落ち込む作用を繰返す。然るに第一次歐洲大戰參加國は戰費として多大の資本を消耗したから國民購買力を縮減し、支拂手段に窮した。他方非參戰國も參戰國も戰時中に勃興した國內産業維持のために關稅障壁を高くしたから、國際分業は破壊されて世界の鎖封化を促進した。かやうにして世界的不況は愈々深刻化して、之が海外市場獲得の爭鬭戰となり、資源確保鬭爭となつた。さうしてかうした經濟的目的達成のための通商交渉に武力を背景とするに至つて國際間の關係は漸く險惡ならんとする。

我國としては昭和六年滿洲事變のあとを承けて同年末金輸出を禁止し、輸出促進の姿勢を執つた結果八、九年に至つて輸出は非常な躍進を示した。本邦商品の各國への氾濫に對して各國が頻りに對日障壁を築化したに拘らず、九年中の貿易は其の最も萎縮したる昭和六年に較べて、輸出は八九・四%を増加して二十一億七千二百萬圓輸入は八四・七%を増加して二十二億八千三百萬圓の巨額に達した。

そこで各國の對日通商措置は愈々嚴格となつたため八年以降頻りに各國との間に通商交渉が開かれるとともに我國としても伸びんための自制から貿易統制政策を執らざるを得なくなつた。それにも拘らず各國の對日措置はいよいよ激烈となり、十一年には埃及、土耳其、暹羅、英國との通商協定が廢棄の運命に逢着した。

製品輸出と資源確保とは表裏の關係にある。持たざる國としての我國海外市場の狹隘化は我國の存立上憂慮すべき兆でなければならぬ。然るに一方、滿洲事變を繞つて八年國際聯盟を脱退して以來國際關係は惡化したが恰も之が通商交渉の不味と絡み合つて我國への壓迫が加はり、之に備へて軍備充實の必要が迫つて來た。「廣義國防」といひ「非常時」といふ言葉が脚光を浴びて登場したのも十年前後であり、軍需工業及生産部門たる重工業への産業の編成替即ち國防のための産業統制を強化せざるを得なくなつた。

國防のための軍事費の増大は軍需資材の海外發注を必然とし、之が支拂に充當すべき外貨の獲得がまた焦眉の急となつた。低物價を基礎とする輸出促進政策が至上命令であつた。物價抑制といふ經濟統制がここに現はれる。

十二年支那事變勃發とともに、すべては、戦争遂行の目的に一貫して統制され、準戰體制から戰時體制に入つた。之がための産業統制と物價抑制とは愈々加はつて來た。十二年九月の「臨時資金調整法」が不急不要産業たる三種産業には三萬圓以上の資金調達を要許可とする如き、同月の「輸出入品等ニ關スル臨時措置法」も亦不急不要品の輸入を制限又は禁止する如き統制措置が強行された。同時に生産力擴充のための鑛工業四ヶ年計畫或は

農業増産四ヶ年計畫の如き計畫經濟への一步が踏み出された。又十四年九月の價格停止令(所謂九・一八價格令)等物動計畫が着々と進行した。かくて生産力擴充を企業家の營利心に訴へるよりも戦争遂行の計畫に添つて政策的に強行する方向をとつた。更に十五年四月に於ける陸軍の軍需品調辦價格の利潤算定法を契機として會社經理統制令の發布となり配當制限を實施することとなつた。次で各産業に於ける適正價格算定のために原價計算が強行されるに至つた。

かくて經濟上の自由主義は漸を追つて統制經濟へ移行し、經濟的個人主義は營利追求の抑制によつて著しく抑へられた。

十五年一月日米通商條約失効により對米貿易は漸く困難となり、更に十六年に至つて英米の對日資産凍結のために、必需資材の輸入は杜絶するといふ緊急事態に追ひ込まれたから、支那事變を完遂するための物動計畫は根本的建直しが必要に逼られ、統制は全面的計畫經濟に突き進まざるを得なくなつた。大東亞戦争の勃發は國家の總力を擧げて戦ひ抜かねばならぬ態勢を執らしめ、國民は大東亞共榮圈の確立といふ聖戰の目的貫徹、この至上命令のために國家の指示するところに従つて行動せねばならないこととなつた。勞力供出のためにも、不足物資を圓滑に配給するためにも産業の劃期的な編成替が要請され、好むと好まざるとに拘らず産業整理を餘儀なくされた。この聖戰完遂と大東亞建設の理想實現のためには、經濟上の恣意は許さるべくもない。經濟上に於ける自由主義と個人主義即ち自由競争と營利追求が強度の抑制を加へられたのは洵に歴史的必然である。

歐化思想を棄て皇國精神の確立 不況による失業苦、就職難がいかにも人心を惡化したかは既に述べた。マルクスの學說が一世を風靡し學生の心を捉へたのもこの不況による深刻なる社會苦の根源を衝かんとするところに發する。自由競争が恐慌と不況とを周期的に齎らす經濟組織は缺陷を包蔵する。資本家は獨り繁榮し勞働者は就職の機會を失ふ。ここに階級對立の觀念が生れ社會組織變革の思想が胚胎する。社會主義的諸運動はこの經濟組織の缺陷を是正せんと世界的に澎湃として興つた。けれども社會主義的思想は社會革命を主張する危險思想である。これは我國體觀念と相容れぬ。又個人主義に立脚する民主主義思想も我が憲法の解釋に妥當しない。ここに國際狀勢の緊迫とともに皇國日本の皇國精神が反省され、歐化思想は一擲されることがなつた。資本家も勞働者も、ともに日本國民としてその職能を國家への奉仕に捧げ、かくて國家へ歸一するところに皇國の道がある。國家の永遠、國家の隆昌を先きにし個人はこの國家目的に没入せねばならぬ。これが、ここ十年間に明確となつた皇國精神である。

ソ聯の赤化政策に對しては徹底的に取締り、屢次の共產黨檢擧となつたが、政府は十年八月及九月に國體明徴に關する聲明を發し、又十二年七月には夙くも産業報國會が結成された。産業報國思想は具體的には、現在の經濟構造を職分的に確認し、資本經營勞務の有機的一體化による産業報國を主張するものである。即ち資本も勞働も自己は勿論、國體的利己も主張せず、一體となつて皇運を扶翼し奉る、之が皇國精神に基く日本的勤勞觀であり、産業新體制である。

この産業報國思想は統制經濟から計畫經濟へ進展するとともに益々滲透し、支那事變による第一線將兵の盡忠報國の活躍とともに愈々昂揚され、滅私奉公、公益優先の思想が澎湃として漲るに至つた。大東亞戰爭の勃發による超重點主義生産量化の要請に對して、國民はあらゆる犠牲あらゆる艱難に堪える準備が出来たのである。同時に大東亞共榮國建設といふ國家的理念に挺身殉國する決意が完成したのである。

教育界の新體制 教育界もまたこの國家的轉換の線に添ひ、新體制が樹立された。明治維新後の教育制度はその範を歐米に採つたが、同時に政治經濟文化凡ゆる分野に自由主義個人主義が受容されて資本主義經濟の發展に貢獻したことは事實であり、この時代に於ける教育思想も著しく個人主義的色彩が強く所謂立身出世主義であり、學問を功を遂げ名を成す手段とさへ考へられたのである。この期間に歐米文化の榮華吸收に力め、これをよく消化したればこそ僅かに六、七十年の短時日に我國をして世界的水準に到達せしめたのであるが、自由主義個人主義の行詰りは遂に世界戰爭に導き、世界史的大轉換を招來せしめ、我國もまた凡ゆる方面に速やかに根本的刷新を加へ國防國家體制を完成して國家の生存を危くする禍根を免除せねばならなくなつた。大東亞新秩序の建設なる理想は、東亞に於ける米英の民族搾取組織を打破し、八紘一字とする皇國の大精神に基き、我國を核心とする鞏固なる結合體を建設するにあり、この大事業のために一方には戰爭、一方には建設といふ極めて困難なれども雄大なる計畫を遂行せねばならない。殉國挺身、滅私奉公、すべて是れこの大理想顯現のための必然的要請である。個人主義は揚棄されねばならぬ。教育の目的は個人の立身出世ではなく、國家の理想顯現でなければならぬ。

らない。文部省は薔きの「國體の本義」の姉妹篇として、臣民訓とも言ふべき「臣民の道」の一齣を公にし（十六年）一段と國體の本義、皇國臣民としての自覺を徹底せしめ「自我功利の思想を排し國家奉仕を第一義とする」ことを強調したことは洵に時宜を得たものといふべく、國家奉仕の臣民訓として殊に學園にとりては炳乎たる新體制の炬火であつた。この崇高なる目的達成のためにはまた鞏固なる國防體制を確立せねばならぬ。個人主義が許されぬとともに、青白きインテリたるを宥されない。知行一如が強行される所以である。學園に於ける教育方針がこの知行一如に基いて建てられるとともに、教育の目的が職域による挺身報國の至誠涵養にありとされたのは洵に當然といはなければならぬ。本校またこの教育新體制に則り學園新體制の樹立に直往邁進したのである。

二 學園新體制

國體明徴 思想の相剋、混亂に對する對策に文政當局が最も力を致したことは既に思想對策のところでも述べたが、ここに漸く國民をして國體の本義に徹せしめて、歐米と異り日本國家のあるべき姿を會得せしめ、國民の嚮ふべきところを示した我國獨自の立場に還らしめんとする積極的思想對策が樹てられた。十年五月二十八日から開かれた専門學校長會議に於て、國體明徴の徹底を期すべき文相の訓令あり思想局からも之を強調した。更に十二年三月には文部省から「國體の本義」（一五六頁）と題する冊子が發行され教育關係者に頒布されたが、その緒

言に於て、我が國に輸入せられた西洋思想が主として啓蒙思想或はその延長であつて、その思想の根柢をなす世界觀人生觀は歴史的考察を缺いた合理主義實證主義であり、一面に於て個人に至高の價值を認め、個人の自由と平等とを主張すると共に、他面に於て國家や民族を超越して抽象的な世界性を尊重する。かかる世界觀人生觀を基とする諸學說が、固陋な慣習や制度の改廢にその力を發揮した。けれども極端な歐化は我國の傳統を傷け國民精神を萎靡せしめる恐れがあり消化されざる西洋思想の流行は思想上社會上の混亂を惹起す。個人主義の行詰りは思想上社會上の轉換打開を必要とするに至つたが、「我國に關する限り、眞に我が國獨自の立場に還り、萬古不易の國體を闡明し、一切の追隨を排してよく本來の姿を現示せしめ、而も固陋を棄てて益々歐米文化の攝取醇化に努め、本を立てて末を生かし聰明にして宏量なる新日本を建設すべきである」と述べられてゐる。十二月五日の校長會議の文相訓示は、この「國體の本義」に及び國體觀念を明徴にし教學の刷新振興を期すべきを説いてゐる。

左翼運動の諸事件数は著しく減少したけれどもなほ相當汎く極左思想が行き互つて居つたし、極右思想と運動も擡頭してゐた。けれども支那事變の勃發によつて、かうした思想的混亂は大方拂拭されたが、進んで學園一致の思想體制を整へるために、十月十三日から一週間「國民精神總動員」の強調が實施せられ、日本精神の昂揚によつて國民志氣の振作と、社會風潮の一新を圖り併せて銃後の後援強化に努める首途の一步が踏み出された。

本校に於けるこの實施運動は文部省の指示に基き次の如く行はれた。

第一日 時局の生活の日。講堂に於て岩本教授の訓示、戊辛詔書之奉讀、陸軍省新聞班安達少佐の時局講演があつた。

第二日 出動將兵へ感謝の日。全校生徒、感謝慰問文を書き發送。

第三日 非常時經濟の日。消費節約。

第四日 銃後の護の日。國防献金。

第五日 神社参拜及殉國勇士を讃へるの日。伊勢山皇太神宮へ参拜行進。校長訓示。

第六日 勤勞報國日。雨天にて勤勞作業中止。

第七日 心身鍛鍊の日。各種體育實施。

勤勞報國團結 日支事變(當時の呼稱)の長期戦化に伴ひ時局の認識愛國の熱情目覺しいものがあるがこの熱誠と緊張を打つて一丸とする團體の出現が要望され、縣下中等學校、青年團の報國團結に呼應して、市内五専門の報國學生團が全國に率先して同時に結成され、十三年四月二十四日中村町廣場に於て結團式が舉行された。銃後活動に協力する男女中等學校青年團とともに五専門學校全員参加。團長半井知事及幹事本校校長の式辭後分行進を行ふ。式後本校代表者一五四名は保土ヶ谷富士ヶ谷富士瓦斯紡績構内の防空用貯水槽掘鑿に従事した。

報國團の目的は勤勞奉仕、體力向上、團體的訓練を主眼とするが、その行ふ所は學生の本分を盡すに妨げなく又他の營利事業の妨害をなさず公共事業たるに重きを置くこととなつてゐる。學校その團員であり團長は校長之

に當る規定である。

尙十三年度からは合同體操が正課となり體位の向上に資し、又一年生は斷髮、禁酒禁煙を實行、二、三年生は自肅自戒することとし時局下學生の實質剛健の氣風を一層強化した。かくて三年目には全校坊主刈が實現した。

集團勤勞作業 實質剛健の氣風振作と時局重大性への認識の徹底のために、勤勞作業が執り上げられて來たが本校は率先して夏期休暇中の集團勤勞奉仕に當ることとなり、十三年七月十日より五日乃至一週間(この期間に運動大會のため不参加のものは九月初旬一週間)に亘り全校舉げて参加實施された。方に劃期的學生集團勤勞奉仕作業である。

第一集團 行幸道路改修工事

この集團は毎朝六時四十分横濱驛前集合、電車で原町田着、驛附近及陸士前の道路改修工事に従事。國民儀禮及體操を行つた後、九時から作業開始、一般勞働者と共にスコップを握り、リヤカーを引いて土砂運搬を行ふ。四日間。

第二集團 箱根報國寮、森林治水作業

三年生五十名は新に開設された箱根舊街道畑宿の縣立報國寮に入所、一週間宿泊して、森林及治水作業に従事した。附添教職員も起居を共にする。十日は開寮式が舉げられ、本校學生が第一回入寮生となつたのである。校長も同行し、一泊の上運搬作業に加はつた。

第三集團 校庭除草地均し作業

五日間勤務。

第四集團 寄宿寮清掃

寮生八十名は寮内外の清掃を二日間行ひ、三日間は第一、第三集團に参加。

第五集團 農場作業

別科生五十名は五日間農場手入れ施肥等に従事した。

箱根報國寮生活

報國寮は勤務を通して行ふ魂の訓練所である。随て規律節制は嚴格だ。朝四時半コーンコーンと番木に起床。三十分間に洗面と清掃。五時全員寮庭集合、寮長の號令の下に木劍體操、建國體操、君が代合唱國旗掲揚伊勢太廟宮城遙拜、各自の家庭に向つて遙かに朝の挨拶を送る。次に明治天皇の御製を全員拜讀齊唱。六時朝食、食事の時は寮長の音頭で「箸とらは天地御代の御恵み、君と親との御恩を味へ」を齊唱する。八時から全員整列の上各班毎に任務の割當てがあつて國旗を押立てて現場へ赴き作業をする。各班それぞれ助教がついて仕事を指導する。臼小屋澤、埋盛澤の砂防堰堤工事、二子山麓の除草作業等に分れる。午後四時作業を了へ行進して寮に歸る。國旗降納。五時半から入浴、六時夕食、七時から修養會、八時半消燈。また翌日の行事が待つてゐる。

第二回夏期集團勤務作業は翌十四年七月九日から實施された。文部省では時局の重大性に鑑み、今後夏季冬季休暇の觀念を棄て、この期間に學徒の心身を鍛鍊せしむることとなり本校に於てもその趣旨に則り勤務作業による夏期心身鍛鍊を前年度より強化した。

第一集團 縣道中野線修築工事

横濱市より中野町に至る縣道の開設工事で作業場は原町田驛を去る約三杆の地點である。作業は専ら道路豫定線に當る森林の大木伐倒で痛快極まる仕事であつた。七月九日より十七日まで及八月三十一日より九月六日まで二回に分れて實施。

第二集團 報國寮、森林治水工事

前年同様第一班五十名は七月十一日乃至十七日、第二班五十名は八月三十一日乃至九月六日、各々五十名宛入寮作業する。

第三集團 最乗寺宿泊、林道工事

大雄山最乗寺即ち道了山の寺坊に宿泊し嚴重な行的訓練を行ふと共に寺有林の林道開鑿のための樹木伐倒、地密、土砂運搬をなす。夜は住職より座禪の實習を受け法話を聴く。参加者百人。七月十一日乃至十七日。

第四集團 水道局作業場、土砂取除作業

崩壊土砂取除運搬清掃作業。九月一日乃至五日。

第五集團 街路樹枝切作業

身體虛弱にして激烈なる勤務に服し難きものが、七月十一日より十七日まで市内街路樹の枝切清掃作業を實施した。

十五年度は紀元二千六百年記念事業の一つとして返子櫻山地内に報國林を設け四月三日乃至七日と十月七日と四本杉二千本の苗木を植林したが、すべて教職員及學生の勤務作業に俟つた。

十五年夏期勤務作業は港北區所在の市の綜合運動場新設作業、報國寮作業、中野線道路修築工事等に出動した。かくて雨來春更秋の休暇期には一週間内外の集團勤務作業を毎年繼續して今日に至つてゐる(詳細は別掲「勤務作業資料」参照)。

興亞青年勤務報國隊參加 昭和十四年、日滿兩國政府の協同により日本青年の興亞青年勤務報國隊が組織され滿洲及び北支那方面に於て勤務奉仕に従事することとなり本校に於ても之に参加すべき生徒を募集しその中より五名を選抜し武市助教授が隊長となり之を引率渡滿することとなり七月一日壯行會を舉行す。隊長及び隊員は一應茨城縣内原訓練所で訓練を受け出發することとなり、武市助教授は七月四日、生徒五名は七月十一日夫々横濱を出發した而して渡滿勤務報國の後八月三十日無事歸校した。

第二回北支派遣興亞青年勤務報國隊の壯行會を十五年七月二日行ふ、本年の參加學生は第三學年より四名第二

學年生より一名を選抜し先づ習志野に於て訓練を受け北支那方面に派遣せられた。而して八月下旬歸校した。

第三回興亞學生勤務報國隊本年の參加學生は第三學年より三名第二學年より二名を選抜し五日間茨城縣滿洲工青少年訓練所に於て訓練を受け北支那方面に派遣せられる筈にて十六年七月三日壯行會を舉行。然るに諸般の事情に依り現地派遣は中止となり赤羽及王子兵器廠に於て二週間軍の作業に従事八月五日歸校した。

勤務作業資料

昭和一三、四、二四

生徒の一部を以て學校報國團活動の第一助手として市内保土ヶ谷 富士瓦斯紡績合社工場内に防空貯水槽を掘鑿せり。

參加者 一五四名

昭和一三、七、一〇

集團勤務作業は團體訓練、心身の鍛錬、勤務愛好精神の培養等に極めて有効なるを以て本校に於ては昭和十三年四月報國團結成と同時に之を實施し其の後文部省の方策に則り一層之を擴大し職員生徒共一學年間に最低七日間は必ず之に服せしむることとし之を學中休暇直前、直後の七日間に實施することとせり。

全校一齊に數日に亘る勤務作業の實施は本校開校以來初めてなり。

作業全期間を通じて生徒は超非常時下にあるの自覺に生き頗る眞面目に勤務に従事し豫期以上の教育的効果を擧ぐることを得たり。

作業の細別、期間等は次の如し。

自七月十一日 至七月十四日

(一) 行幸道路修築工事

省線原町田驛附近より縣下高座郡座間村にある陸軍士官學校附近に至る延長約六料の縣營道路改築工事にして其の中七月の

作業は原町田原より約一軒の地敷及び士官學校附近に於ける土砂の採取運搬なり。

本作業には報國寮入寮者以外は全員三日乃至四日從事する様配當したり。

毎日午前六時四十分全員横濱縣集合七時十二分横濱發電車にて同四十八分原町田原驛に近き作業場に就ては徒歩(約一軒)士官學校附近に就ては驛よりトラックにより現場に至る。

作業は午前八時半開始午後四時終了、其の食休時間三十分外に午前一回午後一回各二十分の休憩時間あり。作業實施に就ては生徒を約二十人宛の班に分ち職員は之に分屬し各班毎に縣道路線にて作業の分擔を定め且つ専門技術者を配して指導す。

参加者延人員 一一〇八名

(一) 神奈川縣立箱根報國寮

第一回 自七月十日 至七月十六日

第二回 自八月三十日 至九月五日

本寮は神奈川縣足柄下郡湯本町畑宿に所在し須雲川河谷の傾斜地海拔四百米舊東海道街道に當る附近幽邃靜寂にして環境頗る良好學校報國園員の修練道場として設置せるものにして林業技師一名寮長として専ら指導に當り其の下に専門指導員數名あり。

七月初め本寮の工事完成し本校は最初に入寮するを得たり。

作業は附近國立公園の森林治水砂防工事及森林の撫育(下生刈取、枝切、間伐、林道開通)なり生徒五十名を五班に分ち各班一名の専門指導員を附し寮長も何れかに分屬し生徒と共に作業す附添職員も各班に分屬作業をなす。

入寮退寮の日を除き毎日午前四時三十分起床、清掃、洗面、點呼、體操、國旗掲揚、國歌合唱、宮城通拜、靜座、朝食、自習等を行ひ午前八時三十分出發。必ず辨當を携帶し午後四時迄作業し歸寮後は入浴、夕食の上自修、座談會をなし午後八時點呼、就寢するものにて嚴格なる規律節制の下に訓練す。附添職員も生徒と起居を共にす。

寮の作業は雨天の時は養生にて出勤し如何なる惡天候と雖も作業を中止することなし、殊に第二回入寮中は時恰も二十十日

荒天期の前後に相當し特に箱根の如き山地に於ては風々霖雨車軸を流すが如き事ありしも全風寒も風せず意氣益々昂り幸ひ二回を通じ一人の傷病者なく却つて健康を増進したる程なり。

作業の場所は近きは寮より一軒、遠きは四軒なり入寮者は第一回は第三學年中より希望者を募り第二回は高專競技大會の爲七月の勤勞作業に従事し離き者にて即ち野球、庭球、劍道、弓道、籠球各部の運動選手なり従つて本科各學年生徒を含むものとす。

参加者延人員 七四九名

(二) 自七月十日 至七月十四日

自九月四日 至九月五日

校内除草、清掃及食糧飼料増産作業。

本作業は(一)(二)に配屬したる殘餘の人員を以て校内運動場の地均し柵内全部の除草柵外土堤の草刈、校舎内の清掃、寄宿寮生には寄宿寮内外の清掃、貿易別科生には實習用農場の整地及び收穫物(小麥)調整作業等をなさしめたり。

毎日午前七時五十分集合前掲の如き行事の後八時三十分作業開始正午迄に十分宛二回休憩、午後は零時四十分開始午後二時終了。

本作業は(一)(二)の作業の如く公共的性質を有するものにあらざるも生徒自身の手により生徒の修學運動の場所を清掃整備し之を美化する點に教育上の價值あり生徒も他の作業と同様熱心に之に従事したり。

又平素身體虛弱にて體操教練等を見學する者にして劇烈なる作業に服せしめ難き者に對しては特別班を設け其の作業は校内の除草等の比較的輕易なるもの及び作業當日各班の連絡傳令をなさしめたり。

参加者延人員 一七四四名

昭和十四、七、九

夏季心身鍛鍊期開始せらる。文部省に於ては時局の重大性に鑑み今後各學校共夏季及び冬季に學業を休むの觀念を放擲し此の期間に學徒の心身を鍛鍊せしむることとなり、直轄諸學校其他全國に互つて週牒を發した本校に於ても本省の大方針に従

つて夏季心身鍛錬計畫を樹て前年度より強化して實施せり。

(一) 自七月九日 至七月十七日

自八月三十一日 至九月六日

神奈川縣高座郡大野村縣道中野線修築工事

横濱市より中野町に至る延長約三十軒の縣管道路の開墾工事をなす作業場は原町田驛を去ること約三軒の地點なり其他は前年の行幸道路作業に同じ。

参加者延人員 一五六七名

(二) 第一回 自七月十一日 至七月十七日

第二回 自八月三十一日 至九月六日

本年も二回に亘り箱根報國寮に入寮森林治水手入作業を行ふ。

前年と同じく作業中は全部入寮して嚴重なる訓練を受く。

参加者延人員 七〇七名

(三) 自七月十一日 至七月十七日

大雄山最乗寺 林道修築工事

大雄山最乗寺は俗に道了山と稱し神奈川縣足柄上郡南足柄村大字岡本に在り人家を離れたる山寺附近一帯杉、檜、松等の老樹鬱蒼として天日を遮り凡俗の身は自ら洗滌せらるゝを覺ゆ。作業は寺有林の林道開鑿にして本校の起工に着手する所、樹木伐倒、地盤、土砂運搬なり。

作業中は金具寺内に宿泊嚴格なる行的訓練を行ふと同時に毎夜佳職より座禪の實習を受け且つ法話を聴く。

参加者延人員 七十四名

(四) 自九月一日 至九月五日

横濱市水道局作業場

崩壊土砂取除運搬汚掃作業

参加者延人員 六一五名

(五) 自七月十一日 至七月十七日

横濱市内街路樹、枝切、枝集、汚掃作業

本作業は激烈なる勤務に服し難き身體脆弱者の爲に特に設けたるものなり。

参加者延人員 五八一名

昨年は行はれた集團勤務作業に比し本年は生徒の非常時局認識一段と深まり居ることゝて夏季鍛錬の成果は大いに見えるべきものあり。

昭和一五、四、三 集團勤務作業

自四月三日 至四月七日及十月七日

神奈川縣三浦郡逗子町櫻山地内報國造林

報國造林は本校紀元二千六百年記念事業の一として縣林務課の幹旋により本年四月之を設定したるものにして造林地は湘南田浦驛より徒歩四軒の山地なり東京灣を足下に望める景勝の地、環境絶好且つ植林に適し作業上の危険毫もなく全面積十町歩餘あり。地擦へ、苗木の植付下草刈を行ふ。

苗木檢四千本、杉二千本計六千本、植付面積約二町歩なり。

参加者延人員 九五八名

昭和一五、七、一一 夏季集團勤務作業開始

自七月十一日 至七月十六日

(一) 横濱市綜合運動場(防空公園)新設作業

本運動場は横濱市の紀元二千六百年記念事業にして陸上競技場、球技場を設置し防空公園を附設す市内港北區岸根町に在り面積六萬五千軒五ヶ年の繼續事業なり。

本校は本運動場の起工式に引續き最初の作業（道路開設、土砂運搬、樹木の移植手入、下草刈等）を行ふ。
参加者延人員 九八一名

(二) 自七月十一日 至七月十七日
箱根報國寮に入寮、森林治水、手入作業を行ふ。前年と同じく作業中は全部入寮して厳格なる訓練を受く。
参加者延人員 三六四名

(三) 自七月十一日 至七月十三日
神奈川縣高座郡相原村縣道中野線の修築工事をなす。
作業場其の他前年に同じ。
参加者延人員 三六三名

(四) 自九月三日 至九月六日及九月十四日、十月五日
校内除草、消毒及食糧飼料増産作業
秋季に豫定したる縣道中野線の修築工事縣の都合により中止となりたる爲本作業を實施す。
参加者延人員 一二九八名

(五) 自九月三日至九月六日
図書整理作業
特別班を之に配當す。本校圖書館備付の圖書整理の補助をなす。
参加者延人員 一二四名

昭和一六、四、四 春季集團勸勞作業
(一) 自四月四日 至四月七日
逗子町榎山地内本校報國造林
前年と同じく地拵へ、苗木の植付を行ふ。

参加者延人員 一七八名

(二) 自四月四日 至四月九日
校内除草、消毒及食糧飼料増産作業
本校裏門外に在る荒地を借受け開墾す。
参加者延人員 五四名

昭和一六、七、一一 夏季集團勸勞作業開始
(一) 自七月十一日 至七月十七日
箱根報國寮に入寮
前年と同じく森林治水、手入作業を行ふ。
参加者延人員 三六四名

(二) 自七月十三日 至七月十七日
横濱市綜合運動場（防空公園）新設作業
前年と同じく道路開設、土砂運搬、樹木の移植、手入、下草刈を行ふ。
参加者延人員 一、二四五名

(三) 自七月十三日 至七月十四日及七月十六日
校内除草、消毒及食糧飼料増産作業
参加者延人員 一二六名

昭和一六、九、三 秋季集團勸勞作業
(一) 自九月三日 至九月四日及自九月二十六日 至九月二十七日
逗子町榎山地内本校報國造林
前年と同じく地拵へ下草刈苗木植付を行ふ。

参加者延人員 三五八名

(二) 九月六日、二十五日、二十六日、十月四日、十一日、十一月八日
横濱市綜合運動場(防空公園)新設作業
夏季の作業に同じ。

参加者延人員 九七六名

(三) 九月三日、四日、二十五日、二十六日、十一月八日、二十二日
校内清掃及食糧飼料増産作業

参加者延人員 二七一名

昭和一七、三、一一 春季集團勸勞作業

(一) 自三月十一日 至三月十四日

本校報國造林

前年と同じく地拵へ苗木植付を行ふ。

参加者延人員 二八八名

(二) 自三月十一日 至三月十四日

自三月二十二日 自三月三十一日

横濱市綜合運動場(防空公園)新設作業
作業内容は前年に同じ。

参加者延人員 一、一四〇名

(三) 自三月二十二日 至三月三十一日

横須賀海軍工廠防空壕構築作業

國民勸勞協力令に依り三月二十八日を除き毎日三十二名を出動せしめ横須賀海軍工廠に於て防空壕構築作業に従事す。

参加者延人員 三三〇名

(四) 六月六日

神奈川県藤園神社建造地作業

市内神奈川県藤園町に建造せらるゝ神奈川県藤園神社境内敷地奉仕作業(掘鑿、土の運搬)をなす。

参加者延人員 一四九名

昭和一七、八、一 夏季集團勸勞作業

(一) 自八月一日 至八月七日

箱根報國寮に入寮

前年と同じく森林治水、手入作業を行ふ。

参加者延人員 三六四名

(二) 自八月十三日 至八月十五日、八月十八日、九月十七日

本校報國造林

前年と同じく地拵へ、下草刈を行ふ。

参加者延人員 五八六名

(三) 八月十七日、十九日、九月十八日

横濱市綜合運動場(防空公園)新設作業

前年と同じく道路開設、土砂運搬、樹木の移植、手入、草刈等を行ふ。

参加者延人員 二八五名

(四) 自八月十三日 至八月十四日及八月十六日

校内清掃及食糧飼料増産作業

参加者延人員 二九四名

昭和一七、一一、五

農村農繁期努力援助作業

國民勤勞協力令に依り十一月五、六の二日間横濱市近郊の折本、荏田、下谷の三部落に至り各農事實行組合長の指揮を受け三十九農家に三名乃至六名分宿の上農耕作業（稻刈、稻扱、運搬、麥蒔、除草、芋掘等）に従事し食料増産の援助をなしたり参加者延人員 三八二名

長津田兵器廠、報國林、綜合運動場勤勞、昭和十八年三月十九日乃至四月七日。

三 報國團結成と報國隊編成

自治的學友會の解消 學友會なるものは從來比較的自由な立場にあつて學生の自治的運用に委せられて來たが報國精神を基とする新體制下、かかる性格の學友會の再編成が要請されるに至つたのは蓋し必然の歸結でなければならぬ。從來の如き學生の自治的生活態度は改變されねばならない。

十五年春より學友會の指導精神について變更の氣運起り更に至つて之が具體化することとなつた。即ちその自治的機構を變改して指導的訓練機關たらしめ、個人の趣味娛樂を考へず、自我功利の思想を排除し、報國の至誠徹底と積極の心身の鍊成とを指導精神とし、質實剛健にして明朗瀟灑の性格を得せしめ、訓練は團體的に行ひ、規律節制あり、研究と熱意に燃え滅私奉公の犠牲的精神と堅忍不拔の敢闘精神を強調せんとした。九月委員會成立、報國鍊成組織の案を練り文部省の指示事項等により報國團々則及綱領を作成した。十一月二十日學友會幹事の座談會を開き學友會の解消と報國團の使命を語る。

又、十月十日の實業專門學校長會議の席上、文部當局の發表したる新組織の骨子は次の如くであつて報國團の性格は明瞭に示されてゐる。

一、新組織は報國精神の下、學行一如を目標とし師弟相携へて俱學俱進する。その氣運を全校内に横溢させるところが第一眼目である。

一、新氣運の振起には校内團體の再編成を當面の目標とはするが、進んで寄宿寮の生活にも同じ精神に基く修練體制を布く必要がある。

隨て役員は團長に校長が當り全組織を一元的に統裁するほか、部長、班長はすべて教官が當り理事に事務職員が任ぜられ、生徒は幹事として若干名參劃することとなる。役員決定は選舉制によらず團長の任命を俟つことに決した。

報國團結成 かくて從來の學友會は十五年十一月三十日を以て發展的解消を遂げて、學校報國團が力強く結成された。この日、本校創立以來十六年の長きに亘つて本校の歴史を飾つて來た學友會の解散式が行はれ續いて直ちに報國團の結成式が擧げられた。校長の訓示、學生總代の宣誓、下田教授の報國團の組織及綱領の發表があつた。

第二條 本團ハ本團ノ綱領ニ則リ團員一致心身ノ修練ヲ行ヒ校風ノ發揚ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第三條 本團ハ本校職員、生徒ヲ以テ之ヲ組織ス

第四條 本團ニ左ノ五部ヲ置ク

- 一、總務部
- 二、鍛鍊部
- 三、國防部
- 四、文化部
- 五、生活部

第五條

總務部ハ企画、指導、經理ニ當リ且他ノ部ニ屬セザル事務ヲ掌ル

總務部、鍛鍊部、國防部、文化部、生活部ニ次ノ諸班ヲ置ク

鍛鍊部 東亞研究班

作樂、強歩、體操、陸上競技、水上競技、野球、庭球、卓球、籠球、蹴球、排球、ラグビー、劍道、柔道、弓道

國防部

射擊、銃劍術、馬術、滑空、海軍

文化部

學報、研究、音樂、文藝、語學

生活部

保健、共濟、購買

第六條

本團ニ左ノ役員ヲ置ク

團長	一名
副團長	一名
部長	若干名
班長	若干名

理事 若干名

幹事 若干名

第七條

團長ハ學校長之ニ當ル

副團長、部長、班長及ビ理事ハ職員中ヨリ幹事ハ生徒中ヨリ團長之ヲ任免ス

第八條

團長ハ本團ヲ處理ス

副團長ハ團長ヲ輔佐シ團長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

部長ハ團長ノ指揮ヲ受ケ其ノ部ヲ統括シ部務ヲ掌理ス

班長ハ部長ヲ輔佐シ班務ヲ掌ル

理事ハ部又ハ班ニ屬シ部長又ハ班長ヲ輔佐シ部務又ハ班務ニ參預ス

幹事ハ總務部又ハ班ニ屬シ部長又ハ班長ノ指揮ヲ受ケ事務ニ從事ス

第九條

部長ヲ以テ部長會ヲ組織ス

部長會ハ團長之ヲ招集ス

部長會ハ團長ノ諮問ニ應ジ豫算決算其ノ他重要ナル事項ヲ審議ス

第十條

職員タル役員ヲ以テ役員會ヲ組織ス

役員會ハ團長之ヲ招集ス

役員會ハ團長ノ諮問ニ應ジ團則ノ變更其ノ他團長ニ於テ重要ト認ムル事項ヲ審議ス

第十一條

本團ノ經費ハ團費及入團金ヲ以テ之ヲ支辨ス

職員團員ハ團費トシテ俸給ノ二分ノ一ヲ繰出ス

生徒團員ノ團費ハ年額金拾五圓トシ四月ニ拾圓九月ニ五圓ヲ授業料ト同時ニ納付スルモノトス但特別ノ理由アルトキハ臨時團費ヲ納付スルコトアルベシ

入團金ハ本科生徒金五圓貿易別科生徒金貳圓トシ入學ノ初メニ納付スルモノトス

本園ハ寄附金及入園金ヲ以テ本園ノ基金トスルコトヲ得

第十二條

本園ノ會計年度ハ毎年四月ニ始マリ翌年三月ニ終ル

第十三條

園長ハ部又ハ班ニ部則又ハ班則ヲ定メシムルコトアルベシ

第十四條

園長ハ他校若クハ他ノ團體ト聯合シ又ハ之ト對抗スル研究競技其ノ他ノ會合ニ團員ノ參加ヲ命ズルコトアルベシ

他ノ主催スル會合ニ對シテモ亦同ジ

附 則

第十五條

本園則ハ昭和十五年十二月一日ヨリ之ヲ實施ス

横濱高等商業學校報國團綱領

一、團員ハ團體ノ本義ニ透徹シ文ヲ修メ武ヲ練リ實實剛健ノ氣風ヲ振勵シ盡忠報國ノ信念ヲ涵養スベシ

一、團員ハ禮義ヲ正シ氣節ヲ尙ヒ廉耻ヲ重ンジ誠私奉公ノ精神ヲ振作スベシ

一、團員ハ強健ナル身體旺盛ナル氣力鞏固ナル意志ヲ鍛成シ盛國ノ理想顯現ニ邁進スベシ

報 國 團 役 員 (十五年十一月三十日付)

團 長 田 尻 校 長

副團長 岩 本 教 授

總務部長 下 田 教 授

鍛鍊部長 小 幡 教 授

作業班長 不二門 教授
強歩班長 河 村 教授

國防部長 不二門 教授

文化部長 德 增 教 授

體操班長	下津屋 教授
陸上競技班長	同
水上競技班長	井 手 講師
野球班長	小 幡 教授
庭球班長	渡 邊 教授
卓球班長	時 田 教授
蹴球班長	富 成 教授
籠球班長	伊 東 教授
劍道班長	小 白 講師
柔道班長	大 竹 教授
弓道班長	光 井 教授
射擊班長	小 白 講師
銃劍術班長	同
馬術班長	下津屋 教授
滑空班長	不二門 教授
學報班長	森 田 教授
研究班長	德 增 教授
語學班長	西 村 教授

生活部長 黒澤生徒主事

文藝班長 井上教授
音樂班長 沼田教授

保健班長 黒澤生徒主事
共済班長 南種教授
購買班長 越村教授

十七年四月一日團長は次の諸班の新設及獨立を命じた。

東亞研究班（總務部所屬）班長下田教授、排球班、班長小幡教授、ラグビー班、班長小幡教授（何れも鍛鍊部所屬）海洋班（國防班）班長下津屋教授。

十七年秋に至り、時局の進展に伴ひ報國團修鍊の更に強化を図る氣運動き、實戰即應の指揮者たる人材を育成することとなり、強健なる體力、旺盛なる氣力、鞏固なる意志を鍊成せしむるため各班を再檢討し、不愈なるを除きて積極的に活動せんとする。素より班の種類は鍊成に要する資材の制約よりも考慮せらるべきは言ふを俟たずと雖も、國防能力の増強を主として之が決定をなすものである。かくて十八年度の鍊成の目標は次の如くである。

體操訓練、行軍力強化、水泳訓練、綜合的基本體力増強、劍道柔道相撲、戰技訓練、滑空海洋訓練。

消費組合より生活部購買班へ 消費組合も報國團の組織中に包攝されることとなり、生活部購買班となつた。

購買班規則

第一章 總則

第一條 本班ハ報國團ノ購買職分ヲ果スヲ目的トス

第二條 本班ハ横濱高等商業學校報國團員ヲ以テ構成ス

第二章 機關

第三條 本班ニ左ノ役員ヲ置ク

部長	一名
班長	一名
幹事	若干名

第四章

部長ハ生活部長之ニ任ズ

班長ハ購買班長之ニ任ズ

第五章

部長ハ班務ヲ總理ス

班長ハ班ヲ代表シ班務ヲ管掌ス

第六章

班長及ビ幹事ハ隨時會議ヲ開キ班務ノ進捗ヲ圖ル

第七章 事業ノ執行

本班ハ其目的ニ從ヒ左ノ事業ヲ行フ

- 一、書籍雜誌新聞文具運動具切手葉書其他學用品及日用品一切ノ購買及販賣
- 二、古書籍ノ交換仲介印刷取次

- 第二條 本報國隊ハ横濱高等商業學校報國隊ト稱ス
- 第三條 本報國隊ハ本校報國團員ヲ以テ組織ス
- 第四條 本報告隊ハ本隊特技隊特別整備隊トス
本隊ハ報國團全員ヲ以テ組織ス
- 特技隊ハ特殊ノ技能アル者ヲ以テ組織シ自轉車隊消防隊トス
- 特別整備隊ハ非常變災時ニ於ケル特別整備其ノ他ノ任ニ當リ得ル者ヲ以テ組織ス
- 第五條 報國隊長ハ本校報國團長之ニ當リ全部隊ヲ統轄ス
- 第六條 本報國隊ニ本部ヲ設ケ部附ヲ置ケ
部附ハ教職員中ヨリ隊長之ヲ命ズ
- 第七條 本隊ニ一個大隊ヲ置キ大隊ハ三個中隊中隊ハ第一、第二中隊四個小隊第三中隊五個小隊小隊ハ四個分隊編成トス
- 特技隊ニ自轉車隊一個小隊消防隊一個小隊ヲ置キ小隊ハ二個分隊編成トス
- 特別整備隊ニ一個中隊ヲ置キ中隊ハ三個小隊小隊ハ第一第二小隊四個分隊第三小隊五個分隊編成トス
- 第八條 大隊中隊小隊分隊ニ各長ヲ置ケ
- 小隊長以上ハ教職員中ヨリ分隊長ハ生徒中ヨリ隊長之ヲ命ズ
- 第九條 小隊以上ニ隊附ヲ置クコトヲ得
生徒中ヨリ隊長之ヲ命ズ
- 第十條 以上ノ外必要ナル事項ハ其ノ都度隊長之ヲ定ム
- 第十一條 本報告隊編成ノ細部ハ附表ニ依ル

尙右結成式後全員横濱市綜合運動場に行軍し勤勞作業を行つた。爾來報國隊は本隊或は特技隊、特別整備隊と

して一般市民の防空訓練に出動参加し或は隊伍堂々行軍を行ひ或は與亞奉公日、大詔奉戴日等に閱兵分列を行ひ或は校内防空演習を行ふ等本校の體育上極めて重要な組織となり訓練の主要機關となつてゐる。

勤勞協力令と報國隊 國民勤勞報國令は十六年十一月二十日勅令を以て公布され、當局では之が施行に伴ふ關係法令の整備を急ぎ十二月二日附、厚生文部兩省令第三號を以て「國民勤勞協力令施行規則」を公布、即日實施を見たが、その第八條第九條により、協力申請者から申請のあつた場合は當該學校長に對し學校報國隊の勤勞協力を命じ報國隊は即時出動要務に服することとなつた。

この協力令により十七年三月二十二日より三十一日まで横濱海軍工廠の防空壕構築作業に出動したるを第一次とし、十一月五日六日の二日間は農村勞力援助作業に従事し、十八年三月二十七日より五日間長津田に在る陸軍兵器廠へ出動した（詳細別掲「勤勞作業資料」参照）。

このほか十七年九月二十八、九の兩日及十二月十六日より一週間大政翼賛會の希望により横濱驛の交通整理に協力出動した。

國防體制の強化 教練が中等學校以上に課せられたのは大正十四年以來で、かの陸軍現役將校學校配屬令によつて實施されてゐたが、昭和十五年以來は國防體制強化と相俟つて益々教練の重要性が加はり、各學年とも毎週二時間以上、一學年七十時間以上を課し且つ採點上獨立學科目となつた。野外教練も強化され、教練査閲の内容も行軍力を重視するといふやうに變つて來た。報國團に於ける國防部の各班重視の事は既に記した通りである。

次に近代戦に於ける航空機の威力に對しては防空陣の完備が要請され、民間防空訓練が例年實施されてゐた。然るに支那事變の勃發は國を擧げての防空訓練の必要を逼り特殊官衙にも訓練を實施することとなり、本校も十二年七月三十一日「防空規程」を制定し「防護實施要領」によつて九月十五日から一般の防空演習に参加、全校一致の實戰的訓練を行つた。爾來一般防空訓練毎に本校も歩調を共にして訓練を重ねてゐる。「防空規程」「防空實施要領」は本校「一覽」中に收載されてゐるからここに轉載せず。尙報國隊の特技隊消防小隊は直接縣消防隊から消防自動車操作訓練を受け、特別警備隊は警察署に配置され樞要地點の警備配置に就くこととなり、既に十七年十一月二十九日港内商船爆發の際、四十九名の特別警備隊は職員引率の下に出動し戸部警察署管轄下に警備配置に就いた。

四 教育の統括

日本文化昂揚施設 思想對策の消極的態度から教育刷新、日本文化の昂揚を目指す文部省は十一年、日本諸學振興委員會を設け、日本精神の本義に基き各種の學問に互つてその内容及方法を検討し我國獨自の學問文化を創設發展すると共に、延ひて學制改革、内容の改善に當らしめんとした。その第一回委員會が十一年十一月四日から四日間文部省會議室で開かれた。學問の自由は明治以來の教育界の建前でありそれは甚だ尊重すべきであつたけれども、歐化に急なる餘り國體と相容れざる學問思想の彌漫は文政當局の憂慮すべきところであつて、かかる

思想への抑壓政策とともに文教の府が中心となつて日本獨自の文化昂揚へ邁進すべきは、方に思想對策としては一歩進めたものであると同時に、學問の自由から學問への統括へ轉換する礎石が置かれたと見られるのであらう。第一回委員會は教育學關係であつたが本校からは渡邊富成兩氏が出席した。爾來、經濟學、史學、哲學等の振興會には本校教授がその專攻に隨つて出席してゐる。

因にこの間、文部省の學生部は思想局となり次で教學局となり専ら學生思想方面の監督指導に當つてゐる。

文部省は同時に、大學高專諸校に日本文化講座を開講、思想局の斡旋によつて學界の權威を各校に派し、日本文化に關する講義を講述することとなり、本校も十二年度から日本文化講座が特別講義として設けられた。當初は年五回現在では三回の文化講義が繼續されて今日に及んでゐる。本校では大體國史、國文又は儒學、經濟、自然科學各一名宛の講師を依頼してゐる。

日本文化講義		日本文化講義	
開催年月	演題	講師	
昭和十一年十一月	歴史的に觀たる日本文化の使命	文博村川堅固氏	
同 十一年十二月	日本民族	醫博永井潜氏	
同 十二年六月	日本人に還れ	文博平泉澄氏	
同 六月		本間俊平氏	

同	十一月	日本精神と日本音楽	田邊 尚 雄氏
同	十一月	戦争と経済	海軍主計中將 武井 大 助氏
同	十二月	社会機構と生物學	京大數授 川村 多 實 二氏
同	十三年 一月	日本美術の海外進出について	美校教授 矢代 幸 雄氏
同	五月	身分の話	文博 幸 田 成 友氏
同	十一月	航空機について	理博 和 田 小 文氏
同	十二月	現下の外交事情	法博 米 田 實氏
同	十四年 二月	日本産業の精神	膳 桂 之 助氏
同	六月	戦ふものの心境	陸軍少將 櫻井 忠 溫氏
同	十月	東洋文化と西洋文化	文博 鹽 谷 溫氏
同	十二月	支那事變について	法博 三 浦 新 七氏
同	十五年 一月	日本文化と亞細亞文化	法博 下 村 宏氏
同	六月	全體主義と個人主義	文博 中 村 孝 也氏
同	十月	日本の氣象と國民性	經濟博 井 藤 半 彌氏
同	十六年 一月		理博 藤 原 咲 平氏

同	六月	國防國家の經濟政策	商大教授 赤 松 要氏
同	十一月	國防と科學	理博 仁 科 芳 雄氏
同	十七年 一月	儒教と我國の徳教	文博 諸 橋 徹 次氏
同	六月	南方經濟の諸問題	外務省通商局第一課長 法 華 津 孝 太氏
同	十月	南方の民族文化	文博 宇 野 圓 空氏
同	十八年 一月	日本の人口問題	醫博 古 屋 芳 雄氏

學校視察の實行 文部省が直轄學校への關心を著しく昂めて來たことは文部省視學委員の視學制度が十年末から實行されたことによつても窺はれる。從來視學又は視學委員が大學専門學校の視察に派遣されることは殆んどなかつたのであるが、十年十二月七日と九日の兩日、東京商大教授石川文吾氏が文部省の二、三の人々と來校、具さに教授の實際を視察され、座談會で意見の交換を行つたのを初めとしてその後は殆んど毎年視學官、教學官又は視學委員が來校した。十五年十二月十三、十四日の兩日には、關口實業學務局長、西崎商工教育課長、増地大畑兩督學官一行の綜合視察があつた。第一日午前中は各教官の授業を具さに視察、午後は合同體操、教練、報國圖鍛鍊部各班の活動振りを觀、第二日は研究所、體育館、寄宿寮等の施設を視察した。右終了後、座談會を開き隔意なき意見の開陳交換があり、相互に理解を深めるところが多かつたが之は同時に文部省の教育總括の意嚮を如實に示してゐるものである。

教育の統制 入學難、試験地獄といはれるほど我が國の入學試験へは受験者が殺到する。さうして試験期日が各學校區々別々である時は志願者の延人員を徒らに増大してよいよ受験競争を苛棘激甚ならしめるから、この弊を除くために、文部省は昭和三年から校長會議の申合に基いて試験期日を大體一班、二班の二つに統一した。試験科目と方法も略一定して來たけれども、なほ各學校の方針に委せられてゐた。然るに十七年に至つて試験期日は文部省に於て一定し、實業專門學校と高等學校とを同一とし、且つ一班、二班の別を無くした。入學志願者數は隨て大幅の減少を見た（本校の如きも開校以來の最低記録を示し、七六一名となり最高年度の約半數となつた）。十八年には文部省に於て入學試験一切を統制し、試験期日は高等學校と專門學校とに別け、それぞれ同一日に施行することとなつた（本校十八年度受験者數一、五四三名、前年の略二倍）。試験問題もすべて文部省で作成出題することとなつたのは著しい變化である。

學科課程は各商商とも商業經濟法律に關する學科を中心として、相似てはゐたが各學校とも特色を持ち細部に互る時は、かなり相違してゐたし學科の名稱も一定してゐなかつたが、十六年實業教育振興中央會の作成した統一學科目案を各商商で採用することとなり、ここに學科課程が全國的に統一された（詳細は學科課程のところで記述する）。

又教科書も十六年以來、文部省の認可を要することとなり、教授事項の内容にも國家的統制が加へられることとなつた。

次に實業學校は完成教育であることを建前とするが故に、國家が人的資源を必要とする戰時下に於ては、卒業後直ちに實務又は軍務に就き國家の要請に應へしめたいのではあるが、進學を悉く禁止することは青年向學の志を抑壓するものであるから、文部省はその兩要請の折衷として進學制限を執り、卒業生數の一割以内を限り學校長の推薦に依つて上級學校への進學を認めることとし、且つ浪人生活を許さざることとした。隨て中等商業學校から本校第二部へ受験するものと、本校卒業生にして上級學校へ進學せんとするものとは、この文部省の方針に隨はねばならない。本校も昭和十五年から嚴格に一割以内の推薦を實行してゐる。

專門學校令の改正 實業專門學校は實業學校令及專門學校令に準據する教育機關であるがその關係法令の教育目標は次の如くであつた。

實業學校令第一條

實業學校ハ實業ニ從事スル者ニ須要ナル知識技能ヲ授クルヲ以テ目的トシ兼テ德性ノ涵養ニ努ムヘキモノトス

專門學校令第一條

高等ノ學術技藝ヲ教授スル學校ヲ專門學校トス

專門學校ニ於テハ人格ノ陶冶及國體觀念ノ養成ニ留意スヘキモノトス

然るに教育の新體制を整備するため文教の根本的刷新を圖り、劃期的なる學制改革を斷行したが、十八年一月二十一日付の官報によつて教育に關する五勅令が公布され、專門學校令はその第一條を次の如く改正された。

專門學校ハ皇國ノ道ニ則リテ高等ノ學術技藝ニ關スル教育ヲ施シ國家有用ノ人物ヲ鍊成スルヲ以テ目的トス
 この改正條文に於て最も注目せらるる點は、從來の如く專門學校を以て高等の學術技藝を教授するところとせず、「皇國の道に則りて」「國家有用の人物を鍊成する」道場としたことである。皇國の最高目標へ到達すべき軌道の上に乘せて國家に有用なる人物を鍊成するので、單なる學術技藝の教授所ではなく、崇高なる目標を指向して人間を作る道場、之が學園の本質となつたのである。知育偏重の弊を去つて知育德育體育三位一體の修練の場之が學園である。

且つ從來實業專門學校は文部省實業學務局の監督下にあつたけれども實業學校といふ特殊系統は廢されて、實業專門教育も專門學校として專門教育局の系統に入ることとなり、實業學務局が廢止された。

五 學科課程の改革

學制改革 昭和十二年近衛內閣成立するや、教育の刷新振興がその重大政綱の一つとして取り上げられたが、その實現を期するため同年十二月教育審議會を設置し、しかも上諭を仰いで審議會の決議は必ず實行するといふ堅き決意を示した。さうして政府は審議會に對して劈頭「わが國教育の内容及び制度の刷新振興に關して實施すべき方策如何」を問ふた。この諮問に對して審議の便宜上、初等教育、中等教育、高等教育、社會教育、教育行政及財政の五部門に分ち各專門委員が審議を重ねて成案を政府に答申し政府は之を基礎として教育の刷新、内容の

整備を圖るところがあつた。因に本校田尻校長も臨時委員を仰付けられ、專門委員として參劃したのである。

青年學校の義務制、國民學校八年制、師範學校の官立專門學校への昇格等現行の教育制度は孰れも教育審議會の答申並に建議を基礎とした新制度である。

その後支那事變の長期戰化更に大東亞戰爭勃發は教育面に著しく影響し、一方に於て日本産業の重化學工業への轉換と相俟つて工業教育の擴充となり、他方、軍事及び産業兩方面に於ける人材要求著しきものがあるために教育期間の縮減と應急の措置としての學年短縮が要請せられるに至つた。十八年度より實施せらるる中等學校四年制、高等學校二年制は即ち之であるが、專門學校三年制は易らざるを以て本校は依然として三年制ではあるけれども、抑々高商三年制は教授上かなりの無理があり、これを四年制とすることが最も教育効果を大にすると考へられるために田尻校長の如き久しきに亙る持論として四年制を主張してゐたのであるが、近年の情勢—教育期間の短縮といふ情勢の裡に在つては、この三年制を以て最も効果ある教育を施さねばならない。

第二次學科課程の改正 昭和七年四月から實施された第一次改正の目標は、基礎學科目と特殊專攻學科目とに二大別し、前者を一、二年で教授し後者を三年で講ずる方法を執り學生に重點的專攻をなさしめんとする狙ひであつてそれは理想としては確かに優れてゐたけれども、實施して見ると、第一に學生が選擇科目といふので之を輕視する傾向があつたこと、第二に科目が過度に細分されてゐるに拘らず教官數は増加することが出來ないから、一教官の擔當科目が多くその負擔に堪えないといふのが主なる欠陥として教授効果が期待したやうに上らな

改正事項中、重要な點を上げると、先づ教授時數を一週三十二時間とし、從來の三十四時間より二時間縮減し、選擇學科目を廢止して學科目を綜合主義とし、從來の學科目が専門分岐に急で各科の間の聯繫が殆んど無視されてゐた弊を改め、更に日本產業論、東亞經濟論、經營及市場分析等が新環境に即應して新設されたことである。

又第二外國語は、第一次改正以降、第一學年第二學期から課してゐたが之を第一學期より課し、第三學年の第二學期には之を隨意科とすることとなつた。尙商業史、商業地理は經濟史、經濟地理となつた。

（昭和十五年三月廿二日
文部省令第十二號）

學 科 目		學 年	
第一學年每週教授時數	第二學期	第一學年每週教授時數	第二學期
一	三	一	三
二	二	二	二
三	七	三	七
七	三	七	三
三	一	三	一
二	三	二	三
六	六	六	六

[illegible]

特別計	講義	三三	三三	三三	三三	三三	三三
特	義	不定時	不定時	不定時	不定時	不定時	不定時

備考

- 一、第一學年ノ學科目ニ於テ(中)ト記シタルハ中學校出身者、(商)ト記シタルハ商業學校出身者ニ之ヲ限ス
- 二、第二外國語ハ支那語、西班牙語、獨逸語、佛蘭西語、露西亞語、和蘭語及馬來語ニツキ其ノ一ヲ選擇履修セシム 但シ學校ノ都合ニ依リ其ノ一種又ハ數種ヲ缺クコトアルベシ
- 一旦選擇シタル第二外國語ハ變更ヲ許サズ
- 三、珠算ハ中學校出身者ニ限リ第一學年ニ於テ每週一時間ヲ課スルモノトス
- 四、演習及研究指導ノ學科目ハ商業、經濟、法律ニ關スルモノニ限ル
- 五、前表ニ掲ゲタルモノ、外隨意科目トシテ次ノ諸學科ヲ置ク
經濟心理、外國語、珠算、タイプライティング、速記術、書法、古典講義
但シ右隨意科目中ノ外國語ハ第三學年第二學期ニ於テ其ノ前學期ノ繼續授業トシテ希望者ニ之ヲ限ス
又右隨意科目中ノ珠算ハ第三學年第二學期ニ於テ希望者ニ之ヲ限ス

附則

本令ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
本令施行ノ際現ニ第二學年以上ニ在學スル生徒ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ハ新舊學科課程ヲ斟酌シテ之ヲ定ム

然るに新課程實施後一年にして、卒業繰上げとなり、十七年三月の卒業期は十六年十二月末となり更に十七年は九月と、六ヶ月の短縮となつたため、その対策として學年末休暇及び夏季鍛鍊期間(夏休)の縮少と每週授業時數の増加とを以て之に應じ、學力の低下を防がんとし、ここに十七年度に於ては、新課程による一學年及二學

年と、舊課程を主とし之に新學科課程を加味した三學年に對する應急措置が講ぜられた。かくて第二次改正課程が全學年に互つて實施されることになつたのである。

十七年度學科課程表 (臨時)

學科目	第一學年每週 授業時數	第二學年每週 授業時數	第三學年每週 授業時數
修身	一	一	一
體操	一	一	一
教練	二	二	三
國史	一	一	一
國語	(商) 二	二	二
數學	(商) 一	五	五
英語	六	二	二
第二外國語	三	二	二
法律	二	二	三
民法	二	二	三
商法	三	二	三
經濟理論	三	二	三
經濟地理	二	二	三
經濟史	二	二	三
經濟政策	三	三	三
統計學	三	三	三

一六五

りとされ、統制乃至計畫經濟にあつても經營配給交易が商業機能として愈々重要性を帯びる所以を明確にし、商業が決して個人の營利追求のみに限られず、却て國家的使命を有するが故に、商業者の報國精神が同時に愈々高揚されねばならぬ點を強調せんとするにある。

又學科目の多岐に互る結果、多くの學校では從來一週三十四時間制を採用してゐたが、今次の改正によつて三十一時間とし、詰込主義を排して獨創的研究の餘裕を持たせ、同時に「演習」を必修課目として師弟接觸による個人的啓發指導を強化したことは頗る意義ある點である。

因にこの高等商業學校標準教授要綱決定の主旨として調査委員會の指示せるところは次の如くであつた。

- 本教授要綱は、商業教育の全學科課程を通じて又全教官の統一ある指導及教官と生徒との緊密なる接觸により、日本商業精神の確立を期する事を主眼とする商業教育の指導精神と、配給、生産經營、貿易の三分野をその内容とする商業教育の目標とを明かにすると共に高等商業學校の標準となるべき學科目學年配當表と學科目教授要綱とを示したので、現行の三年制を基準として作成された結果、學科目編成並に教授時數等に於て著しく不十分なるを免れず隨つて各校教育の實際に於ける教官の周到なる研究指導と緊密なる教官相互の連絡に依り、本要綱編成趣旨の達成に實効を期する様格段の配慮を要望される。
- 一、國體の本義と興亜の大使命を通じて皇運を扶翼し奉るの信念を涵養すること
 - 二、生産と消費の連絡調和を圖り日本國民經濟の圓滑なる運行に資する配給機能の國家的意義を自覺すること
 - 三、産業の合理化と經營能率の増進を圖り日本産業の健全なる發達に貢獻する經營機能の重要性を認識すること
 - 四、内外物資の流通を圖り日本國民經濟の發展と東亞共榮圈の確立に寄與する貿易の重大任務を認識すること
 - 五、大國民たるの心身を鍛成し國威宣揚に貢獻する海外雄飛の精神を發揚すること

改正の主要事項

以上の如き趣旨に従ひ學科目學年配當表作成上特に留意せられた事項は次の諸點である

- 一、學科目の整理統合 從來多數の學科目に細分せられたものを統合した學科目數を整理減少し必須學科目を共通學科目と特殊學科目とに分ち更に共通學科目を普通學科目と専門學科目とに分ち、専門學科目は法律學、經濟學、商業學、演習の大科目分類とし學科目の體系を整備した

二、學科目名稱の統一

- 三、教授内容の改善と必須學科目の新設國史、日本産業論、東亞經濟論等の學科目を必修とする

- 四、每週教授時數の減少研究的自學自習の風の振作と報國團活動との關聯を考慮して、每週三十一時間を標準とする

- 五、分科制の採用 特殊學科目に關しては生徒卒業後の職業分野を考慮し各地方學校の事情に應じて第三學年に於て、商業貿易、經營の分科を設け、各分科共その科に適當なる學科目を學校に於て選定して每週五時間課する様分科制を採用した。但し特に必要ある場合は特殊の學科目を組合せ適當なる分科名を用ひて二分科を設け、或は分科制に據らず單一なる特殊學科目編成をなし得る事とした

六、選擇科目制の廢止

- 七、演習制の確立 教官と生徒との人格的接觸並に生徒相互間の切磋琢磨に依り日本商業精神の體得を期すると共に眞的研究的態度を養ふ爲生徒を少人數の班に分ち教官之を分擔して研究演習を行ふ演習制を確立して正科とする方針をとつた

八、隨意科目の取扱 タイプライテング速記其他を隨意科目とする

- 九、特別講義の取扱 學界實業界其他各方面の講師に依り隨時日本文化講義、産業報國精神特別講義その他産業經濟の實際問題等に關し適切なる特別講義を行ひ、常に教科の清新と實際化を圖り得る事とする

- 十、體位向上 教練の重視及修練強化との關聯、體位向上を期し教練を重視する爲、各學年共體操每週一時間、教練每週二時間を課する事とし、體操には剣道柔道弓道等武道を加へ得る事とした、又修練組織との關聯をも考慮して報國團活動に十分なる時間的餘裕あらしむる様考慮した

十一、外國語の取扱 外國語は第一外國語及第二外國語に分ち、二種類の外國語を履修せしむる事とした、尙第一外國語の教授時數は他學科目の關係及教授總時數減少の關係上從來に比し減少を來し、之が爲教授方法の工夫改善に依り教授効果の低下を來さざる様特に留意する

本校に於ける新學科課程

學科目	第一學年每週教授時數	第二學年每週教授時數	第三學年每週教授時數
修身體操	一	一	一
敎練	一	一	一
國文	二	二	二
國語及漢文	二		
數學	(商) 一		
物理學		二	二
化學		五	五
第一外國語	六		
第二外國語	三	二	二
法學	二		
憲法			
民法		三	三
商法	三		
經濟學			
經濟學原論			

經濟學	二	三	二
經濟學史			
經濟學地理			
財政學		二	二
金融學			
統計學			
日本經濟學			
東亞經濟學			
商業概論	二		
經營學		二	二
交通學		二	二
保險學		二	二
簿記學	(中) 一		
會計學	(中) 三		
商業概論	二		
珠算學	(中) 一		
商業概論	一	一	二
工業概論	一		
演習			
特殊學目			

特別講義	計
不定時	三一
不定時	三一
不定時	三一

備考

- 一、本表中(商)印ヲ附シタルハ商業學校出身者及之ニ準ズル者ニ(中)印ヲ附シタルハ其ノ他ノ者ニ之ヲ課ス
- 二、體操中ニバ武道ヲ含ムモノトス
- 三、第一外國語ハ英語トス
- 第二外國語ハ支那語、馬來語、西班牙語、獨逸語及佛蘭西語トシ其ノ一ヲ選擇履修セシム
- 四、特殊學科目ハ生徒ヲ左ノ三分科ニ分チ各分科ニ屬スル學科目ノ中ヨリ學校長之ヲ指定シ毎週五時間ヲ履修セシム

商業分科	學科	貿易分科	學科	經營分科	學科
學科目	授時數	學科目	授時數	學科目	授時數
配給	一	國際金融	一	工業經營	一
會計監査	一	保險各論	一	組合監査	一
金融各論	一	交通各論	一	會計監査	一
保險各論	一	世界經濟論	一	原價計算	一
交通各論	一	植民地論	一	經濟分析	一
景氣論	一	貿易實踐	一	社會政策	一
組合論	一	貿易實踐	一	工業各論	一
商業實踐	一				

五、本表ノ外隨意學科目トシテタイプライティング及速記ヲ課スルコトアルベシ

- 六、商業文ニ於テハ書法ヲ併セ課スルモノトス
- 七、演習ノ學科目ハ法律、經濟、商業ニ關スルモノニ限ル

右新學科課程は十七年度より實施されたのであるが、同年は學年短縮の應急措置として上述せる臨時學科課程を採用し、十八年度から全學年に互つて適用實施されたのである。但し當分の間卒業期六ヶ月繰上げ實施の對策として三十一時間制を三十四時間制とし、六ヶ月短縮を三ヶ年に割振り増課した。

増課課目次の如し

第一學年	經濟原論一時間、
第二學年	民法一時間、 東亞經濟論二時間
第三學年	經濟政策一時間、 東亞經濟論一時間、 會計學一時間

なほ三分科學科目中履修すべきものは次の如く決定した。(十八年度)

商業分科	學科	貿易分科	學科	經營分科	學科
學科目	授時數	學科目	授時數	學科目	授時數
配給	一	南洋事情	一	工業經濟論	一
會計監査	一	貿易實踐	一	配給	一
金融各論	一	金融各論	一	會計監査	一
保險各論	一	保險各論	一	原價計算	一
交通各論	一	交通各論	一	社會政策	一

三分科制實施第一年度たる昭和十八年度に於ける各分科志望者数は、貿易分科二一、商業分科五二に對して經營分科は一二七の多數に上つてゐるのは、商業職能が流通部門から生産部門へ重點を移した時代的反映と見られるであらう。演習志望者數に現はれた時代的反映と相應する現象である。

卒業期繰上對策 三年生の卒業期繰上げが文部省から通達されたので九月勿々その對策を協議して次の如く決定實施した。十一月二十四日ゼミナール終了、十二月十日卒業論文提出、十三日授業終了、十五日より二十日まで學年試験、二十七日第十六回卒業式舉行。この三ヶ月短縮を補ふため十月から第三學年の授業時數を二週三十九時間として七十時間を増課した。さうして當時既に十七年度に於ては六ヶ月の繰上げが確定してゐたので、當時の第二學年に對しては、十七年一月初めから二月末まで、商法、經濟政策(二)、東亞經濟論、經濟史、保險教練等第三學年の學科目毎週七時間を増課し第二學年の課程と併せ履修せしめた。二月二十三日より學年試験を行つた。三月一日から四日まで入學試験、その間三月一日より十日まで學年末休日とし十一日から勤務作業六日間、十六日より第一學年は第二學年の授業、第二學年は第三學年の授業を開始した(學年試験の結果未發表につき各學年原學年のままの姿で授業)。かくの如き措置を豫め執つた上に、十七年度には既述の臨時學科課程によつて授業し且つ夏期鍛鍊期間を七月二十二日より八月十日まで三週間に短縮して六ヶ月繰上げ卒業に對處した。

更に十七年十月からは各學年とも毎週教授時數を三十四時間とし第一學年より各上級學年の科目の一部を繰上げ授業し且つ十二月に於て第一學年、第二學年の授業を終了し、學年試験を行ひ、一月から三月までは第一學年

は第二學年の授業を、第二學年は第三學年の授業を行ふこととした。即ち第一學年から第三學年まで毎週三十四時間の教授時數に平均し、各學年とも毎日同時刻に授業を終り、演練その他の行事に都合よからしめた。かやうに十二月を學年の區切りとしたため、第一學年は四月乃至十二月で九ヶ月、第二學年は一月乃至十二月で十二ヶ月、第三學年は一月乃至九月で九ヶ月と長短を生じたのは止むを得ないが、一應學園の臨戰態勢は整つたのである。

卒業期繰上げによる十六年十二月の卒業生にして大學受験のものに對して、臨時補習科を設け十七年一月より三月末迄専ら經濟學商業學及英語等毎週三十四時間を課し、演習の方法により指導した。十七年九月の卒業生に對しては大學の選抜試験が九月となつたためにこの補習科開設の必要はなくなつた。

六 研究 施設

ゼミナール 本校は創設以來、二年生及三年生を二十名内外の少人數に分割し、その志望に應じて各專攻教官が毎週一、二時間直接研究指導に當るゼミナール制を採用して頗る効果を擧げたことは既に述べたところであるが、この個別的研究指導制は、新學科課目に於ても「演習」の名稱で各高商に正科として採用されることになつた。

本校のゼミナール制は第二學年のプロゼミナールと第三學年のゼミナールに分れ、プロゼミナールでは専ら原

書講讀の方法によつて、原書の理解の方法を教授し、兼ねて學生の志望選擇せる科目専攻を指導するもので、ゼミナールでは専攻題目の研究報告討論を行ひ、論文作成に導くものである。ゼミナール制の目的はかくの如く學問研究を個別的に指導し、一つの研究題目について「纏まりをつける」方法を教授するとともに、師弟の個別的接觸によつて人格の陶冶に資し學生相互の研究室に於ける近接によつて切磋琢磨せんとする訓育上の効果をも目的としたもので、その効果は蓋し顯著なものがあつた。

プロゼミナールはかくの如く原書講讀を建前としたけれども第二次世界大戰後、原書の輸入難に直面したため日本に於ける複刻版を使用することとなつた結果、從來の如く十乃至十二のゼミナールに分割して異なる原書を使用することは事實上不可能になつた。そこで十五年四月の新學期からは組單位に原書講讀することに變更し、アダムスミスの國富論（原書）を、徳増、渡邊、越村の三教授が講述し、十六年四月からはセリグマンの經濟原論（原書抄録）を、岩本、森田、井手三教授が講述することとした。十七年四月からは再び少數分割制に戻り、原書講讀の建前を必ずしも踏襲せず、すべて指導教官の指導方法に一任することとなつた。

このゼミナール制は、かなり時代の學界の消長、學問傾向を反映し、例へば金本位停止後の數年は金融研究希望者多く、支那事變の長期戰化と國內經濟態勢の變化に伴ふ價格統制經理統制の強化されるや會計學ゼミナールへ志望者殺到し、又政治經濟學と純粹經濟學の論戰華やかとなりゴツトル經濟學が構成體論的又は生活經濟學として理論經濟學界に華々しく取り容れられるや經濟理論ゼミナール志望者が増加した如き、或は南方共榮圈問題

が時代の脚光を浴びて世人の關心を惹き、之に關聯して地政學の如き新しい學問が紹介されるや經濟地理ゼミナールが盛況を呈するなど、孰れもかかる學界乃至は社會的動向を反映してゐる。

英語教授上の一特色 効率高き語學教授法は少數クラス單位を理想とするが之は教官數と時間數との關係で出来ない。そこで本校では各學年を縦に割りA B C D各組を各一人の英語教授が専任して教授する方法を採つてゐる。随つて學生は一ケ年間、一人の教官だけについて英文通信以外凡ての英語講義の教授を受ける仕組になつてゐる。例へば

三年、二年、一年の各A組	西村教授
三年、二年、一年の各B組	河村教授
三年、二年、一年の各C組	伊東教授
三年、二年、一年の各D組	澤崎教授

（英文通信は全學年とも光井教授）

次年度はクラス編成替となるから三ケ年同一教官のみの教授を受けるものは半數以下である。

又西村教授は所謂ディレクトメソッドによつて教授してゐるが、これは同教授の年來の主張であり、英語學界では非常に注目を惹いてゐる。昭和十二年十月三十一日神田一橋講堂で開かれた英語教官會議には、西村教授は擔任の二年B組生徒三十五名を率ゐてそのデモンストレーションを行つた。

圖書館 本校の圖書館は學校の性質上、經濟學に關するものが壓倒的に多いのは當然であり、しかも洋書數が和書數に較べて豊富である。昭和九年度までは洋書數七千四百五十九冊に對し和書は七千七百七十九冊で洋書の方が勝つてゐた。千年度から和書數が漸次洋書數を凌駕し十八年一月現在では和漢書一萬三千七百十四冊に對して洋書數は九千八百八十三冊である。之は支那事變以來強力な爲替管理の遂行によつて洋書輸入が窮屈になつたことに始まり、十六年獨ソ開戦と英米の對日資産凍結とによつて輸入が全く杜絶した結果に外ならない。昨今は和書さへ出版統制と書籍への購買力旺盛のために買入困難を來してゐる状態である。

十八年一月現在の藏書冊數次の如し

和	漢	書	一三、七一四冊
洋	書	九、一八三冊	
合	計	二二、八九七冊	

次に學生の讀書傾向を識るために十三年六月下旬、在校生徒の一齊讀書調査を圖書館で行つたがその結果は次の如くであつた。

先づ調査事項として、愛讀新聞雜誌を問ひ、その讀書目的等を訊ね之を一年二年三年生に分類して詳細な數字を掲げてゐるが、之を綜合してここに述べよう。

新聞は東京朝日、東京日々、讀賣、中外商業の順、雜誌は中央公論、文藝春秋、國際知識及評論、改造、日本

評論の順であり、その讀書の目的は孰れも常識の涵養、知識の獲得、趣味娛樂である。

一般圖書で日常讀むものは文學と經濟とが相匹敵し修養、思想、傳記、哲學、歴史が之に續いてゐる。さうして最近の興味深く讀まれたものとして、「學生と生活」が最も多く「大地」「學生の書」「若い人」「生活の探求」等々文學書又は修養書ともいふべきものが多數の愛讀者を贏ち得てゐることが判る。(詳細は學報第九十二號參看)

十六年十二月一日を期して第二回の讀書調査が行はれた。

讀書傾向は文學が斷然多く、經濟、哲學、歴史が之に次いでゐる。愛好する著者では、經濟の分野では、中山伊知郎、高田保馬の兩純粹經濟學者が多く文化一般では西田幾太郎、三木清、和辻哲郎、阿部次郎諸氏の順であつた。文學では、夏目漱石が斷然多く第二位のトルストイの五倍半であり、島崎藤村、吉田絃二郎のものは下級生に愛讀者多くドストエフスキー、ゲーテは上級生に多い。

學校圖書館の利用程度としては正確を期し難いが大體次の數字が出てゐる。利用する者二四%餘り利用せぬ者四一%殆んど利用せざる者三五%(答申者二七六名)。(詳細は學報第二百二十四號參看)。

紀元二千六百年記念文庫 圖書館では紀元二千六百年記念事業の一部として、圖書分類改正と記念文庫を創設した。從來の圖書分類方法では、激變した最近の商業經濟情勢に聊か不適應となつて來たので之を分類し直したのであるが、之は相當に大仕事である上に事務職員の数が多いから夏休みの勤務作業の一部として激しい勞働に

堪へない學生を動員して之を完成した。

他の事業は記念文庫の創設であるが、從來本校の圖書館には専門學術書は豊富にありながら學生の情操を養ひ教養を高める方面の思想書文學書等は豫算の關係上極度に尠いのは止むを得ないところだけでも甚だ遺憾であり、讀書調査によつても判るやうに文學思想方面への讀書慾は頗る旺盛であるから、記念事業の一つとして此の方面の書籍を買い整へんとしたけれども學校の圖書費を之に充當することは専門學術書を犠牲にする結果となるので、井上圖書課主任は富丘會にはかり同窓會員の寄附に俟つこととした。幸ひ三、二八八圓餘の金額が集められたから、之に在校生の寄附を加へ、精神文化、文藝、科學に關する和書の購入によつて漸次充實し學生の渴望を癒してゐる。其の現在數（十八年一月）は一、一三二冊である。將來も逐次資金を補充して所期の目的を達成せんと志してゐる。

なほ圖書館に於ける生徒閱覽人員、冊數、開館日數及び藏書冊數、（十八年一月現在二二、八九七冊）其の價格の増加實數次の如し。

	開館 日數	閱覽人 員	閱覽冊 數	一ヶ月 平均閱 覽人員	一ヶ月 平均閱 覽冊數	一日平 均閱覽 人員	一日平 均閱覽 冊數
大正十三年度			不	詳			1
大正十四年度			不	詳			
大正十五年度 昭和元年度	日 136	人 4556	冊 8099	人 456	冊 810	人 34	冊 60
昭和二年度	196	4641	7194	464	719	34	37
昭和三年度	185	4483	6074	448	607	24	33
昭和四年度	193	6980	8861	698	886	36	46
昭和五年度	189	17256	23193	1569	2109	91	123
昭和六年度	222	21655	32393	1969	2945	98	146
昭和七年度	207	27562	38032	2506	3457	133	134
昭和八年度	189	24117	27896	2192	2536	129	155
昭和九年度	186	25700	31861	2335	2896	138	171
昭和十年度	201	24040	30184	2185	2744	120	150
昭和十一年度	195	35579	48467	3234	4406	182	247
昭和十二年度	180	30618	43509	2783	3955	170	241
昭和十三年度	198	44395	69762	4036	6342	224	352
昭和十四年度	199	49765	83050	4524	6921	250	417
昭和十五年度	183	31621	52178	2635	4348	173	285
昭和十六年度	180	31274	41276	2843	3752	174	229
昭和十七年度 （十八年一月 マデ）		29755	40672				

備考 以上閱覽日誌ニヨル
昭和15年度ニ於テハ圖書分類變更ノ爲休館又ハ貸出圖書ノ制限等ヲナス
昭和16年度ニ於テハ三年生ハ十二月卒業
和昭17年度ニ於テハ三年生ハ九月卒業
貸出圖書一人二冊三日間

紀元 2600 年記念文庫閲覧状況及蔵書冊数並金高表

年 次	昭和 16 年度	昭和 17 年度 (18年 1 月マデ)
生徒閲覧人員	3,586 人	10,042 人
生徒閲覧冊数	3,586 冊	10,042 冊
開 館 日 数	昭和16年10月 ヨリ開館 95 日	

年 次	昭和 16 年度	昭和 17 年度 (18年 1 月マデ)
蔵 書 冊 数	702 冊	1,132 冊
蔵 書 價 格	圓 1,388.980	圓 2,325.860

備 考 以上閲覧日誌及圖書原簿ニヨル
貸出圖書一人一冊二日間

備付定期刊行物

二五六種

(内譯)

單
獨
刊
行
物

會
社
團
體
組
合

商
工
會
議
所

一八
八〇
四八

備付新聞

三種

官
公
署

學
校

取
引
所

銀
行

一七
六七
五
二一

東京朝日、毎日、日本産業

(以上昭和十八年三月一日現在)

資料の蒐集は購入の方法によらず専ら本校出版物との交換による。調査部が獨立豫算を持たず圖書費の一部に依る以上已むを得ざるところである。

太平洋貿易研究所 設立經過。徳増、渡邊、岡野、井上龜三、井上鍔三、森田、越村諸教授を以て十年末組織した研究所員懇談會が毎月回を重ねて十一年十一月二十五日第十三回懇談會の席上、貿易研究所設置前提として貿易研究會結成を申合せ、貿易のブロック單位別研究調査を當面の研究課題として之を分擔報告することとして既に述べた如く調査報告會を一ケ年に互つて續行。然るに森田教授の留學、越村助教授の應召、事務野口氏の出征等にて不在教官の講義の代理擔當、事務の幅輳等重なり一時報告會を中止するの已むなき状態に立到つた。

貿易研究會結成の申合せと同時に研究所設置の具體案が執り上げられ、研究所整備の内容として(一)貿易文庫の設置(圖書館及調査部所管の貿易關係文獻資料の移管と別途資金又は圖書館費用による貿易關係文獻資料の

一八〇
調査部 専ら資料の蒐集、整理、保管を司ること開設以來變りたることはないが、商學會の事務即ち「商學」の編輯發行事務と公民講座事務、及び新設の太平洋貿易研究所、研究會等の事務は調査部教授と事務書記とが實際には擔當してゐる。

所藏資料 購入分 四〇七
既製冊子 八、九九〇
製本分 八〇一
新聞製本分 三三三
計 一〇、五三一冊

創立後日ヨリノ開設状況及日開月開

(昭和18年2月開)

年次	大正13年度	大正14年度	大正15年度 昭和元年度	昭和2年度	昭和3年度	昭和4年度	昭和5年度	昭和6年度	昭和7年度	昭和8年度	昭和9年度	昭和10年度	昭和11年度	昭和12年度	昭和13年度	昭和14年度	昭和15年度	昭和16年度	昭和17年度 (18年1月迄)	計
生徒開校人員	?	?	4,556	4,641	4,483	6,980	17,266	21,655	27,562	24,111	25,700	24,040	35,579	30,618	44,395	49,765	31,821	31,274	29,755	413,997
生徒開校人数	?	?	7,206	6,162	6,282	7,786	10,834	26,526	32,285	24,241	29,039	28,037	43,069	39,210	61,440	73,788	47,520	36,745	36,421	523,282
開校日数	?	?	8,099	7,194	6,074	8,881	23,198	32,393	38,032	27,851	31,881	30,184	48,467	43,509	69,762	83,050	52,178	41,276	40,672	562,706

年次	大正13年度	大正14年度	大正15年度 昭和元年度	昭和2年度	昭和3年度	昭和4年度	昭和5年度	昭和6年度	昭和7年度	昭和8年度	昭和9年度	昭和10年度	昭和11年度	昭和12年度	昭和13年度	昭和14年度	昭和15年度	昭和16年度	昭和17年度 (18年1月迄)
蔵書冊数	1,409	2,780	3,265	3,770	4,304	5,067	5,491	5,906	6,351	6,627	7,179	8,433	10,485	10,925	11,506	11,985	12,412	13,114	13,714
蔵書冊数	1,376	4,285	4,563	4,855	5,689	6,242	6,495	6,777	7,151	7,151	7,459	7,648	8,079	8,445	8,679	8,972	9,004	9,140	9,188
蔵書冊数	2,787	7,075	7,848	8,625	10,093	11,309	11,986	12,683	13,778	13,778	14,638	17,081	18,564	19,317	20,185	20,857	21,416	22,264	22,897
蔵書冊数			14,510,415	16,662,165	18,194,445	21,377,845	22,953,345	24,433,715	25,720,000	26,942,055	28,438,955	29,182,485	31,818,525	35,432,635	37,391,685	39,162,685	40,976,035	43,745,685	46,245,235
蔵書冊数			29,379,790	31,684,710	33,010,330	41,725,470	43,751,180	45,994,050	47,841,000	50,370,970	53,863,320	55,204,670	61,631,920	65,257,890	67,428,980	69,859,630	71,656,630	73,966,780	74,645,440
計	19,517,645	30,922,755	43,695,205	48,176,875	57,204,775	63,103,315	68,704,625	70,427,795	73,551,975	77,318,025	82,299,275	85,787,165	88,481,445	100,680,615	104,818,665	109,032,865	112,632,665	117,732,555	120,891,675

備考 以上開校日数及圖書開校日数ニヨリ

昭和15年度ニ於テハ圖書分限額更ノ爲事務上臨時休館又ハ貸出圖書ノ制限等ノ爲

昭和16年度ニ於テハ三年生ハ十二月卒業

昭和17年度ニ於テ三年生ハ九月卒業

貸出圖書一人二冊三日間

購入により、(二)貿易研究所のため特別の建築物を設備すること但し右實現まで校内の特別なる室を以て當分
之に充てること等を決議して校長に實現方を要望するところがあつた。その後支那事變の進展とともに南方諸地
域の産業貿易調査研究の必要が痛感されたので、十五年匆々計畫を變更して調査研究の對象を専ら太平洋沿岸地
域とし、廣域經濟貿易理論及政策の研究に當ることとし、その企劃するところを詳細に説明し校長を通じて各務
財團に研究費補助方を申出でた。各務財團もその研究が極めて有效適切なるを認め第一年度の研究資金として一
萬圓を提供されたので一略計劃の實現に邁進することになつた。

當初の計畫では事業を前期と後期とに分ちそれぞれ三年の豫定で地域別に産業貿易の調査研究をすることと
し、前期はまたそれぞれ一年間の豫定で、南洋地帯、濠洲、中南米の順を追ひ、後期は北米地域に集中するとい
ふ相當永續的大規模のものであつた。

かくて第一期事業計畫を次の如く決定し、開所準備を整へ十六年一月二十三日開所式を舉げた。

第一期事業計畫

東亞共榮圈ノ一環トシテノ南洋地域ニ關スル産業及ビ貿易ノ調査研究

一、資料蒐集、調査出張

一、調査研究、資料ノ翻譯

一、太平洋産業研究叢書刊行

一、公開講義開設

一、業者ソノ他關係諸團體ノ聯絡協議

研究所職員及研究員

所長	校長 田尻 常雄
主任	教授 徳増 榮太郎
副主任	同 森田 優三
幹事	同 越村 信三郎
同	講師 井手 文雄
書記	主事 齋藤 照之助
同	書記 野口 勝利
研究員	岩本、下田、南嶺、不二門 徳増、大竹、渡邊、井上、 森田、黒澤、沼田、越村各

教授、井手講師

開所式。十六年一月二十三日銀行集會所に開所式を舉行。所長田尻校長の設立經過、組織、方針等についての

説明あり、續いて第一同卒業生辻嶺二君第二同坂本四郎君第十一同佐地康治君の現地報告を聴いた。
その後資料の蒐集とともに調査研究の成果を上梓し各方面に頒布した。

十七年に至り第二年度の資金一萬圓を受け引續き南方共榮圈の産業經濟の研究調査に當つてゐる。印刷頒布せるもの次の如し。

太平洋産業研究叢書

第一輯 蘭領東印度經濟研究資料 I (十六年六月二十五日發行)

世界恐慌と蘭印の産業貿易政策 第二次歐洲大戰と蘭領東印度經濟 I の國際的統制

第二輯 蘭領東印度經濟研究資料 II (十六年六月二十五日發行)

蘭領東印度に於ける商品統制

第三輯 タイ國産業經濟事情 (十六年十月七日發行)

タイ國産業經濟狀態 タイ國經濟發展の新目標

第四輯 英領馬來の主要産業に就て (十六年十一月十二日發行)

第五輯 世界的危局下に於ける蘭印財政 (十七年二月十三日發行)

第六輯 東亞共榮圈經濟循環の基本圖式 (十七年二月十三日發行)

第七輯 佛領印度支那 (十八年三月五日發行)

地理、歴史、産業の概観

第八輯 華僑研究 (十七年十二月三十一日) 發行

華僑資本の性格とその經濟的活動 華僑の人口構成 配給機構上の華僑の地位 華僑研究文獻

本校圖書館、調査部及本研究部所藏圖書、備付資料より南方關係の文獻、資料を書き抜き之を地域別に分類整理して「南方共榮圈資料目錄」を作成、第三輯まで印刷頒布した。

南方共榮圈資料目錄

第一輯 昭和十六年一月現在 (十六年四月十五日發行)

第二輯 昭和十六年度 (十七年五月十二日發行)

第三輯 昭和十七年度 (十八年十二月二十四日發行)

叢書第一輯乃至第六輯及資料目錄第一輯第二輯を合冊して「南方共榮圈經濟研究」と題し、十七年八月二十日大東書館より發賣させた。

次に H. L. Harris: *Australia's National Interests and National Policy*, Melbourne, 1938. を邦譯し(徳増敬授譯出)「濠洲の政治經濟構造」と題して、十七年八月富山房より發行した。

かくの如く研究所は大東亞戰爭勃發に先立つ滿一ヶ年前に開所し、専ら南方諸地域の産業研究に従事してゐたが、大東亞戰爭と共に愈々使命の重大を感じ一意その目的に専念してゐる。その間十七年五月には、古き歴史を有する外郭團體たる横濱經濟研究會を合體して太平洋貿易研究會を設置し、共榮圈建設上輕視することの出来ぬ

華僑の問題を研究課題として斯界の權威からその核心問題を聴き討議するところがあつた。

五月八日 華僑資本の性格とその經濟的活動

六月九日 華僑の人口構成

外務省南洋局 牟田哲二氏

經濟學博士 井出季和 太氏

七月十三日 配給機構上の華僑の地位

東亞研究所 福田省三氏

右講演の大意は一部に纏め「華僑研究」と題し、太平洋產業研究叢書第八輯として印刷頒布した。

十一月十日には交換船にて十月歸朝せる本校第一回卒業生市川泰次郎君を招き、濠洲の最近事情を聴いた。同君は領事兼商務書記官として久しくカンベラ、シドニーに駐在した新知識である。同月二十五日には陸軍囑託として南方諸地域の産業經營の調査を遂げて歸朝した本校黒澤教授を招きその視察談を聴いた。

本研究所周員渡邊輝一教授は現職のまま二ヶ年の豫定を以て十七年十一月二十五日横濱を出發して佛領印度支那西貢に開設されたる南方學院の教授として赴任目下同地に在り現地教育と調査研究に従事してゐる。

なほ研究所は南方資源の實物標本の蒐集に努め多少之を集め得たるも、資料の入手困難の現状は所期の蒐集を達成せしめないうままで一時的中止の状態であるが、十六年十二月二十四日 賀陽宮殿下御來校の砌り、畏くも御台

覽種々御下問の榮を賜つた。

所藏圖書

和書

八四〇冊

洋書

二五五冊

合計

一、〇九五冊

(十八年三月一日現在)

備付定期刊行物

八種

研究團體

學校内に雜誌「商學」の發行を目的とする組織としての「商學會」のあることは既に敘べた。昭和四年創設當初は「商學」の發行回数は年二回であつたが、早くも六年には年三回となり、第四號から十三年第二十六號までは年三回發行が續けられた。然るにこの頃には既に用紙代印刷代孰れも昂騰して年三回の發行は困難となつた。會費の値上げをしないとすれば發行回数を減らすほか方法がない。會費の値上げを避けた結果、年二回發行と決定し、十四年一月の第二十七、八號は一冊に合せ事實上一回發行を減らしたこととなつた。その後、用紙手當難と印刷所の幅狭のために發行期日が三ヶ月、四ヶ月も遅れる状態の上に物價は益々昂騰し、更に卒業期繰上げ實施等が重なつて年二回發行も困難となつた。よつて十七年には三十五、六號を合冊として發行し、暫行的に年一回の發行となつたのである。しかし之は用紙配給が統制されたことが最大の原因である。

開校二十周年記念號は「商學論文集」として十八年九月上旬發行の豫定であるが、この論文集には、南方經濟研究の論稿が併せ收載される筈である。

なほ學校機關雜誌への用紙制限が著しく窮屈になつたので、今後は不定期年一回の「商學論文集」を發行して雑誌「商學」に代へる計畫である。

商 學

第一號（昭和四、七、一〇）

論 說

鎖國時代に於ける支那の對歐貿易に就て
聯結貸借對照表に關する問題若干
農家經濟に於ける勞働力の自己搾取
CIAの約款ワルソト・ルール
ワイルト・ホイットマン論

時 論

最近の金解禁問題
賠償問題と獨逸の經濟

資料及紹介

ミルス氏の物價變動研究
市販變油の研究

第二號（昭和五、二、二〇）

論 說

下田 禮 佐
小宮山 敬 保
井上 禮 三
不二門 龍 觀
西村 利

森田 優 三
岡野 鑑 記

森田 優 三
南 稻 康 博

人口増加の法則
地方歳出研究（上）
勞働參加株式會社について
製絲工業に於ける産業革命

時 論

失業對策の種々相

研 究 報 告

本邦重要商品價格變動の研究

紹 介

コールの新經濟政策論
外國雜誌論題

第三號（昭五、七、五）

論 說

相關係數理論の發端
債權者還滯の要件に關する一考察
阿片の研究
産業に對する業外線の貢獻
我國の砂糖統制

德増 榮 太 郎

經濟統計研究室

德増 榮 太 郎

森田 優 三
岡野 鑑 記
大 竹 鑑 録
井上 鑑 三

森田 優 三
不二門 龍 觀
下田 禮 佐
南 稻 康 博
田尻 彦 幸

地方歳出研究(中)

時 論

岡野 鑑 記

生糸恐慌と米國景氣の實相

紹 介

井 上 鏡 三

Politic は如何にして學として可能であるか

外國雜誌論題

渡 邊 輝 一

第四號(昭和六、二、一〇)

論 說

債権者還滞の要件に關する一考察(二)
相關係數の意義

不 二 門 龍 觀

地方歳出研究(下)
H. J. S. 氏の事業管理に對する見解と計理學の新使命

森 田 優 三

封建制度打倒運動としての英國宗教改革

岡 野 鑑 記

時 論

德 增 榮 太 郎

米國景氣の實相と景氣豫測の可能性

井 上 鏡 三

紹 介

Politic は如何にして學として可能であるか(中)

渡 邊 輝 一

外國雜誌論題

第五號(昭和六、七、五)

論 說

社債の價格計算と其償還とに就て
債権者還滞の要件に關する一考察(三)
無盡掛金に就て

小 宮 山 敬 保

不 二 門 龍 觀

時 論

米國景氣の實相

井 上 鏡 三

資料及紹介

Politic は學として可能であるか(下)

渡 邊 輝 一

ケインズの物價指數論

森 田 優 三

我國の砂糖統制(二)

田 尻 彦 幸

外國雜誌論題

第六號(昭和六、一一、五)

論 說

ライブチヒ見本市を中心としての歐洲に於ける「大市」の研究
英國産業の衰頹
聯結貸借對照表に關する考察補遺

井 上 鏡 三

下 田 聰 佐

小 宮 山 敬 保

無盡掛金に就て(二)

時 論

小幡 孫 二

賠償問題と國際モラトリアム

紹 介

岡 野 鑑 記

カウツキー「行詰れるボルシェヴィズム」を読む

徳増 榮 太 耶

外國雜誌論題

第七號(昭和七、二、五)

論 説

統計の概念

森 田 優 三

ライプチヒ見本市を中心としての歐洲に於ける「大市」の研究(二)

井 上 龜 三

カーライルの性質と哲學

西 村 綱

資 料

商品容器の考察

南 種 康 博

第八號(昭和七、七、五)

論 説

財政計算書の分析

小 宮 山 敬 保

佛會社法に於ける發起人持分

大 竹 綠

時 論

滿洲に於ける日本人農業經營に關する若干研討

井 上 龜 三

資 料

マンハイムの「知識社會學」

渡 邊 輝 一

外國雜誌論題

第九號(昭和七、一一、二五)

論 説

經營とその主體

井 上 龜 三

アノルド・ベンネットに於ける守銭奴の研究

西 村 綱

時 論

新手形法に就て

不 二 門 龍 觀

資 料 及 紹 介

マンハイムの「知識社會學」(二)

渡 邊 輝 一

米國アンチトラスト法規の一資料

市 川 泰 次 耶

外國雜誌論題

第十號(昭和八、二、二五)

説

現物出資法制論

商業と教育

店頭裝飾に於ける商品の職能

時 論

生糸販賣統制問題の經過

最近の戦債問題

資料及紹介

近時獨逸のカルテル運動の狀勢

外國雜誌論題

第十一號(昭和八、七、五)

論 說

Foreign Exchange Restrictions.

本邦重要商品價格季節變動の研究

資料及紹介

東亞に於ける人口過剩問題

計理の實用

近時獨逸のカルテル運動の狀勢(二)

生絲經濟資料

大 竹 綠
内 山 進
南 種 康 博

德 増 榮 太 郎
岡 野 鑑 記

井 上 龜 三

R. E. M. Cameron.
森 田 優 三

德 増 榮 太 郎
小 宮 山 敬 保
井 上 龜 三

外國雜誌論題

第十二號(昭和八、一、一八)

論 說

解釋方法論管見

アダム・スミスの經濟循環理論研究

時 論

南米各國の經濟的非常時とその對策

資料及紹介

世界貿易の分析と恐慌の進展

マンハイムの「知識社會學」(三)

米國トラスト法研究

生糸經濟資料

外國雜誌論題

第十三號(昭和九、二、一五)

論 說

趨勢變動測定の問題

アダム・スミスの經濟循環理論研究(一)

森 田 優 三
越 村 信 三 郎

岡 野 鑑 記
渡 邊 輝 一
市 川 泰 次 郎

大 竹 綠
越 村 信 三 郎

下 田 禮 佐

非常時財政か財政非常時か
新小切手法について

資料及紹介

近時獨逸のカルテル運動の狀勢 (三)
マンハイム「知識社會學」(四)
外國雜誌論題

第十四號(昭和九、六、二七)

論 說

英國の戰時公債政策研究
エスカラ「商法の自主性」
ホテル會計の島歐的解説

資 料

本邦物價指數の一吟味
世界的重要商品としてのココアの經濟的價值
近時獨逸のカルテル運動の狀勢 (四)
産業復興法とトラスト法
外國雜誌論題

岡野 鑑 記
不二門 龍 觀

井上 龜 三
渡邊 輝 一

岡野 鑑 記
大竹 敬 保
小宮山 敬 保

森田 優 三
福田 龜 三
井上 龜 三
市川 泰 次 郎

第十五、十六號(開校十周年紀念論文集、昭和九、一〇、二二)

第 一 部

白人の人口減少とその影響
法律行為の解釋
商品保存問題
海上保險に於ける填補の種類
人間の自然的人間學的性格と「計養學問」の問題
燃料問題に對する一考察
貸借對照表論の推移と標準貸借對照表
勢力價值學說
權利行使の方式
英國の減債基金制度
本邦移植民の情勢と其將來の發展策
事業管理への補助としての標準減價相の觀察
我國製紙業に於ける産業統制
イギリス重商主義學說と其社會的背景
價格分散と景氣變動

第 二 部

マヤの考古學から見たアトランティダ大陸の假説
コーヘンの論理學に於ける體系概念

下田 禮 佐
大竹 敬 保
南和 藤 博
岩本 啓 治
渡邊 輝 一
田尻 彦 幸
古館 市 太 郎
井上 鑑 三
不二門 龍 觀
岡野 鑑 記
福田 龜 三
小宮山 敬 保
井上 龜 三
德増 榮 太 郎
森田 優 三

岡田 峻
富成 喜 馬 平

ディッケンズの悪人
 Sales Letters の書き方と就
 Otto Ludwig Meisterwerke
 新渡戸博士著「武士道」の研究
 取残された問題
 外國に於けるフランス語
 Fantasy in Poetry
 Some Factors in Japan's Trade Expansion

第十七號（昭和一〇、六、二八）

論 說

スミス經濟學に於ける重商主義批判の重要性
 財貨の代替性の考察
 物價水準移動の限界に關する學說の發展（上）
 英國の戰時公債政策研究（中）
 理解の構造
 ユカタンを中心としたマヤの文化
 續ディッケンズ研究

時 論

英語教授廢止論批判

西村 稠

伊東 彌
 光井 武八郎
 山中 靜三
 西村 稠
 河村 重治
 時田 清
 J. T. I. Bryan
 R. E. M. Cameron

新刊紹介

第十八號（昭和一〇、一、二八）

論 說

交換及分配に於ける社會的正義の實現
 原始土地所有形態に關するフステル・ド・クラランジュの見解
 商品取引に於ける投機の要素に就て
 アダム・スミスの經濟循環理論研究（三）
 英國の戰時公債政策研究（四）
 中央アメリカ文化の特色

資 料

世界貿易と貿易政策（一）
 中・南米を中心としたる世界的商品珈琲（一）
 新刊紹介

第十九號（昭和一一、三、一）

論 說

卸賣商の概念規定
 經濟理論に於ける數量關係
 物價水準移動の限界に關する學說の發展（中）

井上 健三
 德増 榮太郎
 井上 龜三
 越村 信三郎
 岡野 鑑
 岡田 峻
 岡田 要一
 渡邊 輝
 福田 要一

井上 龜三
 井上 健三
 森田 優三
 森田 優三

資料

世界貿易と貿易政策 (二)
中・南米を中心としたる世界的商品珈琲 (二)
新刊紹介
小宮山敬授逝く

岡田 峻

波邊 輝一
福田 要

第二十號 (昭和一一・六・二〇)

論 說

經濟心理學の問題體系
物價水準移動の限界に關する學說の發展 (下)
科學方法論上より見たる二人のメイコンの眞價について
非常時日本の發明界と産業界との相關現象
Jain de Pascua

時 論

米穀の統制と米穀取引所問題
商法中改正法律案略説

資 料

世界的商品アルミニウムの經濟的價值

波邊 輝一
森田 優三
富成 喜馬平
南種 康博
岡田 峻

井上 龜三
大竹 綠

福田 要

第二十一號 (昭和一一・一一・一)

論 說

一九二四年ヨーク・アントワープ規定を論ず
本邦人絹工業の地理的研究
無利子面に於ける無盡利益の考察
商法中改正法律案略説 (二)

經濟問題解説

電力國營問題
日米通商問題
支那の幣制改革
ステープルファクトリーに就て

貿易調査報告

ソ聯邦外國貿易事情

第二十二號 (昭和一二・一二・一五)

論 說

貸借対照表比較分析と比較綜合
も一つの勢力價值學說
屬揚財政と税制改革

越村 信三郎

井上 龜三
渡邊 輝一
森田 優三
南種 康博

岩本 啓治
下田 義佐
小幡 孫二
大竹 綠

黒澤 清
井上 鑑三
岡野 鑑記

近世初頭の航海術
ニヤソン哲學に於けるインスピレーション

經濟問題解説

貿易關係諸法案
フラン切下げ

第二十三號(昭和一二・六・二〇)

論説

銀行資本の循環軌道
醫學發達の基礎條件
Les Voies d'Andorra
新約四福音書に現れたる商品

資料

本邦畜産乳製品の經濟的情勢

經濟問題解説

滿洲國の重要産業統制
勞働立法の一前進

第二十四號(昭和一二・一一・二五)

論説

富成喜馬平
西村 朝

渡邊 輝一
徳増 榮太郎

越村 信三郎
富成 喜馬平
岡田 康雄
南 翔博

福田 要

井上 龜三
井上 龜三

近世初期の數學
本邦産業貿易の動向
滿洲道路交通の機械化
經營經濟的貸借對照表と國民經濟的貸借對照表

經濟問題解説

貿易統制と經濟的摩擦
生糸標準價格の決定

第二十五號(昭和一二・三・二)

論説

衣裳の經濟學
分割償還債券の發行者負擔利廻
南アメリカの人口に就て

經濟問題解説

滿洲に於ける重工業の經營

資料

北支の農産資源と其經濟的價值

第二十六號(昭和一二・七・一〇)

富成 喜馬平
下田 睦一
波邊 輝一
黒澤 清

徳増 榮太郎
井上 龜三

井上 龜三
小幡 孫二
岡田 峻

井上 龜三

福田 要

論 說

古學派と實踐主義
近代米國農業の變遷
最近本邦發明界の展望
重商主義學說の一覺悟

資 料

新企業形態「有限會社」
ライフチヒのメツセ

第二十七、二十八號(昭和十四、一、二五)

論 說

科學者としての軌足萬里
衣裳の文學
メヒロの石油問題について
華僑の現勢

時 論

世界經濟狀況

資 料

富成喜馬平
下田 磯 佐
南 種 康 博
德增榮太郎

井 上 龜 三
山 中 節 三

富成喜馬平
井 上 燈 三
岡 田 峻 一
香坂 順 一

渡邊 輝 一

オーストリアの經濟概觀
最近の人造纖維に就て
本邦に於ける毛皮及皮革の經濟的發展と其給源

第二十九號(昭和十四、七、八)

論 說

問屋制工業論
國民經濟學・經營經濟學・計算經濟學
資金と小切手契約
新興代用品の將來性
本多利明論

時 論

圓ブロック貿易問題
物價統制大綱に於ける原價計算の問題

資 料

本邦に於ける毛皮及皮革の經濟的發展と其給源(二)

書 評

X X

商業經濟時事問題資料

山中 靜 三
武市 一 孝
福 田 要

井 上 龜 三
黒澤 清
不二門 龍 靚
南 和 康 博
富成喜馬平

德增榮太郎
黒澤 清
福 田 要

第三十號(昭和一五、二、二五)

論 說

費用計算の本質とその形態

經濟循環理論の一研究

蒙古族の研究

傳統的「經濟政策論」體系の清算

人口の自然増加に關するロトカの法則

時 論

米穀統制令と米穀市場

資 料

横濱に於ける重要食料品に關する經濟調査

書 評

第三十一號(昭和一五、七、一〇)

論 說

我國人口の安定増加率

「舍密閑余」に關する覺書

傳統的「經濟政策論」體系の清算(二)

沼田 嘉穂
越村 信三郎
下田 禮一
渡邊 輝三
森田 優三

井上 龜三

福田 要

森田 優三
富成 喜馬平
渡邊 輝一

リカアドウの減債基金論批判

時 論

日本農業の經營規模擴大の限度

適正利潤率に就て

資 料

紙類に關する二三の實驗

東南滿洲の鐵產資源

書 評

第三十二號(昭和十六、二、五)

論 說

リカアドウの減債基金論批判(二)

傳統的「經濟政策論」體系の清算(三)

商品の歴史的研究所の提唱

經濟循環の均衡體系

時 論

統制經濟の究局段階

資 料

德増 榮太郎
黒澤 清
南 種康博
武市 一孝

井手 文雄

井手 文雄
渡邊 輝一
南 種康博
越村 信三郎

德増 榮太郎

書評

第三十三號(昭和一六、一二、三〇)

論説

統一原價計算方式の比較研究
サー・ウィリアム・ベティの租税論
アダム・スミスの經濟循環理論研究
番頭手代等の代理權の最大範圍

書評

黒澤 清
井手 文雄
越村 信三郎
大竹 綠

第三十四號(昭和一七、五、五)

論説

告知義務に就て
國家實力と國民所得
一般的均衡に關するバレートの學說

資料

岩本 啓治
森田 優三
越村 信三郎

最近の輕金屬概況

武市 一孝

第三十五、三十六號(昭和一七、一〇、一〇)

論説

企畫院製造工業貸借對照表と獨逸株式會社法貸借對照表との比較研究
南方國産業に於ける企業形態
租税經濟と國民經濟
安定人口論補説
貨幣數量説の一研究
ガラパゴス群島と其將來性に就て
ロトマンの研究

資料

沼田 嘉穗
井上 龜三
井手 文雄
森田 優三
越村 信三郎
岡田 蛟
徳増 榮太郎

國民政治力結集體

渡邊 輝一

學校外の研究團體として「生糸經濟研究會」の活躍したことは前に敍べたところであるが、之は主宰者井上鑑三教授の逝去により自然解散の形となつた。

岡野教授が主宰し殆んど獨力で築き上げたものに「横濱經濟研究會」(Y・K・K)がある。昭和八年十一月に結成され、實務家と理論家との接觸によつて横濱公私經濟の發展を助長しようといふ目的で會員約三百名を擁し、昭和十年前後から華々しい活動を續け、講演會討論會等隔月之を開催して非常な成果を上げた。然るに同教授の關心が大陸政策に向けられ續いて現地滿洲へ赴任されるに及んで、十三年前後から休會することとなつた。

約一ヶ年休會の後を承けて岡野教授に代り徳増教授が常任幹事として續開することとなり、十四年五月十八日新生Y・K・K第一回懇話會を銀行集會所に開催した。爾來十六年末まで大體隔月懇話會を重ねて開いたが、太平洋貿易研究會の成立と同時にこれに合流して發展的に解消することとなつた。

このほか岡野教授を中心とした同窓會員の研究團體「論究會」、黒澤教授を講師とする「經理研究會」等が結成されたが、これ等については同窓會記に譲る。

公民講座 昭和二年始めて文部省より成人講座を委嘱された本校は爾來ほぼ隔年文部省より開設を委嘱され、横濱市民の啓發に資するところがあつたと信ずる。殊に昭和十年以降は準戰體制から戰時體制へと目まぐるしき經濟機構の變化に直面して、この變革の意味を十分理解し得ざる不安を懷ける社會に對して、その時當面の問題を提げて之を平易懇切に解説することは極めて時宜に適したる方法であり、本校は各専門教授を動員して時事問題講座を開設した。十一年度は「非常時經濟問題講座」とし、十月二十二日より十日間、横濱貿易新報社講堂にて開催、十二年度は「戰時經濟講座」とし、十一月八日より一週間、朝日新聞支局講堂に於て開講したが、孰れも三百名を超す聽講者で盛況であつた。

昭和十一年度 非常時經濟問題講座

政治經濟上より就たる太平洋問題

貿易統制の諸問題

下田教授
徳増教授

馬場財政と税制改革

産業統制と電力國營

非常時と蠶糸業

非常時經濟と金融統制

日本精神と新興日本の使命

岡野教授

井上龜三教授

井上龜三教授

森田教授

富成助教授

昭和十二年度 戰時經濟講座

支那事變と國民精神總動員

貿易統制とその影響

日本の工業經濟

統制經濟の原理

大陸政策と生産擴充

滿洲國の經濟建設狀況

支那經濟事情

田尻校長

徳増教授

井上龜三教授

井上龜三教授

岡野教授

渡邊教授

下田教授

商品實驗室と商品陳列所

商品の資源的研究及商品交通の研究と並んで商品の物理化學的研究の必要があるのが本校に於ては特に意を商品實驗に注ぎ、本館階下西側に數室を連ねる實驗室を設け更に本館中央に商品陳列所を置き、隨時參觀せしめて實物知識の把握に資してゐる。陳列商品標本數は四、八一五點（十七年八月一日現在）に達してゐる。南種教授主任として學生の指導に當る。

七 教練と體育

學校教練の重視 陸軍現役將校が本校に配屬されてから宮城善助氏、今田浩氏、田中收氏、遠藤舒氏（少佐として來任、配屬中、中佐に進級）を経て昭和十一年十二月一日付を以て佐分利重雄大佐が配屬されることとなつた。ここに始めて大佐級の配屬將校が任命されたのであるが、それは當時時局が漸く多端の情勢にあつたから、陸軍當局が學校教練を重視し大學專門學校には大佐を配屬せしめ教練の實績をより昂揚せしめんとするに外ならない。佐分利大佐は十六年十二月まで五ヶ年在任、小白講師應召不在中の手不足と戰時體制下の非常時局の裡に學生訓練の大任を果された。此の間吉濱囑託が助教として佐分利大佐を輔けた。佐分利大佐は十六年十二月應召後任に一時正木兼三大佐來任したが十七年二月には藤堂大輔大佐と交迭した。

教練教官小白（舊姓石川）講師は開校以來配屬將校と共に教練を擔當してゐたが十二年支那事變直後應召され第一線にあつて死線を越すこと屢とであつたが修水河畔の戰闘中、マラリアに罹り十四年四月内地へ白衣の歸還をなし十五年春應召解除、四月の新學期から再び教練を擔當されたが、實戰に得たる戰術と死線を越えた體驗に據つて生きた訓練を施し、藤堂大佐の老練と相俟つて教練の實は一段と上げられてゐる。毎年末に於ける査閲に常に優良の講評を査閲官より受けてゐるが洵に故ありといふべきである。

この間特筆すべきことが四つある。第一は十四年五月二十二日宮城前廣場に於て、現役將校配屬十五周年記念

の御親閱を受けたことである。校長生徒主事配屬將校及生徒十名は紫紺の校旗を捧持して、全國千八百余校、三萬二千五百余名の學徒とともに、天顏を咫尺に拜し長くも御親閱の光榮に浴した。この日、本校に於ても校庭にて閱兵分列を舉行した。

此の日青少年學徒に對し勸語を賜ふ。

第二は教練の強化で十六年第二學期より毎週二時間の教練を課し、今後は第一、第二學年は年七十時間、第三學年は年六十時間を實施することとなり、野外教練も從來四日間であつたが七日間となつた。

第三は十六年十二月二十四日。東部第一部隊長賀陽宮殿下の御台臨を忝うし優渥なる御訓示を賜つたことである。曩に本校では、昭和七年十一月十七日、歩兵第一旅團長朝香宮殿下の教練狀況御視察を忝うしてゐるが、再び宮殿下御台臨の榮に浴したのである。

訓 示

竊ニ本校ノ教練査閲ヲ豫定シテ果サス

本日來リテ聊カソノ實ヲ塞クニ際シ過日實施セラレタル査閲ノ成績ノ優良ナリシヲ聞キ今面ノ邊リソノ成果ノ

一端ヲ實視シ深ク満足スル所ナリ

惟フニ時局ハ眞ニ重大ニシテ青年學徒ノ任タル頗ル重キヲ加フ

諸子夫レ愈々文ヲ修メ武ヲ鍛ヘ國家カ諸子ノ明日ニ期待スル強健ナル身體ト旺盛ナル實行力並ニ率先國難ニ赴

ク烈々タル氣魄トヲ涵養シ以テ

聖恩ノ萬一ニ答ヘ奉ランコトヲ期スヘシ

昭和十六年十二月二十四日

東部第一部隊長 恒 憲 王

第四は十七年査閲が七月十四日に行はれたが、閱兵分列に當り報國隊の編成で受閲することとなり、岩本教授大隊長として帶劍指揮に當り、中隊長小隊長もまた帶劍の教授が指揮號令した。俱學俱進の典型といふべきであらう。

野外教練は支那事變後、輸送の關係で全校同時に實施することが出来なくなつて學年別に行ふこととなつたが、教職員また交替制で廠舎に起居を共にし、具さに學生教練の實際狀況を視察する。近年は殆んど富士裾野の演習地に於て實施し、駒門、板妻、瀧河原三廠舎の孰れかへ宿營する實狀である。十七年度は次の如く學年別に五日間を富士裾野で、二日間を學校附近に於て行つた。

五月二十日—二十四日	第三學年	駒門
六月十五日—十九日	第二學年	瀧河原
七月三十日—八月三日	第一學年、別科	瀧河原

體育に出色 體育を重視する田尻校長と體育を科學的に研究實踐する下津屋教授のあるありて本校の體育は頗

る出色のものであることは等しく認めるところである。

昭和二年夙くも體育館竣工し内部の施設も年を追ふて充實して來たが、その年六月には下津屋教授の指導の下に體育研究會が結成され、後年の華々しい活躍の發足點を成したことは既に述べたが、十一年十一月三日日比谷音樂堂に於て行はれた全日本體操祭には、學校體操、社會體操の各種に互り妙技を振ひ、全日本體操聯盟會會長平沼三氏より賞狀を授與され、十四年二月十一日には文部大臣より次の如き表彰狀を授與され、「體育高商」の名を益々昂揚した。蓋、全國大學高專校中最初の表彰校の榮譽を擔つたからである。

表 彰 狀

横濱高等商業學校學校

體操ノ振作ニ力ヲ效シ施設經營亦宜シキヲ得其ノ成績洵ニ顯著ニシテ他ノ模範トスルニ足ルモノト認ム
仍テ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和十四年二月十一日

體操表彰會總裁 文部大臣 男爵 荒 木 貞 夫

體操表彰會會長 全日本體操聯盟會會長 平 沼 亮 三

體育運動實施狀況は次の如くである。

學科課程に配當されたる體操のほか、毎日（土曜日を除く）午前十時より十時二十分に至る二十分間全校合同

體操を正課として實施してゐる。この合同體操は昭和十三年四月八日より開始したのであるが、その種目として一、國民保健體操第一。二、同第二。三、建國體操。四、健康體操。五、行進駢走。六、大日本國民體操。七、大日本青年體操。八、自校體操。九、作業體操。一〇、日本產業體操を時期に應じて選定實施してゐる。

十二年十一月第一回全校生徒體力検査を實施し、翌十三年も之を行ひ、百米、砲丸投、走幅跳、懸垂屈臂、建國體操の五種目に就て審査し、標準記録に達したものは、全日本體操聯盟に通告して合格賞を與へることとした。この體力検査は十四年度より厚生省體力章檢定に引繼ぎ現在に及んでゐる。

長き歴史と華々しい活躍を續けた體育研究會は昭和十三年一月體操部として學友會の一部となり現在は報國國の體操班として、依然對内對外孰れの方面にもよく活躍してゐる。

體育館は體育高商の殿堂であつて内部の設備の如きは體育專門校に較べて決して遜色なく完備してゐる。體育館の廣さ百二十六坪之に附屬室四十五坪計百七十一坪。高さ四間。建設費三八、一八八圓、内部の設備一〇、四四四圓。

十六年十二月賀陽宮殿下御來校の砌、體育館に於て各種の體操實演を台覽に供し御嘉賞の御言葉を賜はつた。なほ各種の國家的行事に於ける保健強調の場合は、全校教官生徒その運動に参加して保健の實を擧ぐるに努めてゐる。十二年十月十三日開始の「國民精神總動員」週間第七日非常時心身鍛錬日には全校生徒二列縱隊で四千米のクロスカン トリーを行へる如き、大東亞戰爭一周年記念行事第三日十二月七日心身鍛錬日には二年武裝一年

非武裝教職員全部參加して、鎌倉街道を弘明寺、日野を経て大船に至り戸塚を経て二十六軒行軍を行へる如き、又十八年二月二十一日より二月四日まで十五日間の「耐寒心身鍛錬期間」には全校合同體操を行ひ、報國團鍛錬各班は放課後一時間塞稽古武道演練を實施せる如きは即ち保健強調週間に於ける本校の實踐せるところである。

最後に體育について一言すべきは體育運動の統制である。二千六百年記念祝賀のオリムピック大會が支那事變のため無期延期されるとともに戰時下學徒體育の強化を圖り皇國民鍊成の目的を以て體育臨戰態勢を整へるため學、徒體育振興會が十六年十二月二十四日文相官邸に於て發會式を擧げ文部省の外郭團體として體育の統制に當ることとなつた。實踐即應體育への轉換が方に遂げられようとしてゐる。

八 入學試験と就職狀況

入學試験 本校の入學試験は二部制を採用し第一部中學校出身、第二部商業學校出身として前者の數學の代りに簿記を課してゐる。かやうに中學商業双方から選拔入學せしめる方針を執り、その志願者は開校當時から昭和二年頃までは二對一の比率であり、入學許可も二對一であつた。然るに經濟不況の深刻化とともに完成教育たる商業學校出身者の入學志望者數が著しく減少し昭和七年度から十一年度までは三對一の比率となつた。しかも入學許可數は二對一であつたから、それだけ中學出身者の競争率は激甚であつたといへる。尤も高等學校の入學試験をも受けられる場合には多少割引して見ねばならないけれども。然るに十二年度からは大體二對一の比率とな

り、十五年度は三對二、十六年度十七年度は一對一の比率となつた。この現象は一つは好況による商業出身者の進學が多くなつたためと高等學校と本校の入學試験期日が重なつたために中學卒業生の受験者が減少した結果にほかならぬ。十八年度は高等學校と、専門學校の入試期日を異にした結果、再び中學卒業の志願者が激増した。之に反して商業卒業生は進學制限のために著しい増加は見なかつた。

入學志願者数の最高は十八年度の一、五四三名を除けば十一年度の一、四四名で競争率は十八年度七・五倍、十一年度九・四倍で後者の方が激烈だつた。最低は十七年度の七六一名で競争率は三・七倍であつた。蓋、十六年度より採用人員が二〇〇名となつたから入學難は相當緩和された譯である。

本科入學志願者並入學者異年比較表

募集年次	種別	中學	入學志願者計	中學	入學志願者計
大正十三年度	中學	七三八	二九〇	一、〇二八	八四
大正十四年度	中學	七四九	三九四	一、一四三	一〇二
大正十五年度	中學	六一一	三三六	九四七	五二
昭和二年	中學	七三三	二九七	一、〇二〇	九四
昭和三年	中學	七〇三	三四五	一、〇四八	一〇七
昭和四年	中學	九二五	三四八	一、二七三	八六
昭和五年	中學	七七五	二七三	一、〇四八	八三
昭和六年	中學	七〇八	二二三	九三一	一〇九
					九六
					五四
					一五〇

昭和七年度	七九三	二二七	一、〇二〇	一〇四	五四	一五八
昭和八年度	九〇一	二七八	一、一七九	一〇一	五一	一五二
昭和九年度	八八一	二五五	一、一三六	一一六	四九	一六五
昭和十年度	九五九	二九三	一、二五二	一二六	五〇	一七六
昭和十一年度	一、〇八三	三六一	一、四四四	九八	五五	一五三
昭和十二年	八七四	三八二	一、二五六	一一〇	六〇	一七〇
昭和十三年	九二一	四五九	一、三八〇	一一三	六六	一七九
昭和十四年度	八二三	四八六	一、三〇九	一〇〇	六七	一六七
昭和十五年度	八〇九	六二四	一、四三三	七九	九三	一七二
昭和十六年度	四七五	四六七	九四二	九一	一二二	二二三
昭和十七年度	三八五	三七六	七六一	八一	一二六	二〇七
昭和十八年度	一、〇三六	五〇七	一、五四三			

貿易別科入學志願者並入學者異年比較表

募集年次	種別	中學	入學志願者計	中學	入學志願者計
昭和四年度	中學	二〇五	三五	二四〇	三五
昭和五年度	中學	七二	二六	九八	一一
昭和六年度	中學	三七	六	四三	五
昭和七年度	中學	三四	七	四一	五
昭和八年度	中學	五〇	七	五七	四
昭和九年度	中學	八三	一四	九七	六
					二九
					六
					四
					三三
					三五
					二一九

昭和十年度	一九	一三	一三二	二九	一	三〇
昭和十一年度	一五〇	二五	一七五	三三	七	四〇
昭和十二年度	一六四	五〇	二二四	三三	一八	五一
昭和十三年度	八四	三三	一一七	三三	一六	四九
昭和十四年度	八〇	三七	一一七	三四	一七	五一
昭和十五年度	七四	三五	一〇九	三三	一六	四九
昭和十六年度	四七	五一	九八	二二	二八	五〇
昭和十七年度	七〇	六四	一三四	一八	三三	五〇
昭和十八年度	七八	一四二	二二〇	一三	四一	五四

入學志望者にして中等學校在學中の成績極めて優秀なる者に對しては二十名位を限度として無試験檢定入學を許可してゐる。

但し無試験といつても昭和八年度からは口頭試問を行ふことになつたから、試験檢定者と異なるのは筆答試問だけを免する點である。

昭和十四年度入學者に伍して、外務省より委託の泰國學生一名聽講生として入學を許し十六年十二月畢業せしめた。

就職狀況 「創業時代より開校十周年まで」の篇に於て、昭和七年頃より景氣好轉し假令跛行景氣であつたといへ就職狀況は頗る朗らかとなつたことを記述したが、兩來軍備の充實に伴ふ軍需工業の振興、滿洲經濟建設

の進展等多年悲境に沈淪してゐた經濟界は愈々活況を帶び景氣は逐年上昇の一途を辿り、重工業の隆昌、化學工業の勃興、其他鑛工業殷盛を來し、更に昭和十二年支那事變勃發以來、生産力擴充に拍車が掛けられ、重化學工業は驚異的發展を遂げ、應召者の補充も加へて求人數は激増し、採用の時期も著しく早められた。

十年三月卒業の百二十九名に對する就職狀況を學報第六十一號は次の如く報じてゐる。「昨年九月より就職申込陸續殺到、近年にない活況を呈した。例年なら之からといふ三月の卒業式前にただ五、六名を残すのみで今や正に百パーセントの就職率を示し、實に開校以來のレコードである」と。勿論不況當時でも就職狀況は順調で永きに亘る未就職者の如きはなかつたが、この十年頃から就職先の大部分が一流銀行會社を網羅して質の向上が見られることは數字に現はれない好轉狀況といへる。

就職狀況はかくの如く好轉したとはいへ尙卒業式當時未就職者が五、六名あつたが、之も束の間、益々好況が推轉し、十四年三月卒業のものは十三年十一月初旬に全部決定した。當時の申込會社數三百二十社、需要延人員約千二百、洵に「娘一人に婿八人の盛況」であつた。十四年には翌年三月卒業すべき生徒を早くも五月に採用を決定するといふ風で、各銀行會社の人事部は人を得るに狂奔し、逆に學校を訪問して推薦を依頼するに至つた。正に主客顛倒である。六社協定の如きも影を潛めてしまつた。

かくて各社の求人競争は益々激甚となり、學生の勉學に悪影響を及ぼす惧があつたから、文部省は遂に十四年六月通牒を發し、採用申込の發表は九月以降、推薦並に銓衡の時期は十月以降と制限した。仍て本校に於ては九

月勿々採用申込を一括發表し、十月一日を期して一齊に推薦を開始することとしたが、大部分は一回の面會で即決、僅に三週間前後に全部の就職決定を見る状態となつた。卒業期繰上げにより推薦開始期に多少の變動はあつたが、大體三週間内外で全部決定の事情には變りがなかつた。

最近四ヶ年間採用決定時期一覽

卒業 同次	卒業期	推薦開始期	同上ニ於ケル 就職希望者數	推薦開始 リ一週間	採用決定率
				同	二週間 同 三週間
第十四回	昭和年月 一五、五	昭和年月 一四、一〇	一六六	五二%	七六% 八六%
第十五回	一六、三	一五、一〇	一一二	七〇	八五 九四
第十六回	一六、一二	一六、一〇	一一〇	七七	九一 一〇〇
第十七回	一七、九	一七、七	一五一	七九	九一 九九
備考	第十四回ノ採用決定率ニハ文部次官通牒前(六月)決定者一七名ヲ含ム				

又昭和十七年九月の卒業生は、その殆んど全部が校門より直ちに入營の實狀であつたが、卒業前に全部就職先きが決定してゐるので、九月中旬卒業式當日から十月一日入營日の前日までの短時日を就職先で實務に就き、就職先未決定のままで入除するものは一名もなかつたのである。

貿易別科の卒業期は依然二月であつて、その就職状況も好調なること本科と變るところがない。

昭和十四年度以降の卒業生に對する需要延人員は常に千二、三百名に達し、之に對して卒業生の振り當て餘蘊

に苦勞するといふ状況である。

卒業生の就職先については次の表に詳細記載した通り、昭和九年頃までは、官公吏、個人商店の就職者が相當あつたが、十年以降は殆んど之を見ざるに至り又之を業種別に考察すれば、十一年頃迄は銀行、商事、保険運輸等商業方面が大部分を示し鑛工業方面特に重工業は微々たるものに過ぎなかつたが、十二年頃よりこの比率は次第に逆轉し、最近三、四年は重工業が壓倒的多數を占め、その他の鑛工業を合せるときは三分の二以上に達し、生産部門の經營擔當者が著しく増加してゐる。

この盛況を見るにつけて、經濟界不況時代の田尻校長の献身的斡旋努力は並大抵のものではなく、この好成绩も確かに校長のこの努力を基礎にして招來されたものといふことが出来る。

卒業一ヶ月後ニ於ケル卒業生就職状況

卒業同次	卒業年月	卒業生	上級 學校 入學者	自家 營業 從事者	就職 希望 者	其ノ 他ノ 者	需要申込 員數	就職希望者ニ對スル 同上倍數	就職決 定者	同上百 分比	未就 職者 數	就職當時ノ給料月額 最高 最低 平均
第一回	昭和 二、三	一七	一五	六	九五	一	二三	二、七八	八三	八七	一二	一〇〇 五〇 六五
第二回	三、三	一三〇	六	七	一〇七	一〇	二二	一、九八	九七	九一	一〇	一〇〇 五〇 六五
第三回	四、三	一三一	六	三	一二二	一	二三	一、九五	一〇八	八九	一四	九〇 五〇 六五
第四回	五、三	一五六	一一	一三	一三三	一	二五	一、七一	九八	七四	三四	八五 五〇 六三
第五回	六、三	一三三	一一	一五	一〇一	五	二六	二、六五	九二	九一	九	八〇 四五 五八

第六回	七、三	一四四	一六	一三	一〇	五	二二七	二、一五	九六	八七	一四	八〇	四五	五五
第七回	八、三	一四四	一一	八	一二五	二八五	二、二八	一一一	九六	九七	四	一四四	四五	五五
第八回	九、三	一四五	一二	六	一二七	三〇八	二、四三	一二五	九八	九八	二	一三六	四五	五五
第九回	一〇、三	一二九	八	三	一一八	三一七	二、六九	一一七	九九	一	一三八	四〇	六三	
第十回	一一、三	一三〇	七	六	一一四	三二五	二、八五	一一四	九九					
第十一回	一二、三	一六三	八	四	一五〇	四八八	三、二五	一五〇	一〇〇					
第十二回	一三、三	一五七	八	一三	一三四	六一六	四、六〇	一三四	一〇〇					
第十三回	一四、三	一五八	一六	四	一三六	八五一	六、二六	一三六	一〇〇					
第十四回	一五、三	一六〇	一八	四	一三五	八四	八、八四	一三五	一〇〇					
第十五回	一六、三	一六九	三三	三	一三一	一三〇	九、九五	一三一	一〇〇					
第十六回	一六、三	一五一	一〇	二	一三八	二四七	九、〇四	一三八	一〇〇					
第十七回	一七、九	一七八	一〇	四	一六〇	二六四	七、九〇	一六〇	一〇〇					

卒業一年後ニ於ケル卒業生ノ狀況

卒業同次	卒業年月	官公吏	銀行又 會社	新聞 記者	個人 商店	自家 營業	從兵	學生又 研究者	外國 留學者	死亡 シタ者	不詳	計
第一回	二、三	五	六	七〇	五	六	二	一三	一	二	七	一七
第二回	三、三	二	三	四	九	六	一	五	一	一	六	三一
第三回	四、三	一	四	八	九	六	一	五	一	一	六	三一
第四回	五、三	一	四	九	九	六	一	五	一	一	六	三一
第五回	六、三	七	三	八	七	二	九	一	一	一	三	一三

第六回	七、三	一三	五	七	七	六	八	一五	一	一	七	一四四
第七回	八、三	一〇	三	一〇	三	七	一〇	九	一	一	二	一四四
第八回	九、三	六	一	一〇	九	八	一	七	一	一	二	一四四
第九回	一〇、三	一	一	一〇	六	三	一	七	一	一	二	一四四
第十回	一一、三	三	一	一〇	六	三	一	七	一	一	二	一四四
第十一回	一二、三	二	一	一〇	六	三	一	七	一	一	二	一四四
第十二回	一三、三	一	一	一〇	六	三	一	七	一	一	二	一四四
第十三回	一四、三	一	一	一〇	六	三	一	七	一	一	二	一四四
第十四回	一五、三	一	一	一〇	六	三	一	七	一	一	二	一四四
第十五回	一六、三	一	一	一〇	六	三	一	七	一	一	二	一四四
第十六回	一六、十二	一八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一七八
第十七回	一七、九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一七八

※備考 第十六回官公吏欄に一八ト掲上シアルハ國家的特殊ノ事情ニ依ルモノナリ

卒業一年後ニ於ケル銀行會社就職卒業生ノ業種別

卒業同次	卒業年月	銀行 信託	證券 投資	商業 拓殖	保險 通商	通信 運輸	其他 工業	電力 電燈	瓦斯 建築	水産 其他	計
第一回	二、三	一	一	一	八	六	五	一	一	一	七〇
第二回	三、三	一	一	一	九	四	一	一	一	一	九四
第三回	四、三	一	一	一	四	三	一	一	一	一	八七
第四回	五、三	一〇	二	三	四	一	一	一	一	一	九四

第五回	六、三	二一	二二	二〇	三	一	一七	一	三	五	八四
第六回	七、三	八	三二	四	三	一	一一	一	三	五	七七
第七回	八、三	二一	三二	一一	三	五	二〇	二	二	一四	一〇三
第八回	九、三	二一	三九	一三	六	八	一四	三	二	一	一〇九
第九回	一〇、三	一五	一三九	五	六	一〇	二七	三	六	一	一一六
第十回	一一、三	二〇	一四二	四	一	一二	二一	三	四	一	一一〇
第十一回	一二、三	一六	二三七	一一	九	一八	三八	七	三	二	一二四
第十二回	一三、三	一九	四二二	一〇	五	二五	三四	八	二	一	一三二
第十三回	一四、三	二〇	六二六	一一	三	三二	二三	一	三	一	一三八
第十四回	一五、三	二一	二二六	四	七	四六	二三	一一	二	一	一三四
第十五回	一六、三	一九	二二〇	六	四	四〇	二三	一一	一	一	一二七
第十六回	一六、三	一八	五	八	四	四四	二六	一一	一	一	一二一
第十七回	一七、九	一八	六	一六	六	七	六一	三〇	九	一	一三

九 教職員十年間の動靜

田尻校長の榮譽 星移り月かはる。四十歳で校長となつた若い田尻校長も昭和十一年には六十一歳の還暦を迎へた。創業以來の經濟不況下に年々新卒業生を出す新設校としては、その就職斡旋は並大抵の勞苦ではなかつたが、廣い交際振りと圓轉滑腕な手腕と明朗瀟灑な氣性とは、克くこの難關を突破して「横濱商商に入學難はあれ

ど就職難なし」と謳はれ、就職金字塔を打樹てられたる功績と、些かの蟠りなき明るい人格と深く人の情を解する優しい心情とは、よく人の和を致して學内を和衷協同せしめた人徳とは洵に讃へられるべきであらう。その校長の還暦祝は全校舉つて心からの祝福となつた。十一年十一月二十六日の教職員全部の祝賀會席上、岩本教授が「還暦などとは兎角老人めいて面白くないが、家族が親父の還暦を祝ふ分には一向差支ない」と冒頭したのは、本校の空氣をよく現はしてゐる。學生からも記念品が贈呈された。

十二年八月より第七回世界教育會議が東大安田講堂で開催された時、世界四十八ヶ國二千餘名の教育關係者が参集したが、田尻校長はその商業教育部に於て「商業教育と國際奉仕」なる英語講演を行つた。又同年教育審議會が内閣に設置されるや田尻校長はその臨時委員に名を列し、兩來文教の根本的刷新に参劃すること約五年、その功績により、十七年五月五日木杯一組齋付御下賜恩賞の榮に浴した。

十七年九月八日には勳一等敘勲の御沙汰あり授瑞寶章の光榮に浴した。眞に文官最高の榮譽といふべきである。

十五年十月三十日教育勸語發五十周年記念式に當り、本校に於ては田尻校長と光井教授とが教育功勞者として文部大臣より表彰され木杯一個授與された。

十七年九月十五日滿洲國建國十周年記念式典には我國教育界の代表者として参列の榮に浴した。

この間我國は重大時局に直面したが、田尻校長は文教方面のみならず、中央、地方の各種經濟統制會の委員と

訓練の實施等緊切な對策施設を講ずる必要著しく加はりたるを以て、鍊成會には渡邊富成小幡の諸教授、防空講習には下津屋教授吉瀨囑託が參加訓練を受けた。興亞青年勤勞報國隊として大陸の勤勞作業に加はつた學生の引率者として十四年には武市助教授が滿洲へ、翌十五年には下津屋教授が中支へ赴く。

教官の異動。古館教授轉任、小宮山教授逝去によつて會計學教授は空白となつたが、黒澤教授が十一年、沼田教授が十四年新學期から來任充實した。十年には富成氏が修身擔任教官として來任。越村信三郎、石島快隆氏がそれぞれ商業通論、國漢擔任者として來任した。田尻彦幸氏逝去の後には武市一孝氏來任したがその後武市助教授も十七年母校徳島高工へ轉任した。十四年には獨逸語教官として小谷助教授の後任たりし山中靜三助教授及び支那語教官の香坂順一氏退官、大島清氏が講師として山中氏の後を承けた。岡野教授の後任としては井手文雄氏來任、財政學社會政策を擔當してゐる。十五年十一月農業大意擔任の福田要氏去り井上憲司郎氏來任。福田氏は大倉高商教授として南方經濟事情の研究、著述に蘊蓄を傾けてゐる。十七年末配屬將校佐分利大佐應召し正木大佐を経て十七年三月藤堂大佐來任。十七年には圖書課に十六年勤務した増田彌之助書記が退職した。なほ十七年には澤崎教授英語、神子田、岡本兩助教授獨逸語支那語擔任教官として來任。新設のマライ語には信永講師來任した。

十八年二月には調査部及太平洋貿易研究所の野口勝利書記が新設鹿兒島縣立醫學專門學校へ懇望され轉勤した。三月には岩本教授が退官し、四月には越村教授が一ヶ年間の豫定で總力戰研究所へ研究員として入所した。

岩本教授は本校開校の翌年即ち大正十四年四月、海外留學を了へて直ちに來任、海上保險と海運を専ら擔當しその氣合のかかつた名調子の講義振りと、誠意事に當る訓育振りは全校の信望を集めてゐたが十八年三月を以て退官された。

英語教育界に令名高い西村彌教授が、十五年日本學術振興會より謡曲五十番の英譯を委囑されたのは獨り同教授のみならず本校英語教授陣のため氣を吐くものといへる。

尙、本校はその地的位置から文部省關係の各種の計畫に教官が動員され參劃することが多い。田尻校長が實業教育に關するあらゆる計畫に參劃してゐることは素より、井上龜三教授は教員檢定試驗委員會を命ぜられて居り、昭和十一、二年の中等學校教授要目改正には下田、徳増兩教授が委員として改正案に參劃、十七、八年の中等學校教授要目改正にも南種、徳増、小幡、黒澤の四教授が參劃してゐる。

十五年十月三十日には教育功勞者として光井教授が文部大臣より表彰されたことは既に述べた。

物故教官 十一年一月、會計學擔當の小宮山敬保教授逝去享年五十。氏は大正十四年歐米留學から歸朝するや直に本校に來任、兩來十年、多年實際界に在つた豊富な經驗を生かして學理を裏づけ生きた講義をされてゐた。又よくその研究を發表したことは「商學」への投稿が続けられたことによつても窺はれる。その性質が江戸兒としての恬淡さを持ち又屢々稗氣を發揮して親しまれてゐた。死の前年に刊行された「特殊會計」の著述は我國の會計學界では新しい途を開いたものである。

十二年二月、理化學擔任の田尻彦幸助教教授逝去。氏は大正十五年横濱高工卒業と同時に來任、物理化學の講義と商品實驗を指導、文寮監をも兼務された。敬虔なる基督教信徒であり日曜學校長をやつて居た。溫厚着實にして寡黙謹嚴な性格を持ち學生から尊敬されてゐた。三十五歳未だ春秋に當む身を以て他界されたのは洵に残念である。老母堂、病夫人、幼き二令嬢を遺されたことは痛惜に堪へない。教職員生徒同窓會は遺児養育資金を遺族に贈つた。

十二年六月、元教授にして當時福井縣立大野中學校長たりし内山進氏逝去。氏は京都帝大卒業後留學、大正十四年歸朝するや本校に來任、專攻の商工心理學及修身を擔當し又生徒主事として赤化思想橫行瀾漫の時代に思想對策に懸命の努力をされた。直情徑行苟くも阿諛の風なく教育者らしい教育者であり國士の風があつた。昭和八年懇望されて郷里の大野中學校長となり寢食を忘れて青年子弟の薰陶及び學校の經營に當り董化大に上つたが遂に急逝された。享年四十五。校葬の禮を以て同氏の靈を弔つたことは、いかに氏の業績が偉大であつたかを語つてゐる。本校からも岩本教授が本校を代表して葬儀に參列、又氏の薰陶を受けた卒業生も多數馳せ參じ、葬儀に列して師恩に酬ひるところがあつた。

十四年四月、井上鍔三教授逝去。享年四十一。大正十四年東京商大卒業と同時に本校講師となり商業通論最氣論、次で徳増教授に代つて經濟原論を擔當、その明敏な頭腦と緻密な學風とは理論經濟學界に重きをなしてゐた。その理論を實際に適用したものが、氏獨自の經營主宰する生糸經濟研究所の、「生糸經濟研究」(昭和二年

九月一日創刊)の發刊であつて蠶糸經濟研究に實證的科學的方法を導き入れて新生面を拓いたのである。又野球部長としては生來の熱情家たる氏は部員の督勵に眞剣であつたが殊に全國實業專門學校野球聯盟を主唱して之を結成せしめただけにその力の入れ方は眞に驚嘆に値した。氏は洵に快男子であり熱血漢であつた。中途半端が嫌ひだつたから一旦引受けたり始めたりすると心魂を打込んでいつた。野球部の育成もこの氣風から熱烈なものがあつただけに、氏の一番惱んだのは本來の專攻へ没頭する時間が足りないことだつた。何事にも徹せずんば駄目な性格の氏には二つの仕事に精力の使ひ別けが出来なかつた。氏は藝術的天賦にも恵まれて歌をよくした。春秋に當む身、本校にとりても學界にとりてもその死は大きな損失であつた。

十 支那事變 大東亞戰爭と學園

應召卒業生と戦歿者 支那事變勃發とともに教職員から小白、越村、武田、野口、窪田、植岡、吉濱、神の諸氏應召したことは既に敘べたが、卒業生の年齢が孰れも若かつたから、第一回卒業生から各回多數の應召者を出し第一線各地に勇戦奮闘したが、またそれだけに陣歿したものも尠くなかつた(陣歿者の名は「同窓會記」に收めてある)。十二年八月二十五日には、第六回卒業生佐藤祐幸君が陀里村高地で壯烈なる戦死を遂げ、本校最初の戦死者を出したが、爾來十五年一月二十五日本校講堂に於て富丘會長祭主となり戦歿者合同慰靈祭執行までに英靈は十五柱に及んだ。その後の戦歿者を加へ、十八年五月一日現在で卅二名を數へるに至つた。護國の華と散

つた之等の英靈に對しては二十周年記念式に於てその冥福を祈るべき慰靈祭が執行される筈である。このほか戦歿者ではないが大東亞戦争による犠牲者として三名の卒業生がある。雄圖を懷いて南方へ赴任の途中、事故のために逝かれた人々で洵に同情に堪へない。

記念行事 事變及戦争に對する學徒の覺悟を新にし鞏固にするために各種の強調週間が催されたことは言ふまでもないが、十四年二月十一日の紀元節からは全校伊勢山皇大神宮へ参拜行進をなし、十六年四月二十五日の靖國神社臨時大祭 天皇御親拜當日には保土ヶ谷遊園地の忠魂碑へ全校参拜行進をした。

又十二月十日南京陥落、翌十一日、五専門學生三千名が祝賀大行進を起し、公園にて祝賀式舉行。夜は百數十名の學生が佐分利大佐引率の下にブラスバンドを先頭に、全市の提灯行列に参加した。

十三年七月七日の事變一周年記念日には校庭に於て武裝行進團兵分列を行ひ更に市内學徒一萬六千餘名の大行進に参加、縣廳前で分列式を舉行した。同日優渥なる勅語を賜ひ、本校では翌八日奉讀式を行つた。

同年十月二十七日漢口占領の公報を俟つて武漢三鎮攻略祝賀式舉行、愛國行進曲の合唱を行ひ嚴肅なる式典を舉げた。

十六年十二月八日對米英宣戰の大詔を拜し、一億國民決然歡起したが本校に於ては九日詔書奉讀式を舉行し、校長より、一切を擧げて國家に殉すべき覺悟の訓示があつた。十七年一月八日大詔奉讀日に大詔奉讀式舉行、兩來毎月八日奉讀式を行ふ。十七年二月十五日シンガポール陥落、十八日第一次戰勝祝賀大會が催され、本校に於

ても祝賀式並に行進を行ひ更に五専門合同祝賀行進に参加、伊勢山皇大神宮に参拜した。十七年十二月八日大東亞戦争一周年記念日を迎へ前後一週間の記念行事を行ひ、勤勞作業に、攻防演習見學に、長距離武裝行軍に、必勝祈願に、米英撃滅の意氣を昂揚した。

十一 學友會 報國團

學友會より報國團へ 報國團といふ名稱はすでに昭和十三年春、勤勞奉仕、團體訓練を主眼として結成される組織に用ひられ「横濱高商報國團」なるものが生れたが、それは從來の學友會とは直接の關係はなかつた。然るに十五年十月一日文部省から學團新體制のための新組織實施の骨子が發表され、學行一如師弟相携へて俱學俱進する報國團を結成すべく學友會の積極的解消が要求され、ここに學友會は報國團と名實共に變革することとなつたことは既に報國團のところで敘べた通りである。以下學友會から報國團へ連續するものとしてその十年間の活動を略述しよう。尤も全貌に互つて敘べることはその煩に堪へないからそれは「學友會記」に譲り主なる足跡だけを述べることにする。

鐵鍊部 運動部中の大きな行事は何と言つても野球部の對高工定期戦であつて之は獨り野球部の仕合のみではなく應援團の結成により全校を擧げての對校意識の昂揚で、在學中の思ひ出の最も深いものとして印象されてゐる年中行事である。定期戦は十年十一年と連敗し十二年に三年目で勝ち十三年十四年連續敗退し、十五、十六、

十七と三年連覇を遂げた。大正十四年第一回定期戦より九年第八回まで本校五回勝、三回敗の成績であつた。

昭和十年、第九回、本校敗。

バツテリ―前：西山。

第一回戦 高工 四―三 本校

第二回戦 高工 三△―一 本校

同十一年、第十回、本校敗。

前、犬松―下山。

第一回戦 高工 四△―一 本校

第二回戦 高工 九―四 本校

同十二年、第十一回、本校勝。

前―飯島。

第一回戦 本校 四―三 高工

第二回戦 本校 一―三 高工

同十三年、第十二回、本校敗。

岩井―下山。

第一回戦 高工 二―八 本校

第二回戦 本校 三―二 高工

第三回戦 高工 八―三 本校

同十四年、第十三回、本校敗。

岩井―下山。

第一回戦 高工 六―五 本校

第二回戦 本校 一五―四 高工

第三回戦 高工 五―一 本校

同十五年、第十四回、本校勝。

大門、戸來―小田野。

第一回戦 本校 七△―四 高工

第二回戦 本校 八―四 高工

同十六年、第十五回、本校勝。

戸來、常見―小田野。

第一回戦 本校 一―三 高工

第二回戦 本校 五△―三 高工

同十七年、第十六回、本校勝。

戸來―小田野。

第一回戦 本校 五―三 高工

第二回戦 高工 一〇―七 本校

第三回戦 本校 一三―四 高工

第一回より第十六回に至る戦績

本校勝 九回 (十九戦勝)

高工勝 七回 (十五戰勝)

全國實業專門學校大會の戰績は次の如し

昭和十二年 關東地方大會 優勝 (決勝戰 本校 九A—六 高工)

全國大會 同志社高商に準決勝戰で敗る (二—〇)

同 十三年 關東地方大會 優勝

全國大會 優勝 (本校 四—三 松山高商)

同 十四年 關東地方大會 優勝 (決勝戰 本校 六—二 横專)

全國大會 横專に決勝戰で敗る (六—四)

同 十五年 關東地方大會 優勝 (決勝戰 本校 四A—三 横專)

全國大會 優勝 (本校 七A—二 西南學院)

同 十六年 關東地方大會 一回戰にて中止

全國大會 中止

同 十七年 關東地方大會 決勝戰で高工に敗る (七—〇)

全國大會 決勝戰で高工に敗る (五—四)

又十五年秋の明治神宮大會には山口高校を五對三で敗り優勝してゐる。

右の戰績が語るやうに本校野球部は常に優勝の王座を占めて野球界に重きをなしてゐるが、對高工定期戰は横濱名物の尤なるものとして喧傳され、十一年十二年の定期戰はJ()AKがネット裏にマイクロフォンを据えて實況放送をした。十二年六月の定期戰で三年連敗の雪辱を遂げた野球部は本館玄關傍へ記念植樹をした。

次に卓球部は十年秋の全關東リーグ戰に優勝、十一年には早くも國際式を採用した。剣道は十年高商リーグ戰に優勝。この第六回まで第四回を除いて毎回優勝してゐる。引續き毎年好成績を収めてゐる。

プールが十二年五月三十日開かれ八月十六日公認されてから水泳部の進況一段と目覺しく十五年七月の五專門大會に制覇し、東部高商大會では二位を獲得した。

競技部では十一年主將梶山が日本陸上二十傑中の十種競技第十位にランクされて氣を吐いた。

體操部は壓倒的な好成績を収めてゐたが、十三年秋のインターカレッジ二部に於て明大と覇を爭ひ優勝した。

同年文部省より表彰されたことは既述した通りである。

報國團結後成立した銃劍術班、射撃班孰れも活躍、射撃班は個人團體に優秀な成績を示し十七年には五專門射撃聯盟大會に於て全種目に優勝してゐる。

文化部 支那事變勃發するや舉國非常時局への認識深まり學徒また頗る緊張したが、ここに從來の年中行事を開催すべきや否やが反省された結果、非常時の内容を盛つたものとして體育、語劇、演奏大會を綜合して文化大會を開くこととし、十二年十一月六日七日兩日に互つて舉行された。翌十三年十一月十九日第二回文化大會を開

きブラジル、アルゼンチン紹介の映畫を上場しアルゼンチン公使の講演あるなど國際色も織込まれた。この綜合文化大會も相互に活動を制限され効果を上げ得ないといふので十四年には再び各別に大會を開催することとなつた。十六年再度綜合文化大會となる。

語學部は追がに「語學高商」の名に背かず非常な活躍振りて十年の外語劇大會の如きは俳優の衣裳を着けメーキアツプさへするといふ凝り方であつた。十四年以降は時局の逼迫と電力節減等で派手な演出は出来なくなつたが十五年十一月三十日には紀元二千六百年奉祝の英語劇と音楽會が開かれてゐる。

このほか十一年には市内四専門共同英語演說會を結成、記念會館にその第一回を開催、十三年には學生が英西語等を以て支那事變を解説して世界の學生層へ呼びかける國際文化協會の成立、比島學生團を本校に招き國際親善に努め十四年には日米學生會議に代表二名派遣するなどその活動目覺しきものがあつた。

音楽部、十年には小野尙太郎君の如き天才的存在がゐてハーモニカ獨奏競演に優勝し或はJ.O.A.Kから放送した。十一年には待望のブラスバンドが誕生し、定期戰に、街頭行進に士氣を鼓舞してゐる。十三年十二月には五専門合同音楽會第一同大會が記念會館で開催された。尺八の巢籠會の活動も依然として盛んで商工との合同演奏會も開かれた。謡曲部は學生謡曲として極めて優秀なる成績を示し、觀世宗家に於ける競演では十二年十三年連續第一席を獲得した。

講演部、十年岡野部長時代に開始された夏休中の地方巡回講演が越村、富成の諸部長にも引繼がれて行はれた

十一年十二月に五専門辯論聯盟が結成され、兩來交互に討論會を催し、大會を開いて智能の練磨に力めてゐる。YMCA聯盟は十年に結成、佛教青年會は十年夏圓覺寺居士林に參禪座禪修業を積んだ。聖書研究、佛教研究は殆んど常設的に會合してゐる。

學報部。學報は十二年十一月、第三種郵便物として認可され、十三年三月「有保證」となり掲載事項が擴大された。十三年五月の第八十八號から戰線からの卒業生の現地報告が戦り始めた。十四年七月十七日第百號記念を發行した。學内のニュースはもとより同窓會欄によつて同窓會のニュース會員の動靜も報道し、報道上の大使命を果してゐる。

文藝班内の高商俳句會は十一年十一月第一回の句會を開いてから大東亞戰爭勃發直前まで續いた。「東炎」主幹の内藤吐天氏を師とし、教官、學生水入らずの句會を開いた。井上山紫樓（龜三）教授の「寒島港は雪になりけり」の如き、學生宮坂斗南（義一）の「枯山の萱に沁み入る寒の雨」の如き名吟が生れた。

十一年夏高商浴衣が消費組合で取次販賣された。浪に「横濱高商」とローマ字を配した學生好みのもの、一反一圓五十錢であつたが、十三年には二圓五十錢になつた。純綿飢饉の今日から觀ると隔世の感がある。

x

x

學友會を解消して報國團を結成したのは十五年秋であつたが、學友會構成各部はそのまま報國團の各班として繼承存続し、新に銃劍術班東亞研究班海洋班等が時代の要請によつて成立した。學校長の衆議院議員、師弟俱進の體

勢が盛へられたが、從來の各部の存廢については厳しい検討が加へられなかつた。然るに臨戰體勢を更に強化する必要が起り、文部省は三月二十九日、十八年度戰時學徒體育訓練實施要綱を發表し、聖戰完遂上必要なる將兵となり得る體力精神力を訓練することを目標として報國團各部の諸班を再検討し整理する方針を明示した。之によつて實踐即應の演練即ち行軍力強化、戰技訓練、航空海洋訓練、綜合的基本體力増強、劍柔道銃劍術相撲、水泳等が重視され競技本位から蟬脱し決戰型へ大轉同することとなつた。この目標に向つての具體的整理内容は近く審議されるであらう。(十八年四月この決戰型報國團が組織された——追記)。

十二 生活調査

昭和九年、生徒身許並ニ生活費調査。

當時生活費として生徒が受けてゐた費用は月約四十圓であつた。

(詳細は學報第五十九號第六十號參照)

十年七月、調査項目——購讀新聞雜誌愛讀書種類、私淑する人物、世界觀主義、宗教、娛樂趣味。

朝日、日

日が多く、經濟往來、中央公論、改造、キング。私淑人物は西郷隆盛が八五名で最大多數、乃木大將、東郷元帥、楠正成之に次ぐ。高橋是清、澁澤榮一、福澤諭吉の名も出てゐる。主義では漫然と自由主義といふのが斷然多し。宗教は佛教三八九、基督教三六。娛樂趣味では映畫音樂讀書の現代學生氣質その儘を表はしてゐる。(學報第六十七號參照)

十一年六月、出席統計成る。(學報第七十四參照)

十三年六月、讀書調査。

新聞は東京朝日、東京日々、讀賣、中外商業の順。雜誌は中央公論、文藝春秋、

國際知識及評論、改造、日本評論の順である。興味深く讀み取つた一般圖書として、「學生と生活」が最も多く

「大地」「學生の書」「生活の探求」が多數の讀者を持つてゐる。(學報第九十二號參照)

十六年十二月、讀書調査。讀書傾向は文學が斷然多く經濟、哲學、歴史が之に次ぐ。愛讀書では中山伊知郎高田保馬、兩純粹理論家の著書が多く一般教養書では西田幾多郎、三木清、和辻哲郎、阿部次郎諸氏の著書の順である。文學では夏目漱石が他を抜いて多く第二位のトルストイの五倍半。感銘を受けた書物としては倉田百三の「愛と認識の出發」が多く「出家とその弟子」、漱石の「心」、蘆花の「思出の記」、西田幾多郎の「善の研究」長與善郎の「竹澤先生といふ人」の順である。雜誌は「改造」斷然多く中央公論日本評論が之に續く。圖書館利用者數が案外少く答申二七六中二四%に過ぎない。尤もこの數字は圖書館を極度に利用する者の意味に解される。(學報第二百二十四、二百二十六號參照)

十三 寄宿寮

本校寄宿寮は昭和三年四月八日開寮した。其の沿革概要次の如し。

昭和三年四月八日 開寮。初めて第一學年生八十名を收容。寄宿寮規定及寮生心得を定む。

昭和四年四月 寮生收容方針は第一學年生を入れることに定めてあつたが本年より貿易別科附設せられ空室を生じたる場合は貿易別科生を以て補充することとした。

昭和九年度より午前十時半に點呼を行ふこととす。昭和九年七月九日 寮歌を作成。

昭和十六年度より寮生の日課を左の通り改正して勵行することに定めた。

1、起床 午前六時三十分

2、國民儀禮及體操

午前六時三十分寮庭に集合、國民儀禮の後、體操（ラジオ體操、建國體操、米劍體操等）をなす。此の際制服又は袴を着用。

3、朝食 午前七時（宿直員同席）

4、夕食 午後五時

5、自習時間 午後七時より九時三十分迄

6、夕點呼 午後九時三十分

各自自習室前にて之を行ふ

7、消燈就寢 午後十一時

昭和十七年一月より毎月八日 大詔奉戴日には駐足を行ひ杉山神社に參拜し戰勝の祈願をなす。昭和十七年四

月本年より前年入寮生中四名を残し新入寮生を指導せしむることに收容方針を變更した。又日課の一部改正を行ひ特に拭掃の徹底強化及び食事の自己奉仕制を實施した。

十四 開校二十周年時代（昭和十八年五月）の概況

一、職員

校長

田尻 常雄

教授

經濟地理、南米及南洋經濟事情、東亞經濟論、演習

下田 禮佐

英語、商品學、商品實驗、工業概論、物理化學、演習

西村 康博

法學通論及憲法、民法、商法、演習

不二門 龍觀

商業英語、商業通信、英語

光井 武八郎

經濟史、日本產業論、演習

河村 重治郎

仰關 西語

總增 榮太郎

英語

時田 清

英語

伊東 彌

商法、國際法、演習
經濟政策、演習（南方出張中）
數 學
經營經濟學、商業概論、配給論、演習
金融論、統計學、外國爲替、演習
體 操
簿記及帳簿組織、會計監査、原價計算、經營分析、演習
修 身
經濟原論、經濟大意、演習（總力戰研究所入所中）
商業簿記、銀行簿記、演習
經濟政策、貿易大意、演習
英 語
（渡邊、越村兩教授不在中、經濟政策ハ井手教授、經濟原論ハ森田教授、經濟大意ハ徳増教授擔當）

生徒主事

（兼）

下田 禮 佐
不二門 龍 嗣
黒澤 清

配屬將校

陸軍大佐 藤 堂 大 輔

教 練

助 教 授

西班牙語
獨逸語
支那語
馬來語

岡 田 睦 峻
神 子 田 茂
岡 本 隆 三
信 永 清

講 師

珠 算
農業大意及農業經營、農業實習及測量
國語及漢文、商業文、國史
英語、外國實踐
保險論、交通論

陸軍大尉

小 白 寛
山崎 與右衛門
井上 憲 司 郎
石 島 快 隆
岸 登 烈
相 馬 勝 夫

外國人講師

西班牙語
英 會 話

ホセ・エレロス
ルードウィヒ・モー・フランク

寄 記

主事 齋藤照之助

湯 川 眞 藏
高 林 義 雄

嘱託員

教務、審法

柔道

剣道

弓道

事務

職員

(應召中)

校醫

事務分室

教務課

生徒課

庶務課

會計課

神林盛雄
増田榮喜

藤田義雄
阿部信文
田中巳吉
平松精二
窪田保春
正本信子

陸軍少尉

植岡金次郎
中村多作
淺井正久
神慶次郎
大木平吾
依知川朱子
安藤悦子
池上新一
田畑榮喜
岩田孝

櫻井己之吉

醫學博士
松岡長一郎

主任 教授 下田禮一
副主任 同 渡邊輝一
書記 湯川眞藏

主任 生徒主事 不二門龍観

同 同 下田禮一
同 同 黒澤清
講師 小島寛
書記 神林盛雄
嘱託 窪田保春

主任 書記 高林義雄
同 同 淺井正久
同 同 安藤悦子

主任 主事 齋藤照之助

屬	同	同	同	同	同	屬
託						
正	岩	依	大	櫛	中	植
本	田	知	木	慶	村	岡
信		末	平	次	多	次
子	孝	子	晉	郎	作	郎

主 任	教 授	井 上	龜 三
書 記	增 田	榮 喜	
屈 田	畑 田	榮 喜	

主任教授南種康博

主任	教授	講師	嘱	審
富成喜馬	師井上憲司	託藤田義雄	肥神林盛雄	

部長	教授
部長	森田 優三

池	井	沼	越	黑	井	沼
上	手	田	村	澤	上	上
新	文	嘉	信		龜	越
一	雄	穂	三	清	三	

(昭和十八年四月末日現在)

六	師講	備外國人教
二	講師	外國人
三	託囑	
三	武道教師	配屬
一	將校	雇員
一		醫校
一		衛守
一		給仕
二		夫定
九		使小計
八	三六	

二、生徒

(昭和十七年八月末日現在)

第三學年

一七九

計 六〇六

二五

貿易別科生徒數

五〇

(昭和十七年八月末日現在)

計 五〇

本科生徒原籍調

(昭和十七年八月末日現在)

原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數
北海道	六	栃木	三〇	石川	四	滋賀	四
青森	一	群馬	一八	福井	六	京都	一三
岩手	八	埼玉	二六	山梨	九	大阪	五
宮城	九	千葉	一四	長野	一六	兵庫	七
秋田	七	東京	二一	岐阜	九	和歌山	三
山形	七	神奈川	一六	静岡	五	島根	九
福島	一四	新潟	一六	愛知	七	岡山	二
茨城	二	富山	一	三重	八	岡山	八
廣島	八	愛媛	四	長崎	一〇		
山口	六	高知	七	熊本	四		
徳島	三	福岡	七	大分	一		
香川	一	佐賀	三	鹿児島	三		
計					六〇六		

貿易別科生徒原籍調

(昭和十七年八月末日現在)

原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數	原籍	生徒數
北海道	一	栃木	六	新潟	二	岡山	一
岩手	二	群馬	一	長野	三	鹿児島	一
宮城	一	埼玉	三	静岡	六		
山形	一	千葉	三	愛知	一		
福島	二	東京	九	三重	一		
茨城	一	神奈川	三	京都	二		
計					五〇		

三、研究資料

(昭和十七年八月末日現在)

圖書及雜誌冊數	圖書冊數	雜誌冊數	合計
圖書	一三、三三〇冊	和洋雜誌	五一點
雜誌	九、一四〇冊	洋雜誌	一點
合計	二二、八四七冊	其他定期刊行物	一八點

(昭和十八年三月末日現在)

調查部保管資料及備付定期刊行物

(昭和十七年八月末日現在)

所藏資料

(昭和十七年八月末日現在)

備付定期刊行物

(昭和十七年八月末日現在)

備付新聞

(昭和十七年八月末日現在)

種類	數量	價格
商品標本	四、八一五	一〇、七一五圓
機械器具	二、二六七	三〇、六四〇圓

學友會(報國團)記

同窓會(富丘會)記

回想錄

學友會記

學友會記を「學報」の記事から轉載する方法によつた。ただ「學報」は昭和二年六月三十日に創刊されたので、開校第一年の大正十三年から昭和二年五月までは編者の日記によることとした。

大正十三年

三月二十七、八、九日、第二回入學試驗舉行。横浜、東京、京都、金澤の四ヶ所で試験す。

四月二十二日 第二回入學式を行ふ。

九月一日 震災三周年。午前十二時五十八分號砲汽笛梵鐘の響を合圖に諸車一分間停車、市民黙禱を捧げる。

十二月二十二日 國際聯盟協會横浜高商學生支部國際經濟研究會發命式を本校(高工假校舍)にて舉行した。一年生市川泰次郎君の幹旋により組織されたるもの。支部長徳増教授。當日の講演は次の如し。

歐米財政事情

財務官 森 賢 吾氏

國家人と國際人との調和

早大教授 内ヶ崎 作三郎氏

大正十四年

一月三十一日 國際經濟研究會講演會を開催、新渡戸稻造、林毅陸兩博士の講演を聴く。

二月二十三日 學友會誌第一號發行。

三月五日 下田教授、デヴィス講師送別會。

同 十二日 下田教授渡歐。

同 二十五、六、七日第二回入學試驗を行ふ。

同 二十七日 高工教職員を招き、お別れ會を開く。午後、本校新校舎へ移る。四月一日事務開始。

四月六日 軍事教育案（配屬將校による教練實施）につき教官會議。

四月十三日 入學式

同 二十五日 國際經濟研究會講演會、穂積重遠博士の「フーゴーグロチユースの國際心」。

同 二十九日 昨年開始したるルソー研究會再開。

五月二日 高谷道男氏の聖書講義開始 毎金曜日放課後。

同 十日 天皇皇后兩陛下御成婚二十五年記念式典。

同 十九日 プロゼミナル開始。

同 二十二日 國際經濟研究會研究講座第一回開催。外務省塚本毅氏講演。

同 三十日 講演部第一回大會、高谷道男氏、堀光龜教授の講演を聴く。

六月一日 神戸商大坂西由藏教授の「工業國の理想」なる講演があつた。

同 十日 岡田文部大臣來校。

同 三十日 對高工野球戰應援團發團式。

七月一日 對高工野球戰第一回定期戰。雨で中止。翌二日舉行四A對三にて本校惜敗。

同 十四日 十四日より二十四日まで毎朝七時―九時の二時間、國際經濟研究會の夏期原書講演會開催。

同 二十一日 學友會誌第二號發行。

九月七日 大竹綠講師來任。

同 十四日 スタンフォード大學教授市橋氏の英語演説。

十一月十五日 第一回陸上運動會開催。

十二月四日―五日 高工と對抗して野外演習。

同 九日 上田貞次郎博士講演「商業の社會的機能」。

大正十五年

五月十一日 夜學部講義開始。

六月九日 國際經濟研究會講演、下村宏氏。

同 十一日 早大新人との野球、二對二引分。

同 十九日 講演部大會、青柳篤恒氏「反省の日本」。

七月一日 第二回對高工野球定期戰、五對四にて勝つ。

十月二十日 校旗奉戴式舉行。

同 二十一日 開校式舉行、岡田文相臨席。

同 二十二日 兒玉謙次、福田德三博士の講演。

同 二十三日より二十六日まで開校記念各部大會開催。

十二月十四日 賀川豊彦氏の講演あり。

同 二十五日 天皇陛下崩御。

同 二十六日 「昭和」と改元。

昭和二年

一月十一日 學友會雜誌第五號は二百三十八頁の「開校記念號」として發行。

二月七日 御大葬、校庭にて遙拜式舉行。

三月十五日 第一回卒業式舉行。

五月十二日 下田教授留學より歸朝。

同 十四日 渡邊教授渡歐出發。

六月三十日 高商新聞創刊さる。主筆、坂本四郎。

六月（第一號）

○聲樂講演會開催。水上競技部創設。部長下津屋助教授。

○學生、濱谷源藏君の「ウィリアム、ゴドウィン」論脱稿。

○發刊の辭及「發刊に至る迄」が第一面を占む。

七月（第二號）

○第三回高工野球定期戰一對零にて惜敗。バッテリー丸橋中島博。

○體研相談會開かる。學報に「研究室めぐり」載り始む。

九月（第三號）

○寄宿舎の實現其緒につく。圖書館の設備大に改善さる。

○帝大野球聯盟主催高専關東豫選大會にて準決勝戰に高工と顔が合ひ、一對零にて本校敗退。

十月（第四號）

○成人講座、市民講座開催。

十一月（第五號）「横濱高商新聞」は「横濱高商學報」と改題

○對早大新人野球戰に接戦十二合、五A對四にて本校勝つ。
十二月(第六號)

○一年生越村信三郎君の現地調査に成る「飛騨白川大家族制度の研究」載る。次號に續く。

○宗教大講演會。來馬琢道氏の「禪宗徒の信仰」鷲尾順敬博士の「國史教育と佛教」。

○國際經濟講演會、上田貞次郎博士、田中貢博士講演。

○關東高商聯盟リーグ戰に劍道部優勝す。

○十月二十七日第一回同窓會總會開催。

○十一月三日を明治節と定めらる。

昭和三年

一月(第七號)

○「行く先は何處」の見出しで本年度卒業生就職の見透が香しからぬ記事あり。

○野球、横濱俱樂部生る、先輩と現部員とより組織さる。

五月(第八號)

○學生の論稿「資本主義經濟學の思想的背景」、「階級闘争と協調」載る。

○光井教授四月二十六日渡歐。

○勳員令下り、圖書課増田彌之助氏學生三人應召。

六月(第九號)

○岡野教授司會學術研究討論會開催。「中等階級の覺醒運動」が討論議題

○第一回寮祭行はる。

七月(第十號)

○第四回對高工野球定期戰、四對二にて本校勝つ。バッテリー丸橋中島博。

昭和四年

一月(第十四號)

○「いつも變らぬ卒業期の悶へ」不安増す就職難の記事あり。

○講演部は昨夏巡回講演をした。

四月(第十五號)

○商學會組織さる。

○學友會費値上、年額十二圓となる。

○水泳部獨立す。

五月(第十六號)

○井上龜三教授三月三十日渡歐の途につく。

○劍道部主將笠原善一、神奈川縣代表として御大禮記念天覽試合に出場。

六月(第十七號)

○文部省學生部を設けて思想取締に乘出す。

○對高工野球定期戦無期延期となる。

○第三回對高工競技戦引分。

七月(第十八號)

○野球部高專關東豫選大會に日大を九對三で撃破し、甲子園の全國大會へ進出。バッテリー宮崎、鹽見、中島博

○對高工定期戦に範球部優勝す。

○水泳部四専門對抗大會に再度優勝す。

○國際經濟研究會講演會、神川彦松教授、千葉龜雄氏、前田多門氏の講演あり。

○文部省にて思想善導講演會開催、高田保馬教授「マルクシズムの經濟學的批判」を始め土方、牧野、中村孝也
諸教授の講演あり、生徒監出席聽講す。

十月(第十九號)

○開校五周年記念行事行はる。日本交響樂協會の祝賀音樂會開催。豪華版である。

○校歌成る。

十一月(第二十號)

○體育會第一聲を舉ぐ。

○校長渡歐につき同窓會各所で送別會を催す。

昭和五年

七月(第二十五號)

○一橋専門部會との對抗綜合競技會開催と決定。第一回大會に優勝。

十一月(第二十七號)

○講演部文藝講演會を開き長谷川如是閑の講演を聴く。

昭和六年

五月(第三十一號)

○對高工野球定期戰復活決定。應援團結成さる。團長磯匠。

六月(第三十二號)

○定期戰に宿敵高工を破る。第一回戰 本校一二A・五高工。第二回戰 本校六―三高工。バッテリー 宮崎、荒木、宇佐美、武富。野球部の黃金時代で宮崎鹽見が本壘打を飛ばす健棒と怪腕投手荒木と守備陣の堅實は超弩級のチームであつた。定期戰の人氣はすばらしいが此の年は殊に素晴しく、入場券は十八分間で賣り切れたと報ぜられてゐる。

七月(第三十三號)

○對一橋専門部綜合競技會で本校六―専門部三の記録を以て再び優勝す。

十月(第三十四號)

○野球部夏の滿鮮試合旅行記を載す。

○講演、河合榮次郎氏「英國労働黨の社會思想」。

○講演部、前滿鐵理事齋藤良衛氏を招き、滿蒙問題を聴く會を開く。

十二月(第三十六號)

○市内五専門學校に學生英語聯盟生る。

○外語劇にスペイン語劇加はる。西語劇「罪は若きにあり」、獨語劇「ウィリアム・テル」、佛語劇「アルルの女」。

英語劇「息子」上場。

○米國職業野球團と試合、投手荒木の球も問題でなく打捲くられ、之に反して米國投手グローヴの「スモークボール」には流石の野球猛者連手も足も出ず、醜弄されてしまつたが、専門學校で、試合したのは本校だけであつたから、野球部の黃金時代が認められる。

昭和七年

一月(第三十七號)

○「就職率第一位の牙城にも吹き捲る不況の嵐」。

六月(第四十號)

○下田教授南米へ、下津屋教授體操選手監督としてロスアンゼルスのおリムピックへ出發確定。

○對高工野球定期戰本校勝つ。第一回戰 本校三A―二高工、本校勝。第二回戰 本校一―四高工、高工勝。第

三回戰 本校一〇A―一高工、本校勝。バッテリー 五十嵐、宇佐美。

七月(第四十一號)

○講演部主催第二回全國大學専門學校講演大會開催。

○佛教青年會圓覺寺居士林に參禪。

○對一橋定期戦は二ヶ年で中止と決定。二年連続獲得した優勝旗は、兩校委員の手で、多摩河畔で焼却した。

十一月

○教練御下調べに朝香宮殿下御來校。
を提示す。

○講演部主催「非常時對策講演會」に於て、内閣資源局宮嶋信夫課長の「國家總動員準備について」及小川郷太郎博士の「現下の不況と非常時不況と非常時豫算」の講演があつた。

○映畫研究會、座談會に見學に盛んに活躍す。

○第一回校内體育大會開催、綜合競技の結果三年C組優勝す。

十二月（第四十四號）

○朝香宮殿下教練査閲に御來校。

○プロゼミナールに三グループ採用。Aグループ私經濟學Bグループ國民經濟學Cグループ法律學とし、第一志望者が十五名を超すときは同一グループ内の第二志望へ廻すこととして一部門への志望者偏在を避ける方法を講じた。

○小谷惠一郎助教授意逝。獨逸語教官として稀に見る優秀豊富な語學力を以て學生を指導したことは勿論、記憶

力は聊か常人を超して驚嘆すべきものがあり汽車の時間表を立ち所に暗記してしまふといふ手品師的才能を持つてゐた。頗る諧謔性に富み、接する人々から好かれ親しまれた。三十三歳の若さで逝かれたのは洵に惜みて餘りある。

○劍道部、關東高商大會に優勝。

昭和八年

一月（第四十五號）

○求人申込百二十餘、昨年より五割の増加で、「インフレ謳歌時代來る」。

○昨年中の運動各部の總決算記掲載。野球、卓球、弓道、劍道、蹴球各部の戦績優秀であつた。

四月（第四十六號）

○福田要、山中靜三、越村信三郎三講師新任。

○中島周平寮監退職さる。

○ラグビー部獨立す。

五月（第四十七號）

○校醫松岡博士を迎へて「健康相談」開設。月二回健康相談を受く。

○應援團結團式。團長清水喜代造。

六月（第四十八號）

○對高工野球定期戰。三年連勝、第一回戰本校勝。本校七△―一高工。第二回戰高工勝。本校七―八△高工。第三回戰本校勝。本校五△―〇高工。バッテリー五十嵐宇佐美。松内アナウンサー實況放送をする。

○陸上競技對高工定期戰三八對一九で本校勝。四種目に全勝。

十一月（第五十號）

○學報第五十號發刊。内容愈々盛ふ。

○内山生徒主事、母校福井縣立大野中學校長に轉出さる。

○第二回校内體育大會にて綜合競技の結果、一年△組優勝す。

○横濱市内專門學校弓道聯盟結成。

十二月（第五十一號）

○岡野教授、生徒主事となり、南種教授寮監となる。

○第六回卒業生宮川保君、北滿に共匪討伐中十一月七日名譽の戦死を遂ぐ。始めての悲しくも勇ましき記録である。

○學友會脫衣所を造る。

○排球部縣下選手權を獲得。

昭和九年

四月（第五十三號）

○「驅歌せよ丘上の春」、就職率九七％。

○富成喜馬平講師來任。

五月（第五十四號）

○井上鑑三教授歐洲留學より歸る。

○高商浴衣復活賣出す。昭和六年まで賣り出されてゐたのが一時中止。ここに復活す。一反一圓五十錢。

○海外卒業生よりの寄稿、三面を埋む。

六月（第五十五號）

○同窓會、會館設立、プール建設を計畫す。

○井上鑑三教授鑑糸業行詰り打開を企圖する鑑糸調査會委員となる。

○對高工野球定期戰四年振りに敗る。第一回戰本校勝。本校五△―一高工。第二回戰高工勝。本校三―五△高工。第三回戰高工勝。本校〇―一△高工。

七月(第五十六號)

○佛教青年會宇野圓空博士を招いて「日本民族精神と佛教」の講演を聴く。

○剣道部、五専門リーグ戦に優勝す。

○弓道部市内學生リーグ戦に優勝す。

十月(第五十七號)

○開校十周年記念事業の一たる物故教職員生徒七十六名の慰靈祭、十四日舉行。

○簡単な「學園十年史」掲載。

十一月(第五十八號)

○十周年記念式舉行。松田文相臨席。文相、横山知事、大西市長、佐野商大學長、渡邊名古屋高商校長、有吉商工會議所會頭、ボイスアメリカ總領事の祝辭があつた。續いて十年勤続教職員二十二氏の表彰式に移る。午後
は安達謙藏、出淵勝次兩氏の講演があつた。夜は提灯行列。

十二月(第五十九號)

○外語劇開催。西語の「デメトリオ・モンターノ」支那語の「五祖と六祖」、英語の「ヴェニス商人」、獨語の「世襲山番人」、佛語の「スカパンの詭計」。

○待望の山岳部成立。

○剣道部、關東高商大會、四専門リーグ戦に優勝。
○謡曲鼻鳴會は設立年久しいが教授四名、學生三十名の會員で盛況を極めてゐる。
○ハーモニカ部第一回街頭進出。

十年

一月(第六十號)

○謳歌せよー就職の春 既に過半数採用決定。別科生に春は朗らか、本科を抜く就職率。別科生二名南米へ、第一
一回商業實習生として外務省の嚴選にパス。

○非常時の笛に踊るもの吟詠會の誕生。

○生徒課苦心の調査 學生諸統計成る。

四月(第六十一號)

○論説「緊揮一番」と題して、就職率百パーセントに甘んぜず天下の横濱高商たるに恥じざる名實完備の學園に
せよと主張す。

○歡喜に躍動する白聖 就職率百パーセント一流所を網羅して 質の向上目覺し。

○YCCの教壇に新味加はる 富成助教授の人間論と越村(商業通論)石島(國漢)兩講師初講義。

五月(第六十二號)

○臥薪嘗膽ここに一年、應援團結團式舉行(五月十日)。團長小山喜規。

○小野(尙太郎)、木谷(洋左右)の兩君ハーモニカ獨奏コンクールに見事優勝の榮。

○野球部今春の戦績 對早大二軍九對七本校勝。對桐生高工九對四本校勝。對藤倉電線四A對三本校敗る。

○競技部 對慈惠豫科戰三三對二四本校勝つ。

六月(第六十三號)

○論説「偉大なる收穫」と題して、定期戦には敗れたが、學園全體の融合調和を祝福する。

○吾々の讀書傾向 産業經濟が斷然多い。圖書館のお蔭を蒙るもの一日平均一三五人、讀まれる本の數は一八〇冊前後、本校は藏書數は少く、全國高商中最下位で、最上位の山口高商の四分の一とは情ないが、讀む人と讀まれる本の數は第一位で、二位の山口高商の二倍ばかり、使用價值の大なること満點。

○YMCA本校の活躍 高工關東學院高商部と提携して、市内専門學校基督教青年會聯盟結成、六月八日發會式を舉ぐ。

○教授訪問記載る。第一回森田教授訪問記。

○野球部 對高工定期戦 武運拙く惜敗す。試合經過 第一回戦 高工四―三本校、第二回戦 高工三A―一本校。然かも二年連敗。バッテリー前、西山。

○庭球部 對高工定期戦本校七―高工二 本校勝つ。

○水泳部 對高工第一回定期戦 二中プールに於て舉行、高工七七―本校五二 敗る。

○卓球部 對大倉高商定期戦 本校四―大倉高商三 本校勝つ、合宿の効あり。

○弓道部 市内四専門リーグ戦 横専、南専を破り、高工を七九中―六三中 その差十六中にて撃破、昨年に續して優勝。

七月(第六十四號)

○森田教授の「佛貨の動搖と金ブロックの將來」なる時論掲載。

○論説「學生の自覺を望む」と題して、本校の學生が秀才を待み、就職率の良きに満足して研究心足らざる憾みなしとせず、自發的により研究慾を勃興せよと叫ぶ。

○本校の産婆役で、全國實業専門學校野球聯盟結成さる。高専野球大會解消。

○岡野部長引率の下に講演部信州地方巡回計發表表。

○佛教青年會例年の如く古川堯造師について圓覺寺居士林に參禪 七月十二日より五日間。西村教授「禪の初心者」の爲めに」を載す。

○籠球部 苦節五年高工を下す 高工三九―本校五六。五専門リーグ戦では四勝四敗で關東學院、高工に次ぎ三位。

○蹴球部 對高工定期戰 六―五にて惜敗。

十月(第六十五號)

○ここ毎號、岡野生徒主事執筆の、「主事室だより」掲載。生徒主事としての注意と抱負を述べてゐるが、この號では就職運動に血眼になつて授業が怠慢になるのを戒めてゐる。

○在獨感想「失業の社會惡」を井上鑑三教授(筆名大森三彌)が載せてゐる。

○「來年度の卒業生まづまづ安心して可なり」。申込殺到に學校當局狼狽の態とある。

○開校記念講演會 阿部賢一氏「日本經濟の彈力性」。

○巢籠會(尺八同好會)演奏、創立以來十年の歴史を持ち第十回演奏會を本校講堂で開く。

○卓球部 全關東リーグ戰に優勝杯獲得。

○排球部 關東學生リーグ戰に第三位獲得。對高工定期戰には敗退。

○十月十五日から四日間の演習、習志野に展開、第一日夜間演習、第二日陣地攻防戰、第三日實包射擊、第四日鐵道輸送。高津西廠舍宿營。教官は遠藤中佐、小白講師。H・S生の吟懷、

教練に疲れて戻る途の邊に 秋草咲けり習志野の原

秋雨の降る習志野の夜はふけて ここにかしこに燈火けむる

十一月(第六十六號)

○就職戦線續報 羽根が生えて飛ぶ。就職希望者百十六名中現在決定者過半数。

○英語討論會生る スレッシャー教師を議長として隔週續行。今回は十一月八日に開かれ、「伊・エチオピア何れにつくべきか」を討論し國際聯盟總會縮圖の如き觀を呈した。

○復活第一回大運動會舉行、十一月一日。

十二月(第六十七號)

○生徒生活調査報告完成 本校生は西郷隆盛がお好き、娛樂では映畫と音樂、酒も少しはいけます。

○外語劇(十二月十四日) 本式の衣裳を着け、メーキアップして熱演。佛語劇「服裝が物を言ふ」、獨語劇「平行」、英語劇「ハムレット」、支那語劇「長恨歌」、西語劇「町の幻」。

○基督教青年會十周年記念講演 波多野海軍中將の「眞の宗教と基督教の本質」。

○本校の提唱で、五専門辯論聯盟結成、十四日開港記念會館で發會式舉行。

○ラグビー部 對高工戰善闘唯涙、對名高商戰には完勝。

○劍道部 全關東高商リーグ戰に破竹の勢にて連勝。

十一年

一月(第六十八號)

○小宮山教授逝去、一月二十三日告別式。眞學恬淡な生涯を惜しまれる。

○競技部主將梶山正親、日本陸上二十傑中の十種競技第十位にランクされた。

四月(第六十九號)

○成績考査細則一部變更 本年度より再試験撤廢。

○古館教授大倉高商校長に轉じ、東京帝大に於て社會學及會計學を専攻し、中央大學教授たりし黒澤清講師來任

○古館教務主任の轉出に伴ひ、井上龜三教授教務主任となり、井上鑑三教授圖書副主任となる。

○對高工前哨戰に野球部振はず、三勝一引分四敗の戰績。對立命館戰八一五本校敗。對帝大戰三一〇本校勝、對
ブレーブス戰四一二本校敗、對コロムビア戰四一三本校敗、對明大二一二引分、對東京瓦斯〇五本校勝、對森

永製菓〇一七本校勝、對專修大學四一五本校勝。

五月(第七十號)

○講演部主催擬國會開催。今議會の重要議案たる「退職積立金法案」を中心議題とし、討議參加部員は事業主側
代表と勞働者側代表とに分れて論議す。議長岡野教授。

○美術部ノアル會生る。

○YCC浴衣、消費組合で賣出す。價一圓五十錢、本染で浪に横濱高商とローマ字を配したもの。

○應援團結團式(五月十一日)。團長内藤威。

○卓球部 市内リーグ戰。第二部に優勝、一部への昇格成る。

○縮球部 五専門リーグ戰に高工を壓る。

六月(第七十一號)

○論說「學生論文に就て」と題して、學報が些か低調にあると自責し、先月號より學生論文を第一面に掲出する
方針を執つたから、本校の眞價發揚のためにも學報を一段と光彩あらしむるためにも優れたる論稿を寄せよと
主張してゐる。

○出席統計成る「本年は香しくありません」と生徒主事室の雲行險惡。

○對高工野球定期戰 連敗三年。今年こそはの復讐ならず。第一回戰高工四八一一本校、第二回戰高工九一四本
校。バッテリー 前、大松、下山。三年振りにAKは實況放送をした。

○柔道部 對高工戰に六年振り宿敵を降す。

○弓道部 高工粉碎、四専門リーグ三年連勝。

○水泳部 第二回對高工定期戰 六六一四二敗戰。

○排球部 關東高專リーグに第三位獲得。

七月(第七十二號)

○井上龜三教授を首班とし産業視察團組織さる。足利、桐生機業地見學、七月十二日―十四日。
○市内四専門學校語學部共同主催第一回英語演說會朝日講堂に開催。

○弓道部 強豪商大専門部を一蹴、關東關西大會を制覇せんと意氣込高し。
十一月（第七十四號）

○同窓會の快舉、プール建設案愈々具體化。

○學術の日本化、文部省に諸學振興委員會開設。南種、渡邊、富成諸教授出席。

○官立専門學校に日本文化講座開設。第一回は村川堅固氏の「歴史的に見たる日本文化の使命」講演。

○第一回全國高專講演大會を十一月三十一日記念會館に開催。

○全日本體操祭に賞狀を受く。

十二月（第七十五號）

○岡野教授の「滿支を巡る」、井上龜三教授の「日獨防共協定の學術的見解」、渡邊教授「國字改良から國際語へ」の諸論稿收載。

○校長の還曆祝 十一月二十六日教職員の祝賀會がニューグランドで催され、校長同夫人招待記念品として徳富蘇峰氏の書贈る。學生より銀製紫檀の漆付煙草盆贈呈。

○配屬將校更迭、遠藤中佐去り佐分利大佐を迎へる。

○森田教授獨塊に一ケ年半留學決定、明春三月渡歐。

○五専門當事者の奔走により横濱學生馬術聯盟十一月二十八日結成。

○多年の金城湯地に據り就職インフレに湧立つ。採用決定既に九割。

○日本文化講座第二回永井潜博士「日本民族」

○教練査閲 成果茲に充實し成績は優秀。

○體育研究會主催室内體育大會は毎年秋體育館で行はれて來たが本年はその第八回である。

太田小學校兒童の轉廻運動遊戲、本校生徒の合同體操、器械體操徒手體操、ベルリンホリムピツク大會四選手の演技があつた。

○劍道部 榮光耀たり三年連勝の關東商劍道大會。

○ラグビー部 對高工定期戦で一四對一一の接戦を演じたが六年連敗の雪辱成る。

○「先輩を訪ねて」の綱設けられる。

○商南俳句會は十一月開會以來すでに數回の句會を開いてゐた。東京藥學専門學校教授にして「東炎」の主幹内藤吐氏を師として、時田、井上、富成、徳増諸教授、高林、増田兩氏及學生宮坂を世話役とした十數名、水入らずの俳句會である。

季題 枯野 短日

日に遠く枯野の起伏つづきけり
 白薔薇しらじら庭の日詰りて
 風寒し枯野に白き月明り
 短日や客去りしあとの椅子二つ
 藻の影のわづかに動く枯野川
 沼明り鋭き枯野風吹きすさぶ
 枯野原鳥一聲鳴きにけり
 煙一筋流れ居りけり枯野原
 山頂は夕日まだある枯野かな
 短日の雲そのままに暮るる峽

内藤吐夫
 井土山紫樓
 徳増寒河江
 時田九冷流
 富成喜馬平
 宮坂斗南
 白井白夏
 海老根桃源
 杉本幸比古
 石川榮一

十二年

一月(第七十六號)

○入學試験期に入り、學課は常識本位、體格人物を重視と下田主專談を載す。

○教授有志間に貿易研究會を組織。毎水曜日研究報告會を開く。

○謡曲部 謡曲コンクールに二等の榮冠。

四月(第七十七號)

○學生の論說で紙面活氣溢れる。内田幸平「フイツシャ一の交換方程式批判」、若菜文夫「日滿支經濟提携の必然性」、安西良治「取引税研究」。

○軍需景氣の高潮に乗り就職率超百パーセント。

○商品學の田尻彦幸助教授逝く。溫厚着實にして寡言忍苦の性格を持ち、敬虔なる基督教徒であり、日曜學校長でもあつた。横濱高工應化の出身で、大正十五年卒業と同時に本校に來任、商品實驗、物理化學擔當。享年三十五歳の夭折は甚だ残念であり殊に老母堂、病夫人、幼き二令嬢を遺されたことは誠に痛惜に堪へない。教職員同窓會學友會は遺児養育資金を獻出することとした。

○時代の要望に支那語講習會生る。武田助教授が奉仕的に盡くみに教授。

○大陸經濟研究會、講演部に新設。

○武市一孝講師來任。故田尻助教授の後任として。徳島高工出身。

○中等學校教授要目改正委員として久しく文部省に改正案を練つてゐた徳増教授は、歴史科講師として高知高等學校の講習會に出張。下田教授も地理科の改正委員であつた。

○弓道部 道場移轉に清新の氣漲る。

○待望久しきプラスバンド誕生、来る定期戦に初登場。

○四専門に率先して卓球部國際式を採用す。

五月（第七十八號）

○學友會の各部豫算會議は毎年相當長時間を要するが今年は前後十三時間を費やし徹宵會議を續けて決定した。

○暗雲低迷する時局を反映してカメロン先生幹旋の國際問題研究會第一回例会開く。

○應援團結團式 雪辱の決意固し、團長鈴木三郎。

六月（第七十九號）

○實業専門學校長會議 現下諸般の情勢に鑑み教學の刷新斷行に文部大臣訓示。

○元本校教授内山進氏逝去 福井縣立大野中學校長として令名高き同氏は四十五歳で長逝。本校には大正十四年より八ヶ年間商工心理と修身擔當、又生徒主事として當時最も問題多き思想對策に専心した功勞大なるものがあつた。昭和八年郷里の青年教育のため大野中學校長に轉任されたのである。

○ブトル開き、五月三十日大々的に舉行。日大葉室選手谷口選手の模範泳ぎ市内専門學校選手の競泳があつた。

○對高工野球定期戦 雪辱の鋭鋒敵を粉碎、雌伏三年茲に還春。不二ヶ丘勝利の亂舞、篝火の下に感激の凱旋式 第一回戦本校四―三高工。第二回戦本校一―三高工。バッテリー 前、飯島。實況放送（淺沼アナウンサー）

一「十一對三、十一對三、高商軍の勝、お聞きのやうに高商の應援團破れ返へるやうな歡聲でございます。五色のテープ、五彩の色紙は雨霰と降りしきつてをります。又もや歡聲、この歡聲と凱歌は暫し鳴りやみもしません。勝つた高商のナインは泥と汗にまみれ顔には笑さへ浮べて應援團の前に整列してゐます」。

○競技部 商專に快勝、好調を示す。

○籠球部の殊勳、五専門リーグに優勝。

七月（第八十號）

○月桂樹植樹式 高商精神を遺憾なく發揮した對高工野球定期戦の勝利を永久に記念するため、正面玄関南寄の植込に六月二十三日月桂樹植樹式舉行。

○蹴球部 對高工定期戦に快勝。最初の銀カップ獲得。

○山岳部夏季スケヂュール發表 南北アルプス上越國境附近、秩父連峯踏破行。

○講演部夏季地方巡回講演續く。岡野教授越村助教授學生六名。彦根、福井、金澤に於て。

九月（第八十一號）

○世界四十八ヶ國の教育者教育關係者二千餘名の第七回世界教育會議は八月二日から七日まで帝大安田講堂で開催。田尻校長は「商業教育と國際奉仕」の英語講演をした。

○體育、語劇、演奏大會を綜合して全校大會を開催と決定。十一月六、七日舉行。

○防空警備規定制定。

○時局に鑑み寮祭中止と決定。防空訓練實施(十五日)。

○七月十日から二ヶ月の滿蒙旅行を終へた渡邊教授の旅行談掲載。

○野球部 關東大會に優勝し(決勝戦本校九A―六高工)、甲子園全國大會にて同志社高商に準決勝で二對零にて敗退。

○國際經濟研究會、再開近し。

十月(第八十二號)

○國民精神總動員の強調週間。

○本校教授の大論陣、戰時經濟講座開く。八日より十六日まで朝日講堂に於て。

○英語教官會議に西村教授、學生三十五名をつれて出席、教授方法のデモンストレーションを行ふ。

○プール公認 水上聯盟公認のプールとして認めらる(八月十六日)

○全横濱珠算競技大會に二名二等入賞。

○開校記念名士講演會、前外相佐藤尚武氏最近の國際情勢、前商相小川郷太郎氏非常時財政經濟立法。

十一月(第八十三號)

○同窓會號

○學報第三種として認可(十一月十七日付)

○俳句會句集「荒海」發行さる。

○謡曲部 觀世宗家に於ける全國學生謡曲コンクールに優勝。

○本校に於て始めて試みたる全校體力検査を行ふ。合格者百七十八名。

○本校水泳選手 中村隆男、全日本水泳公認記録によりCクラスに入る。

○小白講師應召、吉濱準尉後任に來任。

十二月(第八十四號)

○田尻校長、教育審議會臨時委員仰付らる。

○南京陷落祝賀提灯行列參加。

○音樂部 戰傷病兵慰問に活躍。

十三年

一月(第八十五號)

○年頭の辭として下田教授の「時局に對處すべき學生の覺悟」が述べられ、支那事變に於ける學生の報公精神を高唱す。

○支那事變の正しき認識を全世界の學生層に呼びかけるために、國際文化協會設立され、學生宮坂義一の案文を羽仁謙三がスペイン語に、黒住眞一が英語に翻譯して、パンフレットを各國學生層へ發送せんとする。
三月（第八十六號）

○早稲由五郎少尉津浦線沿線にて壯烈なる戦死を遂ぐ。卒業生戦死の始めての報道。

○會長案通り同窓會を富丘會と命名。

○就職豪華版、超百パーセントを示す。本科第十二回、別科第九回卒業式に當り、校長、好況時の卒業に氣を許すなど戒める。

○學報「有保證」となる。學友會の取計ひにより政府に戦時公債を供託した。有保證となれば掲載禁止事項が一々通達される便宜があり時局下これは是非必要であつた。

四月（第八十七號）

○富成教授の「時局と學生」、黒澤教授の「經營計算と戦時經濟的課題」の二論説掲載。

○オリムピック東京大會の準備着々進む。

○樺瀨高南報國團結さる。心身鍛鍊と勤勞奉仕等五綱領を掲ぐ。

○岡野教授、現職のまま、關東軍參謀本部付、建國大學教授として滿洲國へ赴任。大正十五年九月海外留學から歸朝、直ちに本校來任、財政學、社會政策學教授としては熱辯に學生の血を沸かせ、生徒主事としては身を以

て指導に當り學生の心をよく握んでゐた。

○猪間驥一講師、岡野教授の財政學と統計學擔任。

○主任寮監南種教授、富成教授と更迭。

○ラヂオ體操、正課と決定。

○武田助教授現地へ轉出後、外語の宮越、内之宮兩教授が講師として支那語を擔當してゐたが、兩氏に代り香坂順一氏講師として來任。

○學生の自肅、自戒一年生は斷髮を實行。

五月（第八十八號）

○卒業生小峯登君の「抗日の首都漢口脱出記」掲載。その他卒業生從軍將士の現地報告載り始む。

○比島學生國を招き親善茶話會を開く。

○應援團結圖式、團長宮本海。

○待望の映畫研究會復活。

○消費組合三ヶ年計畫。五項目の改善要項。

六月（第八十九號）

○井上龜三教授「經濟と法律についての一問題」徳増教授「獨逸合邦の經濟的價值」の二論稿掲載。

○長期戦に對應して貯蓄報國強調。

○田尻校長、神奈川地方物價委員を委嘱さる。

○庶務課矢島主任、長崎高商事務官に榮轉。創立以來の功勞者。特に就職難時代における就職事務一手引受人であつた。

○國際經濟研究會では實際資料の整理研究を進め、調査部と協力して資料整理の上研究材料として提供せんとする。

○對高工野球定期戦、春戦して敗る。第一回戰高工二二一八本校。第二回戰本校三A一二高工。第三回戰高工八一三本校。バッテリー 岩井、下山。

○水泳部 大倉高商に六七對四一で大勝し、意氣軒昂。

○應召中の越村教授より送り來れる、入浴中の自畫像入り便り掲載。行水の湯音を包む蛙鳴かな。

七月(第九十號)

○一面の富丘舎の記事、卒業生の消息載る。

○事變一周年、全市を舉る一萬六千、歩武堂々の大行進。

○記念日に勅語を賜ふ。翌八日講堂に於て奉讀式舉行。

○靴の脅威、天下晴れて下駄ばき許可。

○青年學校教員養成所開く。

○水泳部 宿敵高工を撃破、續く五専門リーグに優勝。本校七七點、横専七一點、關東四〇點、商専三七點、高二五點。

○柔道部 對高工定期戦に勝ち、三年連覇。

○蹴球部 對高工定期戦に連覇、優勝カップ授與さる。

○汗と土に塗れて集團勤勞作業舉行さる。第一集團は箱根畑宿の報國寮に初入寮し、勤勞作業一週間。第二集團は原町田座間間の行幸道路工事。第三集團は本校校庭地均し。尙報國寮ルボルタージュ第四團に掲載。九月(第九十一號)

○甲子園に於ける全國實業専門學校野球大會に松山高商を破り優勝。本校四 松山三。

○難關で聞えるガイド試験に三瓶芳朗、出合資文、羽仁謙三の三生徒合格、免許證下附された。

十月(第九十二號)

○陣中通信に小白教官からの漢口攻略便り等載る。

○就職殆んど決定。未決定僅かに三名。

○體操部 インターカレッジ二部に於て明大と覇を争ひ優勝。

○第三外國語新設、三年二學期に於て教授す。

- 「商學」は從來年三回發行されてゐたが發行回數の整理に迫られ、十四年度より年二回發行と變更。
- 二十七日武漢三鎮攻略祝賀式を校庭に舉行。
- 宿望の寮歌成る。寮生佐藤武敏作詞。
- 圖書課の學生讀物調査結果發表さる。新聞では東京朝日斷然多く、舊物では「學生と生活」「大地」「學生の誓」「若い人」「生活の探求」の順である。
- 學報執筆者紹介欄を設ける。
- 十一月（第九十三號）
- 「獨我論所見」なる學生の論說紙面を壓す。
- 十二月「第九十四號」
- 德増教授の「英米通商條約の意味」、香坂講師の「日本語中の支那語」の二論稿掲載。
- 第二回文化大會、空前の成功を收む。アルゼンチン公使フランス總領事來場。
- 謡曲部 觀世能舞臺に於ける學生謡曲コンクールに第一席を獲得、堂々二年連覇す。
- 送別會は會費一圓以内とせよと生徒主事の達しあり。嚴守を望むといふ苦言投書見ゆ。
- 五日より十日迄圖書週間として、書庫開放。
- 燒夷彈防火演習校庭にて行はる。

- 五専門合同音樂會第一回大會開港記念會館に開催。
- 高工との合同三曲演奏會本校講堂に開かる。
- 十四年

一月（第九十五號）

- 森田教授、歐米の新知識を土産に歸朝。

三月（第九十六號）

- 搖がぬ鐵壁王座、娘一人に婿八人の盛況といふ就職金字塔。

- 日本國際協會の學生論文懸賞募集に、三年生森川保久「日滿支の經濟關係」に一等入賞。

- 紀元節にプラスチックを先頭として伊勢山太神宮へ行進拜禮す。

四月（第九十七號）

- 調査部資料の校外搬出許可。

- 井上鑑三教授逝く。大正十四年東京商大卒業と同時に來任。原論を擔當。生糸經濟研究では有數の權威であつた。野球部長としては寢食を忘れて奔走、明るい性格は多くの人に親しまれた。享年四十一歳。

- 冠たり體育高商。全國大學高專中體育優秀校として文部省より最初に表彰さる。

○商大突破十六名。又しても全國一。

○山中靜三助教授、香坂順一講師退職。沼田嘉穂、大畠清の兩氏來任。

○森田教授「海外で逢つた同窓の人々」なる一文を寄す。

五月（第九十八號）

○就職戦線開始、早くも申込殺到。

○第一線の小白教官惜くも病を得て歸る。

○應援團結團式（五月一日）。團長望月雄二。

○京濱商工界の權威及學界關係者を以て昭和九年組織せる橫濱經濟研究會（Y・K・K）は主宰岡野教授轉出後休止してゐたが、今回徳増教授主宰調査部中心に新活動に入り、第一回懇談會を開催す。

六月（第九十九號）

○森田教授の講演筆記「ドイツの東進政策」、學生宮永吉平の「ドイツの貿易政策と原料問題」なる論稿掲載。

○現役將校配屬十五周年記念御親閲。

○満蒙に派遣すべき興亞青年勤勞報國隊參加員決定。

○十三回對高工定期野球戰。熱戰又熱戰、天運我に恵まず惜しや長蛇を逸す。第一回戰高工六一五本校。第二回戰本校一五一四高工。第三回戰高工五一一本校。バッテリー 岩井、下山。

七月（第百號）

○記念増大號。富山高工校長の「兄弟校として更に密接な關係を」、前田商專校長の「祝辭」、白山關東學院高商部長の「學報百號を祝す」等の言葉掲載。尙、「學報創刊當時の思ひ出」を畔上勝二深澤多喜男兩君が書いてゐるが、學報發刊には専ら「泥壺」同人が當つたこと、發行部數値かに五、六百部に過ぎなかつたこと等の憶ひ出が述べられてゐる。

○若人の熱と力をこめて集團勤勞作業開始。第一集團、縣道中野線修築工事、第二集團、箱根報國寮、第三集團大雄山最乗寺林道修築工事等。

○事變二周年、校庭にて分列式舉行。

九月（第百一號）

○越村助教授、調査部野口勝利氏歸還。吉濱教官應召。

○野球部 關東實專大會に横専を六對二で撃破し制覇成る。

十月（第百二號）

○文化大會は事實上分裂。音楽の夕と演劇か。電力使用統制により講堂の夜間使用も問題。

○就職王國の威觀。二旬にして全員決定。

○海運と戰爭（蓮沼忠男）、預金貨幣（立石清志）の二學生論稿收載。

十一月(第百三號)

○學生の諸論文、支那大陸現地報告で紙面賑ふ。

十二月(第百四號)

○學科課程改正、教授時數は三十二時間、課目を綜合主義に。明年度より實施。

○卓球部室新築成る。

○講演部は部長富成教授に率ゐられて小田原に講演會開催。

○同志著大學主催高專大學英語演說大會に一年生津田孝太郎出場、二等賞獲得。

○日本文化講座に於て三浦新七博士の「東洋文化と西洋文化」の講演あり。

十五年

一月(第百五號)

○本校出身戦歿者合同慰靈祭一月二十五日舉行。石田光治君外十四柱。

○生徒課窪田保春氏召集解除昨年末歸還。

三月(第百六號)

○白亜の殿堂に憧れて窄き門に競ふ若人千五百人に近く、十人に一人の合格率で創立以來二番目の記録である。

○二千六百年記念事業の一つとして、逗子櫻山地内に杉檜數千本を植林し學生の勤勞奉仕を以てこの植林をすることとなる。

四月「第百七號」

○渡邊教授「商業廣告研究の將來」、黒澤教授「同情・感情移入・一體感」、富成教授「文化の普及化」の諸論稿を寄せ、在學生泰國キムヘン・シュテイクル「今日の泰國」掲載。

○二千六百年記念事業の一つとして、圖書課では、商業經濟圖書の分類改正と記念文庫の創設を計畫す。

○従來のプロゼミナール制(十五名内外に學生を分割したる)に代え、徳増渡邊越村三教授がクラス別に原書國富論の講讀解説を擔當することとなつた。

○井手文雄氏來任。猪間講師に代り財政學擔當。同氏は九州帝大卒業後、同大學助手として財政學研究室に居られた人である。

五月(第百八號)

○學生宮崎義一の「計畫經濟の限界」掲載。

○應援團結圖式。團長加藤八郎。

六月(第百九號)

○第十四回對高工野球戰。三位一體總努力の凱歌、宿敵高工をストレートに擊碎す。第一回戰本校七人―四高工

第二回戦本校八一四高工。バッテリー 大門、戸來、小田野。過去二連敗のあと、この優勝は感激を昂め、校庭篝火燃える中で勝利の萬歳を絶叫す。

○七月東京に開催される日米學生會議に、本校より學生代表二名派遣決定。
七月(第百十號)

○滿洲國皇帝陛下御來訪。横濱御入港を迎ふ。

○水泳部 對高工定期戦四連覇成る。

柔道部 對高工定期戦に勝つ。

剣道部 五専門大會に制覇。

○深緑の三溪園待春軒にて俳句會を開く。寫眞部第一回校内展開催。
八月(第百十一號)

○渡邊教授の「大領域經濟的生活圈の外部部域と經濟協定の新形態」、沼田嘉穂教授の「戦時經濟と統制の強化」の二論稿掲載。

○本年度第二次集團勤勞作業。

○西村教授日本學術振興會の委嘱を受け、謡曲五十卷英譯に着手す。

○野球部は實專關東大會に、五A對三で横專を敗り優勝、更に甲子園に於ける全國大會に關西學院を五A對二、

横專と再び會ひ之を三對二で退け、決勝戦で西南學院を七A對二で一蹴して堂々たる優勝振りを示した。

○水泳部は五専門大會に制覇、東部高商大會では名古屋高商六十二點に次ぎ五十點で第二位となる。神宮プールの全國高商大會では八百米リレーには優勝したが第四位であつた。

十月(第百十二號)

○全校を擧げて新體制に即應、學友會積極的解消再編成されん。

○長くも錦旗を迎へて特別觀艦式舉行さる。代表者參列奉送迎。午後授業休業、拜觀。

十一月(第百十三號)

○越村教授の「ワーゲマン氏の財貨循環圖型批判」、學生論文「經濟哲學管見」(工藤雄治)、「高橋哲學について」(深谷迪)、「新經濟倫理」(山尾泰造)、「生活と宗教」(田邊福松)掲載。

○十日紀元二千六百年奉祝の大式典擧げらる。本校に於ても西村教授校長代理として式典舉行。十一日には授業を二時間で打切り、校庭に集合、校長の祝辭あつて後、伊勢山皇太神宮參拜行進。

○十一日の奉祝會に、時田教授引率音楽部員五名奉祝歌齊唱團に参加、宮城前式場にて奉唱。

○教育勅語頒發五十周年記念式舉行十月三十日。

○田尻校長光井教授、教育功勞者として十月三十日文部大臣より表彰され木杯一個授與さる。

○神宮大會高專野球に於て高知高校を二對〇にて破り、決勝戦にて山口高校を五對三で撃破して堂々優勝す。

○福田要助教授去り、井上憲司郎講師後任となる。福田氏は別科の農業を擔當され又寮監として寮生の生活指導に當られ、親しみ易い性格と非常な勤勉振りは學生に敬慕されてゐた。氏の榮養料理は有名である。
十二月(第百十四號)

○各務記念財團の篤志により、太平洋貿易研究所設立。二日創立委員會開催。

○學校報國團結成さる。各部長の所懷掲載。

○排球部 定期戦に高工を屠る。

○好成绩の體力検査、中級九十一名に上る。

○紀元二千六百年奉祝大音楽會盛況。

○同英語劇開催。

十六年

一月(第百十五號)

○學界展望欄設けられ、第一回に黒澤教授會計學界展望寄稿。

○學生懸賞論文(學報部主催、越村教授審査)一等入賞者宮崎義一の「經濟價値の論理構造」掲載。

○太平洋貿易研究所資料目錄作成、近く上梓の運びとならん。

○文部省の綜合視察は十二月十三、四日に互り行はれた。

三月(第百十六號)

○太平洋貿易研究所開所式舉行。卒業生坂本四郎、辻嶺二、佐治康治の三氏の現地報告を聴く。

○入學志願者減少。第二部に進學制限令影響し又試験期日が高校と重なるためらしい。

○報國園生活部購買班則成る。

○Y・K・K第九回懇話會は英國でスパイ扱ひを受けた横原覺氏を招き講演を聴く。

四月(第百十七號)

○全國高商科目を改廢、教授要綱飛躍的發展。

○本年度プロゼミナールはクラス單位とし、岩本、森田、井手三教授分擔。セリグマンの原論講讀。

五月(第百十八號)

○學生の研究論文寄稿に紙面横溢。その一つ經濟生活構造の概観(龜坂晴史)。

○應援團結國式。五月一日。團長脇長武夫。

○靖國神社臨時大祭に當り四月二十五日全校保土ヶ谷忠魂碑參拜。

○支那語講師に菅谷正二氏を迎へる。

六月（第百十九號）

○第十五回對高工野球定期戰、燦たり二連覇の偉業。第一回戰本校一一―三高工。第二回戰本校五A―三高工。バッテリー 戸來、常見、小田野。

○銃劍術班活躍、戸山學校における第一回段級試験、吉田保三初段合格。

七月（第百二十號）

○高商標準教授要綱決定、日本商業精神を確立。三學年に分科制を採用。

○興亞勤勞報國隊員五名壯行會。

○國策に順應して愈々教練強化實施。

○強歩大會、本校戸塚競馬場間折返し二十四杆強歩。第一着二時間二十九分。

○第一回研究班講演會、黑澤教授物價政策を説く。

○校醫松岡長一郎博士の「ツベルクリン反應について」の記事掲載。

○ラグビー、蹴球、籠球の三部對抗戰、大倉高商との間に行はれ、二年連敗の後を受け堂々雪辱成る。蹴球籠球に勝ちラグビーに敗る。

○新に結成された横濱五専門射撃聯盟の第一回大會に於て個人戰では一位、二位、三位、五位を占めたが團體戰では四位。

○水上競技班 商大専門部に三連勝、高工に五連覇、五専門大會では三位。

○陸上競技班 商大専門部との定期戰に大勝。

○馬術班 第一回馬事訓練大會に参加。

○籠球、蹴球、柔道各班は對高工定期戰に敗退。

八月（第百二十一號）

○現下の臨戰體制に即應、學校報國隊を編成。

○太平洋貿易研究所の研究叢書第一第二輯刊行。

○徳増教授「兒島灣干拓農場を観る」を寄す。

○獨ソ開戰と英米の對日資産凍結で歐米圖書殆ど杜絶。

○文部省「臣民の道」公刊頒布。

十月（第百二十二號）

○高専研究員として渡邊教授、日本精神文化研究所へ入所。十月十一日より十二月二十七日迄。

○黑澤教授臺灣製糖業視察、八月より一ヶ月間。

○沼田教授「原價計算要綱の確立とその社會的効果」、下田教授「東亞共榮圈の研究」、森田教授「統計の本當のウソ」、黑澤教授「製糖期と非製糖期」の諸寄稿がある。

○報國隊結成式舉行（九月六日）

○報國隊大隊長岩本教授の「決然ペンを捨て軍國の御用に立て」の談載る。

○待望の記念文庫一般公開迫る。

○陸軍の防空訓練を受けて歸校せる下津屋教授の「民防空の先驅たれ」の談話掲載。

十一月（第百二十三號）

○大學高專等の在學修業年限短縮。明年は九月卒業、大學入學は十月。

○校外の學者からの寄稿掲載し始む。加茂儀一氏の「技術と經濟」、相川春喜氏の「日本技術の構成的性格」が富成教授の「機械生産とその特質」とともに載る。

○大學高專銃劍道大會に於て第二位獲得。

○體力章檢定大會、成績極めて良好。

○横濱學生庭球大會に妹尾渡部組優勝。

○就職、十月下旬に全部決定。十月一日から銓衡、一十月足らずの快速調。

○大日本學徒體育振興會設立決定、學徒の體育組織一元化さる。

十二月（第百二十四號）

○大東亞戰爭勃發、對米英宣戰の大詔渙發。詔誓奉讀式を九日校庭にて舉行。

○在學年限短縮に鑑み授業時間大幅增加。

○太平洋貿易研究所一大飛躍、南方政策研究に着手。

○佐分利大佐應召、後任正木大佐。

○射撃班は市内五専門大會に全種目優勝。

○學生生活の向上を圖り全校生に讀書調査。

十七年

一月（第百二十五號）

○賀陽宮殿下御台臨（十六年十二月二十四日）。優渥なる御訓示を賜ふ。

○戦時下學徒實踐要項五訓、文部省敎學局より通達さる。

○八日第一回大詔奉讀日。大詔奉讀式舉行。

○初の繰上卒業式舉行、十二月二十七日。

○勤勞協力令發せらる。

三月（第百二十六號）

○新學年度學科課程決定、産業經濟の變革に即應。卒業繰上の對策全く成る。

○正木大佐に代り藤堂大佐來任。

○新嘉坡陷落(二月十五日)、十八日祝賀式舉行、五専門合同分列行進を縣廳前廣場に行ふ。

○第一師團管下高専射撃査閲に第二位を獲得。

四月(第百二十七號)

○卒業線上に對處し就職對策決定。

○マレー語新設。

○澤崎教授(英語擔當)。神子田助教(獨逸語擔當)來任。

○勤務協力令下の海軍工廠へ出勤、三月二十二日より三十一日まで。

○東亞研究班新設さる。班長下田教授。

○海洋班新設さる。班長下津屋教授。

五月(第百二十八號)

○校長、教育審議會の功績により賜杯の光榮に浴す。

○馬來語に信永講師來任。

○支那語管谷講師辭任、岡本隆三助教來任。

○太平洋貿易研究會開設、Y・K・Kはこれに合流解消。施設を富丘會に開放。

第一回太賀研究會「華僑問題」幸田哲二氏講演。

○應援團結圖式、八日。團長小瀬行則。

六月(第百二十九號)

○在學年限短縮に即し夏期鍛鍊期間を短縮。

○渡邊教授文部省獎學金を受く。

○五専門射撃大會團體個人共に優勝。

○第十六回對高工野球定期戰、三連覇成る。第一回戰本校五―三高工。第二回戰高工二〇―七本校。第三回戰本校一三―四高工。バツテリ―戸來、小田野。

○庭球班 七年振に高工を撃破、リーグ第二位に躍進。

○縮球班 五専門リーグ戰に第二位獲得。

七月(第百三十號)

○南方の資源調査へ黒澤教授出發。

○教練査閲の閱兵分列は報國隊の編成で受閲することとなり岩本大隊長以下教授中隊長は佩劍して指揮す。査閲官の講評は優良。

○圖書課の増田彌之助氏退官。在職十六年。

八月(第百三十一號)

○本年度就職全部決定。

○全國實專野球大會、横濱公園球場に開かる。決勝戦にて高工と熱闘延長十四回五對四にて惜敗。關東大會にも決勝戦で高工と對戦七對〇で敗退してゐる。

十月(第百三十二號)

○田尻校長勳一等に叙せらる。

○校長滿洲國建國十周年記念式典參列。

○本科第十七回卒業式九月十六日舉行。

○東京尚商會設立、官立高商卒業生の親睦を圖る。

○渡邊教授現職のまま二ヶ年間、佛印に新設の南方學院へ赴任決定。

○本校に貯蓄組合誕生。

○横濱驛に出勤、國策輸送に協力。

○文化講演宇野圓空博士の「南方の民族文化について」。

○關東の雄横専を撃破ラグビー班努力結實。

十一月(第百三十三號)

○繰上卒業に臨時的措置、十二月中に試験施行。

○農繁期に下る協力令、小机中山に勤勞奉仕。

○教練擔任吉濱少尉去る。

○明治神宮國民鍊成大會に縣代表として參加したる體操班、集團體操競技に第四位。

十二月(第百三十四號)

○森田教授論稿「共榮圈の物價問題」掲載

○大東亞戰爭一周年、一週間に亙る行事實行。

○防火デ-に防火訓練實施。

○校内銃劍道大會二年△組制覇。

○三専門銃劍道大會に優勝。

○吉村氏を迎へ文藝班短歌會を開く。

○五専門音樂會關東學院講堂に開催。

十八年

一月(第百三十五號)

○學力低下の防止を圖り且つ三分科制愈々實施。

○學制改革勅令公布、皇國民の鍊成を主眼。實業專門學校は專門學校とす。

○二十年史の編纂決定。

○大東亞共榮圈特輯欄に、谷口吉彦氏の「共榮圈の貿易問題」、館穆氏の「大東亞建設と皇國人口政策」、黒澤敬授の「南方經濟の變革過程」、徳増敬授の「亞細亞民族と滿洲」の諸論稿收載。

○嚴寒に鍛ふ。全校擧げて合同體操と、武道稽古、今冬は教室の暖房廢止。

三月（第百三十六號）

○第十四回貿易別科卒業式、二月二十七日舉行。

○入學試験旬日に迫る、競ふ一千五百餘名、開校以來の最高記録。試験問題を文部省で統一。

○防空實戰的訓練實施。

○三月末勤勞作業實施、陸軍兵器廠へ出動、報國林植林、綜合運動場作業、校内防空壕作業の四班に分る。

同窓會記

母校創立二十周年を迎へるとともに、同窓會も本年をもつて十有七年の歴史をもつに至つた。その間母校に育まれ、實業人として巣立つた同窓生は三千人に垂んとし、支部の所在は内地、北海道、朝鮮、臺灣を超えて滿洲支那および滿洲に延び、文字通り東亞の各地に力強い發展の網を繰り擴げるに至つた。既に年次の古い卒業生間には重役支店長を續出し、大多數は大東亞戰下の經濟界に於ける中堅級として活躍し、校是「信賴の人」を信條として、各々その職域に一意奉公の誠を捧げつゝある。

同窓會の歴史もこれを二つの段階に分けて考察することができる。第一は第一回卒業生の年より母校創立十周年に至る創成期であり、第二はその後より二十周年に至る發展期である。

一、創 成 期

昭和二年三月、第一回生卒業とともに同窓生の親睦機關として横浜高商同窓會を設立することとなり、設立委員によつて會則の作成その他各般の準備工作が進められ、田尻校長を會長に戴き、第一回生中より市川泰次郎、

芳野一男、根本清君が幹事となり、評議員には右の外若原竹次、伊藤和吉、大關幸一郎、藤田勝義の諸君が選任され、會計主任に若原君が當り、本部事務所を母校に置いてここに横濱高商同窓會が生誕した。この年十一月二十二日横濱市内馬車道竹内牛肉店に於て第一回總會が開催され、會務報告と會則改正を審議し、同時に神奈川および東京兩支部が発會式を舉げた。この年には母校野球部、庭球部、籠球部等のために卒業生による後援會が結成された。

翌昭和三年五月二十六日第二回總會が開催された。この時第二回生の大西泰一、早瀬正彌、淺井秀次、若山茂坂本四郎の諸君も新役員に選任され、また會計事務は母校の齋藤照之助氏、庶務は矢島照氏に囑託することとなり、新たに機關紙として同窓會報を發刊することとなつた。同年七月には河本英二君等の奔走によつて大阪支部が創立され、十一月三日の御大典には田尻校長を迎へて臨時總會が開かれた。この年には又運動各部の後援會と並んで學藝會方面にも後援會が結成され、講演部のために講究會が、謡曲のために卓鳴會が生れた。

昭和四年には古館市太郎教授を評議員に推戴して陣容を固めるとともに、渡邊輝一教授の歸朝歡迎會、田尻校長の渡歐送別會を開き、また井上鏗三教授を中心に横濱生糸商勤務の會員間で生糸貿易研究會が結成され、母校と同窓生とのあひだに學理と實踐の交誼が行はれた。

兩來同を重ねるに従つて會員の數を増大し、昭和五年には神戸に、昭和八年には静岡に、その他名古屋、朝鮮にそれぞれ支部が設立せられ、定期總會、クラス會等を通じて會員相互の親睦を厚くするとともに、同窓會誌を

よび會報を發行し、あるひは高商學報に同窓會欄を設けて會務の狀態、會員の動靜を報知し、毎年會員名簿を作成配布して會員相互の連絡を密にし、母校學友會に補助金を與へ、また會計の基礎を確立して會務の遂行を圓滑化する等、次第に機構の整備と事業の充實を圖り、同窓生の親睦機關として堅實なる發展の一路を進つてきた。

特に昭和九年母校創立十周年を迎へるとともに、同窓會の記念事業として各種の行事を催すこととなり、昭和八年一月より準備に着手し慰靈祭係委員として芳野一男、早瀬正彌、増田喜三郎、山上伸一、講演會係委員として伊藤和吉、吉川吉光、木村治郎、音樂會係委員として瀧本新、岡澤治彦等の諸君がこれに當り、實行機關として事務部を設け常任幹事、市川泰次郎、早瀬正彌、上瀧一郎、武藤正平、越村信三郎、喜多山九馬、間瀬俊平等の諸君および特別會員齋藤照之助、矢島照の諸氏がその代表となり、各般の計畫と準備を進め、昭和九年十月十四日、母校講堂に於て死亡會員のために盛大なる慰靈祭を行ひ、同日午後五時より開港記念會館に於て同窓大會を開催した。この時一堂に會するもの、會長、母校特別會員、京濱在住會員、および地方支部代表を併せて四百を超え、頗る盛會であつた。

本部の十周年記念大會に呼應して各地支部に於てもそれぞれ各種の催しが行はれた。特に神戸支部に於ては母校より下田禮佐教授を講師として招聘し、「中南米經濟事情に就いて」といふ演題の下に、神戸商工會議所講堂を會場として、盛大なる記念講演會を開催した。

更に母校十周年記念事業の一つとして、學校に水泳プール建設の議が起り、豫算七千圓中、三千五百圓を同窓

會より寄附することとに決定し、また同窓會館設立基金一萬五千圓を五ヶ年計劃で募集することとなり、齋藤氏の豫算案を中心に昭和九年始めより八回に亘つて委員間に協議が進められ、實行委員大西泰一、武藤正平の兩君が八月から十月にかけて各地へ寄附金募集の爲に出張し、豫定の金額の調達および豫約取決めのために奔走した。

二、發 展 期

翌昭和十年三月十日、横濱市内千登世に於て幹事會および評議員會を開催し、會則改正に就て審議した結果、總務、監事、顧問を新たに設けることとなり、引續き新入會員歡迎會が開かれた。當夜の出席者は、母校教職員新會員および先輩を加へ約百八十名に及び團遊會式の饗宴と餘興によつて空前の盛況を呈した。

同年七月十一日静岡及清水地方の大震災に罹災せる會員に對して見舞を發し、翌十一年四月母校教授古館市太郎氏大倉商學校長に榮轉さるるや、引續き同氏を本會顧問に推薦することとし、母校訣別式に於て本會より記念品を贈呈するとともに、五月七日京濱在住會員は東京銀座中央亭に於て盛大なる祝賀會を催した。

昭和十一年四月以來、母校入學生より同窓會終身會費積立金を徴收することとなり、また同年五月以降、特別會員齋藤照之助、矢島照の兩氏を同窓會主事に推し、會報、名簿の編輯、出版、および會計事務を委嘱することとなり、茲に同窓會の財政と事務の體系が確立せられた。

本年をもつて同窓會も創立以來十周年を迎へたので、本部では會報の十周年記念號を編輯することとなり、ま

た大阪、神戸の兩支部では、田尻校長の西下を機とし、十月三十周年記念關西大會を開催した。會場は寶塚の水明館、相會する者、大阪支部長河本英二君、神戸支部長若原竹次君以下六十九名、六甲の翠嶺を仰ぎ、武庫の清流を臨んで同窓會の發展を祝し、各種の餘興に一夕の歡を盡した。

同年十月廿四日サクラヤマグリルに於て兼て縣案の第一回全國支部代表者會議が開催され、東京支部より西野已男司、菊地英夫、静岡支部より井田仁、岩間雪夫、伊東銑一、東海支部より伊藤和吉、大濱敬次、大阪支部より河本英二、龜井竹次郎、神戸支部より若原竹次、中山二郎、朝鮮支部より清水泉の諸君來會し、本部總務市川泰次郎君議長となつて、プール建設、終身會費等の議案を審議し、次いで一同千登世に於ける田尻校長の招宴に列し、和氣霽々裡に本支部の最初の交誼が行はれた。

昭和十二年二月五日母校助教田尻彦幸氏逝去さるるや、遺児養育資金を募集することに決し、發起人および實行委員を擧げて會員より寄附金を募集し、七百餘圓を遺族に贈呈した。

同年五月三十日母校に於てプール開き舉行せられ、工事報告、校長挨拶の後、日大葉室選手等の式流が行はれた。引續き同日午後二時より母校會議室に於て臨時總會を開催し、會則改正の件を審議決定した。その結果、本部總務は常任總務に、任期三年は二年に改められ、また幹事は廢止され、現行規則の基礎案が成立した。會則改正の結果、九月一日、最初の常任總務として西野已男司、深澤多喜男、武藤正平、越村信三郎、喜多山九馬の諸君が選任され、次いで廿二日監事として市川泰次郎、大西泰一、近藤一男、勝木徳治郎の諸君が發令され、母校

側監事として岩本啓治、徳増榮太郎兩教授が重任されることとなつた。

既にこの年七月七日、日支事變勃發し、同窓會員より多數の應召者を送るにいたつた。よつて九月廿一日第一回常任總務會を次いで九月廿八日クラス總務會を開催し、更に十月廿四日第二回全國代表者會議に諮つて、應召會員に慰問袋を送り、戦歿者遺族に校長題字の掛軸及香典を贈り、戦傷者に對し見舞狀を發送することとなつた。既に第一回の全國代表者會議の頃より同窓會名について各種の案が出たのであるが、結局會長に一任することとなり、本會議に於て田尻校長の命名により、爾後本會を「富丘會」と稱することになつた。

昭和十三年四月には母校教授、富丘會評議員會顧問岡野鑑記氏滿洲建國大學教授榮轉の爲送別會を催した。翌十四年三月四日横濱銀行集會所に於て定期總會を開き、議案審議の後來賓中の岡野鑑記氏より「滿洲に於ける五族協和の意義」と題する講話を聴いた。五月十一日常任總務市川泰次郎君シドニー赴任の爲後任者として芳野一男君が選任された。また六月十日母校森田優三教授歸朝歡迎會をサクラヤマグリルに於て開催した。

既に日支事變も可成り進展したので、本專變を記念すべき特別事業計畫を企てることとなり、十四年九月より日支事變記念事業委員會が結成され、常任總務、クラス總務、地方總務および監事中より實行委員を選出して各般の準備を進め、昭和十五年一月二十一日母校講堂に於て會員中の支那事變戦歿者の慰靈祭を執行した。式は先づ始祭の詞、國歌吹奏、修祓降神獻饗に始まり、神官祭詞、祭文朗讀、玉由奉奠終つて、富丘會代表、遺族代表挨拶を述べ、校歌合唱によつて式を閉ぢ、別室に於て招待遺家族を中心に英靈の在校時代の追憶談を交し、嚴肅

なる祭典を終了した。

同年六月十一日若原竹次君等の發起により横濱支部が創立せられ、また九月一日市川泰次郎君、布施重剛君等が中心となつて濠洲支部が、さらに十二月廿三日中村義男君等の努力によつて新潟支部が設立され、翌十六年三月四日伊藤正一君等の奔走によつて九州支部が生誕した。

三月八日横濱市内紅葉閣に於て評議員會および定期總會が開かれ、各種の議案を審議決定し、懇親會席上に於て天野恒雄君の聯銀券、軍票對法幣の關係についての現地視察談を聴いた。

昭和十五年は皇紀二千六百年に當り、母校に於て記念學生文庫を創立することに決し、資金の一部を同窓會の寄附に俟ちたき旨依頼があつたので、十六年二月のクラス總務會および三月の總會に諮り、各支部の承認と援助を得て、寄附金募集に着手し、三千六百餘圓を同文庫に贈つた。

尙昭和八年岡野鑑記教授の主唱によつて母校教授有志、横濱財界有志、京濱在住同窓會員のあひだに横濱經濟研究會が組織され、屢々講演會、座談會を開いて學理と實務の連絡を圖つてきたのであるが、昭和十三年岡野教授渡滿後徳増教授が、この會を主宰し、また母校に太平洋貿易研究所が設置されるとともに、本會も太平洋貿易研究會に發展的解消を遂げ、さらに昭和十七年以降會員の母體を同窓生有志に置くこととなり、横濱銀行集會所に於て隔月講演會座談會を開き、同窓生間の南方經濟圈に對する認識を深める上に大なる貢獻を與へた。

尙昭和十六年には統制經濟の進展に伴ふ學理と實務の統合を圖るため、芳野一男君等が中心となつて經理研究

會を組織し母校教授黒澤清氏を講師として東京丸ノ内糖業會館および横濱銀行集会所等に於て數回に亘り有志間に眞摯な研究が續けられた。

その間、大阪、神戸、九州その他各地支部も次第に會員を増し、總會、クラス會等の開催も頻繁に行はれた。特に東京に於て全國官立高商卒業生の親睦協調機關として東京高商會が組織され、共同の會館設置の議が起るとともに富丘會東京支部は率先これに参加することに決し、支部長松井郁一君等はその創立企劃に參與した。また十二月十三日栗原義潤君等を中心として天津支部が創立され、北京支部、滿洲支部と並んで富丘會は大陸に確乎たる地盤を据えることとなつた。

昭和十七年度を迎へるとともに、富丘會員の増大と物價高に伴ふ經費膨脹に對處する爲會費増額の件が日程により、三月二十二日横濱開港記念會館に於て開催された定期總會に於て原案が可決され、富丘會の財政的基礎が確立した。終つて二階大食堂に於て晚餐會に移り、田口利介君の「太平洋海上決戦」に關する講演があり、和氣露々裡に解散した。

既に前年十二月八日大東亞戰爭開始とともに會員中より軍務あるひは社務のために南方に應召あるひは轉任する者相次ぐ情況であつた。常任總務芳野一男君も重用任務を帯びて南方に轉任することになつたので、若原竹次君が後任者となり、筆頭總務として富丘會の爲に盡力することとなつた。

昭和十八年五月母校創立二十周年記念式舉行に當り、富丘會に於てもこれに對應し、各種の記念事業を行ふこ

ととなり、慰靈祭、同窓大會、母校職員勤績者表彰、母校記念事業への寄附等が計畫され、目下準備より實行に移されんとしつつある。

富丘會規則

第一條 本會ハ富丘會ト稱シ本部ヲ横濱高等商業學校内ニ置ク

第二條 本會ハ會員相互ノ友誼ヲ厚クシ知識ヲ交換シテ我國實業ノ振興ヲ計ルヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス

- 一 正會員 横濱高等商業學校ノ卒業生及ヒ曾テ同校ニ在學セシ者ニシテ總會ノ承認ヲ經タル者
- 一 特別會員 横濱高等商業學校ノ職員及ヒ曾テ同校ノ職員タリシ者

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

- 會長一名、總務若干名、評議員若干名、監事六名、會長ニハ横濱高等商業學校長ヲ推薦ス
- 總務ハ常任總務八名以内、クラス總務及地方支部代表總務若干名トス
- クラス總務ハ各クラス毎ニ評議員ノ互選ニ基キ會長之

レヲ選任ス

クラス總務ハクラス總務會ヲ組織ス

常任總務ハ會員中ヨリクラス總務會ノ推薦ニ基キ會長之レヲ選任ス

常任總務ハ常任總務會ヲ組織ス

地方支部代表總務ハ地方支部ノ推薦ニ基キ會長之レヲ選任ス

評議員ハ各卒業期毎ニ五名ヅ、トシ毎年總會ニ於テ當該クラス所屬正會員ノ互選ニ基キ會長之レヲ選任ス

評議員ハ評議員會ヲ組織ス

監事ハ會員中ヨリ會長之レヲ選任ス

クラス總務、常任總務及監事ハ互ニ之レヲ兼任スルコトヲ得ス

役員ノ任期ハ總テ一ケ年トス

但再選スルコトヲ妨ケス、補缺トシテ就任シタル役員ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス

第五條 會長ハ本會ヲ總理ス

クラス總務會ハ本會主要會務ノ審議決定ヲナス 常任

總務ハ常例ノ會務ヲ處理シ且クテ總務會ニ提出スヘキ重要會務ノ立案計費並クテ總務會ニ於テ議決シタル會務ノ執行ヲ司ル

本會重要會務ニシテ臨時緊急ヲ要スルモノアル時ハ常任總務會ノ決議ニ依リ之ヲ執行スルモノト得但次ノクラス總務會ニ報告シ其ノ承認ヲ求ムルモノトス

評議員會ハ重要ナル會務ノ審議ニ參與ス

監事ハ會計ノ監督ヲ行フ

第六條 本會ニ左ノ職員ヲ置クコトアルヘシ
主事及書記若干名

第六條ノ二 本會ニ顧問ヲ置クコトヲ得

第七條 總會ハ毎年一回三月之ヲ開キ會務ノ報告、役員ノ選舉、豫算、其ノ他重要ナル事項ノ審議ヲ爲ス

但シ必要アルトキハ臨時之ヲ開催スルコトアルヘシ
總會ノ決議ハ出席會員ノ半数以上ノ同意アルコトヲ要ス

第八條 評議員會ハ總會開催前總務部ヨリ議案ノ回付ヲ受ケ、ソノ審議ノ爲メニ評議員會議長之ヲ召集開催スヘキモノトス
但シ評議員會議長ハ評議員二名以上ノ要求アリ且ツ必

要ナリト認メタルトキハ臨時評議員會ヲ開クコトヲ得
第九條 正會員ハ入會ノ際入會金、會費及會費トシテ金拾圓ヲ納付スヘシ

但舊規定ニ依リ終身會費ヲ納付シタルモノハ別ニ基本金トシテ金拾圓ヲ納付スルモノトス

第十條 既ニ納付シタル會費ハ何等ノ事由アルモ之ヲ返還セズ

第十一條 基本金ハ總會ノ決議ヲ經且ツ會長ノ許可ヲ得サル限り之ヲ支出スルコトヲ得ス

第十二條 本會ノ經費ハ豫算ノ範圍内ニ於テノミ支出スルコトヲ得

但シ止ムヲ得サル事情アルトキハ評議員會ノ承認ヲ經且ツ會長ノ許可ヲ得テ豫算外ノ支出ヲ爲スコトヲ得

第十三條 豫算案ハ總務部ニテ之ヲ作成シ評議員會ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス

但會計年度ハ曆年ニ依ル

第十四條 豫算及決算ハ本會ニ誌ニ發表スルコトヲ要ス
第十五條 本會ハ毎年一回會誌及年若干回會報ヲ發行シテ會員ニ配布ス

本會ハ毎月横浜高等商業學校報國閣ニ於テ發行スル「高商學報」ニ會報欄ヲ設ケ會報ニ代フルコトヲ得

第十六條 正會員五名以上居住スル地ニハ本部ノ承認ヲ得テ支部ヲ設置スルコトヲ得

支部規則ノ制定及其改正ハ本部ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス
支部ハ選任シタル代表總務ヲ經テ本部ト連絡ヲ保ツヲ要ス

第十七條 本會規則ノ改正ハ總會ノ決議ヲ經ルコトヲ要ス

昭和十七年度役員

- 會長 田尻常雄
顧問 古館市太郎 岡野鑑記
監事 德増榮太郎 小幡孫二
評議員會 顧問
岩本啓治 下田禮佐 不二門龍觀
南種康博 河村寛治郎
常任總務
若原竹次 服部甚四郎 武藤正平
越村信三郎 大類武雄

クラス總務

- | | |
|-----------|-----------|
| 一回 辻 頼二 | 二回 若山 茂 |
| 三回 布施 重剛 | 四回 白井 司郎 |
| 五回 森 有三 | 六回 糸井 泰治 |
| 七回 原 幸男 | 八回 林 孝一 |
| 九回 小林 敏道 | 十回 廣瀬 文一 |
| 十一回 栗野原基之 | 十二回 三谷 武 |
| 十三回 花井 孝雄 | 十四回 越智 平吉 |
| 十五回 和田 利雄 | 十六回 雨谷 精一 |
| 十七回 山本 晋平 | |

地方總務

- 松井郁一 (東京支部代表)
藤田勝義 (横濱支部代表)
河本英二 (大阪支部代表)
中島華人 (神戸支部代表)
井田 仁 (静岡支部代表)
伊藤和吉 (東海支部代表)
大平主馬之助 (關東支部代表)
中村義勇 (新潟支部代表)
塚田義雄 (九州支部代表)
太内 基 (北海道支部代表)

評議員

藤田榮作 (朝鮮支部代表)	大石建城 (臺灣支部代表)	福山奇平 (滿洲支部代表)	栗原義潤 (天津支部代表)	村田嘉幸 (北京支部代表)
一同 矢田 四郎	辻 額二	二回 若山 茂	三回 吉川 吉光	三回 布施 重剛
板倉 光雄	渡部 登治	鹽崎 輝夫	小泉 武夫	加田 豐實
楠崎 紀男	千葉信治郎	加藤 芳雄	菊池 英夫	林 淳一
高木 一	川邊 克己	大平 一雄	野川 和夫	磯谷 積三
星野 泰助	岡本 鏡一郎	酒井 榮三	西尾 邦明	田中 良雄
伊藤 格爾	酒井 榮三	八回 林 孝一	鈴木 善爾	鈴木 幸男
鈴木 秀	高木 一	五回 森 有三	內山 秀雄	六回 糸井 泰治
天野 恒雄	星野 泰助	七回 齊藤 豐	鈴木 幸男	鈴木 善爾
田中 良雄	伊藤 格爾	八回 林 孝一	鈴木 幸一	伊藤 格爾

監事

別五回 島 貞藏	別六回 佐塚 義雄
別七回 尾澤 聖英	別八回 阪梨 滋
別九回 堀江 四郎	別十回 湯田 孫平
別十一回 天野 哲夫	別十二回 田邊 俊雄
別十三回 城市富士郎	
平館 利雄	瀧本 新
喜多山九馬	木川 敏一

支部所在地並役員

東京支部

東京市麹町區丸ノ内鐵鋼會館内日本線材製品統制株式會社内 松井郁一氣付
支部長 松井 郁一
常任幹事 小池 與市
橫濱支部
橫濱市中區山下町四六太平洋貿易株式會社内
藤田勝義氣付
支部長 藤田 勝義

大場 龜治	丹原 正一	鈴木 斐雄
小林 敬道	本多啓次郎	
矢島 綴	八木橋親臣	
廣瀬 文一	本間亮二朗	佐藤良四郎
佐川 正文	河島 平助	河部 建夫
栗野原基之	麻生 武	
内藤 威	今井新一郎	岩崎禮太郎
三谷 武	池田 進	山崎 秀男
手塚 泰輔	澁木 啓一	
花井 孝雄	井津 鐵也	
青木 修三	海老根源一	
越智 平吉	和泉澤彌太郎	栗山 義
岩瀬 國二	浦田 金吾	
和田 利男	赤羽根 隆	井上富次郎
松本 宗信	若林 昌也	藤沼 謙一
雨谷 精一	石川 勝三	
長洲 一二	津田孝太郎	
山本 晋平	有賀 美夫	酒井 信輔
四王天正章	上川内洋六	
別一回 平沼金一郎	別二回 橋本 旭	別三回 岩崎 和吉
別四回 岩崎 和吉		

常任幹事

岸田 俊介 瀧本 新
林 淳一 大類 武雄
池田 勇 栗田 義

大阪支部

大阪市西區西湊水町三和銀行心齋橋支店

支部長 河本 英二

常任幹事

石井 清 郷 幸之助
石井 知

神戸支部

神戸市神戸區海岸通三井物産株式會社雜貨部
中島準人氣付

支部長 中島 準人

常任幹事

古賀 勝正 鈴木 健太郎

朝鮮支部

京城府南大門二丁目

麒麟麥酒株式會社京城支店內

支部長 森田 榮作

副支部長

鈴木 五郎

臺灣支部

支部長 大石 建城

滿洲支部

大連市桂町二〇 福山方

支部長 福山 奇平

天津支部

天津特三區九經路三一二號 栗原洋行氣付

支部長 栗原 義潤

幹事 田波久五郎 中山 博

北京支部

北京特別市中二區新平路二七號村田嘉幸氣付

支部長 村田 嘉幸

常任幹事 佐伯 健一

戦歿者氏名

本科	一回	石田 光治	本科	三回	飯島 政一
"	六回	眞野 幸次郎	"	六回	宮川 保
"	六回	佐藤 祐幸	"	八回	早稲 由五郎
"	九回	望月 智	"	九回	佐藤 大
"	九回	上島 文男	"	十回	關根 清
"	十一回	石川 榮一	"	十一回	今井 千藏
"	十一回	高田 喜徳	"	十二回	前 驥
"	十二回	吉光 市郎	本科	七回	阿部 一二三
本科	七回	三宅 恂	"	九回	磯谷 信義
"	八回	唯野 眞一	"	十一回	岩田 俊郎
"	十回	坂本 喜美男	"	十二回	北代 幸彦
"	十一回	近藤 正雄	"	十二回	坪田 信
"	十二回	齋藤 政夫	"	十三回	關口 倫正
"	十二回	保谷 秀雄	"	十五回	相澤 芳郎
"	十四回	小林 祐輔	賀別	八回	池田 耕三
賀別	五回	横田 清	賀別	八回	池田 耕三
"	八回	内藤 良一	本科	七回	阿部 一二三
本科	七回	奥野 茂昭	九回	柳田 喜七郎	同
"	九回	柳田 喜七郎	同	坂田 寛	同
"	十回	坂田 寛	同		

回想録

横濱高等商業學校の創立開校せられたることは、大正十二年九月一日の大震災の爲め全滅した我横濱市の復興に大なる聲援を與へ且つ貢獻したるものと信ず。

高商は大正十三年に開校の豫定であつたが、大震災の災害は實に深刻にして餘蘊容易に收らず、従つて高商新校舎の建築工事の進行捗らず、到底新校舎に於て始業の運に至らざる爲め、臨機の對策として横濱高等工業學校の校舎に於て店開きをするこゝとなつた。横濱高工は大震災の爲め全校舎は島有に歸し、翌十三年三月にはバラスクではあるが新校舎が建築せられた。舊校舎に比し建坪は多少の増加があつたので、高商の開校一年生を迎へる充分の餘裕があつた。

煙 洲 鈴 木 達 治

(元横濱高等工業學校校長)

かくして高商は兎に角高工の新バラスク校舎内で呱呱の聲を上げたのであつた。

長崎高商の校長として令名あつた、田尻常雄氏が新校長として創立の任に當られた。當時私は高工の校長であつたが、軀幹巨大な田尻校長と短軀肥大な私と好き對照として、門のない高工の門を一ケ年間仲善く出入りした。田尻校長は熊本市の出身で、少年時代には同市の熊本英學校に學んだ。私の教員生活の最初は此の英學校であつたが、今一、二年私が早ければ、同校にて田尻少年を教へた筈である、僅かの違ひで此寧馨兒を私の門下に加へ得なかつたことは實に残念至極である。

◇……………◇

世事匆忙歲月は流れて高商は本年は創立二十年の記念日を迎へるに至つた。創立當時を回顧する一文を徴せられたが、往事恍として夢の如く、額齡總てを忘れて茫然たるものがある。只一つ忘れ得ないものが、しかも其れは高工の校庭に残つて居る。當時高工には職員食堂はなく、高商は勿論何一つ造營物がなかつた。高商は物置場位は必要であるとして、それを作つた。事實は食堂として設計したもので、高工では今日でも食堂として使用して居るのみならず、各種の小集會に學生まで使用して重寶がられて居る。高工の方では一ケ年間の格安家賃と考へて居るかも知れないが、兎に角立派な高工への置土産であり、又記念物である。

◇……………◇

その内に高商の新校舎は堂々たる城郭の様に清水丘上に落成した。一日兩校教職員の別れの宴會が置土産の食堂で賑しく、且つ實になごやかに開催せられた。高商と高工とは、横濱に於ける直轄學校であるから、今後とも

一層仲善くしよう、又一年に一回位は、兩校の教職員は會合して親睦を重ねようとお互に挨拶を交したものであつた。

併し其時、別れたきりで、申合した會合が一回も催すことなく、二十年と云ふ長い歲月が流れ去つた。只兩校を結ぶ唯一の大綱がある。それは毎年夏期に於ける野球の定期戦であつて今に繼續せられて居る。

定期戦は兩校學生の血を湧かし、校風の發揚に預つて力あつた事は、疑ふ餘地がないが、兩校の親善に資する處があつたや、否やは、疑問として殘される。私としては兩校として我横濱市の爲め、何等か其所に出色のある兩校の友好關係の存立が望ましく感ぜられる。

◇……………◇

二十年間に高商は長足の進歩發達をした。全く田尻校長の精勵努力の致す所と、敬意を表せざるを得ない。高商が第一同卒業生を出した頃は、一般世間の不景氣は、想像の及ばぬ所で、今日と較べると、文字通り隔世の感がある。追従する出身者の就職難は其後十ケ年も繼續した。

田尻校長は東奔西走、所謂席暖まる暇もなかつたであらう。各實業専門學校は、卒業生の就職難に悩み抜く最中に、横濱高商は其苦を知らなかつたかも知れない。所謂、就職戰場に於ては、必勝不敗の地位を確立したものであらう。全く田尻校長の精勵努力と其手腕に負ふ所であつて、出身者でない私共も、大に敬意を表する所である。

二十年の歳月は決して短かくはない。些少の頓挫の跡を留めず、一路向上躍進を辿つた二十年の經營は容易の事ではない。其れが又直轄學校であり、一人の校長に依つて成就せられた事蹟なるに於ては、一層其感を深くせざるを得ない。類例稀れなる偉觀である。

茲に創立二十年を記念するに當り惡文を草し田尻校長、教職員其他高商關係の各位に謹んで深甚の祝意を表します。

横濱高商創立二十周年の回顧

古 館 市 太 郎

(大倉高等商業學校長、元本校教授)

横濱高商の創立を回顧するとき、余は大正十二年九月一日の關東大震災火災の聯想を禁ずることが出来ない。是れ高商の開校は、此大災厄の直後僅かに半年を経過して災害の中心たる東京横濱は、茫々たる一面の焼野原と化したる廢墟の跡に貧弱なるバラック式建築が點綴せられ、漸く復興の緒に就いた許りの時であつて、而かも罹災校の一たる横濱高工のバラック校舎の一隅に居候の姿に於て呱呱の聲を揚げたからである。従て高商の生立ちに誠に恵まれざる諸條件の下にスタートを切つたのであるが、併し一面に於ては、此大震災火災打撃の反動として我

々大和民族の特長たる反撥的大勇猛心が奮起せられ、復興の氣運は大東京大横濱の建設に向つて勃然として盛り上つた緊團氣の中に、高商も田尻校長を中心として教職員一同協心戮力能く其不利不便を克服して力強き地歩を進めたのは、今更ながら感慨無量に堪えない。斯くして翌年三月富士見ヶ丘の新築未完成の本館一階及附属木造建物を教室事務室に利用して此處に引越したのであるが、設備の不完全は却て教授生徒間の行動交流を親密ならめ、所謂家族的和親協同の空氣を醸成し、明朗快活なる進取の氣分に満ちて第二年目を送り、翌大正十四年春堂々たる現白鳳殿堂校舎の落成と元氣潑刺たる教授團の陣容整備と相俟つて校運の基礎茲に確立し、超えて昭和二年第一回卒業生を社會に送出した頃は本館屋上より横濱市復興進捗の状況を眼下に眺めながら、我こそ復興の前途たらんが如き意氣が全校に漲つたのであつた。爾來校運隆々今日に及べるは周知の如くであるが、此發展二十年史の一端を今少しく具體的に語らんとせば勢い田尻校長の存在を切離して考ふことが出来ない。

先づ第一に横濱高商校舎の建設は、其前後に設立されたる直轄諸學校と同様、文部省の豫算は木造二階建の設計であつた。然るに田尻校長は任命と同時に關東大震災火災の體驗を契機として其設計を耐震火災の鐵筋コンクリート建に變更すべき必要を主張し、例の熱誠なる押しを以て遂に當局を動かしてかの類例を破りたる宏壯なる校舍並に先例なき體育館商品陳列館等の設備を完成したのである。

次に學園教養の根源たる教授團の完整であるが、之も田尻校長は優秀なる將來性に富める少壯有爲の人材招聘に腐心し、能く其人選を誤らなかつたのみならず、専任教授の他校兼務を絶対に排除し、學園の教養に専念集中

すべき主義を勵行したことである。斯くの如きことは何人も希望する所であるが、大都會の地に於て優秀なる教授を得ることゝ併行して、而かも一糸亂れざる統制の下に之が實行を貫徹するは容易ならぬことであつて、單なる約束や權威的抑制のみにては出來難きものである。此點に於て田尻校長の緩嚴宜しきを得たる手腕並に同情に富める徳性と相俟つて其苦心は全く他の追従を許さざるものあるを見逃がすことが出來ない。

第三に卒業生の世話に關する努力であるが、之れは横濱高商の卒業生は如何なる不景氣の際にも就職難はないといふ世評と、就職先の重役連が田尻校長の熱誠と其心臓の強き押しとに對しては遂に根負けして一人でも卒業生の採用を餘儀なくされるといふ述懐を聞くことに依つて裏書されるのである。而して之れは校長としては、良き卒業生を採用して貰ふのは結局先方の爲めになるので、決して無理を強ゆる罪惡とはならぬといふ校長の信念と、其採用後の責任を飽まで回避せぬといふ態度より迷る誠意の現れに外ならぬ。即ち校長が彼の精力絶蹶なる銳氣を以て東奔西走勞を厭はざる努力と、常に同窓會本部は勿論地方支部に至るまでマメに出張し、卒業生と接觸連絡を保つて之を奮勵するのみならず、就職先を歴訪して其動靜を視察し、絶えず指導警告を怠らざる精進振りは是又天下一品といふて差支なからう。

右の如き校長の活動と其下に統率せらるる教職員の努力とが相俟つて學校の聲譽と隆昌を齎したので、當に同校發展の二十年史を飾る特筆すべき偉觀と信ずる。

以上筆者が創立當時より昭和十一年迄同校に關係したる立場より觀たる感想の一端を録し、今後一層の隆昌發展を祈り創立二十周年の慶祝の辭に替へる次第である。

富士見ヶ丘の追想

岡野鑑記

(建國大學教授、元本校教授)

もうすでに、二十年も経過したのか――

建學二十年史の編纂に當つて、何か回想録を書けとの依頼狀を受取つたとき、私は、今更の如く自分の過去を振り返つた。成るほど私が、歐米留學から歸つて横濱高商に赴任したのは、創立後三年目の大正十五年の九月であつた。そして關東軍經濟顧問兼建國大學教授要員として横濱を去つたのが昭和十三年の四月だから、私は三十一歳の夏から四十三歳の春まで、壯年期の十二年間を、あの富士見ヶ丘の學園で暮したわけである。その後滿洲に赴任してから早くも滿五年、私の教壇生活が既に十七年を経過したことを想へば、二十周年の祝典と二十年史の編纂も、あゝ成るほどと頷かれる。

今こうして回想の筆を執つてみると、毎年繰返された學校の一年間の行事が、走馬燈のやうに、追憶の胸に浮び上つて來るのを覺ゆる。

慌しい入學試験の仕事が済んで、ほつと一息すると、四月八日の入學式である。希望に燃えた新入生とその父

兄たちを前にして、定まり文句ではあつたが、溫顔に微笑を湛えながら、嬉しうに訓示された田尻校長の姿が眼に浮ぶ。

入學試験の慰勞を兼ねた四月下旬の教職員懇談會も、最も忘れがたいものゝ一つである。時局柄昨今は中止されてゐるであらうが、あれほど心から打ち解けた仲間同志の旅行は、今後一生を通じて、恐らく他の社會では経験することは出来まいと思ふ。横濱から長驅して鬼怒川と日光へのドライブと、銚子から香取鹿島への旅行が、懇談會の壓巻であつた。

野球定期戦の感激は、年中行事のクライマックスであつた。全校の教職員生徒が一境となつて、共に狂喜亂舞し、悲憤慟哭するあの感激は、追想するだに血潮が燃え上るやうな熱い思ひ出である。

秋の行事もまた追想が盡きない。次々に開催される各種のスポーツの對校試合、全校を舉げての運動會、體育大會、野外演習、音樂會等を経て、外語劇大會に至るまでの一連の行事は、それを一々回想するだけでも容易ではない。運動會での教職員たちのだるま突きの異様な光景は、まだ昨日のことのやうに眼前に浮ぶ。外語劇での生徒たちの器用な仕種が、まだあり／＼と追想される。雄大なる富嶽を前にして野外演習の數日は、若々しい明らかな記憶となつて残つてゐる。

ゼミナールの雰圍氣もまた忘れ難いものゝ一である。一週一回のゼミナールは、時間的には不充分であつたが卓ぞ圍んで十四、五人が親しく向ひ合ふと、私の全身には、期せずして清新の氣が満ち溢れて來るのを覺えた。

教室でのやうなバラ／＼の氣分ではなくして、お互の心と心とに血が通つて來るのを感じた。私は夕闇迫るのも忘れて時局を論じ理想を説いたものである。

しかし私の追想として特殊の意義を持つものは、やはり生徒主事としての五年間の経験であつた。初代の内山主事の後を承けて、私がこの重責に就いたのは昭和八年であつた。その頃すでに左翼運動の峠は越えてゐたが、その餘蘊はなほ到るところに燃つてゐた。下田教授と共に、私はいくつかの事件を處理したが、徒らな彈壓や刑罰よりも、生徒たちの環境を充分に理解した上で、溫い親心をもつて諄々として説得することが、その最上の解決方法であることを経験した。

野球定期戦の後始末もまた、その頃の生徒主事の苦勞の種の一つであつた。高商精神を昂揚させる絶好のチャンスとして私はむしろ之を積極的に支持したが、勝利の夜の伊勢佐木町には少なからず惱まされた。敗戦の夕べの富士見ヶ丘の悲痛なる光景もまた、耐えがたきものゝ一つであつた。だが、定期戦後の喜怒哀樂の感情はむしろ私にとつてはいとも愉快な苦勞の印象となつて残つてゐる。

とまれ、二十年と言へば二世である。大震災後の丘の上に、スフィックスの如く立ち現れた高商は、今や二十歳の青年として、大東亞戦争の眞唯中に颯爽として立つてゐる。舞臺は幾轉回して、世紀の事業たる大東亞建設の重責の一翼が、今やこの二十歳の青年の雙肩に懸けられてゐるのである。すでに世に送り出した二千名を越ゆる卒業生とともに、今後の卒業生に課せられた任務は大きい。從來のやうな自由主義的個人主義的な、徒らな立

身出世の榮夢を一掃して、眞に應能奉公の誠意を以つて、大東亞建設の聖業に挺身されんことを祈つて止まないものである。

二十年の『山』の生活

徳増 榮太郎

(敬 授)

(私は回想録を書かない筈であつた。二十年史を執筆すれば自然にそこに二十年の回想が書かれると想つたからである。ところがそれを書き上げると矢張り「回想」の一断片でも書いておきたいといふ氣持が出て來た。それは二十年史には自分の主観を出来るだけ雜へないで資料を客觀的に取扱はうとした(それがどれほど成功したかは疑はしいとしても)から、勢ひ、自分の回想の一片を書きたくなつたのである)

歐洲留學から歸つたのは大正十三年六月二十五日であつた。大正十一年二月日本を離れ、四、五年は歸らない積りでゐたのだが、大震災で横濱が殆んど全滅し、自分の家も影も形もなくなつてしまつたこと、横濱高商が一年早く開校したので文部省から至急歸朝せよとの電報を受取つたことで豫定を早めて歸つて來た。高工の假校舎で授業を始めたばかりの本校は、それでもあと二週間ばかりで夏休みといふところだつたから取敢ず文部省へ歸朝報告を出して假普請の、我家へ引籠つてしまつた。夏休みが明けて九月六日の始業式に一年生だつた一回生を前に就任挨拶をした。之が本校に於ける就任挨拶の皮切りであつたらう。その挨拶の要旨は、南太田の丘上

に立派な容れもの——學舎が出来かけてゐる。いづれ還からずそこに移つて暢び暢びと勉強することにならうが生きた人間として勉強したいものだ。者おきたらしめよ、物おきたらしめるな、お互に。といつたやうなものだつたと記憶する。教育にすぶる素人たる私は或は型に嵌まつた教育は出来なからうがそこに却て新鮮味があるのではなからうかといふ多少の自負と抱負とが、生きた教育をしたいといふ切なる希望となつたものだつた。爾來二十年、この抱負は果して實現されただらうか。自分の仕事は生きてゐたらうかと反省してみるとき頗る熱くなるのを覚える。それでも一回から四、五回までの學生とはゼミナールを通じて學友會の仕事を通して親交を結んだ。自分も若かつたし學生の方も近づき易かつたせいもあらう。ゼミナールなどは時間を超越して薄闇くなつて會食に續くといふ風だつた。それが何時の間にか「怖い先生」になつてしまつたのは轉た感慨なきを得ない。型に嵌つた先生となつてしまつたらしう。

二十年も経過するうちには變動の少い本校にも多少の變化はあつた。若い教授が出來た。けれども私達當時の若い教授連中から見ると當時すでに老大家と思はれた先輩諸教授が多數今なほ健在でゐられるので、やつぱり「若い者」としての氣持は抜けない。二十五歳で最年少の先生だつた森田教授でさへも既に四十を二つ三つ越した昨年のある講義の時間に私は「われわれ若いものは」とやつて學生から拍手喝采されたが、年齢の絶對數は殖えても先輩諸教授との年齢の相對數は變らず、老大家が多數健在であることが、私をして未だに二十年前の若さの錯覺を起させる。有り難いことだ。

學友會の會則も出來て事業を始めようとしたけれども中々手がつけれぬ。雑誌の發行も出來ず、音楽部にしても行ふに場所なく、運動に關する部では運動場がない。わづかに他の場所を借りて庭球、野球をやつた。庭球の中に含まれてゐた卓球も間に合はせの卓球臺でやつた。他のすべての部の活動は開校第二年この不二見ヶ丘に登つてから始つたのである。

その後學校の教職員も多くなり生徒の數も急に増し、家族的なものからより高度の集團に發展した。そして組織立つた。それは塾より學校への推移と似て居らう。併しながらその爲に何か忘れられたものがあるやうである

學友會の豫算案作成に就て所謂幹事會を行ふこと十數年、昭和十五年秋學友會が發展的解消をなすまでにはいろいろの思出がある。幹事は年々入代るけれども私はとう／＼代ることがなかつた。毎年新になつた幹事が集まるので他の部の事を知るものが極めて少い。中には自己の責任の部の事すら知らずに意見を述べる。私が少しでも意見を挟むとその部に可成大きな影響を及ぼすので多くは沈黙を守らねばならない。衆議に對し決を採るとき方法にも注意を要する。そして段々と改良した。常に總ての部を同一視することを考へて來た。他の會議ならば適宜の進行をやるのと思ひながら、随分時間を長引かせて了つた事もある。

兎に角駸々乎として進歩し發展を續けて二十年の記念の日の近い今日、同類の學校中に比類のない名聲を勝ち得たのは、開校當初によき出發あらしめた田尻校長の人格、識見の偉大さの然らしめる所である。係の方から何でも書けとのことであつたから、命これ従ふの氣持でその通り何でも書いた。失禮の點は御海容を希ふ次第である。

若 原 竹 次

(第一回卒業生)

今や母校創立二十周年ヲ迎ヘントスルニ當リ、校運ハ隆々トシテ昂マリ名實共ニ日本一ノ高商トナリツ、アルコトハ、吾々同窓生ニトリテハ此上モナイ大キナ歡ビデアル。又恩師田尻校長ハ位人臣ヲ極メ、而カモ尙譽録トシテ壯者ヲ凌グノ概アルハ、母校ノ隆運ヲ如實ニ象徵スルモノトシテ寔ニ慶賀ニ堪ヘナイ次第デアル。此ノ秋ニ當リ二十年史編纂委員ノ乞ハル、マヽニ創立當時ヲ回顧スルノモ一興デアラウ。願ルニ母校ハ關東大震災ノ直後横濱市ノ復興ガ極メテ困難視セラレタ大正十三年四月ニ創立セラレタ。創立當初ノ約半ケ年間ハ横濱高工ノ假建築ニナル校舍ノ一部ヲ借用シテ授業ヲ受ケタガ、假建築トハ名ノミニテ唯風雨ヲ凌グニ過ギナイ御粗末ナバラツクデアツタト記憶スル。運動場モソノ一隅ヲ肩身狭イ思ヒデ使用シテキタモノデアル。當時ノ吾々ノ大キナ希望ノ一ツハ一日モ早く自分等ノ校舍デ授業ヲ受ケルコトデアツタ。現在ノ如キ不燃性建築ノ校舍、且ツ體育館、プ

ール等ヲ持ツガ如キハ望外ノモノトシテ夢ニモ思ハナカツタ。

當時ノ横濱市ハ本牧、磯子方面ノ一部ヲ除キ、街ハ殆ンド見ル影モナキ廢墟ト化シ、此處彼處ニハ未ダ燒殘リノ家屋ノ殘骸ガ點在シテ、之等ヲ取り除クト時々人間ノ黑燒ガ出テ來タモノデアル。當時ノ横濱ハ家屋ノ密集セラル大都市ノ風格ハ何處ニモナク燒野ケ原ニバラツク建ノ家ガ散在シテキタニ過ギナイ。現在下宿難ノ聲ヲ方々ニ聞クガ當時ニ比ブレバ比較ニナラナイト思フ。下宿屋ハ殆ンドナク普通ノ民家ニ頼ミ込デ無理ニ宿泊サセテ貰ツタモノデ下宿サヘ出來レバ廣イ狭イハ問題デナカツタ。入學當初僕ハ高工カラ二、三町離レタ某家ニ假ノ宿ヲ求メタガ、八疊ト四疊半ノ二室ニ、高商生四人、高工生二人ガ雜居シテキタ、ト云ヘバ一寸信ジナイ人ガアルカモ知レナイ、ガ偽リノナイ眞實ノ話デアル。ソレデモ吾々ハ有難イト感謝シテキタコトヲ記憶シテキル。

「横濱高商ハ帝都ニ於ケル唯一ノ官立高等商業ナレバ諸子モ亦之ヲ自覺シ、勇往邁進勉學ニ努メ全國一ノ高商タラシメヨ」。トハヨク校長先生ノ口ヲ衝イテ出タ言葉デアル。然ルニ最近デハ斯ル熱辯ヲ餘リ聞カナイトコトダ。此レ校長先生ノ希望ガ實現シ、文字通り帝都ニ於ケル唯一ノ官立高商ノ實錄ガ出來、最早之ヲ再々絶叫セラル、必要ガナクナツタカラデアラウト祝福セザルヲ得ナイ。

斯ル思ヒ出ハ筆執レバ幾ラデモアル様ニ思フ。然シ紙面ノ少イ本欄ヲツマラヌコトデ埋メルノヲ遠慮スル。

今ヤ大東亞戰第二年ヲ迎ヘ、此ノ聖戰ヲ勝チ抜クベク長期決戰態勢強化ノ叫バル、時、吾々ガ各職域ニ於テ挺身奉公ノ誠ヲ盡クシ得ルハ偏ヘニ學恩ノ賜ト云フベク、今後吾々同窓生ハ一致團結シテ相實メ相輔ケ、以テ母校

ノ名譽ノ爲又邦家ノ爲、益々精進センコトヲ念願シテ筆ヲ措ク次第デアル。以上

三 同生の思ひ出

武 藤 正 平

(第三回卒業生)

私は大正十五年四月に入學して昭和四年三月卒業した三同生の一人である。入學當時は横濱の町はまだ大震災の餘燼が残つて所謂バラツク建の家並が多く、區劃整理も進行中で道路等も方々掘りかへされてゐた。たゞ學校は現在の白壁の偉容が丁度完成して、私達の入學した時から本校舎に全部入ることが出來たのであるから云はゞ一番幸せな生徒であつた。私が入學許可證を貰つて誓書や色々の届書を差出しに行つたときは、教務課が今の商品實驗室にあり、餘りビカ／＼にきれいなので裸足で恐る／＼入つて行つたことを覺へてゐる。私が出た中等學校も震災でやられた爲め、ひどい假屋で過したから當時高商の建物の立派なのは特に感銘が深く、入學式の日などは、本當に涙ぐむ程に嬉しかつたものである。

私等が入學した年の秋、創立記念祝典が盛大に行はれ、當時の文相岡田良平閣下が臨席された。何でも九月の終りから十月の中ばにかけて、生徒の方にも色々の催しものが行はれたことを今でも、よく覺へてゐる。各教室に飾りつけをやつたが私共の組と隣りの組とが期せずして同じ様な趣好になつて了つて驚いものだつた。私共の

方は誰かの發案で部屋の真ん中に縁の丘をこしらへ、りんこの木などを配してその下に生徒が一人寝そべつて居り、窓側の方へ人の一生を象徴的に配した六つの區劃を設けて、赤坊から爺さんになつて、しまひに墓場をおくといつた按配にしてあつた。寝そべつてゐる上の壁に *Tell me not in mournful numbers, Life is but an empty dream* といふ有名なロングフェローの詩がでか／＼とかいてある。今から思へばたわいのない少年の感慨を示したものであつた。それでも窓の方の「青春時代」の區劃にはおみくじ等をおいて來客に自由にひかせる等の趣向があつて、中々人氣を集めたのは大出來だつた。所が當日いさふたをあけて隣室に入つて見ると、これ又部屋の中央に大きな寢臺をしつらへ生徒が一人寝てゐる、その上の壁に大きな紙が張つてあつて「寢臺白布之ヲ父母ニ受ク、敢テ起床セザルハ孝ノ始メナリ」と漢文で書いてある。見物人の曰く「高商の生徒さんはよつぽど朝寝がすきなんだわ」と。これには一寸弱つたことを今も忘れない。記念講演會には福田徳三博士が來て熱辯を振つたし、音樂會も、大變な満員で、私の記憶する限り、この時程あの山に市民を集めたことはその後にも皆無だつたと思ふ。

兎に角、時代は已に二十年も前で、今と時勢が全く違ひ、自由主義華かなりし頃だから、今から見れば飛んでもない事が平然と行はれてゐたし、私共も若い元氣一杯の頃だから空想的なのが實現したこともあつたのである。學業の點についても、今とかなり異つた空氣が漲つてゐたことは當然で、英語等が盛んで、ミルの自由論や、沙翁のシーザー等を課外でやつたことも覚えてゐる。外國語劇等も私共が二年になつた時から俄然盛大となり、當

時盛んだつた樂地小劇場から新劇の衣裳をそつくり借りてきて、ウキリアム・テルだのラ・トスカだの群盲（メーテルリンク）だのファウストだの一流の出しものを、本職そのけでやつてのけたものである。私は三年になつたときファウストを出したが、初めの齋齋の場で、地靈が煙りと共に忽然と現はれる所で、餘り濃りすぎて、花火の煙硝が強すぎ、物凄ゝ顔をした地靈が *Im Ichtschuppen, im Totensurm, wall ich auf und ab* と云ふ所でクシヨン／＼と噓をしてしまつたのである。嚴肅で息づまる場面だから、その時の可笑しさは又別段で、大喝采しばし鳴りもやまなかつたといふ珍芝居をやらした。むづかしい經濟理論や貸借對照表論は大方忘れて了つたがこんな事だけ昨日の出來事の様に覚えてゐるのは致し方ない。

校旗が初めて出來てその推戴式があつたり、御眞影御下賜でその御迎へ式をやつた事等も印象深い出來事であつた。特に私共が三年になつた昭和三年秋、御即位の大典が行はれ全國一齊に萬歳を奉唱した事は一番感銘の強かつた事であつた。あの日の町の雑踏等も今思ひ出に強く残つてゐる。

私共の卒業した昭和四年が就職難の序の口で、卒業は皆に心配の種となつたものであつた。現在の世相と比べると全く天地の差があつたのである。今の學生諸君にはとても話してもわかるものでない。あの時の田尻先生の御奮闘が横濱高商の名聲を一段と輝かしいものとし、その後の校運を拓いた大きな因をなしたものと信じ度い。

野球の強くなつたことも校名の喧傳には大きな役割をなしたがそれは實質的のものではない。學校の名聲は巢立つた生徒が各方面に於て出世することにあるわけだから學力、品性その他の要素の具備と、これを有効に使用

する舞臺を必要とする。その意味で就職問題が旨く行くことは、實に大きな要素となるわけである。古い卒業生の大部分はその意味で學校に對する恩義は、現在の存在をかけたる程に大きなものであり、これが又愛校心となつて無限に母校の發展に負ふ所があるわけである。

思ひ出は盡くる所なく續くが若い時代のたわいのない出來事も二十周年といふ機會に、この上もなく懐かしく蘇つて、

Ihr bringt mit euch die Bilder froher Tage,

Und man liebo Sehnten steigen auf,

Gleich einer alten halberklungenen Sage,

Kommt erste Lieb und Freundschaft mit herauf.

の感慨更に痛切なるものがある。

時代は將に急轉同して國家、個人の運命と共に富士見丘の母校の行く手は多事である。二十年の星霜を閲した我々の母校は將に青年期に達して今後の活躍が愈々期待される。今後の發展を衷心より祈つて拙ない思ひ出を終る。十八年三月某日

附 表

- 一 教官擔當科目異動表
- 二 生徒主事異動表
- 三 年 表
- 四 十五年以上勤績者

教官擔當科目移動表

學 科 目	年 次	修 身	體 操	教 練
大正	十三	友 枝	下津屋 小 白	小 白
	十四			
	十五			小 白
昭和	二	2 内 山		
	三			
	四			
	五			
	六			
	七			
(改正)	八			
	九	9 富 成	9 下津屋	
	十			
	十一			
	十二			
	十三			
	十四			
	十五			15 小 白
	十六			16 正 大 木 佐 堂 佐 藤 堂 小 白
	十七			
	十八			

學科目	年次	近世史	國史	國漢	商業文	書法
大正	十三	栗林		栗林	栗林	栗林
十四	十四				藤田	藤田
十五	十五					
昭和	二					
三	三					
四	四					
五	五					
六	六					
七	七			永積		
八	八	徳増			永積	
九	九				石島	
十	十			石島		
十一	十一					
十二	十二					
十三	十三					
十四	十四					14
十五	十五					
十六	十六					
十七	十七		石島			
十八	十八		石島	石島	石島	

學科目	年次	數學	理化學	英語
大正	十三	小幡	横山	デヴィス
十四	十四			14 ラウンズ 14 ヘーワード
十五	十五		15 田尻	
昭和	二			
三	三			
四	四			5 ブライアン 5 グラント
五	五			
六	六			
七	七			8 コー ス 8 カメロン (英文簿記)
八	八			
九	九			
十	十			10 スレッシャー
十一	十一			
十二	十二		12 武市	
十三	十三			
十四	十四			
十五	十五			15
十六	十六			16 ゴントレット
十七	十七		17 南種	17 フランク
十八	十八	小幡	南種	ゴントレット フランク

英 語	學科目 年次
河村	大正十三
光井 (文藝)	十四
伊東	十五
西村	昭和二
	三
	四
	五
	六 (改正)
	七
	八
	九
	十
	十一
	十二
	十三
	十四 (改正)
	十五 (改正)
	十六 (改正)
	十七 (改正)
	十八
増田時	大正十三
時田	十四
時田	十五
時田	昭和二
時田	三
時田	四
時田	五
時田	六
時田	七
時田	八
時田	九
時田	十
時田	十一
時田	十二
時田	十三
時田	十四
時田	十五
時田	十六
時田	十七
時田	十八

マライ語	スペイン語	支那語	ドイツ語	學科目 年次
		清水元	渡邊即	大正十三
		川添	小谷	十四
		武田		十五
				昭和二
				三
				四
	5 アランブル			五
				六
				七 (改正)
	8 マーティン			八
	9 ヒメネス		9 山中	九
	10 フラナス			十
	11 アランブル			十一
	12 エレロス	12 越宮		十二
	13 ロドリゲス	13 坂		十三
	14 ベリカーノ	14 福代	14 大島	十四
		15 稻垣		十五 (改正)
	16 エレロス	16 菅谷		十六
		17 岡本	17 神子田	十七 (改正)
17 信永			神子田	十八
信永	エレロス	岡本		
	岡田			

學科目		年次
經濟原論	井上 德 (七) 增	大正 十三
	2 井上 徳	十四
	6 徳 増 (井上留學中)	十五
	9 井上 徳	昭和 二
	14 越 村	三
	森 田 (退科不在中)	四
經濟政策	14 渡邊 (商政)	五
社會政策	15 岡野 (工政)	六
商業政策	5 岡野 (社政)	七 (改正)
	6 徳増 (工政)	八
	7 岡野 (社政)	九
	13 猪川	十
	15 井手	十一
	16 井手 (經政)	十二
	17 渡邊 (經政)	十三
	井 手	十四
經濟史	15 徳 増	十五 (改正)
商業史		十六
經濟地理	下 田	十七 (改正)
商業地理	内 田 (下田留學中)	十八
	2 下 田	

學科目	年次
法學通論	正十三
憲法	十四
民法	十五
商法	昭和二
商事關係法	三
國際法	四
	五
	六
	七 (改正)
	八
	九
	十
	十一
	十二
	十三
	十四
	十五 (改正)
	十六
	十七 (改正)
	十八

學科目	年次	統計學	景氣論	外國爲替	(金)行融論	貨幣論
大正	十三	15 森田		15 森田	14 森田	15 井上 鍾
十四	十五					
昭和	二					
三	四					
五	六					6 森田 (井上留學中)
七	八					8
九	十		9 井上 鍾			
十一	十二	12 井上 鍾 (森田留學中)		12 井上 鍾 (森田留學中)	12 井上 鍾 (森田留學中)	
十三	十四	13 猪 間		14 森田	14 森田	
十五	十六	14 森田	14 越 村			
十六	十七		16			
十七	十八	森田		森田	森田	

學科目	年次
大正	十三
十四	十五
昭和	二
三	四
五	六
七	八
九	十
十一	十二
十三	十四
十五	十六
十六	十七
十七	十八

外國經濟	下田 内田 (下田留學中) 2 下田 4 下田
南米經濟	
東亞經濟論	
日本產業論	
社會學	9 渡邊 11 井上 鍾 12 富 成 16 17 德 增 德 增
財政學	15 岡 野 13 猪 間 15 井 手 井 手

學科目	年次
大正	十三
十四	
十五	
昭和	二
三	
四	
五	
六	(改正)
七	
八	
九	
十	
十一	
十二	
十三	
十四	(改正)
十五	(改正)
十六	(改正)
十七	
十八	

經濟學史	7 德 增	13	15 井 手	16
------	-------	----	--------	----

經濟大意	5 德 增	14 越 村	德 增 (越村不在中)
------	-------	--------	----------------

貿易大意	10 德 增	13 井 手	井 手
------	--------	--------	-----

植民政策	5 岡 野	9	
------	-------	---	--

農業大意	5 清水 町	8 福 田	16 井上 盛	井上 盛
------	--------	-------	---------	------

學科目	年次
大正	十三
十四	
十五	
昭和	二
三	
四	
五	
六	(改正)
七	
八	
九	
十	
十一	
十二	
十三	
十四	(改正)
十五	
十六	(改正)
十七	(改正)
十八	

商業概論	古 館	井上 鏡	2 岩 本	5 井上 盛	5 岩本 (別科)	8 岩本 (別科)	8 井上	10 井上 (別科)	10 越村 (別科)	13 岩本	井 上
------	-----	------	-------	--------	--------------	--------------	------	---------------	---------------	-------	-----

賣買市場論 (市場論)	德 增	井上 盛	16	
----------------	-----	------	----	--

配給論	井 上	17 井 上	井 上
-----	-----	--------	-----

經營經濟學 (商工經濟)	15 井上 盛	井上 鏡 (井上留學中)	6 井上 盛	井 上
-----------------	---------	-----------------	--------	-----

取引所	15 井上 盛	4 小宮山 (井上留學中)	6 井上 盛	16
-----	---------	------------------	--------	----

學科目	年次	珠算	商品學	工業概論 (工學)	經濟心理 (商工心理)	商業實踐	銀行經營論
大正	三	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十四	四	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十五	五	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
昭和	二	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
三	三	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
四	四	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
五	五	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
六	六	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
七	七	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
(改正)		山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
八	八	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
九	九	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十	十	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十一	十一	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十二	十二	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十三	十三	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十四	十四	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
(改正)		山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十五	十五	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十六	十六	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
(改正)		山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十七	十七	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
(改正)		山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎
十八	十八	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎	山崎

學科目	年次	税關倉庫	交通論	保險論	商業數學
大正	三	井上島	岩本	岩本	小幡
十四	四	井上島	渡邊	渡邊	小幡
十五	五	井上島	渡邊	渡邊	小幡
昭和	二	井上島	渡邊	渡邊	小幡
三	三	井上島	渡邊	渡邊	小幡
四	四	井上島	渡邊	渡邊	小幡
五	五	井上島	渡邊	渡邊	小幡
六	六	井上島	渡邊	渡邊	小幡
七	七	井上島	渡邊	渡邊	小幡
(改正)		井上島	渡邊	渡邊	小幡
八	八	井上島	渡邊	渡邊	小幡
九	九	井上島	渡邊	渡邊	小幡
十	十	井上島	渡邊	渡邊	小幡
十一	十一	井上島	渡邊	渡邊	小幡
十二	十二	井上島	渡邊	渡邊	小幡
十三	十三	井上島	渡邊	渡邊	小幡
十四	十四	井上島	渡邊	渡邊	小幡
(改正)		井上島	渡邊	渡邊	小幡
十五	十五	井上島	渡邊	渡邊	小幡
十六	十六	井上島	渡邊	渡邊	小幡
(改正)		井上島	渡邊	渡邊	小幡
十七	十七	井上島	渡邊	渡邊	小幡
(改正)		井上島	渡邊	渡邊	小幡
十八	十八	井上島	渡邊	渡邊	小幡

學科目	年次
大正	十三
十四	
十五	
昭和	二
三	
四	
五	
六	(改正)
七	
八	
九	
十	
十一	
十二	
十三	
十四	(改正)
十五	
十六	
十七	(改正)
十八	

簿記	原價計算	會計監査	經營分析
古館 (商簿)	15 古館	9 小宮山	17 黒澤
14 小宮山 (奴簿)			
15 古館 (工簿)			
11 黒澤	11 黒澤	14 沼田	17 黒澤
11 黒澤			
11 越村			
14 沼田			
16			
黒澤 沼田	黒澤	黒澤	黒澤

生徒主事異動表

生徒主事	生徒主事補	兼任生徒主事
大正 十三 十四 十五 昭和 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八	3 小谷 7 9 富成 13 14 武市 16	林 栗 幡 (心得) 15 岩 本 8 下 田 8 南 種 14 不二門 下 田
3 内 山 8 岡 野 14 黒澤 黒澤		

年 表

年 月	社 會 事 項	月	本 校 關 係 事 項
大正 七 八 九	未曾有の好況 東京商科大學設置 好況の反動 來り諸物價暴落す		原内閣—中橋徳五郎文相—高等諸學校の創設と擴張を計議。 本校は第十一高等商業學校として十四年開設の豫定と發表
一二 九	關東大震災火災（二日）經濟界混亂狀態に陥る	一二	文部省直轄學校官制を改めて本校を加ふ。 開設を一年早めて十三年とす（十日） 長崎高商校長田尻常雄本校校長を拜命す（十八日）
一三	國民精神作興に關する詔書下る（十日）	一二	
一四	東京放送局ラジオ放送開始（一日） 普通選舉法公布（五）	三 二 三 四 五 六	第一回入學試驗を行ふ（二十七、八、九日） 横濱高工假校舎に於て第一回入學式（二十一日） 學友會組織さる 本校敷地に建築工事起さる（十八日） 學友會誌第一號發行 下田教授渡歐

昭和 二	三 二	一五 二二	五 一〇	三 六 七 〇 一 二	三 五 〇 一 二
大正天皇御大葬（七日） 明治館制定の詔書換發さる（三日） 金融恐慌、四月より九月までに休業せる銀行數三十七行に上る	大正天皇崩御	天皇皇后兩陛下御成婚二十五年記念式典（十日） 中間國勢調査（一日）	生徒控室、柔劍道場竣工 本校假校舎へ移る 岡田文部大臣來校 讀後會（教官研究發達會）第一回例會 對高工野球定期戰應援團發團式（三十日） 對高工野球第一回定期戰（一日） 學校一覽始めて作成 研究所規程成る 第一回陸上運動會（十五日） 野外演習（四、五日）	本館建築成る 夜學部開設 西村教授渡歐 校旗奉戴式（二十日） 開校式舉行、岡田文部大臣臨席（二十一日） 教育勅語贈本奉戴（九日） 開校記念論文集刊行（十日） 第一回卒業式（十五日） 體育館竣工 渡邊教授渡歐	三 〇 一 二

二二	東京地下鐵「上野淺草間」開通	六〇	高商新聞創刊(三十日)
〇		〇	成人講座開講
二一		〇	第一回同窓會開催(二十七日)
二二		二一	横濱高商新聞は第五號より横濱高商學報と改題 寄宿寮竣工
三	天皇皇后兩陛下の御眞影奉戴	四	光井教授渡歐
三	大學高校の社會科學研究會解散を命ぜらる	五	勳員令下り圖書課増田彌之助氏學生三名應召
四	濟南事件起り第三次山東出兵	六	第一回祭祭
五	御即位の大禮行はる(十日)	七	田尻校長渡歐
二二	教育振興の御沙汰書下賜さる(十日)	〇	生徒主事、主事補置かる
		二	第三學年生徒百三十名宮城前廣場にて御親閱を賜ふ (十五日)
			御大典記念に校庭に椎を植ゆ
四	天皇陛下横濱市に行幸遊ばさる(二十三日)	三	井上龜三教授渡歐
六	文部省學生部を設け思想取締を嚴にす。思想指導費十 一萬圓計上	四	商學會組織さる
		五	徳増教授朝鮮滿洲へ出張
		六	貿易別科設置
		七	對高工定期野球戦無期延期となる
		〇	商學第一號發行
		一	開校五周年記念行事行はる

五	日本銀行正貨準備十億圓を割る	二〇	校歌成る
三	全國失業者三十一萬人と社會局より發表	一	田尻校長渡歐
四	失業防止委員會設置	三	貿易別科第一回卒業生を出す
五	臨時産業合理局設置	七	田中文部大臣來校
〇	教育勸励演説四十周年記念式典	〇	商大専門部との第一回對抗競技會開催 教授要目始めて作成
六	製糸業全休實施(二日)	二	天皇皇后兩陛下の御眞影を奉還改めて御眞影を奉戴 す
三	獨逸金融大恐慌	六	對高工野球定期戦復活、三回戦となる
九	滿洲事變勃發(十八日)	九	井上龜三教授渡歐
一〇	日本銀行正貨準備達に七億圓を割る		
二二	金本位離脱(十三日)		
七	滿洲國建國(九月)	四	第一次改正學科課程實施
三	五・一五事件起る(十五日)	六	下津屋教授オリムピック参加のため渡米
七	オリムピック大會ロサンゼルスに開催	七	井上龜三教授滿洲へ出張
八	オッタワ英帝國會議	〇	下田教授中南米へ出張
三	國際聯盟脱退	一	朝香宮殿下御來校遊ばさる(十七日)
		二	小谷恵一郎助教教授逝く
			「健康相談」開設

三 外國爲替管理法公布(二十九日) 輸出品に對する各國の抑壓愈々加はる		四 内山生徒主事轉任	
九 國民精神文化研究所開設 文部省思想局設置 貿易調節及通商擁護法公布(六日)		一〇 就職好轉 物故教職員慰靈祭(十四日) 開校十周年記念式舉行、松田文部大臣臨席(二十一日)	
一〇 國體明徴に關し政府聲明(三日) ロンドン軍縮會議閉會 農村の疲弊著し		七 本校所在地町名中區南太田町は中區清水ヶ丘と改稱(一日) 全國實業專門學校野球聯盟結成 圖書目錄刊行 復活第一回大運動會舉行(一日)	
二 一 ロンドン軍縮會議退席(十五日) 二・二六事件起る(二十六日) 諸學振興委員會開設 官立專門學校に日本文化講座開設		一 小宮山敬保教授逝く 古倫教授轉任 金日本體操祭に賞狀を受く 田尻校長還曆祝賀會開催(二十六日)	
二 三 「國體の本義」刊行 支那事變勃發(七日) 暴利取締令公布(三日) 上海大山大尉事件		三 森田教授渡歐 田尻彦幸助教授逝く ブル開き(三十日) 防空警備規則制定	

八 職局中南支に擴大(九日) 臨時資金調整法公布(九日) 輸出入品等に關する臨時措置法公布(九日) 南京陥落(十日)		七 渡邊教授滿蒙へ出張 小白講師、越村助教、武田助教、野口勝利氏應召 田尻校長東大講堂に開催の世界教育會議に講演す 綜合文化大會開催(六、七日) 田尻校長教育審議會臨時委員仰付らる	
三 獨逸合邦(十三日) 國家總動員法公布(三十一日) 萬國博覽會及オリムピック大會延期に決定 支那事變一周年記念日に勅語を賜ふ 商店法實施(一日) 武漢三鎮完全攻略(二十七月)		三 同窓會を富丘會と命名 勸勞報國團結成さる 岡野生徒主事兼教授轉任 ラジオ體操正課と決定 一年生斷髮實行 矢島照書記轉任 集團勸勞作業創始 全國實業專門學校大會に優勝す	
五 ノモンハン事件勃發(四日) 青少年學徒に勅語を賜ふ(二十二日) 第一回興亞奉公日(一日) 英佛對獨逸戰布告、第二次歐洲大戰の發端(三日) 價格停止令(十八日)		二 體育優良の表彰狀を文部大臣より受く(十一日) 井上禮三教授逝く 全國青少年學徒代表に加はり本校生徒代表十名宮城前廣場に於て御親開を賜ふ 興亞青年勸勞報國隊員決定 學報第百號記念號を出す	

一五	一	日米通商條約失效(二十六日)
四	一	陸軍適正利潤算定要領を發表(二十一日)
七	一	奢侈品等製造販賣規則(七・七禁令)公布(六日)
九	一〇	實施(七日)
〇	一〇	日獨伊三國同盟結成(二十七日)
〇	一二	大政翼賛會發會式舉行(十二日)
〇	一二	佛印(通駐)
〇	一二	會社經理統制令、銀行等資金運用令實施(二十日)
〇	一二	教育勸諭發五十周年記念式典(三十日)
〇	一二	紀元二千六百年式典(十日)、同奉祝會(十一日)
〇	一二	米穀管理規則公布(十、二十四)(十一月一日實施)
〇	一二	橫濱沖に特別觀艦式舉行
一六	四	日ソ中立條約成立(十三日)
五	四	日佛印通商條約成立(七日)
六	四	東京港開港(二十日)
七	四	日關會商決裂
八	四	在米日本資金凍結令發表(二十五日)
八	四	佛印共同防衛、日佛間に取極めらる(二十六日)
八	四	英國通商條約廢棄を通告し來る(二十六日)
八	四	文部省「臣民の道」頒布
一	三	本校出身戦歿者合同慰靈祭舉行(二十五日)
〇	三	紀元二千六百年記念事業の一つとして逗子櫻山地内に報國林を造營す
〇	三	田尻校長光井教授教育功勞者として表彰せらる(三十日)
〇	三	學友會を解散し報國團を組織す
〇	三	太平洋貿易研究所設駐
〇	三	文部省綜合視察行はる(十三、四日)
〇	三	本科一學級増設し一學年定員二百名となる
〇	三	南方共榮國資料目錄第一輯刊行
〇	三	太平洋産業研究叢書第一、第二輯刊行
〇	三	報國隊編成式舉行(六日)
〇	三	二千六百年記念文庫公開
〇	三	卒業十二月に繰上げ決定につき(十六日)對策を樹つ。十七年度は九月卒業と決定(十一月一日)
〇	三	體力章檢定大會

一七	一	第一回大詔奉戴日(八日)
二	一	衣料切符制實施(一日)
三	一	シンガポール陥落(十五日)
三	一	パタビア占領(五日)
五	一	ラングーン陥落(八日)
五	一	コレヒドール要塞完全攻略(七日)
一	一	大東亞省開廳(一日)
一	一	生産力増強確保政策發表(七日)
二	一	第八十一議會召集(二十四日)
二	二	日米交渉最高潮に達す(二十五日頃)
二	二	對米英宣戰の大詔發せらる(八日)
二	二	日泰攻守同盟成る(十一日)
二	二	賀陽宮殿下御來校遊ばさる(二十四日)
二	二	本科第十六回卒業式舉行(二十七日)
三	三	産業經濟の變革に即應月卒業期繰上に應ずる新學科課程決定
四	三	初の勤勞協力令下る
四	三	マライ昭新設さる
五	三	教育審議會の功績により田尻校長賜杯の榮に浴す(五日)
七	三	夏期鍛鍊期間(夏休)短縮さる
七	三	黒澤教授南方へ出張
九	三	田尻校長勳一等に叙せらる(八日)
九	三	田尻校長滿洲國建國十周年記念式典參列(十五日)
〇	三	本科第十七回卒業式舉行(十六日)
〇	三	渡邊教授現職のまま二ヶ年間佛印の南方學院へ赴任出發(二十五日)
〇	三	繰上卒業の對策として十二月中に學年末試験を行ふ
一八	一	學制改革勅令公布(二十一日)
一	一	實業專門學校を專門學校とす
一	一	勤勞緊急對策要綱發表(二十日)
一	一	二十年史の編纂決定
一	一	新學科課程により三分科制實施
一	一	嚴寒に徹へる、教室の暖房廢止、寒中體育訓練を行

二〃〃

日獨日伊經濟協定調印（二十日）
製鐵工場の管理實施發表（二十七日）
出版事業令公布實施（十八日）

三 五

入學試驗問題文部省にて統一出題。實業專門學校の
入試期日を同一とす（二十三、四、五日）
創立二十周年記念式舉行

十五年以上勤績者（昭和十八年五月末日現在）

校長氏名	任命年月日	在職年月數
田尻常雄	大正一二、一二、一八	十九年六ヶ月
下田證佐	〃 一三、一、二二	十九年五ヶ月
西村 稠	〃 一四、三、三一	十八年二ヶ月
南 和康	〃 一五、七、三一	十六年十ヶ月
不二門龍靚	〃 一三、四、二一	十九年二ヶ月
光井武八郎	〃 一五、三、三一	十七年二ヶ月
河村重治郎	〃 一三、五、一七	十八年九ヶ月
德増榮太郎	〃 一三、八、三一	十八年九ヶ月
時 田 清	〃 一三、八、三一	十八年三ヶ月
伊 東 彌	〃 一四、三、一一	十八年九ヶ月
大 竹 縁	〃 一四、九、七	十七年九ヶ月
渡 邊 輝一	〃 一三、二、二九	十九年四ヶ月
小 幡 孫二	〃 一三、四、二	十九年二ヶ月
井 上 龜三	〃 一五、三、三一（一三、五、一六）	十七年二ヶ月
森 田 優三	〃 一四、三、三一	十八年二ヶ月
下津屋 俊夫	〃 一三、三、三一	十九年二ヶ月
小 白 寛	〃 一三、三、三一	十九年二ヶ月
山崎與右衛門	〃 一三、四、七	十九年二ヶ月

定 同 守 同 履 堀 同 鳳 同 書 堀
夫 衛 員 能 配 託

桐 増 鈴 櫻 植 鑑 増 高 湯 齊 藤
ヶ 田 木 井 岡 田 田 林 川 藤 田
留 丑 二 巳 大 保 榮 眞 之 義
吉 雄 耶 吉 耶 春 喜 雄 助 雄

〃 〃 〃 〃 大 昭 大 昭 〃 〃 〃
一 一 一 一 正 和 正 和 一 一 一
五 四 三 三 三 二 五 二 四 三 四
二 六 六 四 三 二 四 二 二 一 九
三 一 八 〇 一 六 〇 八 八 三 八

十七年九月
十九年五月
十八年四月
十六年四月
十七年二月
十六年四月
十九年二月
十九年二月
十九年二月
十八年
十七年四月

昭和十八年五月二十日 印刷
昭和十八年五月二十七日 發行

横濱高等商業學校二十年史

非賣品

編纂者 横濱市中區新水丘四十一番地
横濱高等商業學校
代表 徳増榮太郎

印刷者 東京市京橋區湊町三丁目十二番地
大 壁 早 治

印刷所 東京市京橋區湊町三丁目十二番地
大倉印刷所

發行所 横濱市中區新水丘四十一 横濱高等商業學校